

SM マニア

平成19年9月1日発行第26巻第9号 (毎月1回1日発行) 昭和57年11月8日第3種郵便物認可

杉浦則夫写真館
虐弄の保健室
聖なる恋獄
従順女体進化論

嗚咽の性春
売られる肉の幸福感 羽鳥止愁

義母耽溺
修羅の美双花 佳奈 淳

吸血の魔戯
不良の杜の淫獣 結城彩雨

肉の迷路
牝犬の止り木 並木梗太郎

9

女姦法楽
幼年色魔症候群 美川一樹



SM

SM・マニア専門
ツーショット
ダイヤル

つかもと.友希

SMに興味ありますか？

e-CLUB TS
エクスタシークラブ TWO-SHOT DIAL

関東 03-5228-7654

関西 06-6936-0055

東海 052-783-8989

北海道 011-330-7654 東北 022-745-7654

中国 082-545-6655 九州 092-771-8600

説明
プロフィール……女の子のメッセージを聞いてからエッチ会話。
逆プロフィール……あなたのPFを気に入った女性から電話がきます。
伝言……伝言からあなた好みの相手を見つけられる。
密着……24時間コンビニで買える電子マネーでポイント購入。
密着……他人のエッチ会話を盗み聞かせてくれる。
※地域によってコーナーが異なる場合がございます。ご了承ください。

お得で便利なお支払い方法

- 銀行振り込み……ポイント最大80%増量の先払い＆即避べる後払い
- プリペイドカード……先払いで安心 販売店案内 0570-048000
- コンビニで決済……24時間コンビニで買える電子マネーでポイント購入
- クレジットカード……ポイントが最大30%増量

5つの数字でこの雑誌を見た方限定
幸運をGET!!
エキキコード29563
登録時にラッキーコードを
必ず入力して下さい!!

1万円が
無料
ポイント進呈中

マニア もっと過激!!マニア専用上級者向け
専用 ツーショットダイヤル

03-5228-1234

携帯専用 女の子を顔で選べる!!

写真で女の子を選んでから「テレフォンセックス」
<http://e-0721.com/krr>



無料 エロ動画見放題☆
～スクベ男の駆け込み寺～

<http://zero2s.com/krr>



※パッケージ代別途 ※機種により動画が閲覧できない場合もございます。

■料金 1分100円～ ■規約を確認の上御利用下さい。法律・条例に違反する行為、18歳未満の方のご利用は固くお断りいたします。無料ポイントについては各番組にてご確認ください。 ■[0570]で始まる電話番号は、君侯先生の通常のダイヤル通話料がかかります。 ■総合案内センター(24h 年中無休) 03-3341-2812 東京都新宿区新宿5-17





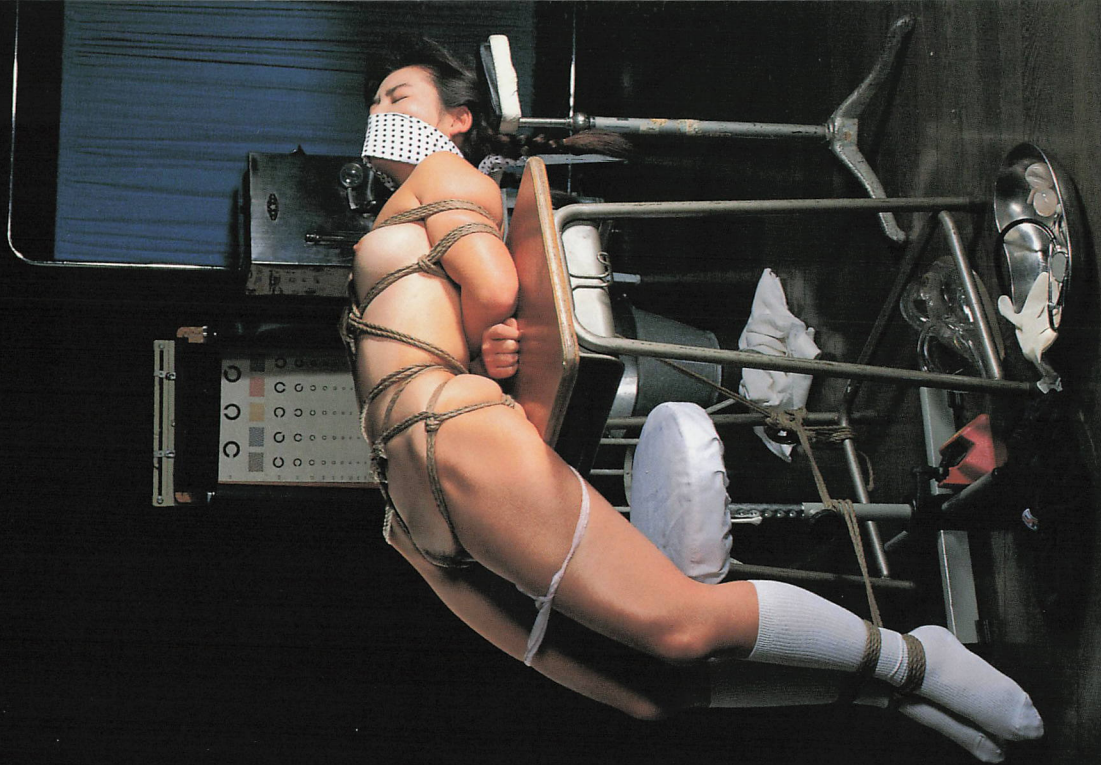




虐弄の保健室





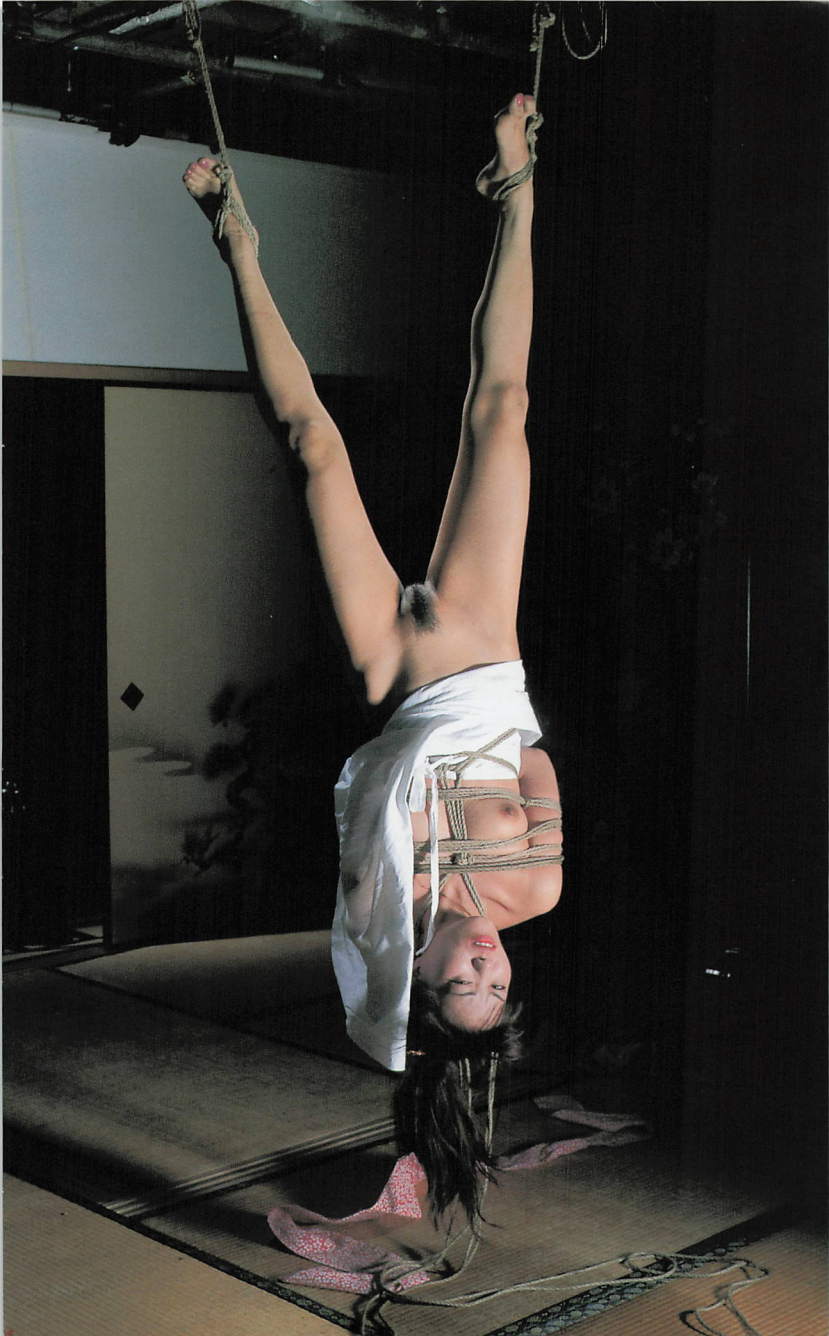






聖なる恋獄







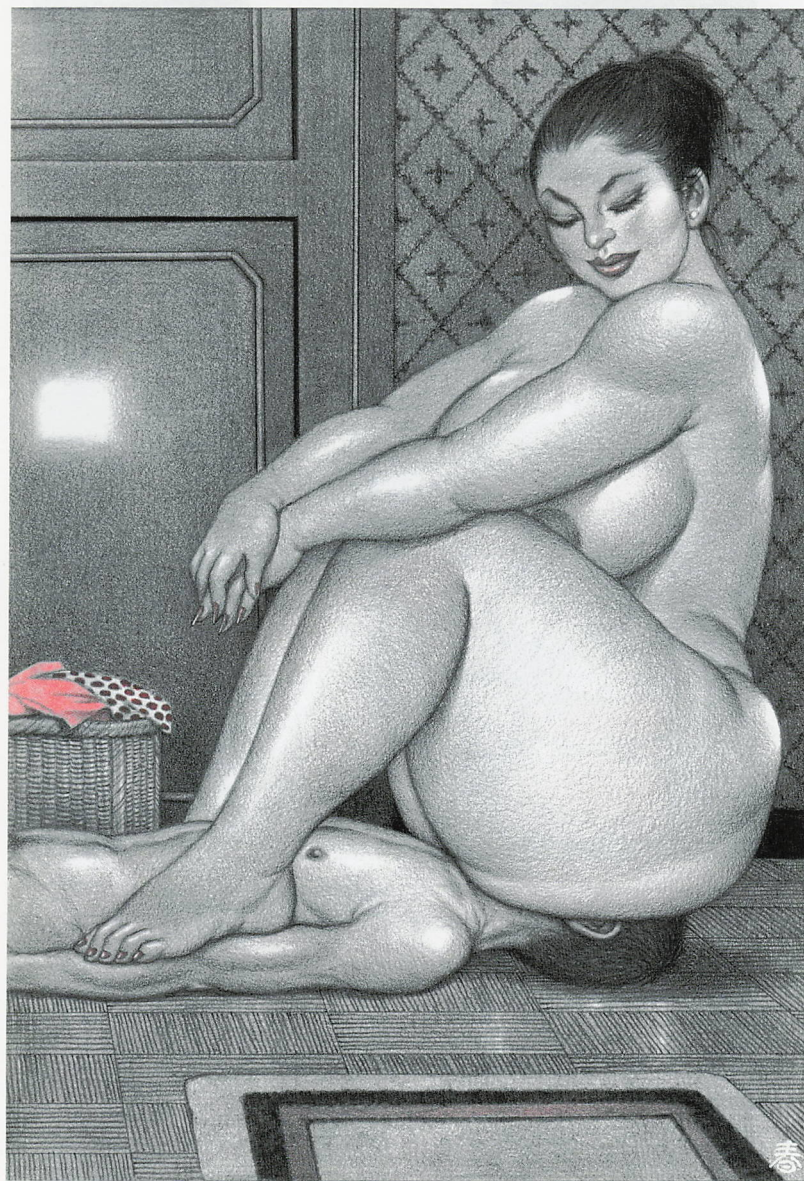












春川ナミオ耽美画廊「臀下の悦楽」

イラストーリィ

美濃村晃のSM画廊 美濃村晃 ……187

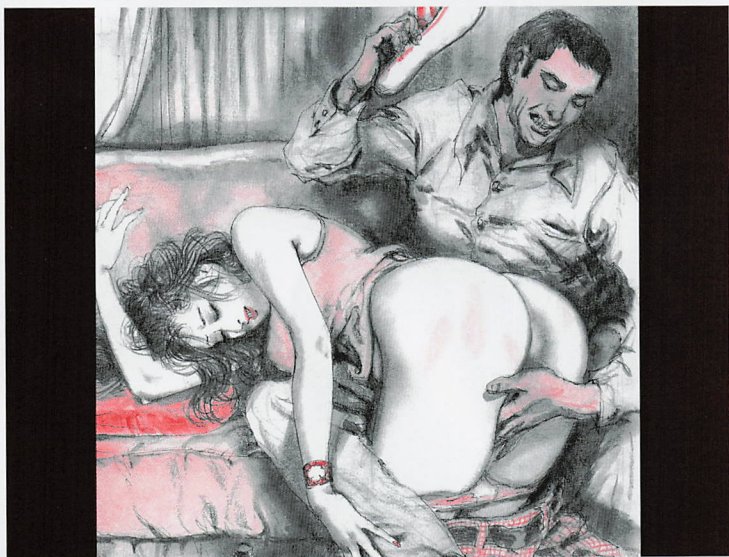
縄好き亀甲隷女 渡辺 一 ……251



秘艶イラスト

濡れる食肉の候 笠間しろう …23

獣たちの官能大飛行 沖 渉二 ……43



読者プレゼント …… 269

撮影現場より

今月の悦虐天使 … 267

特別企画

インターネットSMワールド ……35

SM 画像を集めた世界中の
裏サイトをご紹介します

□表紙／吉田昭夫
□カット／前田寿按

義母 耽溺	修羅の美双花	佳奈 淳 え/笠間しろう	52
----------	--------	-----------------	----

情欲 連鎖	奔放にくねる肉	栗出海洋 え/椋 陽児	92
----------	---------	----------------	----

処女 凜然	試煉の獣愛	環 和羽 え/神野夢一	122
----------	-------	----------------	-----

肉獸 病棟	荒淫矢の如く	麻樹 香 え/山崎無平	158
----------	--------	----------------	-----

嗚咽の 性春	売られる肉の幸福感	羽鳥止愁 え/鹿島嗣男	192
-----------	-----------	----------------	-----

愛淫 菩薩	サフランの女臭	花影 渉 え/楡畑雄二	220
----------	---------	----------------	-----

女姦 法楽	幼年色魔症候群	美川一樹 え/前田寿按	270
----------	---------	----------------	-----

肉の 迷路	牝犬の止り木	並木梗太郎 え/沖涉二	314
----------	--------	----------------	-----

吸虫の 魔戯	不良の杜の淫獣	結城彩雨 え/ミナミ高志	338
-----------	---------	-----------------	-----

『変態妻性乱季』より

M 妻重度変態症候群	179
------------------	-----

鮮烈カラー

虐待の保健室	3
女子生徒の安息の場所であるべきなのに羞恥痴獄が	

聖なる恋獄	11
夏祭りが変な方向に進む。縄の生贄にされる小町娘	

従順女体進化論	27
拉置されたボディエンジェルに秘門責め果てしなく	



巨大な両腿の狭間に狭窄される幸福感

濡れる食肉の候



笠間しろう







従順女体深化論















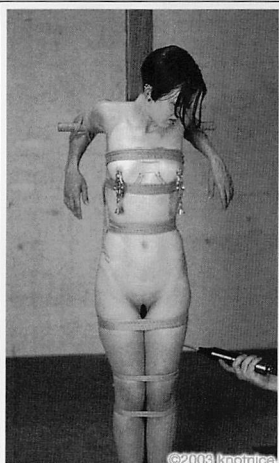


インターネット INTERNET SM WORLD

SMワールド⁰⁰

インターネットが手軽にできるようになって、パソコンはマニアにとってもう魔法の箱になりました

SM
サイト
ワールド



©2003 kaptinica



www.SocietySM.com



SMサイト ワールド

★編集部が探した世界中の優良SMサイトをご紹介します！ エッチ画像収集に役立ててください

INSANE BDSM

URL <http://www.insanebds.com/>

碟プレイ



SM専門サイトを紹介しているページです。特徴としてしっかりとした縛りを見せるサイトのサンプル写真を紹介しています。その中から碟の写真をセレクトしてみました。



INTERNET SM WORLD



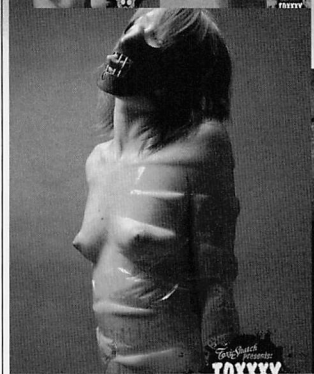
TOXXXY

URL <http://toxxxy.thumblogger.com/>

病んだ精神



精神が病んでしまった世界観を表現した写真を見せてくれるサイトです。写真技術がしっかりしていて芸術的に処理した写真ですね。



SM
サイト
ワールド

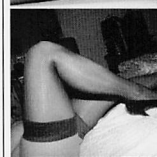


ERDBEERFEE

URL <http://www.erdbeerfee.com/>

足フェチ

SM色は弱いのですが、脚好きマニアには嬉しいフェチサイトです。ホームページの左に現われる文字をクリックするとサンプル画像が見られます。



INTERNET SM WORLD



FUCKING Dirty Sluts

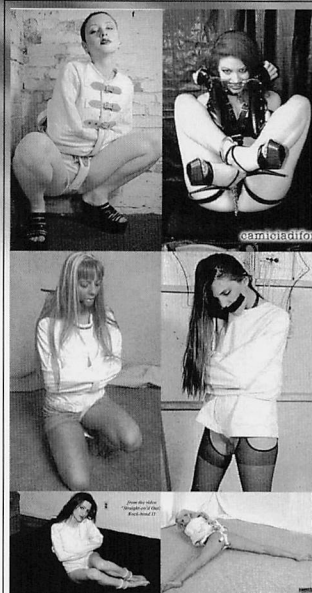
URL <http://www.fuckingdirty sluts.com/>

極上ボディを拘束



豊かなバスト、見事にくびれたウエストが眩しいナイスボディな女達を縛ったサンプル写真を揃えたサイトです。軽く拘束しているだけでも絵になりますね。





Camicia di Forza

URL <http://www.camiciadiforza.com/>

拘束衣



拘束衣専門のサイトです。拘束衣以外の写真は一切ありません。サンプル写真が小さく見にくいのですが写真点数は多くて楽しめます。



SM
サイト
ワールド



TALL GODDESS

URL <http://www.tallgoddess.com/>

ゴージャスな女王様



セレブ感溢れる女達。マゾッ気のない人でもこのサイトの女達を見れば虐められてもしょうがないかと思わされてしまいそう。



INTERNET SM WORLD



BONDAGE in SEX

URL <http://www.bondageinsex.com/>

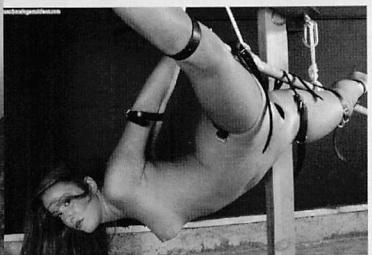
屈辱の強制回脚

BONDAGEINSEX

ATTENTION !!
ONLY ADULTS

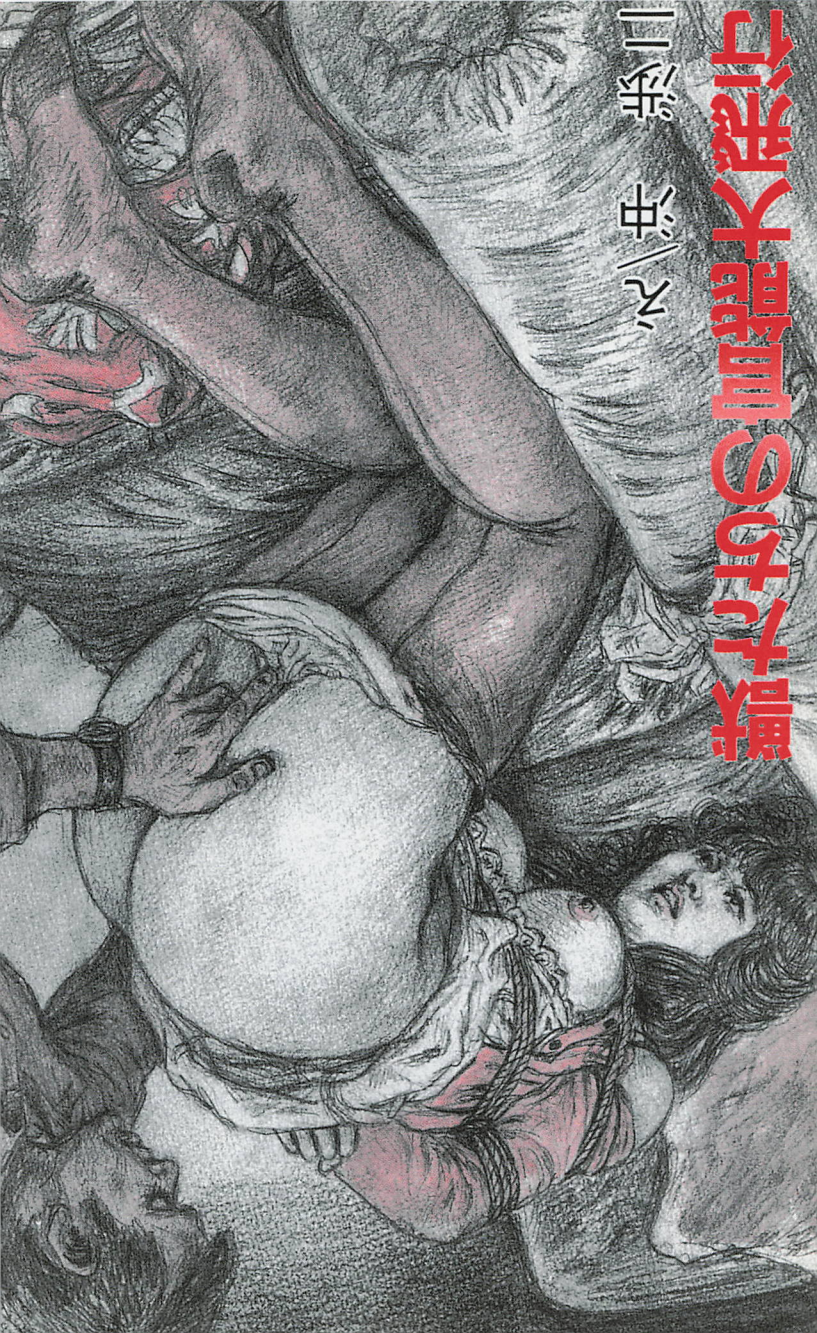
ENTER

4つの大手SMサイトのサンプル画像が見られるサイトです。しっかりした緊縛写真はかなりです。その中から強制開脚責め写真をセレクトしてみました。



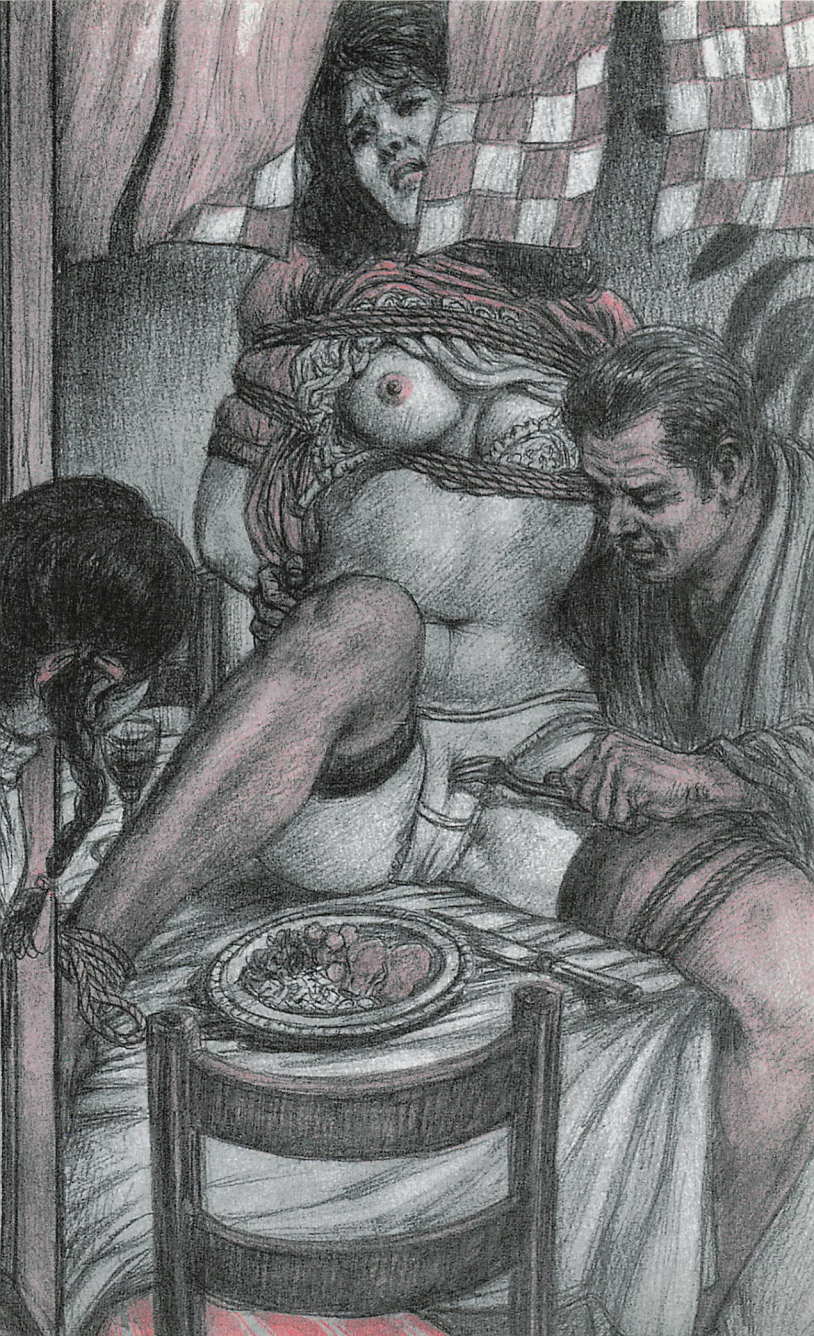
獣たちの巨大飛行

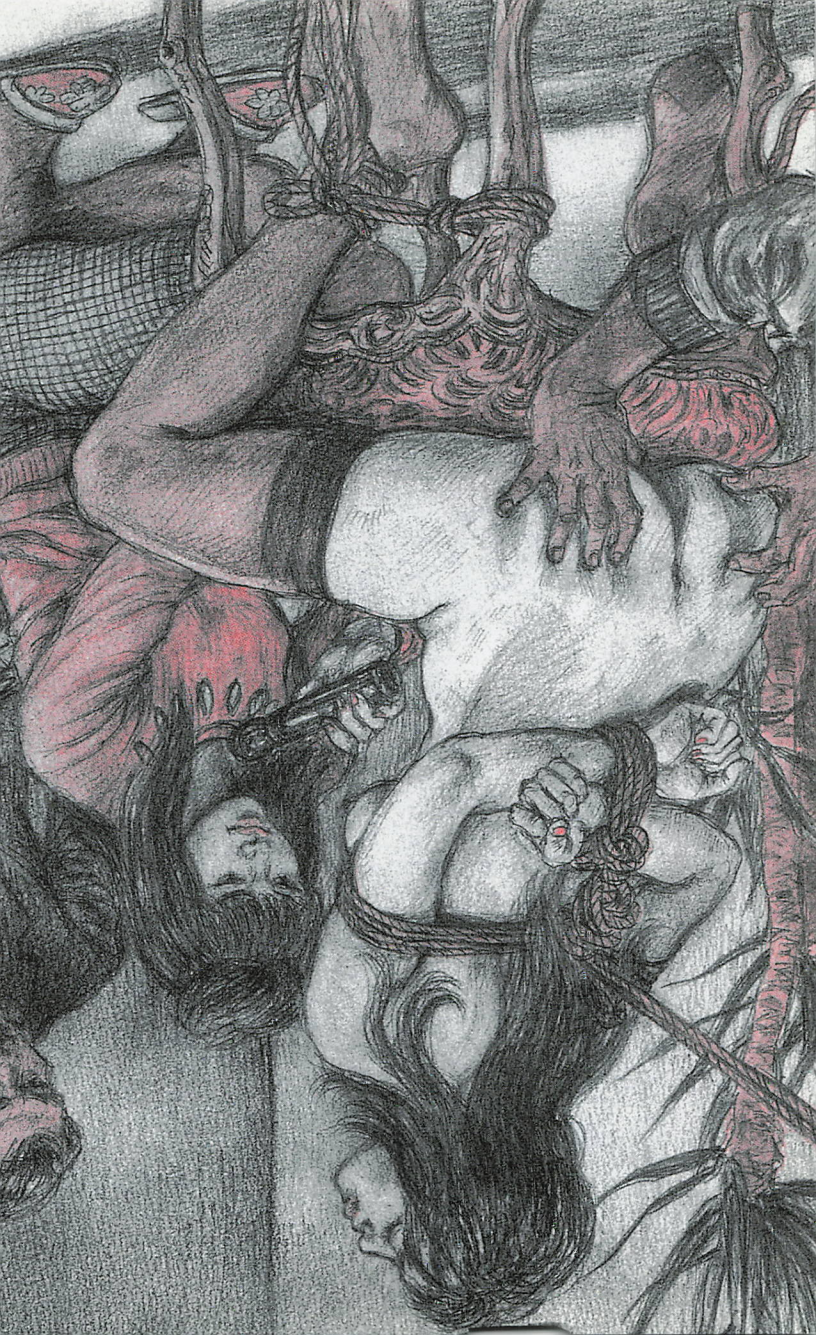
え／＼沖／＼二











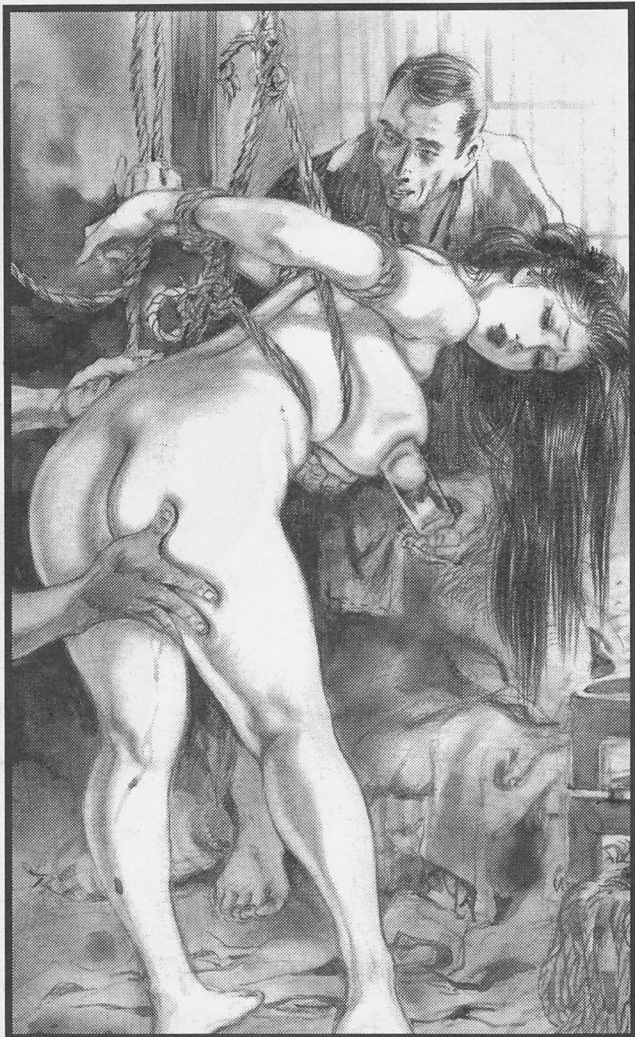






SMマニア

9月号



扉絵・前田寿按



修羅の美双花

義母耽溺

佳奈 淳 え／筈間しろう

シンクロ美人教師

菅野直樹は英語の参考書を開いたまま、パソコンを起動させる。

すると、十九インチのディスプレイに、女性の顔があらわれる。細面の知的な美貌である。切れ長の瞳、すうっと通った小鼻、そして、小さな唇。特に、黒目は引き込まれそうになる。

「香穂里先生」

直樹はため息ともつかない声を洩らす。

さつき、パソコンのハードディスクにコピーした動画を再生させる。

プールが映る。直樹が通っている私立S学院高校の室内プールだ。放課後は、水泳部とシンクロ部が使っている。

❖女子ロッカーに忍び込み香穂里先生のメッシュのパンティを盗み出した直樹は恥毛を絡ませたフロント部分に鼻孔を押しつけ恍惚と



このプールは、二階から泳ぐ姿を見られるようになっている。

直樹は放課後、塾がない日は必ず、二階からプールを見ていた。見学しているのは、いつも直樹だけだった。

香穂里先生がプールサイドに姿を見せる。Ｔシャツにジャージだ。

長い髪をアップにまとめているため、細面の美貌がより映えて見える。

香穂里先生だけがパソコン画面に映し出されている。

プールでは遠目にしか見えないが、ディスプレイには綺麗にアップで撮られている。高倍率のズーム機能のおかげだ。

香穂里先生がシンクロの部員といっしょに、準備体操をはじめ。部員はすでに水着だけだ。

紺のワンピースはシンクロの水着だから、隣の水泳部のワンピースより、かなりハイレグだった。

部員は十二人。シンクロをやっているだけあつ

て、みんなスタイルがよく、足が長い。

そんな生足が、二十四本も並んでいたが、直樹の目は香穂里先生の肢体だけに釘付けになっている。

香穂里先生が左右の五本の指をからませて、両手を万歳するようにあげていく。

すると、Ｔシャツがべったりと上半身に貼り付き、意外と豊かなバストの隆起が浮かび上がる。

教壇に立つ時は、常にジャケットを羽織っているので、胸元がどうなっているのか、はつきりとはわからない。

香穂里先生がシンクロ部の臨時顧問になってから、はじめて、バストが豊かなのを知った。

葉山香穂里先生は英語教師だ。年齢は二十七歳。

シンクロ部の顧問をしていた女性の体育教師が産休をとった。その間だけ、香穂里先生が指導を引き継ぐことになった。

中学の時、少しでもシンクロをやっていたらしい。

準備体操を終えると、生徒たちが次々とプールに

飛び込む。

盗撮もこれで五回めだったが、今回が一番うまく撮れた。

香穂里先生はＴシャツにジャージのままだ。

でも、指導に熱が入ってくると、香穂里先生も水着姿となり、プールに入る。いつ、あのＴシャツとジャージを脱ぐのか、いつもドキドキしながら見ている。

盗撮しようと思ったのは、もっとそばで香穂里先生を見たかったからだ。部外者の直樹がプールサイドに行くわけにもいかず、かといって、双眼鏡で見るわけにもいかず、そばで見るためには、盗撮して、香穂里先生の動画を残し、あとで見るしかなかったからだ。

そばで見られるのなら、盗撮する必要はなかったが、それは無理だった。

上履きの先端にカメラを仕込み、ビデオ本体は学生ズボンのお尻に入れている。ポケットにスイッチチを入れて、それでズームなどを調整した。

最初は、ほとんど撮れていなかったが、回数をこなすうちに、いい動画が撮れるようになってきた。

香穂里先生がＴシャツの裾に手をかけた。この瞬間が、一番興奮する。

両腕を交叉させ、Ｔシャツをあげていく。すると、紺の水着に包まれた上半身があらわになっていく。

意外と高く張り出したバストの隆起が露出する。いつもジャケットという鎧に隠されているだけに、その曲線を見れるだけでも、直樹のからだは熱くなる。

さらに香穂里先生はＴシャツの裾をあげていく。腋の下がちりちりとぞく。その時いつも、直樹は腋の下にズームさせる。

パソコンのディスプレイいっぱい、香穂里先生の腋のくぼみが映し出される。

すっきりと手入れの行き届いた美麗な腋の下だ。いったい、どんな匂いがするのだろう。

この腋の下に、一度でいいから鼻をぐりぐり押し

つけてみたい。もちろん、プールに飛び込む前に。Tシャツをすべて脱ぐと、今度はジャージに手がかる。

直樹は生唾を飲む。プールの二階から生で見ているが、アップ動画は迫力がある。

いつもはすぐにジャージを下げる香穂里先生が、今日は、ちよつとためらいを見せた。そして、二階に目を向けたのだ。

あの時は、心臓が破裂しそうになった。

盗撮しているのがバレたのか、と思った。少なくとも、直樹のいやらしい視線を感じ取ったはずだった。

香穂里先生はそのあと、すぐにジャージを脱いだ。

すらりと伸びた生足があらわれる。生徒たちと違って、同じ太腿でも、やはりむちつとあぶらがのっている。

当たり前だけど、すでに女として成熟していることがわかる。残念だけど、処女ではない。香穂里先

生とエッチできる男がうらやましくて仕方がない。

今、彼氏はいるのだろうか。あのからだを好きに貪っている男はいるのだろうか。

ハイレグの股間がアップになる。けれどすぐに画面が揺れる。香穂里先生がプールに飛び込んだのだ。

直樹は動画を戻し、股間がアップになった瞬間で制止させる。

かなりのハイレグで、きわどく香穂里先生の大切な部分を覆っている。

あの布の下に、香穂里先生の穴が……あるんだ。直樹のペニスですでにこちこちになっている。ジャージの上からさするだけで、はやくも射精してしまいそうだ。

プールに入った香穂里先生が、身振り手振りで指導している。

濡れた腕や濡れた鎖骨、濡れた腋の下や濡れた胸元に、直樹の視線は釘付けに。

香穂里先生の肌はしっとりとしている。水を弾く

というより、水を肌に吸い込み、そして新たな潤いを得ているように見える。

室内プールゆえに、肌は白いままだ。

プールから香穂里先生が出る。その瞬間がまた、たまらない。

全身から水を弾きつつ、抜群のスタイルがあらわれる。

さっきまでと違い、水を吸った紺の水着は、べつたりと香穂里先生の肢体に貼り付き、その惚れ惚れするプロポーションをより強調させてくれる。

特に、ウエストのくびれが素晴らしい。

この時必ず、ハイレグの股間をアップにする。きわどく食い込む股間から、無数の水滴が垂れていくさまを、息を吞んで直樹は見つめる。

この高校に入り、はじめて葉山香穂里先生を見た時から、先生の知的で洗練された美貌の虜になっていたが、官能的ともいえる水着姿を見るようになってから、さらに、のめりこんでいった。

今は、朝起きた瞬間から、眠りにつく瞬間まで、

香穂里先生のことを考えている。

当然のことながら、このところ、勉強に手がつかなくなった。塾でも、講師の話は上の空だ。

もうすぐ期末試験である。このままだと、最悪の結果がやってくる。わかっていても、香穂里先生のことだけを考えてしまう。

パソコンをスリープにして、参考書に向かう。でも五分もしないうちに、デッサン帳を開く。

そして、再びパソコン上に香穂里先生の水着姿を出して、それを見ながら、デッサンをはじめ。

直樹は絵が得意だ。以前から、よく、香穂里先生のことを描いていた。

水着姿を知る前までは、教壇に立つ香穂里先生の凛とした姿を思い出して描いているだけだったが、今は違う。

デッサン帳に描きだされる香穂里先生は、一糸もまとっていない。

そのしなやかな両腕は背中になわされ、そのやわらかそうな二の腕に、どす黒い縄が食い入ってい

く。

それは、かたちよく張り出した乳房の上下にも食
い込み、乳首をぶくつと浮き上がらせる。

それだけではない。

股間の真一文字のおんなの筋目にも、どす黒い縄
が痺のように食い込んでいくのだ。

「ああ、香穂里先生……」

直樹はディスプレイに映し出されている本物の香
穂里先生ではなく、描き出された縛られた香穂里先
生を見ながら、こちこちのペニスをしごきはじめ
る。

縛られている香穂里先生は、すがるような目を直
樹に向けている。

いつもはきりりと閉じられている唇も、半開きに
なっている。

「先生……ああ、香穂里先生……」

直樹はザーメンを放った。

それは、勢いよく、全裸で縛られている香穂里先
生にふりかかった。

三十才の義母

その二日後——放課後のプールに、直樹はいた。
そろそろ、塾がなくても、はやく帰宅して、期末の
ための勉強をしなくてはならなかったが、こうして
プールに來ないと落ち着かない。

今日はすぐにTシャツとジャージを脱ぎ、熱心に
指導している。

ふと、当たり前のことが、直樹の頭に浮かんた。

今、香穂里先生は水着だけだ。ということは、ブ
ラジャーもパンティも穿いていないのだ。

それは今、更衣室にある。

一日ずつと身につけていた香穂里先生のブラジャ
ーとパンティが、別の場所にあるのだ。

欲しい、と直樹は痛切に思った。香穂里先生の匂
いを嗅いでみたかった。パンティなら、香穂里先生
そのものの匂いが残っているはずだ。

匂いを嗅ぐだけなら、気づかれることはない。そ

うだ。匂いを嗅ぐだけなら、大丈夫だ。盗むわけじゃない。

そんなことに気がつくともう居ても立つてもいられなくなった。

匂いを嗅げば、香穂里先生への欲望も少しはおさまり、勉強に集中できるかもしれない。

身勝手な理屈だとわかっていても、直樹は自分をそう納得させて、更衣室へと向かった。

生徒たちの更衣室の奥に、教師用の更衣室がある。鍵がかかっていれば、そこでおしまいだったが、かかっていない気がした。

でもかかっていて欲しい、とも思った。

ドアが開かないのなら、どうしようもない。あきらめがつくからだ。開いていたら……。

この時間、更衣室のまわりに人影はなかった。廊下の突き当たりにあるドアのノブをつかんだ。

やはり、鍵はかかっていなかった。例え更衣室でも、学校の中で鍵をかけるという発想が、教師にはない。

それだけ生徒を信頼しているといえる。その信頼を裏切ることになる。

でも、直樹はドアを開き、滑りこむように、中に入った。

ずらりとロッカーが並んでいたが、すぐにわかった。葉山というプレートが貼ってあったのだ。

直樹はそのロッカーを開いた。すると、甘い薫りが立ち昇ってきて、直樹の鼻孔をくすぐってきた。

そこには、ジャケットがかけてあり、ブラウス、スカートがきちんと畳んであった。

香穂里先生の匂いがこもっていた。

すでに直樹の心臓は破裂しそうなほど高鳴った。どくどくという音が聞こえてきそうだった。

ブラウスに触れてみる。シルクの手触りだ。それだけで、ズボンの下のペニスがひくついた。

ブラウスを手にすると、広げてみた。そして、腋の下が当たっている部分に、思い切って鼻を押しつけた。

なんともいえない甘い薫りが、直樹の鼻孔を包ん

できた。

ああ、これが、香穂里先生の腋の匂いなんだ。なんていい匂いなんだろう。

想像していたものよりかに刺激的な美臭に、直樹は感動した。

きちんとブラウスを畳み、スカートの上に置いた。そしてスカートをそっとあげてみる。

やはり、そこにブラジャーとパンティが隠してあった。パンストも丸めて置いてある。

直樹はブラジャーを手にした。純白のシンプルなデザインだ。

二十七歳の大人の女性でありながら、清廉な雰囲気を感じさせる香穂里先生らしい、ブラジャーだった。

やはり、予想以上にカップは大きかった。そこに、鼻を押しつけていく。

腋の匂いとはまた違った種類の甘さを感じとれた。同じから



だとはいえ、やはり部分部分で微妙に匂いは違うのだ。

パンティに目を向ける。こちらも純白のパンティだった。デザインはブラ同様シンプルだったが、かなり小さい。

今はやりのローライズで、おんなの部分だけをきわどく覆うだけの布面積しかない。

香穂里先生にしてはかなり大胆に思えたが、これが今の大人の女性のパンティの主流なのかもしれない。

そっとパンティを手にした。それだけで、身体がぶるぶるふるえだす。もちろんペニスはこちらこちら、射精していないのが不思議なくらいだ。

鼻先で広げる。そして裏返して見る。すると、割れ目が当たっている部分に、数本の恥毛がついていた。

これは、香穂里先生のアンダーヘアだ。

自分の指で摘むことさえもつたいなくて、ピンセットがあれば、それで摘みたいくらいだった。

二本の指を恥毛に寄せていく。そっと摘み、鼻先にもってくる。まさに絹のような恥毛だ。とても細い。

直樹はズボンからハンカチを出し、そこにいていねいに置いた。

そしてあらためて、割れ目が当たっている部分を見る。すで



に、股間をむずむずさせる女の匂いが微かに漂ってくる。

腋の下や乳房の匂いは、すれ違う男性を振り返らせるためのものだと思えば、パンティのフロントから薫る匂いは、男を発情させるためのものだ。

当然のことながら、直樹も発情した。吸い寄せられるように、鼻をパンティに押しつけた。

「ああ、先生……香穂里先生……」

香穂里先生自身の、香穂里先生そのものの匂いが、直樹を包み込む。

一日ずつと恥部に押しつけていただけに、匂いはかなり残っている。

直樹は目を閉じ、ズボンの上から股間をさする。

じかにつかむ必要などない。それだけの刺激でも充分なのだ。

香穂里先生そのものの匂いに包まれながら、直樹は後ろ手に縛りあげた全裸の先生を想像した。

あっ、と思った次の瞬間には、ブリーフを汚していた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

ちょうど玄関付近にいた千鶴は義理の息子を笑顔で出迎えた。

いつもは少しはにかむような笑顔を向けてくる直樹が、今日は千鶴と視線を合わせることなく、まっすぐ階段を上がっていった。

どうしたのかしら。学校でなにかあったのかしら。

「遅かったわね」

「塾で自習してたから」

塾がない日でも、塾の生徒は自習室を自由に使えることになっている。このところ、塾がない日もかなり帰りが遅い。

勉強疲れかしら。

三十を過ぎた夏、直樹の父である敬一郎と結婚して、この家に入って二年。思春期の難しい時期だったが、直樹は優しく、本当の母親のように接してくれた。

まだ、義母^{かあ}さんとは呼んでくれなかったが、一日を重ねるにつれて、義理の関係とはいえ、母と息子の関係が築かれているような感じはしている。

先生の柔らかな乳

翌日——直樹はとうとう塾を休んで放課後のプールにいた。

プールの中で指導していた香穂里先生が、プールのサイドにあがったところだ。全身水浸し。紺の水着がべったりと貼り付いている。

パンティが欲しい。

昨日持ち帰ってしまったパンティは、すでに直樹のザーメンでどろどろに汚れた。もちろん盗むつもりなどなかった。

盗んだら、それでおしまいになるからだ。でも、持って帰られずにはいられなかった。香穂里先生が穿いていたパンティを、自分のペニスに直接こすりつけずにはいられなかった。

パンティを盗まれたことは、香穂里先生は気づいている。昨日は、ノーパンで帰宅したはずだ。

そんな香穂里先生のことを想像するだけで、また興奮してしまう。

今日はきつと更衣室に鍵がかけてあるはずだ。でも、香穂里先生のことだから、鍵はかけていないかもしれない。

もう盗みたくはない。でも欲しい。先生の新しいパンティが欲しい。

香穂里先生がプールに入ったのを見て、直樹は更衣室に向かった。

ドアのノブをつかむ。

開いている。これは、香穂里先生からのメッセージだと思った。あなたを信じているから、もう盗むのはやめなさい、と言っているのだと思った。

香穂里先生は自分の教え子を信じたいのだ。むしろ、昨日盗ったパンティを返して欲しい、と願っているのかもしれない。

そんなの無理だ。香穂里先生は男の生理がわかっ

ていない。鍵をかけておくべきだったのだ。

鍵をかけていない香穂里先生が悪いんだ。

身勝手な理屈をつけて、直樹は再び、教師用の更衣室へと入った。葉山先生のロッカーを開けると、すぐにスカートの下を見た。

すると、昨日同様、ブラジャーとパンスト、そしてパンティが丸めて置いてあった。

おや、と直樹は思った。ブラジャーもパンティも、昨日とは違って、かなり洒落たデザインのものであった。

ブラはハーフカップ。花柄の刺繍が縫い込まれている。そして、パンティは淡いピンク色で、驚くことに、オールメッシュだった。おんなの部分が当たるところだけ網目が濃くなっている。

昨日の清廉な下着とは違って、二十七歳の大人の女にふさわしいランジェリーになっていた。

これはたまたまだろうか。そんなことはないはずだ。じゃあ、パンティを盗んだ生徒にまた見られることを前提に、また盗られることもあるかもしれない

い、と思いつながら、セクシーなパンティを穿いてきたのだろうか。

わからない。香穂里先生が若い男の生理を理解していないのと同じように、直樹も大人の女性の心理を理解できずにいた。

メッシュのパンティを手にする。そして、鼻先に持つて行く。また数本の恥毛がからみついていた。

メッシュゆえに、からみつきのしやすいように見えた。

今日は、アンダーヘアをからませたまま、パンティのフロント部分を鼻へと押しつけていった。

香穂里先生の匂いに包まれる。

「ああ、先生……ああ、香穂里先生……」

もう盗んではいけない。このまま戻して、更衣室から去らなければ。鍵をかけていない、香穂里先生の信頼を裏切ってはいけない。

香穂里先生が好きならば、香穂里先生をこれ以上悲しませてはいけいんだ。

でも、無理だ。直樹は用意したビニール袋に丁寧

にパンティを入れると、急いで更衣室を出た。

その瞬間、廊下の隅から香穂里先生がやってきた。水着姿のままだ。白い腕やすらりと伸びた足が濡れていた。

シンクロの練習を抜け出して来たようだ。

「菅野くん、なにしているのっ」

更衣室は突き当たりにあった。だから、逃げ道はない。香穂里先生の横を突き抜けて行くしかなかった。

香穂里先生が困ったような顔で近寄ってくる。

魅惑のバストの隆起が、むちつとあぶらの乗った太腿が、直樹に近づいてくる。

ずっとそばで見たいと思っていた香穂里先生の水着姿が、どんどん迫ってきた。

もっと見たい。でも、逃げなくてはいけない。

でも、逃げるより先に、直樹の視線は魅力的すぎる香穂里先生の水着姿に釘付けとなった。

当たり前だが、ビデオのアップよりも、生の香穂里先生の方がいい。

なによりも、剥き出しの肌の質感が違う。水滴を

無数に垂らしながら直樹に迫ってくる香穂里先生は、まさにヴィーナスだった。

「菅野くん」

「失礼します」

と直樹は香穂里先生の横をすり抜けようとした。すると、待ちなさい、と腕をつかまれた。

ズボンのポケットに入っているパンティを見つけたら、なにかもおしまいだ。

直樹は先生の腕をふり払おうとしたが、かなり強くつかまれている。

「更衣室から出てきたわよね」

「いいえ、違います、先生……離してください」

「菅野くん、あなたが、私の……下着を……」

「なんのことですか。離してください、先生っ」

直樹はもう片方の手で、香穂里先生の腕を引き離そうとした。逃がしてはいけない、と香穂里先生は決して離そうとしない。

強く先生の腕を押した瞬間、その手が滑った。そ

してその勢いのまま、香穂里先生の高く張った胸元をつかんでいた。

「あっ」

と直樹と香穂里先生が同時に声をあげた。

直樹はそのまま強くつかんだ。水着越しでも、乳房のやわらかさが伝わってきた。ぐぐとわしづかみにすると、ふくらみの奥から弾きかえされた。

ああ、これが、おっぱい……ああ、これが、香穂里先生のおっぱいなんだ……。

想像をかに上回る揉み心地のよさに、直樹のからだは熱くなった。

「や、やめて、菅野くん」

生徒に乳房を揉まれ、香穂里先生が引くような動きを見せた。生徒に女の急所を触られ、怒りをあらわにする前に、一人の女性としての羞恥が勝っているようだ。

そんな香穂里先生の恥じらいの風情が、直樹の中の、男に火を点けた。

水着越しではなく、生で、じかに、香穂里先生の

乳房を揉みたくなったのだ。

それは牡としての衝動だった。あらかじめ、計画を立てていたら、かえって、怖じ気づいていたかもしれない。

直樹は水着のストラップに手をかけた。

「な、なにをするの、菅野くん、あつ、や、やめなさいっ」

引きちぎらんばかりの勢いで、直樹は水着のストラップを肩から下げていった。

胸元が大胆にめくれ、香穂里先生の乳房がいきなりあらわに。

それはきつく水着に押さえつけられていたのか、水着越しに見る以上に、豊満な隆起を見せた。

その魅惑のふくらみが、解放された喜びを伝えるかのように、ぶるんつと直樹の目の前で弾んだ。

「だめっ」

と香穂里先生が両腕で乳房を抱いた。その恥じらいの仕草が、直樹の背中を押した。

先生っ、と叫ぶと、香穂里先生の二の腕をつか

み、乳房をあらわにさせた。

そして、重たげに揺れるふくらみを、じかにつかんでいった。

「あつ、だめ……」

五本の指が、真つ白なふくらみに食い込んでいく。

香穂里先生の乳房は綺麗なお椀型だった。それが、直樹の手で淫らに形を変えていく。

でも、いくら好き勝手に揉みしだいても、手をちよつと引けば、すぐに、綺麗なお椀型に戻る。

「や、やめて……ああ、おねがいだから……ああ、先生をこれ以上、困らせないで……ああ、おねがい、菅野くん」

悪戯されている香穂里先生のほうが、生徒におねがいしている。

香穂里先生が強く出て、直樹にビンタでも張ったなら、展開は違っていただろう。

水着越しに乳房をつかまれた瞬間から、香穂里先生は、一教師から、一人の女になっていた。

生徒を叱りつけるより前に、大切な胸をつかまれてしまった恥辱が先立ったのだ。

それは、生徒に付け入る隙を与えてしまったといつていい。

だから、直樹のような奥手の男でも、香穂里先生の乳房を生で揉みだくことができた。

乳房を揉まれても、教師らしく毅然とすべきだったのだ。素の女の部分を見せてしまつては、駄目だ。

香穂里先生の肌はしつとりとしていた。直樹の手のひらに、びたつと乳房が貼り付き、なんともいえない感触を伝えてくる。

香穂里先生は直樹の手首をつかんではいたが、強く押しやることはなく、おねがい、やめて、とつぶやき続けているだけだ。

そんな香穂里先生がますますいとおしく思える。

こんなことをしてはいけない。ますます香穂里先生を悲しませてしまう、とわかつていても、乳房から手を離すことができなかった。



むしろ、ピンタを張って欲しかった。

直樹は二つの手で二つのふくらみをつかんでいた。下からすくい上げるようにして、揉みしだいていく。

「や、やめて……ああ、おねがい、菅野くん……いけないわ……こんなこと……いけないの」

すぎるような目を香穂里先生が向けてくる。

ただでさえ引き込まれそうな眼差しに、あらたな魅力が加わる。

「あつ、乳首が、立っています」

水着からこぼれ出た時は、乳輪に埋まっていた蕾が、いつの間にか、ツンとしたとがりを見せたのだ。

香穂里先生の乳首は淡いピンク色だった。

期待を裏切らない清廉な色と形に、直樹はますます興奮した。

「もしかして、感じているんですか、先生」

「やめて、いけないの……わかるでしょう、菅野くん」

「わかりません」

いつまでも揉んでいたかったが、背後から女生徒たちのはしやぎ声が聞こえてきた。誰かこちらにやってくる。

ハッとして手を離すと、はやく行きなさい、と香穂里先生が言った。

すでに水着のストラップを肩へと引き上げた香穂里先生は、いつもの籜とした先生に戻っていた。

そこにはもう、直樹が付け入る隙などなかった。

甘美な女臭に酔う

一人になった途端、大変なことをしてしまった、と後悔の波が押し寄せてきた。

香穂里先生のパンティを盗んだだけではなく、その乳房をこの手で揉みしだいてしまった。

もう終わりだ……。もう学校に行けない。

乳房のことは内緒にしてくれるかもしれないが、下着を盗んだことを香穂里先生が理事長に報告すれ

ば、退学になるだろう。

ああ、どうして……あんなことを……。

憧れの女教師の乳房を自由にした興奮が覚めるにつれ、直樹の目の前は真つ暗になっていった。

ただいま、と玄関を開けると、義母の千鶴が、いつもと変わらぬ笑顔で、お帰りなさい、と声をかけてきた。

夕食の支度をしていたらしく、エプロンをしていた。

「どうしたの、直樹くん」

「ああ、千鶴さん……もうお終いだよっ」

義理の母の優しい顔を見た途端、緊張の糸が切れてしまった。直樹は義母の胸元に顔を埋めた。

「どうしたの、直樹くん。なにがあつたの」

「ああ、千鶴さんっ」

直樹はぐりぐりと、義母の胸元に顔をこすりつけていた。

「もうお終いなんだ……ああ、もう終わりなんだ」

「だから、なにが終わりなの？ どうしたの、直樹くん」

直樹は義母の胸元に顔を埋めたまま、しゃべりはじめた。ずっと葉山香穂里先生に憧れていたこと。

勉強に手がつかなくなり、水着姿を盗撮してしまったこと。そして、パンティまで盗んだばかりか、香穂里先生の生の乳房を揉みしだいたこと……。

すべてを義母に話してしまうと、胸のつかえが取れたようで、直樹は少し落ち着いた。

すると、今の状況を客観的に理解することができた。

その途端、なんとも言えない甘い匂いに包まれていることに、直樹は気づいた。

義母の乳房も、香穂里先生同様、外見よりも、かなり豊かだった。いわゆる着痩せするタイプなのだろう。

それに、元々、千鶴のことをそんな目で見たことはなかった。千鶴はおやじの妻であり、直樹の母親なのだ。

でも、千鶴はまだ三十才の女であり、なんといつても、美しかった。

それにしてもこの胸元から漂う匂いの甘さといつたら。

「直樹くん。これから、一緒に謝りに行きましょう。葉山先生もわかつてくださるはずよ」

「でも……」

直樹は胸に押しつけたまま。今は、さっきまでとは違って意識的にぐりぐりと鼻を押しつけていた。

すると、ブラ越しとはいえ、やわらかな感触が伝わってくる。

香穂里先生の乳房の揉み心地が蘇る。千鶴の乳房は、あれよりきつとさらにやわらかいだろう。

ああ、揉んでみたい……千鶴の乳房を思い切り揉みしだいてみたい。

「自信がないんだ……」

「自信がないって、どういうこと？」

「今回、葉山先生がゆるしてくれたとしても、また

やらないという確信がないんだ」

「そんな……」

「ごめんなさい、千鶴さん」

「ううん。私は女性だから、若い男性の心理はあまりよくわからないけど……勉強が手につかなくなるくらい……なのね……パンティを盗んでしまうくらい……し、したいのね」

直樹は義母の胸から顔をあげて、千鶴を見た。義理の母は品のいい美貌を真つ赤にしていた。

若い男のどうしようもない生理を思い浮かべ、恥じらいの表情を浮かべているのだ。

その瞬間、義母が思春期の娘のように見えた。

直樹にとつて、おやじの妻から、一人の女へと意識が変わった瞬間でもあった。

「それに……僕の欲望っていうか……あ、あの……オナニーする時の……おかずっていうか……あれがちよつと普通じゃないんだ」

「どういうことかしら」

直樹は義母の腕をつかむと、こっちに、と言って

階段を上がつていった。千鶴はそのままついてくる。

直樹は自分の部屋に義母を入れると、デッサン帳を広げて見せる。

「こ、これは……」

千鶴が目を丸くする。全裸で縛られ、あらゆる体位をとらされる香穂里先生の姿が、めくつてもめくつても、あらわれる。

それは直樹の劣情の集大成だった。

「一度でいいから……葉山先生を……こんなふうに縛って……みたいんだ」

「女性を縛ったことは、あるの？」

「もちろん、ないよ……縛るところか……女性の経験もないし」

どうしてだろう。千鶴にはなんでも話せた。

「一度……縛ったら……それで……あの……落ち着くのか？」

直樹から視線をそらし、千鶴がそう言った。

直樹はあらためて義理の母を見た。千鶴はワンピース

姿だった。ノースリーブで、二の腕が剥き出しになっている。

その二の腕が眩しいくらい白いことに気づいた。香穂里先生とは違って、うっすらとあぶらがのつていいる。どんな手触りなんだろう。

エプロンを突き上げるような胸の隆起。とても女らしい魅惑的なからだの曲線。

そして、ワンピースの裾からのぞく、やわらかそうなふくらはぎ。こちらも、雪のように白い。ただ白いのではなく、滑白い感じだ。

男のエキスを存分に体内に受け入れている女だけが放つ、蠱惑の白さだった。

「はつきりとはわからないけど、葉山先生のパンティを盗んだりはしないと思う」

「そう……あ、あの……」

「なに？ 千鶴さん」

「あの……変なこと、提案するんだけど……いいかな」

「なんですか」

問いかける直樹の声が上擦った。

「一度きりって約束して欲しいのだけど……私を

……縛って……いいわ……」

「千鶴さんを……縛るの」

声が喉にからまった。

「ああ、ごめんなさい。変なこと言ったわよね。聞

かなかったことにしてくれるかな」

千鶴が背中を向けた。直樹はその白い二の腕をつかみ、こちらに向かせた。

義母の二の腕は思った通り、とてもやわらかかった。そしてその肌は、しつとりと直樹の手のひらに吸い付いてきた。

この肌に縄を食い込ませることができたら、どんなに興奮するだろうか。

「い、いいの……千鶴さん」

「え、ええ……それで……葉山先生にはもうなにもしないと約束してくれるのなら」

「約束するよ。絶対、先生にはなにもしない」

「信じていいのね」

24時間受付 35才以上向ダイヤル

中高年

電話倶楽部(百合の会)
★初回後払い千円分無料★

北海道	011-728-0708	東京	03-3625-2517
東北	022-232-3450	名古屋	052-481-2560
新潟	025-228-3000	大阪	06-6397-9955
茨城	029-827-1020	広島	082-261-5044
栃木	028-633-7321	愛媛	089-924-7030
山梨	055-254-6510	福岡	092-623-7150
横浜	045-574-6010	女性専用	0120-837-222

メル友はこちら⇒<http://merupara.net>
クレジット決済 10分千円 35歳未満利用不可
携帯後払可 墨田区錦糸4-7 問03(3625)8475 (10時~22時)

30才以上の男性急募

○お相手は全国30才~60才の女性です。
○貴方の近くのリッチな
女性経営者、資産家、未亡人、etc
○身元確実な女性会員を確実に交際へ

1位ただ抱きだけで気持ちいいと感じさせる男性
2位彼女達の知らなかったsexを体験させる男性
3位少額のおこづかいにも「ありがとう」と言う男性

★応募の秘密は厳守。
資料無料急送ハガキで御請求下さい(代引きなし)
〒464-0045名古屋市中千種区城山町1-48 三愛 担当 松井まゆみ

携帯用完全無料モロ画像はここだよ!
<http://jaja.kir.jp/>

交際革命



※平成18年6月をもちまして日本交際連盟ACEは野口グループと合併し、新たなスタートを致しました。今後、よりいっそうのサービスをしてまいりますのでご指導ご声援のほど、よろしくお願い致します。

野口グループ
コミュニティライン 0120-337-441

スポンサーコース ¥5,000-

SEXフレンドコース ¥15,000-

恋人・結婚コース ¥60,000-

■入会資格

- ・二十歳以上で健康な方
- ・身元確実な方

■セキュリティ

- ・合併にともない、最新のセキュリティシステムを導入。
- ・お客様の大切な個人情報保護を保障いたしております。

●まずはお気軽にお電話を! 無料相談・受付窓口 AM10:00~PM22:00 日曜定休 ●東京都渋谷区渋谷3-28-15

広告取扱:日本広報通信社 03-5322-7399

そう言って、義母が直樹を見つめてきた。

背の高さは同じくらいだ。こんなにそばで、千鶴の顔を見るのははじめてだ。

甘い息を感じた。やや厚ぼったい唇が、すぐそばにある。唇を重ねたら、どんなに気持ちいいだろうか。

でも、キスはだめだ。我慢しないと。今、唇を奪おうとして、千鶴が嫌がったら、それで終わりになる。

「でも……縄が……ないわよね」

「あるんだ」

直樹は義母の二の腕をつかんだまま机に近寄り、一番下の引き出しを開いた。

そこにはコンドームの箱や縄が置いてある。

「一度も使ってないけどね。ネットで買ったんだ」

「そ、そうなの……こ、こんなもの……葉山先生に使ってはいけないわ。そうでしょう」

「そうだね、千鶴さん。あ、あの……そのエプロン、とってくれるかな」

「え、ええ……」

千鶴が両腕を背中にまわし、ヒップの上の結び目を解く。そして、頭からエプロンを抜き取っていた。

その時、腋の下がちらりと見えた。直樹の視線が吸い寄せられる。

すつきりと手入れの行き届いた腋の下だ。そこから、熟れた女の匂いが薫った。

すでに午後の七時をまわっている。今日も暑かった。一日の汗が、千鶴の肌にまとわりついていはずだ。

「ワンピースも……いいかな」

「それは……ちよつと……」

と千鶴が恥じらいの風情を見せる。義理の息子の前で下着だけになるのは、やっぱりかなりためらいがあるようだ。

とにかく縄をかけてみよう、と直樹は思った。こんなチャンス、もう二度とないかもしれない。

「じゃあ、後ろ手に縛ってみる」

声がふるえているのが自分でもわかる。

「縛るだけよ……直樹くん……」

そう言つて、千鶴が直樹を見つめてくる。その瞳は、あなたのことを信じているから、と告げていた。

直樹はうなずいた。千鶴が白い二の腕を背後にまわしていく。

直樹は義母の後ろにまわった。千鶴は長い髪をアップにまとめている。それゆえ、うなじがのぞいている。

数本のほつれ毛がからみついているさまが、なんとも色っぽい。

こんな色気は、年上の女性しか出せない。直樹のまわりにいる女子校生にはない成熟した女の魅力だ。

「手首を重ねて、千鶴さん」

「こ、どうかしら……」

ほっそりとした義母の手首と手首が交叉する。直樹はそこに縄をまわしていく。

義母の縄肌

生身の女性に縄をかけるのは、はじめてだったが、部屋にあるいろんなものを縛って練習してはいた。

まさかこんなにはやく、生身の女性を縛る機会がやってくるなんて。

手首を縛ると、余った縄を二の腕へとまわしていく。白い肌にざらついた縄を食い込ませる。

あつ、と千鶴が声をだす。直樹は構わず、やわらかい肌に食い込ませていく。

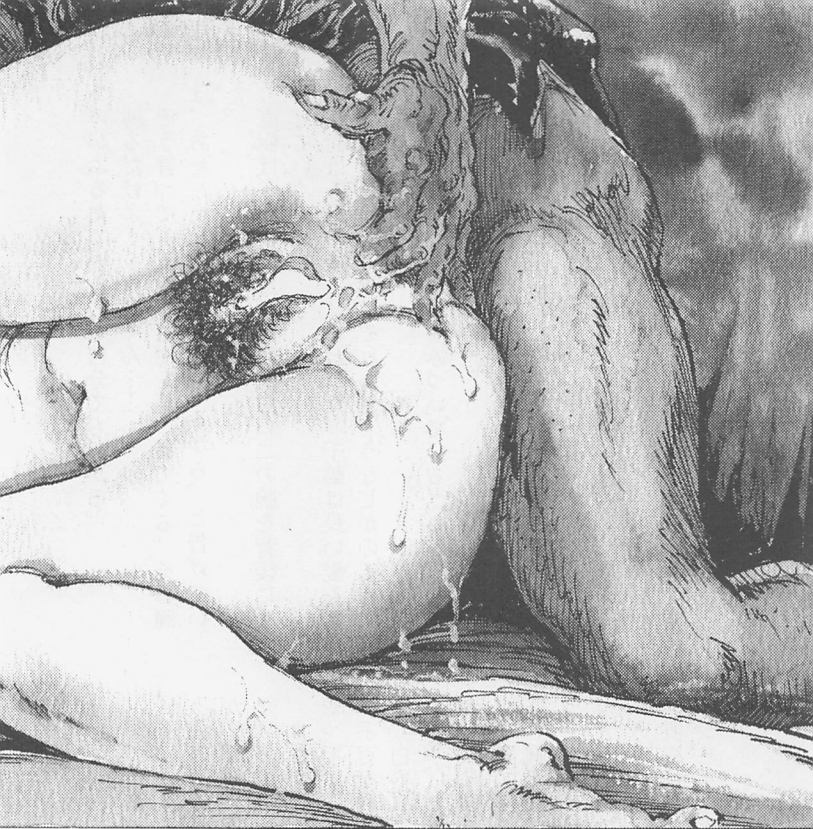
そしてさらにワンピースの胸元を高く盛り上げている胸元に、縄を当てていった。

「や、やつぱり……」

「どうしたの、千鶴さん」

「ううん……いいの……縛って……」

直樹は高いふくらみに縄を食い込ませていった。ワンピースとブラ越しであっても、熟れ盛りの人妻



のやわらかさが、縄に伝わってきた。
やわらかいものにざらついた縄を食
い込ませる快感は、想像をかに越え
た。

一旦背中にまわし、そして今度は乳
房の隆起の下側に縄を食い込ませてい
く。

「あ、ああ……ちよつと、きついわ
……」

「そうかなあ」

ちらりと義母を見ると、眉間に深い
縦皺を刻ませている。その表情に直樹
の股間は熱くなる。

下側に食い込ませた縄も背中にまわ
すと、そこできりりと縛りあげていっ
た。

さらに縄が胸の隆起に食い込んだの
か、千鶴が、ううっ、とつらそうなう
めき声を洩らした。



ごめんなさい、と思いつつも、直樹のペニスはこちこちになった。

直樹は正面にまわった。自分の手で後ろ手に縛り上げた義母の姿を見つめる。

縄掛けされた千鶴は、さつきよりさらに大人の女の色香が増していた。縄化粧、一本の縄が千鶴をさらに輝かせた。

「あ、ああ……そんな目で……見ないで……ああ、なんだか恥ずかしい……」

「すごく綺麗だよ、千鶴さん」

普通だったら、面と向かつてはとも言えない言葉が、するりと直樹の口からこぼれ出た。それくらい、千鶴は縄が似合った。

「こ、これで満足したかしら」

「デッサンとは違うよ、千鶴さん」

「な、なにが……」

「まだ、千鶴さんは裸じゃないよ。素っ裸の上から、縛ってみたいんだ」

「そ、それは……ゆるして……これが精一杯なの……わかるでしょう」

胸元がきついのか、千鶴はつらそうなままだ。

「じゃあ、胸だけでも。いいでしょう、千鶴さん」

そう言うと、直樹はワンピースの胸元のボタンに手をかけた。

「だ、だめ……それはだめよ、直樹くん」

だめ、と言われてもやめるわけにはいかない。縛られている義母は、なにも抵抗できない。

それをいいことに、胸元のボタンを二つ三つと外すと、ブラに包まれたバストがあらわれた。

「ああ、だめ、だめ……見てはだめ……」

ハーフカップのブラから、こぼれんばかりのふくらみがのぞいている。

直樹はワンピースを大きくはだけ、あらわになっている乳房にじかに縄を食い込ませていく。

「あう、うう……」

白いふくらみに、ざらついた縄が食い込むさまは、直樹の中の嗜虐癖をたまらなくすぐてくる。

やはり、服の上より素肌にじかに食い込ませたほうが、縄がより映える。

「ますます綺麗になっているよ、千鶴さん」

「あ、ああ……も、もういいでしょう……おねがい……これで終わりにして……」

義母がするような目を向けてくる。その眼差しは、むしろ逆効果だ。

直樹はブラカップに手をかけた。そして力まかせに引き下げていった。

「あつ、だめっ」

たつぷりと実った乳房が、すべて、義理の息子の前にあらわとなった。

ブラを縄から抜くと、魅惑の隆起の下側にも、じかに縄が食い入っていく。

上下から絞りあげられ、ぶくつと突きだしてく

る。

「乳首が充血しているよ、千鶴さん」

義母の乳首はすでにツンととがりきった。香穂里先生の清廉なピンクとは違い、真っ赤になっている。

この乳首をおやじは毎晩吸いまくっているのだろうか。

「あつ、はあつ……恥ずかしいわ……ああ、見ないで……ああ、ブラを戻して、直樹くん」

千鶴のゆるし無しにブラをむしり取ったことをなじるより先に、義理の息子に乳首を晒していることの方に千鶴の意識は向いた。

直樹はさらにワンピースのボタンを外しはじめた。

「あ、ああ……なにをするの……だめ、そんなにボタンを外してはだめ……」

フロント部分が真つ二つに割れて、パンティだけの肢体があらわとなった。

パンティは淡いブルー。フロントの布面積が狭

く、ヴィーナスの恥丘がこんもりと盛り上がっている。

おなかには、うっすらとあぶらが乗っている。縦長のへその凹みがセクシーだ。

直樹はパンティに手をかけていた。

自分が自分じゃないみたいだ。

縄を手にした時から、なにかが乗り移った感じだった。

「だめっ、パンティはだめっ……ああ、縛るだけって、約束したでしょう、直樹くん」

「そうだったかな」

「ああ……信じていたのに……」

うっすらと涙がにじんだ瞳をからめてくる。

千鶴さん。そんな目で僕を見るからいけないんだよ。千鶴さんはなんにもわかっていないんだ。そうやって、すぎるような目を向けてくればくるほど、もつといいじめてやれって思ってしまうんだよ。

直樹は涙をひと粒流した千鶴を見つめながら、パンティを下げていった。

「ああ……」

義母が絶望的な声を洩らした。

必死に太腿と太腿をすり合わせる。でもそんなことをしても無駄だ。

いやそうじゃない。そんな恥じらいの仕草が、さらに直樹の嗜虐の血を騒がせる。

あらわになった義母の陰りは、やや濃いめだった。濃いめとはいっても、ネットで見ている裏動画の女たちと比較してのことだから、別に濃くないのかもしれない。

直樹はあと二本、縄を取り出した。一本めを、千鶴のくびれた腰にまわしていく。

「な、なにをするつもりなの……」

「もちろん、デッサンの通りにするんだよ」

「デッサンの……通りって……も、もう……おっぱいの上から直接縛ったでしょう」

「こっちに縄を食い込ませていないからね」

そう言つて、直樹はもう一本の縄を腰にまわした縄にT字になるように繋いでいく。

直樹がなにをしようとしているのか気づいたのか、千鶴が、だめだめ、と言いながら、腰を引きはじめる。

「動いちゃ、だめだよ、千鶴さん」

「ああ、おねがい……もう終わりにしましょう……直樹くん……おねがいます」

裸同然で縛られている千鶴のからだからは、なんともいえない甘い体臭がむんむん薫ってきた。

恥辱にまみれ、肌が火照っているのだろう。

この体臭が、直樹の背中をさらに押している。

直樹は三本めの縄を、義母の媚肉の縦溝に押しつけていった。

「あつ、だめっ」

千鶴が腰をうねらせる。すると、縄がずれてしまう。

「じつとしていて、千鶴さん」

「ああ、縄を解いて、おねがい、直樹くん」

直樹は千鶴の真一文字の割れ目に、ざらついた縄を食い込ませていった。

「あうっ……うう……」

ぐぐつと縄が食い入り、恥毛で飾られたサイドの肉が盛り上がってくる。

蟻の門渡りへと縄をくぐらせ、そして、ワンピースをめくって、双臀をあらわにした。

義母の尻は、むっちりと熟れきっていた。

直樹は反射的に、その白い尻たばを撫でていた。

「あっ、だめ、だめよ、直樹くん」

千鶴の尻たばが、しつとりと直樹の手のひらに吸い付いてくる。むちむちの感触である。

直樹はそのままそろりそろりと撫でていく。

「だ、だめ……手を離して、直樹くん」

と義母が直樹の手から逃れるべく、くなくと臀部をうねらせる。

けれどその動きは、直樹には挑発しているようにしか見えない。

尻のかたちが色っぽすぎて、ちよつとした動きも、男の目には誘いに見えてしまう。

直樹は義母の尻から手を離せなくなった。ねちね

ちと撫で回していると、真ん中の尻の狭間に指を入れたくなってくる。

それは尻たばが高いぶん、きゅつと深く割れていた。

直樹は人差し指を忍ばせた。

「あっ、なにしているのっ」

義母の双臀がぶるつとふるえた。

爪先が穴に触れた。それはしつとりと濡れていた。

もしかして、千鶴さんのお尻の……穴……。

直樹はその湿った入り口を、つんつんと指先で突いた。

「だめ、だめっ……そこはだめっ……」

「ここって、千鶴さんのお尻の穴なの？」

「そ、そうよ……いけないわ……わかるでしょう、ああ、直樹くん。もうお終いにして」

膣穴に触れるより先に、後ろの秘めやかな穴に触ってしまった。しかもそこは、しつとりとした湿り気を帯びている。

指先の支配力

直樹は指先を進めてみた。

「な、なにしているのっ」

後ろの入り口は、直樹の指を拒むように、押し返してくる。入り口はかなり狭い。いやここは入り口ではなく、出口なのだ。

そこに入れようとしてるから、拒んでくるのだ。

「やめてっ、直樹くんっ、おねがいだから、そんなとこいじらないでっ」

動かないで、と直樹は媚肉の割れ目に食い込ませている縄を、お尻の方に強く引き上げた。

「う、うう……い、痛い……」

お尻の穴がきゅきゅと締めまり、さらに強く直樹の指を拒んできた。

直樹は割れ目に食い込ませている縄を引いた。一瞬、千鶴の下半身から抗う力が抜けた。

そこを狙って、直樹はもう一度指を進めた。

義母のお尻の穴に指が入った。

「あつ、だめ、だめ……あう、うう……痛い……ああ、痛い……」

直樹の指を強く締めてくる。押し返そうとする動きだけではなく、直樹の指を味わおうとする動きも感じられた。

ペニスを入れたら、きつとひとたまりもないだろう、と直樹は思った。指だから、義母の後ろの穴の感触を、じっくりと味わうことができている。

「抜いて……ああ、抜いて……直樹くん……ああ、そこは、そこは入れるところじゃないのよ……ああ、わかってるでしょう」

「じゃあ、前の穴に入れてみていいかな、千鶴さん」

「だめ、だめっ。私はあなたのお義母さんなのよ……、絶対ゆるされないわ」

「じゃあ、こっちなかないよね」

直樹は少しずつ指を進めていく。奥へ入れるほど、締め付けはきつくなる。たった指一本でも、か

なり窮屈だ。

「うう、痛い……痛い……ああ、おねがい……終わりにして……」

千鶴が苦悶のうめきを洩らしている。本当につらいのか。それとも感じているのか。

お尻の穴は窮屈だったが、じわつと湿ってきた。ただつらいだけじゃないはずだ。お尻を見ると、

尻たばにえくぼが浮いたり消えたりしている。

そして、うつすらとあぶら汗がにじみはじめ、千鶴の体臭がさらにむつと濃く立ち上りだした。

直樹はお尻の穴に指を入れたまま、割れ目に食い込ませている縄をずらした。そして、いきなり膣穴に指を入れていった。

「あっ……」

ずぼり、と指が入った。後ろの穴と違って、入れるための穴らしく、直樹の指を歓迎するかのようにな熱い肉襞の群れがからみついていた。

「すごいよ、千鶴さん。ぐしょぐしょだ」

「うそ、うそ言わないで……ああ、なんてこと……」

ああ、ああ、こんなことって……」

義母の前の穴は、想像以上に潤っていた。ただ潤っているだけではなく、燃えるように熱い。

そして驚くことに、前の穴に指を入れた途端、後ろの穴の締め付けがさらにきつくなった。

でも、さっきまでとは違った。ただきつく締めるだけではなく、きゅきゅつと蠕動するような動きを見せはじめたのだ。

直樹は膣穴に、もう一本指を入れていった。二本で、ずぼずぼと刺激する。

「あ、ああっ……いや、いや……直樹くんっ、やめてっ」

今、義母のふたつの穴を好き勝手にしていることが、自分でも信じられない。

しかも、義母は大量の蜜をあふれさせて、感じているのだ。

縄が食い込む乳房を見ると、その先端で息づく乳首が、なにかを欲しがるようにひくついた。

直樹は考えるより先に、義母の胸の急所にしゃぶ

りついた。そして、吸うより先に、歯を立てていた。

「ひいっ」

義母が悲鳴じみた嬌声をあげ、がくがくと緊縛裸体をふるわせた。前の穴も後ろの穴も、強烈に締めてきた。

「おねがい……もう、ゆるして……千鶴をゆるしてください」

直樹は暴発した。ペニスに一度も触れることなく、ブリーフを汚してしまった。

「すごく締めているよ、千鶴さん」

「ああ、抜いて……ああ、はやく、指を抜いて」

「指を抜いて、僕のち×ぽを入れていいかな、千鶴さん」

「な、なにをばかなこと言っているのっ、私はあなたの母親なのよ」

「でも血は繋がっていない」

直樹は義母の膣穴から指を抜こうとした。すると、待つて、と義母が言った。指を離すまいとするかのように、きつく締めてくる。

「抜かないで……こ、このままでいて……」

「いやだよ、千鶴さん」

直樹は二本の指を義母の膣穴から引き抜いた。爪先から付け根まで、大量の愛液でねとねとだ。





「これ見てよ」

指を千鶴の鼻先に寄せる。

「い、いや……」

お尻の穴に入っている指が強く締め上げられる。表情の変化と同時に、からだの反応をじかに感じ取られて、楽しい。指を抜いた途端、千鶴の割れ目は、閉じられた。でも、まわりを飾る恥毛は愛液で濡れて、べったりと貼り付いている。

発情しているのは、あきらかだ。

直樹は義母のお尻の穴に指を入れたまま、ズボンをブリーフといっしょに引き下げた。

「だめっ、出してはだめっ」

千鶴が直樹の股間から視線をそらす。それでいて、お尻の穴の締め付けはさらに強くなる。

直樹のペニスは暴発したばかりなのがうそみたい、すでにびんびんに勃起した。

その先端は、義母の前方の入り口を狙っている。

千鶴は直樹のそばから離れようとしているが、お尻の穴深く入っている指が、それをゆるそうとし

い。

直樹はお尻の穴に入った指で、千鶴をそばへと引き寄せていった。

「あつ、だめっ」

怒張の先端が、義母の割れ目に触れた。

暴発していなかったら、これだけで射精していたかもしれない。すでに、先走りの汁が鈴口からにじんでいる。

「入れるよ、千鶴さん」

「だめっ、だめっ……私は母親なのよっ、こんなこと、ゆるされないわっ」

強く拒む声とは裏腹に、千鶴のお尻の穴は、こっちに入れてというかのように、直樹の指をひくひく締めてきた。

きつと前の穴は、もっと欲しがっているはずだ。

縄を手にしたことで直樹が変わったように、千鶴も縄を肌を受けた時から、変わったようだ。

直樹は腰を突き出していった。すると、しっかりと閉じていたはずの割れ目が開き、義理の息子の鎌

首をくわえこんできた。

「だめっ、だめっ」

千鶴が下半身を振って逃げようとする。けれど、すでに前の穴と後ろの穴でがっちり固定させてしまった。鎌首が燃えるように熱い。

直樹はこちこちのものを進めていった。

「ああっ、だめっ」

肉壁の群れが、直樹の怒張にからみついてくる。

義理の息子の挿入を歓迎するように、奥へ奥へとひきずりこんでいった。

「ああ、すごいよ、千鶴さん」

直樹は童貞を卒業した。しかも最初の女性が、美しい義母とは。

義理の母のお××こは、想像をはるかに超えた快楽を直樹のペニスに与えてくれた。発情した媚肉にねっとり包まれ、鎌首から付け根まで、とろけてしまいそうだ。

「ああ、なんてこと……ああ、もうお終いだわ」

千鶴は今にも泣き出しそうな顔で、いやいやとか

ぶりを振っている。でも、直樹は知っているのだ。

前の穴も後ろの穴も、直樹を歓迎している。

携帯電話が鳴った。エプロンから呼び出しメロディーが聞こえてきた。

「おやじからかな」

直樹は一旦、怒張を抜いた。でも、お尻の穴からは絶対指を抜くことはしなかった。そのまましゃがみこみ、エプロンから携帯を取った。

そして再び、義母を貫いていった。

「あうっ……」

千鶴のかたちのいいあごがそりあがる。白い喉がなんとも妖しい。携帯のボタンを押し、千鶴の顔にもっていった。

「あ、あなた……は、はい……」

やはり、おやじからだ。

「今、今は……夕食を作っていたところ……えっ、声が変わかしら……ちよつと風邪気味かもしれないわ」

直樹はいきなり激しく怒張を前後させた。

不意をつかれたのか、千鶴が、ああつ、と甘い声をあげた。

「な、なんでもないわ……わかりました。遅くなるのね。じゃあ、お夜食の用意をして待つてゐるから……え、ええ……じゃあ」

直樹は携帯電話を切ると、なじるような目を向ける義母のお××こを激しく突いていった。

「あ、ああつ……ああ、い、いいつ……どうしてつ、どうしてなのっ」

千鶴が、どうして気持ちいいのか、濡れた瞳で訊ねてくる。

ピンクの修羅場

直樹は返事するより先に、熱い息が洩れている義母の唇を奪った。舌を入れると、千鶴のほうからきらませてきた。

ねつとりと、ふたりの舌がじゃれあうようにからみつく。おいしかった。義母の唇と舌は、甘くとろ

けそうだ。

直樹はたつぷりと唾液を注いでいた。義母はそれを白い喉を動かし吞んでいく。その瞬間、お××ことお尻の穴が同時にきゅきゅつと締まった。

直樹は縄が食い込む乳房をわしづかみにして、こねるように揉みながら、激しく突いていった。

「あつ、ああつ……ああつ……」

もう、いけない、とも、駄目、とも千鶴は言わなくなった。義理の息子のペニスから与えられる快楽に呑み込まれてしまっている。

「ああ、ああつ……そんなに……ああ、突かないでつ……ああ、そんなにしちゃ、いやっ」

「もしかして、いきそうなの、千鶴さん」

ちがうの、と言うように千鶴がかぶりを振る。けれど、直樹を見つめる瞳は、今にもいきそう、と告げていた。

直樹はがんがん突いていった。まさに、男になった気分だった。一本のペニスで、美しい女体を操っている。

「ああ、ダメダメ……ダメダメ……」

千鶴が逃げるような動きを見せた。すると、お尻の穴に入っている指がそれを拒むようにえぐる。

「あうっ……恥をかきそう……ああ、もうだめっ」

義母の媚肉が万力のように締まっていった。

「ああ、ちぎれるよっ」

本当にペニスの根元から食いちぎられそうな気がした。あっ、と思った次の瞬間に、直樹は爆発した。義母のお××こでひくつくペニスを、さらに強く締め上げてくる。それは、最後の一滴まで絞りとうとするような動きだった。

チャイムが鳴った。

こんな時間、訪ねてくる人間はいない。

「葉山先生かもしれないね、千鶴さん」

そう言うのと、千鶴がハッとした顔を見せた。

直樹は前の穴からペニスを抜き、後ろの穴から指を抜いた。

そして、どろりどろりと白濁があふれてくる割れ目に、あらためて股縄を食い込ませていった。

「あう、うう……な、なにをするの……もう、お終いでしよう……」

直樹は蟻の門渡りを通し、双臀の狭間に食い込ませると、そのまま引き上げていった。

「う、うう……」

縄鞭のできあがりだ。割れ目に食い入る縄が、白く汚れていく。あの白濁は僕のザーメン。今まで、ティッシュの中に虚しく出していたザーメンが、義母のお××こから出てきている。

またチャイムが鳴った。直樹は汚れたブリーフと、いっしょにズボンを引き上げると、部屋を出て行くとした。

「待つて、待つてっ、縄を解いて、直樹くんっ」

アクメの汗で洗われた妖艶な美貌を強張らせ、千鶴がよろめくように近寄ってくる。ザーメンが太腿の内側まで垂れていく。

「そのまま待つていて、千鶴さん」

「だめっ、待つてっ」

「いっしょに来るか」

SMマニアは毎月21日、全国書店で一斉発売です

直樹はとがりきつたままの乳首をつまむと、引つ張った。

「う、うう……」

感度が上がっているのか、千鶴がぐくぐくと緊縛裸体をふるわせた。むっと汗の匂いが薫ってくる。

直樹は義母を置いて部屋を出た。階段を駆け下りる。玄関の向こうには、香穂里先生がいる、という確信があった。玄関のドアを開けると、心配そうな顔の香穂里先生が立っていた。

「こんばんわ、菅野くん」

さわやかな薫りが、直樹の鼻孔をくすぐっていた。

「先生……」

香穂里先生が真摯な瞳でじつと直樹を見つめる。

「お義母さまはいらっしゃる？」

「義母にあのと言うんですか」

「まさか。なにも言わないわ。もう、あんなこと、二度としないと約束してくれるでしょう、菅野くん」

直樹は黙った。

香穂里がすうつと通った小鼻をひくひくさせた。

「菅野くん……な、なにか、していたの？ 変な匂いがするわ」

「上がってください」

直樹はそれには答えず、香穂里先生の前にスリッパを出した。そして、こっちです、と階段を上がっていく。

「お義母さまにあいさつしないと。どこにいらっしゃるのかしら」

「二階にいますから」

直樹は自室のドアの前で香穂里先生を待つ。

「この中にいますから」

そう言つてノブをつかむと、香穂里先生が、待つて、と直樹の手をつかんできた。

「どうしたんですか、先生」

嫌な予感がするのだろう。香穂里先生の美貌が強張っている。

「このドアを開いたら、僕がもう二度と先生に迷惑

をかけないことがわかりますよ」

「ど、どういうこと、かしら……」

こういうことです、と言つて、直樹はドアを開いた。緊縛されたままの千鶴は部屋の真ん中に立っていた。隠れるところなどないので、あきらめていたのか、まさか、義息が教師を連れてくるとは思ってもしなかったのか。

「こ、これは……」

香穂里先生が呆然と部屋の入り口に立っている。

義母のほうは、あきらめたような、自分を失っているような、なんともいえない表情をした。

義母の裸体からは、むせるような汗の臭いと、直樹のザーメンの匂いが漂っている。

「先生、もう、なにも心配いりませんよ」

直樹は義母のそばに寄ると、ズボンとブリーフを同時に下げた。はやくも見事な力を取り戻したペニスがあらわれる。

「菅野く、くん……」

「先生のパンティを盗みたくなったら、こうやつ

て、千鶴さんの口に出してしまえば、すっきりしますから」

直樹が義母の肩を強く押した。すると、義母は逆らうことなく、その場にひざまずいた。直樹は義母の乱れ髪をつかむと、股間に持つていく。

「な、なにしているのっ。菅野くんっ、あなた、お義母さまになにをしているのっ」

千鶴がピンクの舌を出した。先走りの汁がにじんでいる先端をちろちろと舐めていく。

「お、お義母さま……どうして、どうして」

「義息^{むすこ}がやったことは、どうか先生の胸の中にしまつてください。おねがいします」

「誰にも言いません。だから、そ、その……ペニスから……唇を離してください」

「こうして、たくさんザーメンを出してあげないと……また、義息が、先生にご迷惑をおかけしますから」

そう言うと、千鶴は精一杯唇を開き、女教師の前で、義理の息子のペニスにしゃぶりついていった。

情欲連鎖

栗出海洋 え／＼ 陽児

奔放にくねる肉

旧友の妻

九月に入っても暑い日が続いている。人蒸れがする京都駅中央改札口の近くで、多嶋悦二は憂鬱な表情で人待っていた。

村井昭夫から突然電話が掛かってきたのは、お盆

に帰省した田舎で開かれた、中学の同窓会に初めて出席して一月が過ぎた頃だ。

『頼みたい事があるんだ。詳しい事は会ったときに』

確かに中学時代は親友だったが、卒業後は年賀状一枚交わした事もな

❖「いく時は真紀子イクと叫ぶんですよ」男は豊満な真紀子の臀部に怒張を擦り付け、ぬかるんだ蜜壺に指を二本沈める。「あぁっ、イク！」



く、同窓会で会ったのが二十年ぶりだ。そんな男の頼み事にろくな話がないと思ひながらも、沈みがちな電話の声が気になって出向いてきている。

「多嶋様ですね」

改札口を出てきた女性が、会釈をしてきた。黒のフォーマルワンピースを着こなした、均整の取れた眩しい美人だが、手にした大きな旅行カバンが不釣り合いだ。

「はい、多嶋です」

大柄な戯^{いか}つ男を待っていた悦二は、呆氣に取られた表情で会釈を返した。涼しげな目元、筋の通った鼻、色つばい唇、端麗な頬、すれ違った男が、誰でも振り返りたくなる美貌だ。

「初めまして、村井真紀子です。主人が来られなくなりましてので、代わりに私が……」

端麗な頬を朱に染めた真紀子は、急に俯いた。

「こんな所で話も出来ませんので、コーヒーでも飲みながら」

人ごみで妙に色つばさを見せる人妻に慌てた悦二

は、持つて上げましようとかバンを受け取つてホテルのラウンジに向かった。何が入っているのか、ずっしりと重たい。

「ご用件は何だったのでしょうか？ 電話では詳しい話を聞いていないのですが」

アイスコーヒーを注文した悦二は、無口になってしまった人妻に対して単刀直入に切り出した。会いたいと言つておきながら代理をよこす旧友に、少し腹が立っている。

「夫から手紙を預かっています」

真紀子はバックから取り出した封筒を、テーブルの上を滑らせそつと差し出した。白く長い指、淑やかな仕草が育ちのよさを表している。

手紙を読み進める悦二は、同窓会の二次会で村井と語り合つた事を思い出した。仕事の事、家庭の事、女の事など、アルコールが入つていたとは言え、いつになく多弁になり、エロ小説を書いていると言つた記憶がある。

悦二はチラツと人妻を盗み見た。手紙には、雑誌

に掲載されていた小説を読んだと書かれてある。とすれば、妻もあの小説を目にしている。俯いている真紀子の羞恥に煙る表情が、嗜虐の欲情をかきたてる。

喉の渴きを覚えた悦二はコーヒーを飲み干すと、氷を噛み砕いて潤いを求めた。それほど手紙に書かれていた依頼事は、驚愕させられるものだ。

「貴女は、この手紙の内容を承知で、私に会いに来られたんですか？」

驚きを隠せない悦二は、周りを気にして声をひそめた。旧友からの手紙には、妻の調教を依頼する内容である。

「はい」

背中までの黒髪を振り分けるようにして、俯いていた小顔を上げた真紀子は、真剣な表情で悦二を見詰めた。

「同窓会の際に村井とは色んな話をしましたが、こんな事は一言も言っていなかったはずなんです」

人妻の潤んだ悩ましい瞳にしどろもどろになる悦二は、読み終えた手紙を差し返した。

「主人も私も、先生の小説を読ませて頂き、無理をお願いする事にしましたのです。どうか、調教をお願いします」

真紀子は深く頭を下げた。

「頭を上げて下さい。ここでは話をしづらい、出ましょう」

それでなくても人目を引いているのに、人妻の大胆な言葉と態度に慌てた悦二は、伝票とカバンを手にとると席を立った。昼下がりのラウンジで憩いの時間を楽しんでいる、優雅人の好奇の視線が背中に刺さってくる。

「奥さんを調教して欲しいなんて、村井の奴はいったい何を考えているんだ」

自宅マンションに着いた悦二は、吐き捨てるように言った。

「無理を言って、すみません」

真紀子が恐縮して頭を下げた。

「妻の調教なんて、自分ですればいいんですよ。貴女も、そう思いませんか？」

同窓会で自慢していた美人の妻を、まるで見せ付けるかのように送り込んできた旧友に、再び腹が立つた。

「主人は抗ガン剤の影響でセックスが出来なくなつたのですが、先生の小説を読んで久しぶりに……」

真紀子は言つて、頬を赤くした。

「抗ガン剤？」

悦二は我が耳を疑つた。殺しても死なないような、立派な体格をした友の姿が脳裏に浮かんでくる。

「はい。二月ほど前、肺ガンだと宣告されました。

今年いっぱい持つかどうか」

表情を曇らせる真紀子は、声を落とした。

「この前、会ったときはそんな風には見えなかったぞ。それなら、こんな所に来ていないで、村井の傍にいてやったほうが」

悦二はソファに座り込むと、言葉を探るように天井を見詰めた。

「私も傍にいたいのですが……。主人は私が縛られている姿を、どうしても見てみたいと聞かないのです」

勧められたソファに浅く腰掛けた真紀子は、涙ぐんだ目を悦二に向けた。

「しかしですよ」

村井夫婦の真意が測りきれない悦二は、続く言葉が出てこなかった。美人妻を調教する事に不服などある訳がないが、それが死を前にした旧友への饞別になるかと考えると、複雑な心境になる。

「主人はなかなか外泊できないので、これで私を撮つて貰うように言われています」

真紀子は小顔を真つ赤にしながら、カバンからビデオカメラのセットを取り出した。

たとえ死を前にした夫の願いだとは言え、初めて会った男に緊縛され、ビデオに収める事を哀願する人妻の心境はいかほどのものか、悦二は返事に困つ

た。

手紙には小説に出てくるM女のように、縄酔いする妻の姿を一度見てみたいと書かれていたが、創作の世界と現実とは違うのだと、病院のベッドで寝ているだろう旧友に心の中で叫んだ。

「無理なお願いでしょか？」

悦二が黙ってしまったので、真紀子は不安げに口を開いた。

「貴女のような美人を調教できるなんて、光栄なことですよ。ただ、貴女のことを無視した村井の願いだったら、引き受けかねるのですが」

悦二は嗜虐の光りを宿した鋭い眼差しで、膝の上に両手を置いて硬くなっている人妻を見据えた。

「主人の望みは、私の望みでもあります」

真紀子は自分の迷いを吹き消すかのように、きつぱりとした口調で言った。

「分かりました。奥さんが望むなら、引き受けましょう」

高価そうなビデオカメラを手にした悦二は、人妻

にレンズを向けてみた。恥ずかしそうに俯いた熟女から、艶かしい色香が立ち昇っている。

「宜しく願います」

不安と安堵の入り混じった表情を見せる真紀子は、深々と頭を下げた。

縄酔いの人妻

三脚にカメラをセットした悦二は、クローゼットから愛用のボストンバックを取り出した。中には麻縄などの責め具が入っている。

「奥さんは、縛られた経験があるんですか？」

テーブルを片隅に追いやった悦二は、使い慣れた麻縄を扱いた。

「ありません」

どうしていいのかわからず、ソファに腰掛けたまま表情を強張らせている真紀子は、か細い声を震わせた。

「何をぐずぐずしているんだ。そこに正座して、縛

つて下さいと、お願いするんだ」

リビングの中央を指差す悦二は、急に声を荒げた。

「はい」

弾かれたように立ち上がった真紀子は、床に正座をすると両手を衝いて、縛って下さいと頭を下げた。

「駄目だ、駄目だ！ もつと気持ちを含めろ」

険しい表情になった悦二は、鋭い眼差しで人妻を見据えた。

「ご主人様、何も知らない真紀子をきつく縛って、縄の味を教えて下さい。お願い致します」

真紀子は床に額を擦り付けるようにして哀願した。

「縛られるという事が、どういう事だか分かっているのか？」

真紀子の背後に立った悦二は、細いなで肩に手を乗せた。微かな震えが手の平に伝わってくる。

「は、はい」

正座して背筋を伸ばしている真紀子の小顔が、急に強張った。

「縛られたら何をされても抵抗できなくなるんだぞ」

胸に手を滑らせた悦二は、シルクの滑らかな生地の上からふくよかな乳房を鷲掴みにした。

「いや」

自ら望んだ事とは言え、会ったばかりの男に胸を触られる羞恥に、真紀子は反射的に身を振った。

「駄目だ、少しも分かっているし、覚悟ができてない。出直してくるんだな」

美眉をしかめる人妻を突き放すように、悦二は手にした麻縄をソファに投げ出した。

「御免なさい。どんな事にも耐えますから、縄の味を教えて下さい」

姿勢を正した真紀子は、涙を浮かべた目で悦二を見上げた。

「カメラに向かってはつきりと言うんだ。これから真紀子はご主人様に縛って頂き、マゾとしての調教

を喜んでお受け致しますと」

旧友の妻をいたぶることに昂ぶりを覚える悦二は、精神的に熟女を追い詰めていく。

夫に見せるために撮影しているカメラに向かって真紀子は、悦二の言葉を復唱した。被虐の悦びを知らない身体が恐怖と屈辱に慄き、日に日に痩せていく夫の説得で覚悟したはずの決意が、崩れそうになつていく。

「縛られたら、乳を触られるだけではなく、裸にされてオマ○コの奥まで見られてしまうかも知れないんですよ。それでも縛って欲しいんですか？」

悦二は卑猥な言葉で人妻の恐怖心を煽った。

端麗な頬を引き攣らせて悦二を見上げている真紀子は、逃げ出したくなるのを必死でこらえて小さく頷いた。

「どこまで耐えられるか、楽しみですよ」

淫靡な笑みを浮かべた悦二は、細い手首を握むと背中に捻じ曲げた。亭主の望みに答えようとする人妻のけなげさが、サディストの欲情を激しく刺激す

る。

「ううっ……」

手首を縛られ、胸に回された麻縄で乳房の上下を締め上げられた真紀子は、一文字に結んでいる唇から低い呻きを洩らした。

「縄の味はどうですか、気持ちいいですか？」

後ろ高手小手縛りを完成させた悦二は、カメラの横に立つと人妻を見詰めた。エアコンを利かせているにも関わらず、苦痛に歪んだ美貌には汗が噴き出している。

「く、苦しい……」

初めての緊縛に慄く真紀子は、解放を哀願する悲痛な眼差しを悦二に向けた。

「困りましたね。村井の手紙には、縄酔いする奥さんの姿を見たいと書いてあったのですが。縄に身体が馴染むまで、そうしていなさい。私はタバコを切らしたので買ってきます」

「待って下さい」

「十分ほどで戻るから、正座しているんだ」

泣き出しそうな人妻を残して、悦二は部屋を出た。初めての緊縛放置に、どんな変化を見せるか楽しみだ。

マンションを出た悦二は、近くの喫茶店に入った。

一人になった真紀子は、しだいに不安をつのらせていく。十五分経っても悦二は帰ってこない。静かな部屋に流れる時間が、永遠のように長い。

三十分を過ぎると不安が恐怖を呼ぶ。事故にでも遭って、このまま帰ってこないのではないか。緊縛された苦痛など吹き飛び、悦二の身が、放置されたわが身が心配で居たたまれなくなる。

どうすればいいのか。助けを呼んでも今の状況を説明できない。四十



分が過ぎ、恐怖が恐怖を呼び精神が壊れそうになる。座っていられずに玄関まで行き耳を澄ますが、足音ひとつ聞こえてこない。

一時間経ち、真紀子が叫び出しそうになったとき、玄関のドアが開いた。

「正座していると云ったのに、ここ
で何をしている！」

緊縛された身体を抱き付くように
投げ出してきた真紀子を、悦二は叱
り付けた。

「いつまでも帰って来ないから
……」

悦二の肩口に顔を擦り付ける真紀
子は、押さえ切れない感情に声を出
して泣き出した。

「何があってもご主人様の命令に従
うのが、マゾ女の勤めだ。分かった



ら、戻って正座をしてろ」

人妻の泣き顔に悦二の嗜虐癖が昂ぶった。

リビングに戻った真紀子は、カメラの前に正座して背筋を伸ばした。涙を拭う事のできない頬はまだ濡れている。

「自由を奪われる怖さが、少しは分かったかな？」

ソファに腰掛けた悦二は、安堵した人妻の小顔に一時間前にはなかった被虐性を見た。大きな瞳の奥に妖しい炎が揺らいでいる。

「はい、ご主人様。とても怖くて、気が変になりそうでした」

上目遣いの真紀子は、悩ましい表情を浮かべた。

緊張の糸が解れた瞬間、緊縛されている事に対する不思議な感覚が生まれ始める。

「自由を奪われる怖さが分かったら、次は柔肌に食い込む麻縄の感触を教えるから、パンティだけになるんだ」

悦二はいったん、人妻の縛めを解いた。

「はい。お願いします」

縄目の痕が残る手首を摩りながら立ち上がった真紀子は、夫以外の男に素肌を晒すために服を脱ぎ始める。

飾りベルトを外し、背中のファスナーを下ろした真紀子は激しい羞恥に襲われたが、悦二の小説を読んで興奮した夫に激しく求められたときを思い出すと、身体の芯が熱く疼き崩れかけていた決意が甦った。

ソファに腰掛けた悦二は、人妻の脱衣を黙って凝視している。ワンピースとキャミソールを脱ぎ、黒の下着だけになった熟女の白い肌が眩しく輝いている。

羞恥に震える女体のふくよかな胸、括れた腰、吊り上がった尻朶、むっちりした太腿、全てに官能的な美しさが溢れている。

「さっさとブラジャーを取って、お願いをしないか」

麻縄を扱く悦二は、躊躇している人妻を叱咤した。

「はい」

端麗な頬を真つ赤に染める真紀子は、震える手でブラジャーを外した。上向きに尖った形のいい乳房が現れる。

「ご主人様、真紀子を縛って下さい。お願いします」

夫に飲んで貰いたい一心の真紀子は、正座すると三つ指をついた。

「立つんだ」

二重にした麻縄に三つのループを作った悦二は、一つ目の輪を人妻の首にかけると縄尻を括れた腰に回した。

柔肌に食い込んでくるザラついた縄の感触に真紀子は、ブルつと震えた。

腰に回した縄尻を前面のループに通して引き絞っていく悦二は、慣れた手付きで菱縄縛りを完成させると、後ろ高手小手縛りも追加して人妻の上半身を緊縛した。

「フーッ……」

さらにきつく柔肌に食い込む麻縄に真紀子は、深い吐息を洩らした。身体の芯が熱くなり、アクメに似た快感が全身に広がっていく。

「縛られた自分の姿は、どうですか？」

悦二はキャスター付きの大きな姿見を、隣の部屋から引つ張り出してきた。

「恥ずかしい……」

恐る恐る鏡に視線を向けた真紀子は、羞恥の言葉とは裏腹に、緊縛された自分の姿から目がそらせない。

ふくよかな乳房は麻縄で絞り出され、淡いピンクの乳輪の真ん中で乳首が膨らみ、白い肌は上気して桜色に染まっている。

「美しいと思いませんか？」

小鼻を膨らませて息を荒くしていく人妻に、悦二はカメラを向けた。目が虚ろになり、ピンクの唇が締まりをなくし始める。

「恥ずかしくて、気が変になりそうです」

掠れた声を震わせる真紀子の足元が、頼りなくフ

ラつき始める。

「大きな乳を揉んで上げましょうか？ それとも、勃起した乳首を舐めて上げましょうか？」

濃厚なフェロモンを発散させる人妻の姿に興奮する悦二は、言葉で熟女の感性を刺激した。

「いやです。何もしないで下さい」

小さくかぶりを振る真紀子は、括れた腰をわななかせた。悦二の声に共鳴するかのように子宮が疼き、立ってられないほど下半身の力が抜けていく。

「ひとおもいにパンティを引き下ろして、オマ○コに指を突っ込んで上げましょうか？」

淫靡な笑みを浮かべる悦二は、恍惚とした表情の人妻をアップで捕らえた。このまま犯してしまいたい激しい衝動が昂まるが、死と戦っている旧友の顔が脳裏にチラつき、理性が欲情を抑えてしまう。

「あっ！ ああ……」

噛み殺した喘ぎ声を洩らした真紀子は、崩れるように座り込んでしまった。官能的な太腿が痙攣する

ように震えている。

「顔を上げて、カメラを見るんだ」

美人妻のアクメに興奮する悦二は、声を上擦らせた。ズボンの中の一物が悲鳴を上げて、先走り汁でブリーフを濡らしている。

モニターに写る熟女の表情は、縄酔いを超えていた。大きな瞳は焦点を失い、半開きの唇からは涎が糸を引いて垂れている。

言葉の枷

村井昭夫から電話が掛かってきたのは、真紀子を縛って二週間が過ぎた頃だ。初めての緊縛で昇り詰めた熟女の被虐癖の強さに刺激され、自分の嗜虐癖が暴走するのが怖くなった悦二は、縄酔いの表情をカメラに収めると直ぐに帰宅させた。

『先日は無理を聞いて貰って、すまなかった。やつと外泊許可が出て、昨夜、ビデオを観たよ。お陰で妻を抱くことができた、ありがとう』

電話の向こうから聞こえる旧友の声は弱々しく、生気が感じられない。

『夫婦の痴話話に人を巻き込むなんて、本当に迷惑な話だぞ。それより、身体の方はどうなんだ?』

努めて明るくよそおう悦二は、話題を変えるのに必死だ。縛った女の亭主と、その事について話をするほど肝は据わっていない。

自分のおもわしくない病状を語り終えた昭夫は、緊縛だけではなくムチやロウソクを使つての調教を依頼してきた。

困惑を隠しきれない悦二は、色々と理由を並べて無理だと断つたが、愛する妻の昇天する姿を見て死にたいと旧友に泣きつかれて、条件付きで承諾するしかなかった。

「ご主人様、不束者ふつつかですが、ご調教をお願いします」

翌々日、大きく膨らんだ旅行カバンを持ってやってきた真紀子は、玄関に入るなり深く頭を下げた。

「上がりなさい」

昭夫からの電話のあと悦二は、被虐癖の強い人妻をどんな風に調教するか色々と妄想を膨らませていたが、和服で現れた妖艶な熟女の姿に頭の中が白紙になった。

「はい。邪魔します」

足音を立てずにリビングに入った真紀子は、ソファに浅く腰掛けると膝の上に両手を揃えた。

「村井との約束を確認しておきます。調教期間は五日間。内容は私に一任。調教後、何があっても私は関知しない。それと、私の男としての欲望を受け入れる。それでいいですね」

この前より、ひとときわ清楚感を漂わせる人妻を見詰める悦二は、最後の条件を言い難そうに口にした。

「はい。宜しくお願いします」

正座した真紀子は、床に額をつけた。髪をアップにした白い頂から、噎ひせかえるほどの色香が立ち昇った。



「早速、始めますか」

前回と同じようにカメラをセットした悦二は、激しく昂ぶる気持ちを抑えて麻縄を扱いた。

「お願いします」

真紀子は恥ずかしそうに頬を朱に染めた。悦二と対面したときから身体の芯が疼き、息苦しいほど動悸がしている。

「一度縛られただけで縄の味を覚えるなんて、奥さんは真性マゾだったんですね」

欲情に潤んだ瞳にゾクツとする悦二は、自分の昂ぶりを隠すように人妻を言葉でいたぶった。

「おつしや
仰らないで……」

上目遣いに悦二を見詰める真紀子は、羞恥に声を震わせる。

「奥さんの身体を開発する前に病に倒れるなんて、村井も不憫な奴ですね」

悦二は着物姿の人妻を後ろ高手小手に縛り上げていった。

「夫の事は仰らないで……真紀子と呼んで下さい」
身体に食い込んでくる麻縄の圧迫感に陶酔する真紀子は、透き通った悩ましい声を洩らした。

「貴女は村井の奥さんなんですよ。ひとりの女である貴女を責めるより、友人の妻である貴女を責める方が興奮するじゃないですか。そう思いませんか、奥さん」

淫靡な笑みを浮かべる悦二は、緊縛した背中 of 括



り目に新たな縄を繋ぐと、天井に取り付けた金具で熟女を吊った。

返す言葉のない真紀子

は、恨めしそうに悦二を見詰めた。奥さんと呼ばれる度に背徳感が増し、妖しく官能が昂ぶっていく。

「カメラの向こうにいる亭主に、お尻を触られて悦んでいる顔を見せて上げなさい」

人妻の欲情を感じ取る悦二は、いやらしい手付きで豊満な臀部を撫で回す。

「いや、止めて下さい」

悦二の言葉に屈辱と羞恥が込み上げる真紀子は、吊るされた身体をもがらせる。

「自由を奪われたら何をされても抵抗できないと、この前教えて上げたでしょ」

人妻の足掻きを楽しむ悦二は、着物の裾を割るように手を差し込んでいった。

「ノーパンでくるなんて、虐められなくて仕方なかったんですね」

滑らかな太腿を撫で上げていくと、サラサラした柔毛が指先に絡んでくる。

「仰らないで、恥ずかしい……」

股間を弄られる真紀子は、括れた腰をくねらせた。

「悦んではかりいる女を責めても面白くないので、言葉の枷を嵌めておきましょう。今後、苦しい、痛い、の二言を口にしたら調教を中止します、いいですね」

背後から抱きすくめるようにして人妻をいたぶる

悦二は、赤く染まった耳朶を甘噛みした。

「は、はい」

被虐の悦びを覚え始めた身体を包んでくる切ない快感に、真紀子は総身を震わせた。病に倒れるまでの夫は、仕事人間でセックスもタフだったが、女を満足させる繊細さを持ち合わせていなかった。

「縛られただけで、オマ○コを濡らしているんじゃないでしょうね。奥さん」

熟女の感受性のよさに北叟笑む悦二は、締めまりが

なくなつた内腿に手を滑り込ませた。スベスベの柔肌が汗ばんでいる。

羞恥の吐息を洩らす真紀子は、小さくかぶりを振った。妻としての貞操感が、簡単にアクメに達する事を拒んでいる。

「昇り詰めるときは、真紀子イク、と言うんですよ」

人妻のやるせない法悦を操りながら脚の付け根を撫でる悦二は、柔らかな内腿を強く抓り上げた。

「痛い！」

蜂に刺されたような激痛に襲われた真紀子は、悲鳴に近い叫びを上げた。

「奥さん。今、痛いと言いましたね。調教は中止します」

険しい表情を見せる悦二は、震えの収まらない人妻の縛めを解くと、ソファにどっかりと腰を下ろした。

「ご主人様」

正座した真紀子は、涙ぐんだ目で悦二を見上げ

た。

「調教は中止です、帰って下さい」

悦二は冷たく突き放す。女を精神的に追い詰めていく快感に、身体がゾクゾクしている。

「ご主人様……」

真紀子の端麗な頬を大粒の涙が流れ、細い肩先が小刻みに震えた。夫の望みが叶えられなくなるからではない、責めを望む女体が泣いているのだ。

悦二は鋭い眼差しで人妻を睨んだ。怒りを露わにする表情とは裏腹に、熟女の熱い涙に一物がムクムクと頭をもたげてくる。

泣きながら悦二に擦り寄った真紀子は、怒鳴られるのを覚悟して素足にそつと唇をつけた。

人妻のけなげさに昂ぶる悦二は、大きな足を投げ出した。

真性マゾは肉体的に責めるより、精神的にいたぶる方が嗜虐の欲望が満たされる。

舌を伸ばして丹念に足を舐める真紀子は、床に顔を擦り付けるようにして小指から順番にしゃぶって

いった。ときおり悦二に向ける、潤んだ瞳が情けを訴えている。

「もう一度チャンスやるが、今度、苦しい、痛いと言ったら、直ぐに帰らせるぞ」

「ありがとうございます……」

親指を口に含み舌を絡ませる真紀子は、くぐもつた声で礼を言った。

「命令に従えなかった罰を与える。正座して、歯を食いしばれ」

険しい表情を崩さない悦二は、人妻の前で胡座を組むと右手を上げた。

大きく目を見開いた真紀子の小顔が、恐怖に引き攣った。平手が左頬に炸裂して、アップに結った髪が完全に解れてしまう。

「痛いかな？ 痛いとか叫べば止めてやるぞ」

苦痛に歪む美貌に興奮する悦二は、かえす手の甲で右頬を叩いた。バシッと打撃音が響き、着物姿の女体が揺らぐ。

潤んだ瞳で悦二を見詰め続ける真紀子は、小さく

首を振った。親にも叩かれた事のない頬を打たれるショックと、意識が飛びそうな衝撃に、一瞬にして思考力がなくなる。

「そうか。もつと打たれたいか」

唇の端に嬉しそうな笑みを浮かべた悦二は、往復ビンタを両頬に放った。心地よい響きに一物が勃起して、ズボン突き破りそうになっている。

「ううっ！」

低い呻きを洩らし床に手をついた真紀子だが、直ぐに体勢を戻すと背筋を伸ばした。女の命とも言える顔を叩かれる責めに、慄きと陶酔が生まれ総身の震えが止まらない。

「いい覚悟だ」

悦二はさらに力を込めてビンタを続ける。乱れた黒髪は汗と涙で濡れた小顔に貼り付き、端麗だった頬は真つ赤に腫れ上がっていく。

「くうっ……」

頭の芯まで響いてくる衝撃に目の前が真つ暗になる真紀子は、ゆっくりと崩れ落ちていった。

真性マゾの系譜

人妻をソファに寝かせた悦二は、冷たい水で濡らしたタオルを真つ赤になっている頬に当てた。男を惹きつける美貌は腫れ上がり、醜く歪んでいる。

「あっ！ すみません」

慌てて身体を起こした真紀子は、自分で頬を冷やした。

「帰りたくなりましたか？」

「いいえ。今度は気を失ったりしませんから、もつと虐めて下さい」

真紀子は真顔で悦二を見詰めた。頬のズキン、ズキンとした痛みが、下腹の奥を熱くして、子宮を疼かせる。

「虐め抜いて、苦しい、痛いと呼ばせてやる。裸になれ！」

嗜虐に目をギラつかせる悦二は、テーブルに色んな責め具を並べていった。

「はい」

真紀子は震える指で帯を解いていく。恐ろしくて仕方がないのに、身体が燃え上がるほど火照っている。艶かしい仕草で着物を脱ぎ、淡いピンク色の襦袢を脱いでいく真紀子の表情が、夢見るようになっていく。柔肌を晒す羞恥に酔い始めている。

「ああっ……」

白い湯文字を括れた腰から剥がしていく真紀子は、鋭い視線に身を焦がし微かな喘ぎを洩らした。

「奥さん、オマ○コがヌルヌルに光っています。こんな淫乱な妻を残しては、村井も死ねませんね」

後ろ手に縛った人妻を天井から吊るし、縄を掛けた左足を引き上げた悦二は、隠せなくなった股間を覗き込んだ。

薄い柔毛に飾られた小高い恥丘。小刻みに震える官能的な太腿。愛液で濡れ光る大陰唇。縦長に割れ開いた美事な小陰唇。筒皮が剥けて真珠の輝きを見せる肉芽。男の欲望をそそらずには置かない女のすべてがそこにあった。

苦しさで恥ずかしさに耐える真紀子は、小鼻を膨らませて荒い呼吸をした。白かった柔肌は桜色に上気して、汗が滲み始める。

「苦しいでしょう、我慢しないでいいですよ」

人妻の辛そうな表情に含み笑いを洩らす悦二は、鈴のついた洗濯バサミを手にすると、麻縄で絞り出したふくよかな乳房の先端で、小刻みに震える乳首に挟みつけた。

「くうっ……」

眉間に深い皺を寄せる真紀子の額に、玉の汗が噴き出す。

「早く痛いと言わないと、乳首が千切れるぞ」

見開いた目で恐怖を訴える人妻の苦悶に昂ぶる悦二は、反対の乳首にも容赦なく洗濯バサミを挟みつける。

「い……」

歯を食いしばって激痛に耐える真紀子の小顔が真っ赤になり、柔肌に玉の汗が流れる。

「なかなか頑張りますね」

人妻の股間に手を伸ばした悦二は、愛液を掬うように割れ目をなぞると、大きく膨らんだ肉芽を指先で転がした。

「あうっ……」

真紀子は喉を仰け反らして唾を飛ばした。背筋を貫く快感に気を抜くと、乳首を襲っている激痛に悲鳴が出そうになる。

「お豆が弾けそうだ」

わななく腰を押さえる悦二は、敏感なクリトリスを弄り続ける。チリン、チリンと乳首にぶら下がった鈴の澄んだ音色が、熟女の喘ぎ声のように響く。

悦二の腕から逃れる事の出来ない真紀子は、苦痛と快感の狭間で唇を噛んで総身を震わせた。絶頂が目の前にあるが、昇り詰めたときに口から出る言葉が怖くて、全てを委ねる事ができない。

「痛いと言ったら、イカせて上げますよ」

言葉の枷の効果に北叟笑む悦二は、溢れ出る愛液をまぶしながら肉芽を転がし続ける。

「くうっ……」

汗で貼り付く黒髪を振り乱す真紀子は、狂乱の中にいた。千切れそうな乳首の痛みが脳を痺れさせ、身体が壊れてしまいうような激しいオルガスムスを迎えようとしている。

「痛いのかな？ それとも、気持ちがいいのかな？ 昇り詰めるときは、真紀子イクと叫ぶんですよ」

赤味を増して汗で光る柔肌の妖艶さに興奮する悦二は、ズボンの中で怒張する一物を豊満な臀部に擦り付けながら、ぬかるんでいる蜜壺に二本の指を沈めていく。

「ああっ……」

真紀子はたまらず、快感の嵐に身を投げ出した。緩んだ唇からは熱い喘ぎ声と涎が溢れ出し、法悦に総身が震えて鈴の音色が響き渡る。

「これは、凄い！」

抽送する指に蕩けた肉襞を絡ませて締め付けてくる名器に、悦二は感嘆の声を出した。

「ああっ……イク……真紀子、イク……ああっ」

片足吊りの身体を大きく仰け反らせる真紀子は、

歡喜の叫びを張り上げた。だらしなく開いた唇からは涎が糸を引き、淫靡な音を立てる蜜口から噴き出す愛液は、官能的な太腿を伝っていく。

「もつと、もつと虐めて上げますよ」

人妻の被虐癖に共鳴して嗜虐癖を解放する悦二は、昇り詰めた熟女から離れると六条ムチを握った。興奮で顔は真つ赤になり、呼吸は乱れている。

「ああ……ご主人様……」

真紀子は無意識の喘ぎを洩らした。

「ほら、泣け！ 叫べ！」

熟女のすすり泣くような喘ぎ声に理性を失う悦二は、豊満な臀部にムチを振り下ろした。

「ヒィー！」

甲高い悲鳴がリビングの空気を引き裂く。

「逃げられはしないんだ。痛いとか叫べ！」

悦二は揺れる尻朶を打ち据えた。双臀はみるみる真つ赤に染まっていくな。

「くうっ……い……」

大粒の涙を零す真紀子は、唇を噛んで激痛に耐え

た。容赦のない打撃に、焼け爛れるような痛みが柔肌に広がっていく。

「早く叫ばないと、お尻の皮が裂けてしまうぞ」

苦悶する熟女が発散するフェロモンと打撃音に陶酔する悦二は、抑え切れない欲望に掻き立てられムチをふるい続けた。

ハー、ハーと大きな口を開けて呼吸をする真紀子は、ドラドラと涎を垂らし、薄らいでいく意識の中で何度も昇り詰めた。涙で濡れた目は焦点を失い、宙を彷徨っている。

「おおっ！」

激烈なオルガスムスに総身を痙攣させる熟女を責め続ける悦二は、雄叫びを上げた。興奮の頂点を迎えた一物はズボンの中で爆発し、白濁でブリーフを汚している。

情交の果てに

村井夫人から計報の電話が掛かってきたのは、ハ

ドな調教から一月後だった。

葬儀への出席は鄭重に断った悦二だが、夫から預かっている物があるからと言われ、後日、線香を上げるために出掛けた。

不動産会社の社長だった村井の家は主を失い静まり返っていた。

立派な仏壇に手を合わせた悦二は、遺影の笑顔に後ろめたさを感じないではいられなかった。

二十年ぶりの再会から三ヶ月。あまりにも早い死だったが、悦二が村井夫婦に振り回された三ヶ月でもあった。

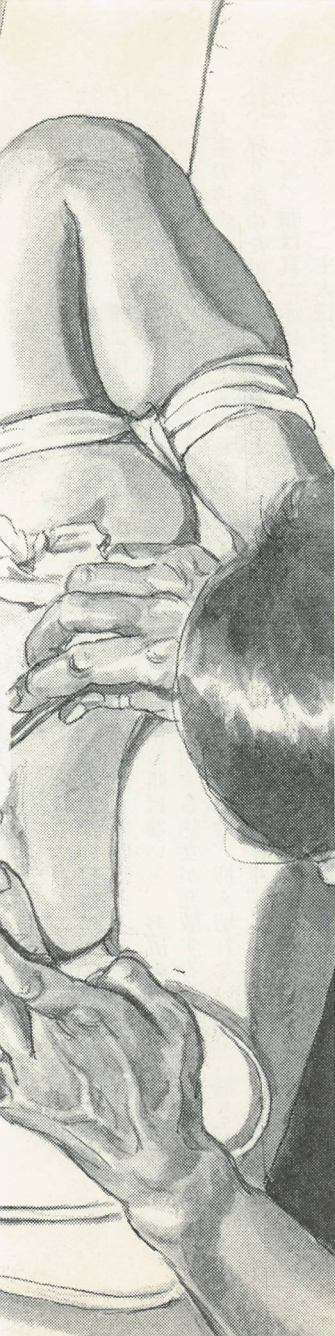
「有難うございました。先生に来て頂いて、主人も喜んでゐる事と思います」

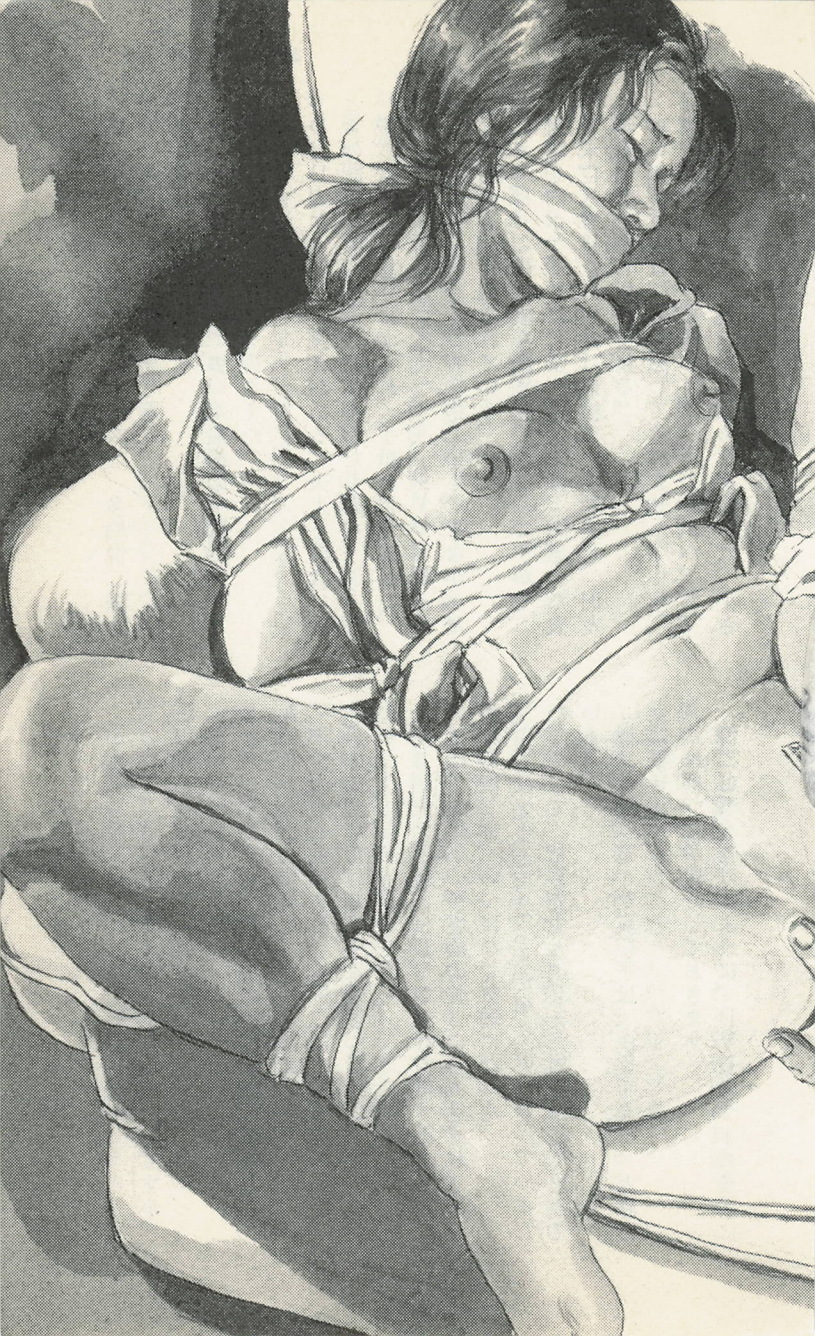
葬儀もとうに済んでいるのに、喪服で迎えた真紀子が三つ指をついた。

「なんと言ったらいいいのか、言葉が見つかりません」

未亡人となった熟女の憂いを含んだ妖艶さに悦二は、心臓が高鳴り息苦しくなる。お尻の穴まで知っている女なのに、別人と向かい合っている錯覚に捕らわれる。

「主人がこれを、先生に渡すようにと」





「はい」

背筋を伸ばす真紀子は、引き締まった表情になった。

「いくぞ！ 二発。三発。四発。五発」

悦二は数を数えながら往復ビンタを繰り返した。歯を食いしばる真紀子の顔が歪み、身体が揺らぐ。

「村井、奥さんは真性のマゾだったんだ。もつと早く気付いて、お前が調教してやったら、よかつたんだ」

血走った目で仏壇を見やった悦二は、ビンタを続けた。熟女の顔が腫れあがり、涙で濡れた瞳が虚ろになっている。

「十発目だ！」

悦二は手の平が熱くなるほど力を込め、頬を叩いた。耳に響く打撃音に一物が激しく勃起している。

ドサツと、音を立てて真紀子の身体が床に倒れた。喪服に包まれた下半身が震えている。

「村井、帰るぜ」

上着を拾い上げた悦二は、遺影に声を掛けた。

「ご主人様、待って下さい。私を置いていけないで」

荒い息の真紀子は掠れた声を出した。唇の端には血が滲んでいる。

「気を失っていなかったんですか？」

「大丈夫です。ただ……」

真紀子は欲情した眼差しで悦二を見上げた。

「ビンタでイッてしまったんですか」

淫靡な笑みを浮かべる悦二は、投げ出された足首を掴むと大きく広げ、喪服の裾を肌蹴た。ノーパンの股間が目に飛び込み、蒸れたメスの匂いが鼻腔に広がってくる。

「いやあ……恥ずかしい……」

鼻に掛かった惱ましい声を洩らす真紀子は、両手の自由が利かない身体を切なげに足掻かせる。激しい羞恥が脳を蕩けさせ、頬の燃えるような痛みが女体を蕩けさせていく。

「自分で剃っているんですか？」

調教のときに剃毛をして一月が経つが、官能的な太腿の付け根に黒い髭りはなく、ツルツルの股間に縦長の割れ目が口を開き、赤色の肉壁を覗かせる。

「はい。ご主人様に見て頂くために、手入れをしていました」

恥部に鋭い視線を感じる真紀子は、下腹の奥を疼かせた。蜜壺の中で肉襞が激しく蠢いている。

「奥さんのオマ○コは、どうしようもなく淫乱だ。

クチュ、クチュといやらしい音を立てて、お汁を溢れさせていますよ」

喪服を捲り上げて桜色に上気した太腿を広げる悦二は、だらしなく涎を垂らした。興奮に理性がなくなり、情交の欲望だけが膨らんでいく。

「ああん……淫乱なオマ○コに、お仕置きを下さい……」

喘ぐように哀願する真紀子の腫れた顔も、恍惚とした表情になっている。

「村井に代わって、たつぷりとお仕置きだ」

慌しく裸になった悦二は仏壇の燭台を手元に置く

と、ムッチリした太腿を抱えるように抱き寄せた。青筋を浮き上がらせ先走り汁を垂らしている肉根が、愛液で濡れた未亡人の股間に当たると。

「ああ……ご主人様……」

真紀子の括れた腰が、わなわなと震える。

サーモンピンクの肉襞を覗かせる蜜口に怒張をあてがった悦二は、いつきに股間を密着させた。ヌルッとした感触で一物が女体の中に姿を消す。

「あうっ……」

真っ赤になった喉を仰け反らせる真紀子は、唾を飛ばしながら喘いだ。鮮烈な快感に激しいアクメが、津波のように押し寄せてくる。

「これから、お仕置きだぞ」

帯を軋ませながら喪服の胸元を広げた悦二は、燭台を手にした。黒い着物から飛び出したふくよかな乳房が、ブルブルと震えている。

「真紀子は、真紀子はどうなるの……ああ……」

恐怖に目を見開く真紀子は、喘ぎながらかぶりを振った。黒髪が汗で小顔に貼り付き、妖しいまでの

美しさを見せる。

「村井、見ているか？　これが蠟涙に悶える奥さんの姿だぞ」

左手を帯に掛けて腰を動かす悦二は、右手に持ったロウソクを肌蹴た胸の上で傾けた。

「あうっ……」

蠟涙が乳房に白い花を咲かせる。熱いとも、痛いとも言わない真紀子は、呻き声を洩らしながら全身をものがかせた。

「おおっ！　凄い、しまりだ！」

未亡人の名器に魅せられる悦二は、絡みついてくる肉襞を擦り上げるように抽送を早めた。腰椎に快感が走り、脳が爛れていく。

滴り落ちる蠟涙はピンクの乳輪も、はちきれそうに膨らんだ乳首をも飾っていく。

「ああっ……ダメになる……」

ハー、ハーと荒い息の中で悩ましい喘ぎ声を絞り出す真紀子は、何度も昇り詰めていた。壊れてしまいうような意識の中で、夫が嬉しそうな顔をして傍で

見ているような錯覚さえ生まれている。

「出すぞ！」

汗まみれの悦二は、一物を襲ってくる快感に耐え切れずに雄叫びを上げた。

「ああっ……ご主人様……下さい……子宮に、掛けて下さい……」

被虐の法悦に酔い痴れる真紀子は、歓喜の叫びを上げた。

「おおっ！　もう、駄目だ……」

ロウソクを捨て、両手で帯を掴んだ悦二は、股間をぶつけるように蜜壺を責めたてた。蠢く肉襞はさらに膨らんでいく一物に絡みつぎ、きつく締め付けてくる。

「ああっ……真紀子、真紀子、イク……ああうっ……」

女性器の奥に熱い進りを受けた真紀子は、甲高い喘ぎ声を張り上げた。激烈なオルガスムスにガク、ガクと総身は震え、空に舞い上がっていく意識は、夫との永遠の別れを交わしている。

(完)

復活!! 大きく強く動く飲めば即実感

あり
パワー
10錠入 ¥13,000

レトラ シリス
独20mg 英国20mg
36,000円
《バイオグラを越えた話題の商品!!》
30錠入 (通常) ¥45,000
12錠入 ¥17,000
6錠入 ¥10,000

30錠 キャンペーン中に付
先着10名様に限り
~~36,000円~~
30,000円

バイオグラ
USA
100mg
30錠入 (通常) ¥36,000
12錠入 ¥17,000
6錠入 ¥10,000

「狼1号」

人気サプリメント
激安商品!!
8錠入 ¥5,000

元祖!
男の根源!!
(ハーバルビリリティ)
3本(270粒) ¥16,000
2本(180粒) ¥11,000
1本(90粒) ¥6,000

はじめての
お客様限定!

お試しセット(米,独,英,中,その他) 6錠 15,000円

《女性が本気でSEXがしたくなる!》 男性諸君!! 必需品!

♥ 女性用商品も多数有ります ♥

絶対
悪用
禁止

ダイ○ルカン
USA100mg [アメリカ]
30錠 45,000円
12錠 17,000円
6錠 10,000円

カンガルー
200mg [オーストラリア]
30錠 36,000円
12錠 17,000円
6錠 10,000円

姫アグラ
(女性不能治療薬) [中国]
30本 30,000円
12本 17,000円
6本 10,000円

バオメイ
(女性不能治療薬) [中国]
10本 28,000円
6本 18,000円
3本 10,000円

※お客様にお役に立つサプリメント多数取り揃えております。※女性用も多数有ります。当社係員までお申し付け下さい。

ご注文・
お問い合わせは

個人輸入代行業 **西日本直販グループ**

<http://www.n0088.com>

申込み方法

TELの方: 下記の番号へお電話下さい。スタッフが詳細をご案内します。

お申し込み時に「SMマニア」を見たとお申し出下さい。

FAXの方: 郵便番号・住所・氏名・電話番号(確実に連絡のとれるもの)を記入
して下記のFAX番号へお送り下さい。当社スタッフよりご連絡致します。

TEL 06-4391-0088

FAX 24時間受付 06-6539-6666

振込先:三井東京UFJ銀行 梅田支店 (普)4896203/名義人:ムカイ アキラ ※代行業手数料・送料一律1,000円要

処女凜然

◆雄犬・平三郎と妻せられる処女・睦月は全裸に縄が施されて股間を大きく開かされた。雄犬はすかさず長い舌で陰唇を舐めあげる！

試煉の獣愛

獣妻への出発

雄犬・平三郎と妻せられる処女・睦月は全裸に縄が施されて股間を大きく開かされた。雄犬はすかさず長い舌で陰唇を舐めあげる！

御隠居さまの健康が久し振りに上向き、平三郎さまを連れて散歩に出られました。私も御供をして、岬の見える見晴らし台まで足を伸ばしました。

岬に立つと、新しい年の始まりを告げるような、優しいそよ風が肌を撫で、御隠居さまも気持ちよ



さそうに目を細めました。

「これでもう一冬、過ごせそうだな」

御隠居さまは、そんな気の弱いことを言いました。

「何をおっしゃいます。御隠居さまはまだまだ、お元気ですよ」

私は、そう言ってお慰めしました。しかし、あれほど女性に淫らかな欲望をたぎらせていた御隠居さまが、女を抱けなくなってもう、だいぶなります。女と見れば凌辱することしか考えなかった御隠居さまが、さすがに、お迎えが近くなつたことを窺わせます。

「もう古い先短い老体だ。儂の身体は、儂が一番よく知っている」

御隠居さまは、寂しそうに言いました。そして、御隠居さまの周



りを元気に飛び回る平三郎さまを、羨ましそうに眺めました。

「平三郎ももう、人間の歳にすると二十になるのかの」

「そのようですわ」

御隠居さまはふと、何事か考え、

「平三郎に、嫁を貰ってやらねばのう」
と言いました。

平三郎さま一頭でも大変なのに、こんな大きなシエパード犬を二頭も世話するのかと思うと、私は内心うんざりしました。

しかし、平三郎さまがこのまま女も知らずに年をとるのも可哀そうで、御隠居さまが配下の組長さんに牝犬の手配を依頼しているのを、黙って聞き過ごしました。

そんなある日のこと。お屋敷に大きな荷物が届けられ、二階に運び上げられました。

「依佐子。手伝ってくれ」

御隠居さまはその荷物を心持ちしていたようで、

楽しそうに荷解きしていました。

それもその筈。荷物の中には歳の頃、二十一、二の美しい女性が収められていたのです。

「……これは」

女性が、まるで荷物みたいに箱詰めになされて運ばれるなんて。

眠り薬で眠らされているのでしょうか。その女性はベッドに横にされても、ぐったりしていました。

「なかなかの美人だろう」

御隠居さまは、この女性を愛人にするつもりなのでしょう。そんな体力は残っていない筈なのに。

「どうだ、依佐子」

私の不審な顔つきに気付いたのか、御隠居さまはそう言い、

「はい……綺麗な女性ですね」

と私は調子を合わせました。

「平三郎に似合いだと思わんか？」

「えっ！」

私は、御隠居さまが何を言ったのか、一瞬、ぽか

んとしてしまいました。

「平三郎さまに……お似合い?」

「そうだ。この娘は平三郎のものだ」

「御隠居さま!」

御隠居さまの言葉に、私はゴクツと唾液を飲み込んでしまいました。

「平三郎に嫁をと捜していたのだが、この際、女を娶^{めと}らせることにした」

私は啞然としました。

「この女性を……平三郎さまの?」

「平三郎の嫁にする」

「御隠居さま……」

「ふふふつ。結婚式を挙げてな。ちゃんと妻にするのだ」

「この女性と……平三郎さまがですか?」

この女性と平三郎さまとを結婚させることに、何の意味があるのでしょう。

「夫婦になるのだ。当然、夜の生活もしなければならぬ。楽しいぞ」

私の危惧を裏付けるように、御隠居さまはそう言いました。

「御隠居さま……それは……」

「この娘は平三郎とセックスするのだ。ふふふつ。女が犬と交わるのだ」

私は、呆れてしまいました。

何かの本で読んだことはありました。夜の寂しさに堪えかねて、人妻がベッドに犬を引き入れ、身体を与える様を記述したものでした。

そんなことは小説の世界の話だと思っていたのです。現実には女性が犬と交わるなんて。

「犬と交わるって……そんな……」

そんなことが本当にできるのでしょうか。いえ、御隠居さまのことです。きつと無理やりにでも、この女性を平三郎さまに掛け合わせることでしょう。

「それにな。この娘は処女だ。処女の無垢な身体を、平三郎に捧げるのだ」

「えっ!」

私は、開いた口が塞がりません。

「この娘は生涯、男を知ることはない。処女を犬に捧げ、操を守るのだ。平三郎の妻になるのだから、夫に貞操を守るのは当然だろうが」

私は、何も知らずに眠っている女性が、哀れになつてしまいました。

こんな綺麗な女性を犬と交わらせるなんて、そんな非道なことをと、御隠居さまが分からなくなつてしまいました。

「この娘をゆつくり、牝犬に育ててやる。女が牝犬になれるということを実験してみるのだ。身も心も牝犬にして、平三郎なしでは生きていけぬ女にな」

御隠居さまは、愉快そうに言いました。

確かに平三郎さまは、血統書付きかも知れませんが、犬の世界では、それなりの格式のある雄犬でしょう。しかし、人間の女を愚弄した話だと思いません。

「御隠居さま……」

「依佐子。僕の最後の我が儘だ。この娘を牝犬にする手助けをしてくれ」

「でも、御隠居さま……」

「冥土への土産に、女が犬と愛し合う姿を見てみたい」

そう言われると、私も言い返せなくなつてしまいます。

「この娘さんは……承知のですか？」

「犬の世話をするという約束で、大金を払った。貞操の対価を超える額だ」

その額を聞いて、びっくりしました。たかが犬の世話に支払われる額ではなかったのです。それでも、この娘さんが犬と思うと、やはり哀れでした。

「平三郎には勿体ない娘だな」

御隠居さまの言うとおり、目鼻立ちの整った美しい女性でした。これだけの器量なら、どんな男も放っておかないだろうに、平三郎さまに買われたのは、何か深い訳でもあるのでしょうか。

「できれば、僕のものにしたいのだが」

「是非、そうして上げて下さい」

「出来たらな」

御隠居さまは、寂しように言いました。

「この娘が僕の回春剤になればいいのだが」

私もそう願いました。この女性が平三郎さまとセックスする姿を見れば、ひよつとしたら、御隠居さまは男に戻るかも知れません。何しろ、滅多に見られない獣と女との性行為です。きっと興奮してしまい、御隠居さまは平三郎さまを跳ね除け、この女性を抱くことでしょう。

その時、娘さんが苦しうに、

「ウーン……」

と声をあげました。

「息が詰まるのかな。脱がしてやろう」

娘さんはまだ、眠っていました。何も知らない女性を裸にするのは気がとがめましたが、私は御隠居さまの手伝いをさせられてしまいました。

ワンピースのファスナーを下ろして、衣服を脱がしていきます。真っ白なスリッパが頭わになって、身体線のぞけます。

そして私は、娘さんの腰が異様に膨れているのに気付きました。

「下着をまくって見ろ」

御隠居さまがそうおっしゃって、私はスリッパをまくりあげていました。すると中から大人の女性が身につけるとは思えない下履きが見えたのです。

「まあ……これは……」

おしめカバーでした。

おしめを包み込み、お尻をこんもりと膨らませた、おしめカバーだったのです。

「驚いたか」

「御隠居さま……」

「この娘は、生まれつきの夜尿症だな。夜は、おしめが手放せない身体なんだ」

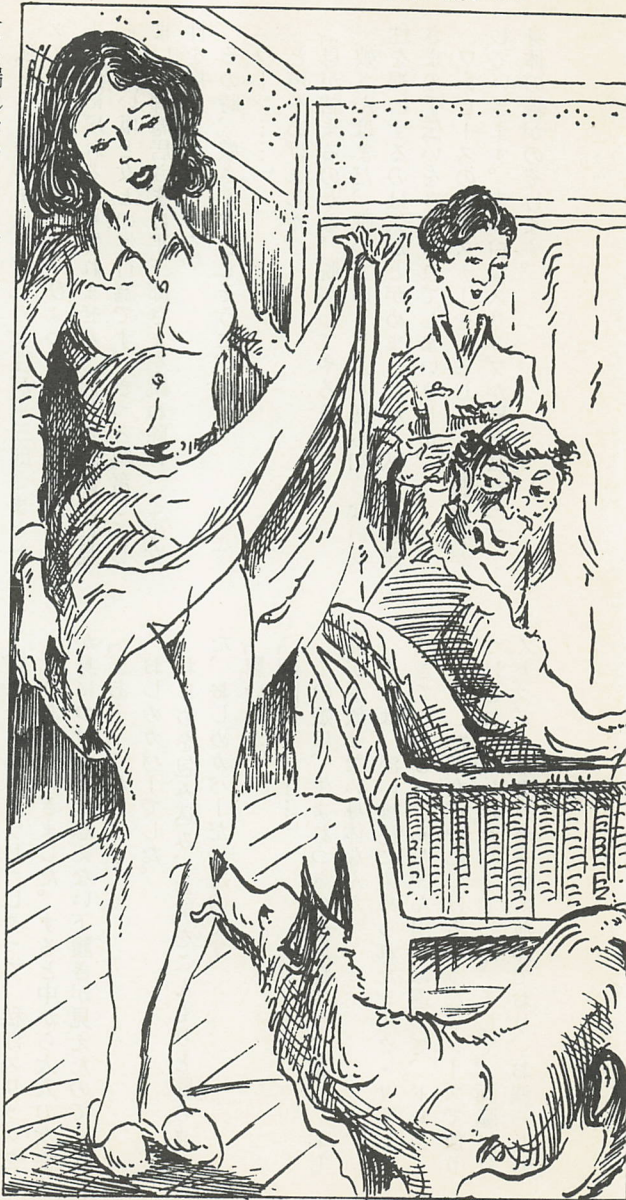
それは、淡い桃色に染められたシルク・サテンでできていました。赤ちゃん用とは違って、ドレス・アップした淑女が身につけるような、レースで飾りつけされたおしめカバーでした。そして、両脇にはスナップ・ボタンが一行に並んでおり、お洩らしし

でも漏れないように、カバールの飾り紐がぴっちり、結ばれていました。

「この娘はどの道、まともな結婚はできない身体な

んだよ」

私は、この娘さんが犬の妻になることを承知していると言った意味が分かりました。



夜尿症を持った身体では結婚できないと、この娘さんは人生を諦めているのでしょう。それで、犬と結婚させられるのを分かっているながら、お屋敷に上がったのでしょうか。

その日の夕刻。食事の時間になり、女性が御隠居さまに連れられて降りてきました。そして、食卓につかされ、お屋敷の住人に紹介されました。

「睦月という。今日から、一緒に住むことになつた」

睦月さんは立ち上がり、丁寧に頭を下げました。しつとりとした淑やかな風情の挨拶でした。育ちの良さが窺える上品な仕草。平三郎さまの妻にされることを承知で売られて来ただなんて、とても信じられません。

「執事の依佐子に、召使の道子だ。あとは運転手夫婦と門番夫婦がいる」

睦月さんは、御隠居さまの言葉に一つひとつ頷きながら、落ち着いて食事をしています。

「睦月は当分の間、儂の妾として扱うように」

睦月さんは妾と聞かされて、恥ずかしそうな顔で俯きました。でも、お妾さんの方が幸せかも知れませんか。

御隠居さまは、でも、

「いずれ、平三郎の妻にするがな」と秘密を暴露したのです。

睦月さんはびっくりし、抗議するような眼差しを御隠居さまに向けました。でも、御隠居さまは、

「平三郎の嫁にと買った娘だ。こんな綺麗な娘を嫁にできるなんて、平三郎も幸せ者だ」

と睦月さんの気持ちなど無視しています。

睦月ご対面

睦月ご対面

食事が終わると、御隠居さまは私に平三郎さまを連れてくるように言い、二階に戻っていきました。そして、睦月さんは私に御辞儀をして、御隠居さまの後に続きました。

「睦月さんは本当に、平三郎さまの奥様になるんで

すか？」

道子さんは、驚いたように尋ねました。私が黙つて頷くと、

「奥様になるってことは、平三郎さまと、するんですよ。あんな綺麗な娘さんが犬となんて」

睦月さんを貶しめるように言いました。

「いいところのお嬢さんなんでしょうに、犬とするなんて」

道子さんは、鼻歌混じりにそう言いながら、食事の後片付けを始めました。まるで、睦月さんの不幸を楽しんでいるみたいで、私は憤りを感じてしまいました。しかし、下女は所詮、その程度の心しか持ち合わせていないのでしょう。高貴な生まれの睦月さんが苛められるのを、悦んでいるのです。

「どんな恰好ですかのかしら。四つん這いになつて、お尻を突き出すのかしら」

睦月さんが平三郎さまと愛し合う姿を思い浮かべている道子さんを無視して、私は御隠居さまの指図どおり、平三郎さまを連れて二階へ上がっていきま

した。

御隠居さまは、睦月さんを平三郎さまに会わせると言いましたが、いきなり今夜から始めるのでしょうか。寝室に入ると、御隠居さまはソファにどしりと腰をかけ、睦月さんは絨毯の上に正座させられていました。

これから夫となる犬との対面を控えて、睦月さんは、すっかり緊張しています。

「さあ。平三郎さま」

私はそう言つて、平三郎さまをお部屋に入れました。

睦月さんは、平三郎さまを見るなり、震え出していました。きつと、平三郎さまは、睦月さんが想像していた以上に大きなシェパードだったのでしよう。睦月さんの身の丈ぐらいある逞ましい雄犬に、睦月さんは身体を強張らせました。

平三郎さまに圧倒された睦月さんを見て、御隠居さまは、

「睦月。挨拶はどうした？」

「はっ……はい……」

御隠居さまに促され、睦月さんは思い出したように小さく頷きました。そして、平三郎さまに向かつて座り直しました。

「……睦月でございます……宜しくお願いいたします」

と言つて、夫となる平三郎さまに深々と頭を下げました。

いくら由緒正しいお犬さまだからと言つて、人間からへりくだつた挨拶をするなんて、侮辱もいいところですよ。

睦月さんは既に、言い含められているのでしょう。平三郎さまは睦月さんの夫になるお方だから、立てるように言われているのです。

平三郎さまは、警戒するように鼻をクンクン鳴らしています。そして立ち上がると、睦月さんの周囲をゆつくりと回り、彼女に敵愾心があるのかどうか確かめました。

睦月さんは、じつとしていました。平三郎さまの

品定めを受ける屈辱にも堪え、正座の姿勢を崩しません。

「どうだ。平三郎。いい女だろう。お前の妻にと連れてきた娘だぞ」

御隠居さまが、そうけしかけます。

これは、お見合ひでした。平三郎さまが睦月さんを受け入れるか、試されているのです。睦月さんの意思は無視され、平三郎さまが一方的に、睦月さんを妻にするかどうか決めるのです。そして、そのように平三郎さまは睦月さんに近付きました。

「どうだ。男の匂いのない娘だ。新品だぞ」

処女であることをそう仄めかされて、睦月さんの頬に赤味が差します。

「妻にする女は、処女に限る。平三郎だって、処女がいいだろう」

平三郎さまは、鼻を押しつけるようにして睦月さんの胸の匂いを嗅ぎました。その大きな体軀に押され、睦月さんは平三郎さまを押し戻すように、そつとお顔を支えました。

「……平三郎さま……」

服の上からも、睦月さんの胸の膨らみが想像できます。殿方を喜ばせずにはおかぬ膨らみに、平三郎さまも満足の様子です。

「睦月。脱ぐんだ」

御隠居さまに促されて、睦月さんは頷きました。

睦月さんは、恥ずかしそうにブラウスのホックに指をかけました。そして、一つ、二つと胸のホックを外していったのです。乳房を男に委ねたことなどないのに、胸の匂いを確かめられるのです。

真っ白なブラジャーが覗けて、平三郎さまがカップに鼻先を押しつけました。そして、クンクンと鼻を鳴らして、乳房の匂いを嗅ぎました。

ブラジャーも脱がされるのかと思っていました。が、平三郎さまは女の乳房に、殿方ほどの関心がないうでした。乳房に男の匂いが無いのを確認すると、平三郎さまは鼻先をゆっくり、睦月さんのスカートに下ろしていきましました。

それは、初対面の殿方にはあるまじき振る舞いで

した。会ったその瞬間に、お股に手を忍ばせる狼と変わりがありません。

睦月さんは、平三郎さまを押し留めようとしてしました。けれども御隠居さまに、

「睦月。処女の匂いを確かめて貰うのだ」
と言われてしまったのです。

「……はっ……はい……」

睦月さんはそう言うのと、恥ずかしそうにスカートをたくし上げていきました。その仕草ももどかしげに、平三郎さまの鼻先がスカートの中に入り込みます。そして、ショーツに押し当てられます。そのあまりにも女性を馬鹿にした仕草に、睦月さんはブルブルと身体を震わせてしまいました。

「……あ……ああ……」

何ということでしょう。平三郎さまが、女の匂いを嗅いでいるのです。睦月さんの女の匂いを嗅ぎ、処女かどうかを確かめているのです。それはまるで、処女でなければ価値がないとでもいうようでした。

犬の妻になるのに、無垢の身体が求められているのです。平三郎さまはワンと一声、吠えました。

「おお。そうか、そうか。睦月は処女だったか」

平三郎さまの叫びが、そのことを明らかにしてしまいました。睦月さんは、匂いで処女だと確かめられてしまったのです。

「ふふふ。平三郎は睦月が気に入ったようだな」

御隠居さまは顔を綻ばせて、嬉しそうに言いました。

それは、睦月さんにとって地獄の始まりでした。平三郎さまが睦月さんを気に入ったということは、睦月さんを妻にということでした。

「睦月。よかったのう。平三郎が気に入ってくれたぞ」

御隠居さまがそう言うのと、睦月さんは恥ずかしそうに顔を伏せてしまいました。

「さあ、平三郎の許嫁になった印だ」
そう言うのと、御隠居さまは犬の首輪を取り出しました。

睦月さんの牝犬の首輪は、純金の豪華なものでした。帯には大きなルビーが幾つも鑲められ、それが光を反射して眩しく光っていました。

しかし、首輪は首輪です。睦月さんは首輪を嵌められると分かって、思わず後退りました。そして

全国の女性からTELが殺到中!!
TEL SEX専用
ツーショット

ZERO

最大1万円のポイントゲット!!
登録時にラッキーコードを必ず入力してね!!
ラッキーコード 71547

リアルな相手とのアツいトーク!
ツーショットダイヤルが繋がりやす
エロなオナカの快楽主義を味わえ!!

電話でしたいエッチなコト

東京 <<<<<<<
03-3358-2525

名古屋 <<<<<<<
052-781-9955

大阪 <<<<<<<
06-6932-8000

札幌	011-242-4334
仙台	022-722-8883
仙台	043-201-6655
仙台	048-658-8838
仙台	045-355-6677
仙台	082-545-4455
仙台	092-739-7722

携帯サイトで求める出会いが肉体関係...
24時間交際する欲望の全てを満たせ!!

携帯サイト

e-SHOT

<http://e-0721.com/kfz>

スケベ男の殿堂-ZERO ホームページ
<http://zero2s.com/kfz>

※1日通話料の上限は、この通話料11P100P
※1ヶ月利用料は、通話料の上限は11P100P
※1ヶ月利用料は、通話料の上限は11P100P
※1ヶ月利用料は、通話料の上限は11P100P

通話料: 0570-048-000

哀願するように、御隠居さまを見つめました。

「睦月は、牝犬になるんだ。犬の首輪をしなければならん」

平三郎さまの妻になることを承知の上で、お屋敷に上がったのです。睦月さんの身分は牝犬でした。

「平三郎さまは……嵌めていませんが……」

睦月さんは、抗議するようにそう言いました。

「当たり前だ。平三郎は、誰の犬だと表示する必要はない。しかし、睦月は平三郎の牝犬だ。そのことを、はつきりさせる必要がある」

睦月さんは暫く、その首輪を見つめていました。

そして、それをネックレスだと思うことにして、仕方なさそうに首を差し出しました。

その殊勝な態度に、御隠居さまは嬉しそうに頷くと、睦月さんの首に犬の首輪を回しました。そして、首輪を嵌めると鑑札をかけてしまいました。

「そんな……」

その鑑札にははつきりと、平三郎さまの名前が刻まれました。睦月さんの身体はもう平三郎さま

のものだと示すように、犬の名前が彫られていたのです。

「どうだ。素晴らしい首輪だろう。睦月のために特別に、作ったものだ」

確かに、豪華なものでした。しかし、どこから見ても首輪でした。

「さあ、よく見るんだ。これは牝犬の印なんだぞ」

鏡に写し出された牝犬姿に、睦月さんは泣き出しそうになりました。睦月さんの目にもはつきり、平三郎さまの名前が彫られた鑑札が写ったのです。

「ああ……御隠居さま……」

「ふふふ。平三郎の印だ。嬉しいだろう」

睦月さんを犬のように手元に引き寄せたのです。

「ああ……惨めです」

「睦月はもう、牝犬なんだ」

平三郎さまに乙女の匂いを確かめられて、許嫁にされ、平三郎さまの刻印が印された首輪を嵌められた睦月さんは、どう見ても平三郎さまのものでした。

「明日から、牝犬になる訓練をみっちり仕込んでやる。平三郎の妻として恥ずかしくない牝犬になれるよう、調教してやるからな」

そう言われて、睦月さんはお尻をぴしゃりと叩かれました。

睦月さんは、牝犬のように首輪の鎖を引かれて、あてがわれた部屋に連れられました。

そこは御隠居さまの部屋の斜向かいにあり、以前は御隠居さまのお妾さんたちが使っていた部屋でした。しかし、その部屋はいつの間にか牝犬用の部屋に改造されていました。既に、睦月さんを迎える準備が整えてありました。

天蓋のついたベッドは、クッションの固そうなものになっていました。平三郎さまとセックスするために、足場のしつかりしたベッドに変えられたのです。

そして、ベッドの周りの格子には、皮の輪が取り付けられた鎖が結ばれていました。

それは、ベッドの上で睦月さんの身体を、大の字

にするためのものでした。手足の自由を奪って、睦月さんをいたぶるための。

「酷い……」

天井からは、何本もの鎖が垂れていました。睦月さんを吊るし上げる鎖です。

壁には、とりどりの鞭がかかっていました。睦月さんが粗相したときに懲らしめるために使われるものなのでしょう。それを見る睦月さんの表情が、厳しくなりました。

睦月さんは、寝室の設えに不安になってしまいました。これでは、逆らったとしても易々と、平三郎さまの餌食にされてしまうでしょう。

覚悟して来たとは言え、これだけの装置に囲まれては、牝犬化は時間の問題です。

そして、部屋の隅には囲いが作られていました。その中を覗くと、やや大きめのオマルが置かれているのが見えました。

「睦月のトイレだ」

思いがけないことを言われて、睦月さんは慌て

て、

「……嘘です……」

と言いました。それは赤ん坊が排泄の訓練をするための便器と変わりなかったのです。

「おしめをする娘に相應しい便器だろうに」

「そんな……知りません」

おしめと言われて、睦月さんの頬にポーツと赤みがさしました。やはり、夜尿症とはいえ、大人の身で赤ん坊のようにおしめを使っているのは恥ずかしいでしょう。

「おしめとカバーは、箆箆にしまつてあるからな」

追い討ちをかけるように、御隠居さまは言いました。睦月さんは、窘めるように御隠居さまを見つめ、そして、恥ずかしそうに頷きました。

「おしめは、依佐子に世話して貰うといい」

睦月さんの視線が向けられました。それは、宜しくお願ひしますと言っているような眼差しでした。私は、優しい微笑みを返しました。

「明日から、牝犬として厳しく調教してやる」

そんな恐ろしいことを言われてしまいます。

「平三郎の妻になるんだ。牝犬の躰しつけはちゃんとせねばな」

「……牝犬の躰」

「平三郎の妻として相應しい牝犬になれるように、その身体にじっくりと言ひ聞かせてやる」

睦月さんは、平三郎さまにお尻を捧げるだけでなく、従順な妻として平三郎さまにかしづかなければならないのでしょうか。そして、平三郎さまに逆らつた時には、鞭を戴くことになるのです。

平三郎さまと結婚することは、単に犬の世話をするだけではないことに気付きました。しかし、それは睦月さんが考えていた以上に辛いものでした。

悲しように、何事かを訴えるような睦月さんの眼差し。

老人の夜伽

老人の夜伽は、老人の心象を写したものである。老人の心象は、老人の生活の経験から来るものである。老人の生活の経験は、老人の人生の歩みである。老人の人生の歩みは、老人の人生の歩みである。

その夜。御隠居さまは睦月さん呼び出し、夜伽



を命じました。

御隠居さまもやはり、睦月さんをそのまま犬に与えることは、忍びがたかったのでしょうか。男の勤めができたなら、睦月さんをお妾さんにするのだと思いました。

睦月さんは、御隠居さまのするままに、ネグリジェを脱がされていきます。買われた女に自由はない。何事も、御隠居さまに従わなくてはならない。睦月さんはそう覚悟を決め、おとなしくしていました。

スリップの肩紐が下ろされ、そして、それがゆつくりと引き下げられて、弾力

のある豊かな乳房が剥き出しにされました。

「いや……」

睦月さんの乳房は、神秘的な丸みを見せていました。ほんのりと薄桃色に輝く乳首は、男に吸われたことがないのでしょう。まだ小さく、窪みを残しています。

御隠居さまの指がショーツにかかり、最後の一枚が脱がされました。そして、睦月さんは生まれたままの姿に。

「綺麗だな。平三郎には勿体ないのだが……」

御隠居さまは、睦月さんの裸姿をじっくり見つめました。

睦月さんのすらりとした、よく引き締まった身体つきは若々しげでした。胸の膨らみから腰のくびれにかけての線は、まだあどけなく、下腹部の黒々とした恥毛は、御隠居さまの情欲をかきたてるに充分でした。お尻はこぢんまり引き締まっていました。

「ふふふつ。犬が好きそうな尻だ」

「そんな……」

「まるで獣姦のために生まれてきたような身体だ」

「ジュウカン！」

「ふふふつ。犬と女がセックスすることだ」

「いや……」

「嫌じゃないだろう。睦月は犬とするのだからな」

「そんな……はつきりと……」

「何を言う。睦月のここに、犬の太いものが食い込むんだ。グイグイと食い込んで、気持ちいいぞ」

「御隠居さま。駄目です。おっしゃらないで」

「何を言う。睦月は平三郎の奥さんになるんじゃないか」

「……どうしても……ですか？」

「嫌なのか？」

睦月さんは一抹の希望に望みを託しました。

「そうか……嫌なのか……」

御隠居さまは何事か、考えていました。そして、睦月さんの耳元にそつと囁きました。

「えっ！」

睦月さんは、御隠居さまの言葉を聞くと見る見る

うちに、頬を赤く染めていききました。御隠居さまに、卑猥なことを要求されたのです。

「そんなこと……」

「それができたら、そのときは妾にしてやろう」

睦月さんは、グツと唇を噛み締めました。

「平三郎の妻になるか、僕の妾になるか、自分で決めるがいい」

犬の妻より、歳が違っても御隠居さまのお妾さんになる方がずつとましです。

「約束です……」

睦月さんはそう言うのと、御隠居さまの下半身に身体を滑らせていききました。

「含めるかな？」

御隠居さまがそう言うのと、睦月さんは恥ずかしそうに頷きました。

睦月さんは、御隠居さまが男の機能を回復すれば、犬とセックスを強いられずにすむのだと必死なのです。

睦月さんは、御隠居さまの浴衣の裾をまくりまし

た。そして、恥ずかしげに御隠居さまの禪を開いていききました。

禪が外され、御隠居さまの陰茎が顕わになりました。それを見た途端、睦月さんは顔を背けてしまいました。

睦月さんはきつと、男の方の印を見たことがなかったのです。

「ちゃんと立たないと、睦月の身体に収められない」

そう言つて、御隠居さまは促しました。睦月さんはゴクリツと唾液を飲み、恐る恐る御隠居さまの陰茎を見つめました。そして、覚悟を決めるとそれに顔を寄せていききました。

ムツとする男の匂いが鼻をつきました。睦月さんが初めて嗅ぐ男根の匂い。

「……約束です……」

これから、乙女が恥ずかしいことをするのです。娼婦の真似ごとをするのです。勤めができたら、犬との結婚は許してくれるよう、御隠居さまに哀願し

ました。

「よしよし。約束だ」

御隠居さまとて、睦月さんをものにできたら何も、平三郎さまに嫁がせる必要はありません。こんな若くて綺麗な睦月さんです。睦月さんを抱くことが出来たら一生、御隠居さまだけのものにしておきたくになります。

睦月さんは身をかかめると、震える手で御隠居さまの陰茎を含みました。そして恐る恐る、その先端に唇を寄せていきました。

睦月さんの唇が、御隠居さまの陰茎に触れました。チュ、チュと軽く触れました。

しかしそんなことでは、御隠居さまは反応しません。

「口の中に、ちゃんと含むんだ」

御隠居さまが、フェラチオのやり方を指南します。睦月さんは、恨めしそうな眼差しで御隠居さまを見上げましたが、御隠居さまの言うとおりに口を開けて、男の印を収めていきました。

「舌を使うんだ。心をこめて美味しそうに舐めるんだぞ」

初めての睦月さんに、そんな淫猥なことを命令します。御隠居さまの陰茎を口の中に収めながら、睦月さんが嫌々をします。

「そんなことでは、平三郎とつるませねばならんな」

そう言われて、睦月さんは焦りました。御隠居さまが立たないと、睦月さんは平三郎さまとの結婚を拒めないのです。

睦月さんは意を決し、しゃんとしました。そして、御隠居さまの陰茎をキャンディーだと思い、一生懸命しゃぶり始めたのです。

「おうおう。睦月がのう」

それは、見た目にも愛情の籠もった尺八でした。何しろ、睦月さんの未来がかかっているのです。御隠居さまの妾になれるか、平三郎さまに与えられるかの瀬戸際です。

睦月さんは、御隠居さまの萎びた男を両手で包

み、唇を押しつけて口に含んでいききました。そして、口の奥深くまで含むと、再び接吻して慰めました。

その行為が何度も繰り返されます。しかし、睦月さんがいくら努力しても、御隠居さまの男は立ちません。

「立たぬか……」

「……いやっ！」

睦月さんは悲しそうに言いました。

「立たねば仕方がない。睦月はやはり、平三郎に嫁がせよう」

睦月さんは首を振り振り、なおも夢中になつてフエラチオを続けました。

「平三郎の立派なもので、処女を貰いて貰うのだ」

萎れたまま立たない御隠居さまの男性に、睦月さんはいつしか涙を浮かべました。そして、御隠居さまにお尻を撲たれて、ワツと泣き出してしまいました。

処女の身そらで男の印を口に含む大胆なことをし

たのに、それに答えて貰えなかった惨めさが哀れです。あんなに努力したのに、御隠居さまを奮い起たせられず、平三郎さまのものと決まってしまった。

「元々、平三郎のものなんだ。泣くことはないだろう」

そう言われればそうですが、できれば御隠居さまのお妾さんにと、必死になって努力したのに。

「さあ、睦月さん。お休み前に、おしめを当てましょう」

私はそう言つて、睦月さんを慰めてあげました。そして、おしめを用意して、シーツの上に広げました。

「……おむつは……私が……」

睦月さんはそう言つて、恥ずかしそうに御隠居さまを見つめました。

「いや。睦月のおしめは依佐子の仕事だ」

そう言われると、睦月さんは召使におしめの世話をさせていたのでしょう。慣れているらしく諦めたように、ベッドに仰向けになりました。

「さあ、おしめをしましょうね」

私は睦月さんの両足を大きく上げさせると、浮いたお尻の下におしめを差し入れていきました。そして、睦月さんのお股に、おしめを当てていつたのです。

「ああ……恥ずかしい……」

睦月さんはこんなに大きいのに、おしめを当てられる。恥ずかしくない訳がありません。それでも、睦月さんはおとなしく、おしめを当てられました。おしめカバーの腰紐を結ばれて、赤ん坊にされていきました。

おしめを当て終わると、御隠居さまはいとおしげに、睦



月さんを抱き寄せました。そして優しく、おしめカバーを撫で回します。

「おむつは……恥ずかしい」

「しかし、睦月はおしめが必要なんだろう？」

男の役目は出来ませんが、

御隠居さまは久し振りの若々しい肌に満足しています。睦月さんは御隠居さまがいじくるのに任せて、

抱きすがっていききました。そして、

「暫く……夜伽をさせて下さいませ」

とお願いました。

「儂に抱かれて眠りたいのか？」

「……はい」

「しかし、儂の匂いがつくと、平三郎が怒るからかう」

御隠居さまはそう言つて、睦月さんを困らせます。

そして、首輪の鎖をベッドの格子に結びつけ、睦



月さんを抱き寄せて眠りにつきました。

雄犬に馴染む

朝になって、私は睦月さんのおしめの後始末をしに御隠居さまの部屋に入りました。

睦月さんは御隠居さまに抱かれていましたが、もう目を覚ましていました。そして、濡れたお尻が気になるのか、モジモジしています。

「お尻が気持ち悪いんですか？」

そう尋ねると、睦月さんは小さく頷きました。

「オネシヨ、なさったんですね」

御隠居さまが言ったことは本当でした。睦月さんは、おしめを汚していたのです。

おしめカバーを紐解くと、睦月さんは可哀そうなくらい恥ずかしがっていました。そして、濡れたおしめを外してあげると、すぐさまそれを奪い取ったのです。

「睦月さん」

「おむつは、睦月が洗います」

睦月さんは、おしめ洗いは自分ですと言い張りました。

「御隠居さま。お願いです」

おしめを使っているだけでも恥ずかしいのに、汚れたおしめを人に見られるのは、たまらないのです。

御隠居さまも睦月さんのたつての願いに、おしめ洗いは睦月さんと決めました。

家でも、おしめの洗濯はご自分でなさっていたとかで、睦月さんは器用におしめを広げて物干しに通していきます。一枚一枚、丁寧に広げて、干してい

きました。

おしめを使う幼児もいない家のヴェランダに、華やいだ桃色の雪花模様のおしめが干され、大人用のおしめカバーが恥ずかしげに吊されました。

おしめ干しが終わって、その日から、睦月さんの牝犬としての調教が始まりました。

睦月さんは台所に立って、平三郎さまの朝食の用意をします。綺麗に盛り付けて平三郎さまに差し出します。平三郎さまは美味しそうに、睦月さんが作った食事食べていました。ムシャムシャと音を立てながら。

そして、平三郎さまの食事が終わって、睦月さんの番になりました。けれども、睦月さんの食事は用意されません。

「睦月は、平三郎の残りものを食べるのだ」

御隠居さまは、無情にもそう言いました。

「睦月は牝犬になるんだ。平三郎の残りを食べるのが当然だろうに」

平三郎さまの器が、睦月さんの目の前に差し出さ

れました。平三郎さまがさんざん、食べ散らかした器でした。

「うん？ どうした、睦月」

犬の残飯を目の前にして、睦月さんは哀願するようには御隠居さまを見つめました。

「平三郎の残飯が駄目なら、ドッグ・フードも用意してあるぞ」

そう冷やかされ、睦月さんは諦めてスプーンを手に取りました。

「……惨めです」

やはり飲み込めないのでしょう。口元で止め、暫く見つめます。

「平三郎の妻にと買われた女であることを、忘れているようだな」

御隠居さまの手に鞭が握られているのを見て、睦月さんはギクツとしました。言うことを聞けないときは、鞭で躰られるのです。

「撲たれるんですか？」

恐る恐る、そう尋ねると、

「撲たれたいか？」

と言われてしまい睦月さんは悲しそうに首を振ると、覚悟をきめました。そして、平三郎さまの残飯を口の中に注ぎ込んでいきました。

平三郎さまは、睦月さんの仕草をじつと見ていました。そして、平三郎さまの残飯を食べた睦月さんは、自分より劣る存在だと確認しました。それは、平三郎さまの頭のなかにある、このお屋敷内での序列でした。

「さあ、全部食べるんだ」

睦月さんは、悲しそうに平三郎さまを見つめました。犬の妻にと言われましたが、こうまでされるとは思っていなかったのでしょう。犬の残飯を食べると言うことは、犬に仕え平三郎さまの下僕となることとです。

「御隠居さまは……意地悪です……」

睦月さんは、抗議めいた口調でそう言いました。そして、平三郎さまの残りかすを食べていきました。

「これからは素直に食べるんだぞ」

食事が終わり睦月さんは、平三郎さまの犬小屋の掃除を命じられたのです。

「ちゃんと、平三郎の寢床を設えるんだ」

御隠居さまは無情にも、そう言いました。

「いずれ、睦月と一緒に寝る場所になる」

「そんな……」

平三郎さまと結婚すれば、犬小屋が夫婦の寢床になるのでしょうか。人間が入るには狭い小屋から、睦月さんが首を出している姿を想像してしまいました。

睦月さんは、四つん這いになって小屋の中に頭を入れ、平三郎さまの藁布団を整え始めます。

「キャア！」

と小さな悲鳴。

睦月さんは、藁に隠れていた獣糞を見つけて、驚いてしまったのです。

「どうした？」

小屋から顔を出した睦月さんに、御隠居さまが尋

ねます。

「あの……平三郎さまが……粗相を……」

「何だ。粗相か」

御隠居さまは簡単にそう言いますが、若い睦月さんにとっては、犬のウンチは容易に扱えるものではありません。

「次の仕事が待っている。早くせんか」

御隠居さまは、睦月さんのお尻を叩いて、そう言いました。

自分の便の後片付けだって嫌なのに。

睦月さんは暫く、平三郎さまの糞を見つめていました。そして、今にも泣き出しそうな顔をして、そつと手を伸ばし、糞をお皿に摘み上げました。

これから毎日、こんな仕事をさせられるのです。

獣糞がこびりついていた所を、雑布でゴシゴシと拭い清めなければならぬのです。

小屋の掃除が終わると、御隠居さまは、

「獣糞に驚くとは何ごとだ。平三郎に失礼のないように、匂いに慣れさせる」

と言い、睦月さんを柱に、縛り付けてしまいました。

「平三郎の匂いをたつぷり、嗅ぐがいい」

そう言うと、御隠居さまは睦月さんの口をテープで塞ぎました。そうされると、睦月さんの呼吸は鼻に限定されてしまいます。

「これは、匂いマスクと言つてな。平三郎の匂いがたつぷり染み付いている」

御隠居さまは、睦月さんの目の前にマスクを見せてびらかしました。

「これをかけると、睦月は嫌でもこの匂いを嗅ぐことになる」

睦月さんの鼻を覆うように、御隠居さまは匂いマスクを掛けていききました。

「むむうつ……」

突然、ムツとする臭氣に包まれ、睦月さんは慌てて嫌々をしました。そして、マスクから逃れようと、顔をのけぞらせました。

「ううつ……むむむつ……」

獣独特の臭い匂い。

「おとなしく、匂いに慣れるんだ。平三郎の大切な匂いだからな」

マスクで顔を包まれてしまい、睦月さんは、匂いを吸うまいと呼吸を止めました。しかし、それは空しい努力でしかありません。

一時ももたず、息が詰まって大きく空気を吸い込みます。と同時に、獣のむせかえるような臭氣が、睦月さんの肺の中に飛び込んで来ました。

「うむつ……」

雄犬の匂いがたつぷり染み付いたマスクから、すごい臭氣が、睦月さんの体内に吸収されていききました。

「ふふふつ。素晴らしい匂いだろう」

睦月さんは頻りに頭を振って、雄犬の匂いから逃れようとしました。しかし、マスクは睦月さんの顔を覆い、呼吸をする度に獣の臭氣を深く吸い込んでしまいます。

「むむうつ……ううつ……」

睦月さんの清らかな胸が、雄犬の臭気で汚されていきます。胸の隅々にまで雄犬の匂いが染み込んでいきます。

「この匂いを嗅いだら発情するようになるまで、訓練を続けるぞ」

御隠居さまは冷たくそう言いました。

暫くして、マスクが外されました。睦月さんはホツとして、新鮮な空気を胸一杯、吸い込みました。しかし、それも瞬時だったのです。より一段と強烈な匂いを染み込ませたマスクが用意され、睦月さんの顔に掛けられました。

「むぐううっ……」

頭のなかが痺れてしまいそうな匂いに、クラクラツとします。失神しそうになります。その睦月さんを見て、御隠居さまは気付けの準備をしました。

「氣を失ってはいかな」

御隠居さまは、睦月さんの前にしゃがみ込みました。そして、睦月さんの腰をしっかり抱えました。

匂いに負けて、睦月さんがぐったりします。と同

時に御隠居さまは、針先を彼女のクリトリスにグツと差し込みました。

「うぐううっ……」

情け容赦ない仕打ちです。身体のコを通り抜けていく激痛に、睦月さんは顔をのけ反らせて堪ええま

す。
「痛かったら起きていなければな。平三郎の匂いを嫌がるなんて、そんな無礼は許されん。いずれ睦月の身体からも、平三郎の匂いが発散されるようになるのだ」

御隠居さまはまた、マスクを取り替えました。その都度、睦月さんは失神しました。そして、クリトリスに苦痛を受けて目を覚ましました。

「……うぐう……ううっ……」

「匂いをたつぷり、吸い込むんだ」

マスクは、五回、六回と取り替えられました。そして、睦月さんが失神しなくなると漸く、許されました。その時はもう、睦月さんの嗅覚は完全に、麻痺してしまっていました。胸から頭のとっぺんま

読者メッセージ

お尻を陵辱したい男

女性のお尻は美しい。白くて柔らかく、つやつや光っていて女性のお尻はまさにセックスのシンボルです。

だからこそ、私は美しく若い女性の魅惑的な尻を汚し辱めたいのです。血が出て、赤く腫れあがるほどムチで叩いたらどんなに気持ちいいだろうと思います。もしくは、ロウソクに火をつけ尻に垂らして汚し陵辱したいのです。

私は31歳の独身男性で、バーを経営しています。私の店でバイトする22歳の女の子が今のブレイ相手です。彼女は僕が理想とする白くて柔らかないお尻の持ち主。ロウソクも最初は「熱い熱

で、雄犬の匂いが染み込んだのです。

「十日も続ければ、平三郎のこの匂いが大好きになる。頑張つて、早く一人前の牝犬になるんだな」

御隠居さまのそんな酷い仕打ちにも、睦月さんは

コックリ頷いていました。

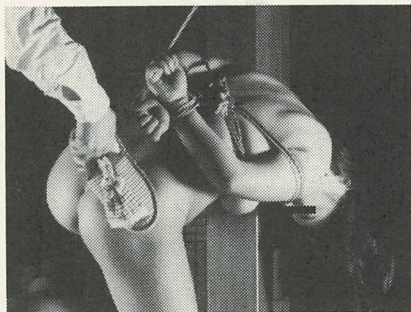
睦月さんは、平三郎さまの妻にと買われた女です。から、いつも平三郎さまの側に侍らなければなりません。当然、平三郎さまの匂いに慣れる必要があります。

い」と嫌がりましたが、私が異様な興奮でペニスをガチガチに勃起させることを知ると耐えてくれるようになりました。

私はロウソクで汚れたお尻を後ろから抱きしめ、そのまま性器の中へペニスを押し込みます。いわゆる後背位です。この瞬間の快感というものは、男の私が思わず泣き声をあげるほど最高です。私がいまだにも喜ぶので彼女もしだいにお尻を汚され、刺激される被虐の快感に目覚めたようです。

最近ではラブホテルに行く前に、自分の方からロウソクを用意するほどになりました。もうすぐでムチも喜ぶ身体になりそうです。

(京都・剛志)



たのです。

その日から、睦月さんは平三郎さまのマスクをして寝るように言われました。

それは、睦月さんには辛い試練でした。結婚もしていないのに、男の匂いを付けられてしまうのです。それも犬の匂いを。

寝る前におしめを当て、それがすむと、勝手にマスクを外さないように、睦月さんは後ろ手に縛られました。そして、匂いマスクを顔にかけられ、眠るのです。

初めの数分、睦月さんは身体をくねらせて、頻りに嫌々をしました。でも、匂いに圧倒されて感覚がなくなり、やがてぐったりして眠りについていました。

そんな夜が数日の間続き、睦月さんは平三郎さまの匂いにすっかり、慣れてしまいました。マスクをかけられても、嫌々をすることはなくなりました。縛らなくても、マスクを外す気ずかいはなくなつたのです。

「慣れたかな？」

御隠居さまにそう聞かれ、睦月さんは悲しそうに頷きました。そして、御隠居さまが差し出したマスクを自分から、鼻にかけていきました。

大きく深呼吸吸して、匂いを胸いっぱい吸い込みます。そして、頭をクラクラッとさせて、獣の匂いに溶け込んでいきます。その仕草を二回、三回と繰り返し、落ち着いた眼差しで御隠居さまを見つめます。

「大丈夫だな？」

その言葉に、コックリと頷くさまが愛らしく、睦月さんを牝犬にするのがためらわれる程でした。それでも、御隠居さまは、女性と雄犬がセックスする姿をどうしても見たくて、睦月さんの調教を続けました。

やがて、平三郎さまと睦月さんの仲の良さそうな素振りが見られるようになりました。

一ヶ月も経つと、平三郎さまと睦月さんは、庭で戯れるようになったのです。平三郎さまが散歩に出



ると、睦月さんも付いていくようになりました。

平三郎さまが嬉しそうに、睦月さんにまとわりついていました。睦月さんの足元で跳ね回っています。そして、睦月さんは平三郎さまの体毛を優しく撫で、スキン・シップを始めました。芝生に腰を下ろすと、抱き合うように絡み合いました。

それは、傍目から見れば微笑ましい光景でした。睦月さんが犬のものにされるといふ事を知らなければ、和やかな光景でした。しかし、それは睦月さんが、犬に身体を委ねる前の心の準備なのです。睦月さんは、平三郎さまに慣らされているのです。雄犬との自然な交流を育み、その上で身体の関係が強えられるのです。

前戯の訓練

前戯の訓練は、犬の身体を委ねる前の心の準備なのです。雄犬との自然な交流を育み、その上で身体の関係が強えられるのです。

それから、数日たったある日のこと。

御隠居さまは、犬小屋の掃除を終えた睦月さんを部屋に呼びました。

いつもなら、今頃はお庭を散歩している平三郎さまでしたが、その日は御隠居さまの部屋にいました。そして、睦月さんを待っていました。

「何のご用でしょうか？」

睦月さんは、平三郎さまが控えているのを訝しげに思いました。

「睦月がここに来てから、一ト月になったのう」

「……はい」

この一ヶ月は、睦月さんにとって針の筵でした。いつ、平三郎さまと身体の間隔を強えられるのかと、冷や冷やした。それでも、平三郎さまがなついてくれて、ごく普通の女性と犬との間のように、戯れられるようになっていました。

このまま何も起こらずに過ごせたらと思っていました。御隠居さまに改まられると、結婚の儀式かと胸騒ぎを感じてしまいます。

「平三郎は、どうだ？」

「はい……あの……とても賢くて……」

「そうじゃろう。睦月よりも頭はいいぞ」

確かに平三郎さまは、利発なお犬さまでした。でも、犬が人間よりも賢いとは思えません。平三郎さまがいかに知能が勝れているといつても所詮、犬です。

「それで、平三郎と仲良くなったのかな」

御隠居さまは、意味ありげにそうお尋ねになりました。

「……はい……」

それが性的な意味まで含んでいる質問なので、睦月さんは恥ずかしそうです。

御隠居さまは、睦月さんと平三郎さまとを結婚させるつもりです。友達のような関係から恋人のように、そして夫婦にするつもりなのです。仲良くなるということとは、いずれ平三郎さまに貰われて、妻の勤めを強いられることを意味します。

「恋人になれたかな？」

御隠居さまはそう言うのと、睦月さんを抱き寄せました。そして、睦月さんの唇に唇を重ねて、まろやかな女の感触を楽しみました。

「平三郎とはまだ、接吻できないようだな」

そう言われ、睦月さんは恥ずかしそうに頷きました。

「そんなことではいかんぞ。平三郎は夫になるんだからな」

「はい……」

睦月さんは、素直にそうに答えました。

「平三郎に接吻してもらって、恋のときめきを教えて貰うのだ」

そんな無理難題を吹っ掛けられています。犬とは口の構造が違うから、接吻は無理だと思うのですが、それは睦月さんが牝犬になろうとしていないからだ、と、本心を見抜かれてしまします。

「無理やり、牝犬にしたくはないのですな」

連れてこられたときは、明日にでも平三郎さまの妻にされるような雰囲気でしたが、御隠居さまも睦月さんの身体が惜しいのでしょうか。そんな優しいことを言いました。

「ありがとうございます。牝犬になれるよう努力い

たします」

御隠居さまが優しいと、睦月さんも殊勝になりました。心にもない言葉が出てしまい、御隠居さまに唇をお捧げしました。

「その心意気だ。一日も早く牝犬になって、平三郎とつがうさまを見せてくれ」

そう言うのと、御隠居さまは睦月さんのブラウスのホックに手をかけました。そして、それを一つ一つ外していききました。

「御隠居さま……」

平三郎さまがご覧になっっているのに、御隠居さまはお戯れをと、睦月さんは平三郎さまに申し訳なさそうな顔をしました。それでも、もしや御隠居さまに抱いて貰えるのではと期待して、脱がされるままにしていました。

ブラジャーを外され、ショーツまで下ろされて、睦月さんは生まれたままの姿にされてしまいました。そして、恥ずかしそうに胸を隠していました。

御隠居さまは、縄を手にしました。そして、それ

を目の前に突き付けられて、睦月さんは素直に頷きました。

「縛らなくても……」

そう言いながらも、睦月さんは素直に両腕を背中に組み合わせました。

身体の自由を拘束されるというのに、睦月さんは怖くないのでしょうか。御隠居さまを信頼しきったような態度には、感心してしまいます。

睦月さんは後ろ手に縛られ、背後から御隠居さまに抱かれました。胸の上下に回された縄が、睦月さんの乳房を引き立てました。ふっくらとした膨らみに、小さな乳首を乗せた美しい乳房。

「睦月の感度を確かめてやろう」

そんな卑猥な言葉に、俯いてしまいます。御隠居さまの手に乳房が包まれるのだと思っていると、御隠居さまは、

「この肌をたつぷり、平三郎に舐めて貰うのだ」

「えっ？……」

睦月さんが慌てます。でもその時はもう、平三郎

さまが、身体を擦り寄せてきました。

「ああ……御隠居さま……」

まさか、裸にされて平三郎さまにいたぶられるとは、思ってもいなかったのでしょうか。

「後生ですから……」

そう言ったときでした。平三郎さまは長い舌を出し、睦月さんの乳房を大きく舐め上げたのです。

「あっ！」

睦月さんは、思わず小さな悲鳴を上げて、顔をのけ反らせました。

いきなり女性の性感を刺激してくるなんて、平三郎さまは女の弱点を知っているのではないかと怖くなります。

「平三郎さま……」

そして、睦月さんの危惧したとおりでした。平三郎さまは知っていたのです。女性がどこを舐められたら参ってしまうのか。

睦月さんは、執拗に乳房を舐められました。愛らしい乳房が、平三郎さまの舌でねつとりと、舐めら

れました。そして乳首までもペロリと、舐め上げられたのです。

睦月さんは、身をよじって逃れようとした。けれども、御隠居さまにしっかりと抱えられて、身動きできません。

「あっ……ああっ！」

平三郎さまは、何度も何度も、睦月さんの乳房を舐め上げました。

睦月さんは助けを求めるように、御隠居さまを振り返りました。犬に愚弄される屈辱がいたたまれなかったのでしょうか。しかし、御隠居さまは許してくれません。むしろ睦月さんの背を反らせて、乳房を突き出させたのです。

「ああ……嫌あ……」

突き出されて、乳首が敏感になってしまいました。その先端を平三郎さまの舌が捏ね回すのです。

「いっ……嫌あ……駄目……」

睦月さんは悲鳴を上げると、ブルンツと身体を震わせてしまいました。

「嫌です……嫌です……」

睦月さんの口調が、明らかに狼狽しています。平三郎さまに乳房を舐められて、睦月さんは戸惑ったのです。

平三郎さまは、睦月さんの感性を刺激したので、睦月さんは、平三郎さまに乳房を弄られて、感じてしまったのです。それを示すように、睦月さんの股間から女の匂いが漂いました。そして、その匂いを平三郎さまに嗅ぎ付けられてしまいました。

平三郎さまの舌が、乳房から降りていきます。睦月さんの女の匂いに誘われて、お股に降りていきます。

「ああ……嫌です……嫌です……」

睦月さんは身をよじって、平三郎さまの舌から逃れようとしてました。膝を固く閉じ合わせて、平三郎さまの舌がお股に伸びてくるのを防いでいました。

「さあ。睦月。平三郎が舐めてくれる。股を開くんだ」

「御隠居さま……それだけは、お許し下さい」

「何を言う。睦月は平三郎の妻になるのだ。夫に全てを与えるのは当然だろう」

「……でも……」

「嫌がるなら、この場で処女を捧げるか？」

「ああ……そんな……」

「夫婦の契りを交わしてもいいんだぞ」

そう言われて、睦月さんは諦めました。

いつかは、平三郎さまのものにされるのです。その覚悟をして、お屋敷に上がったのです。そして、平三郎さまのものになるのなら、自然に結ばれたい。

睦月さんの心が知らず知らずのうちに牝犬になって、その意識のなかで平三郎さまのものになりました。

「どうだ。契るか？」

いつかは、捧げなければなりません。しかしまだ、そこまでの心の準備は出来ていません。

「……結婚してから……」

睦月さんは、恥ずかしそうにそう言うと、閉じ合

わせていた膝をそつと開いていきました。そして、平三郎さまにお股を晒したのです。

平三郎さまが喜び勇んで、睦月さんの股間に顔を突っ込んでいきます。そして、舌を大きく出して、睦月さんの女性器を舐め上げました。

「あうっ！」

その感触に、睦月さんは思わず後退りしてしまいました。

「いつ、嫌っ！ できません！」

睦月さんはまた、膝を合わせてしまいました。すると、御隠居さまは睦月さんを抱えたまま、赤ちゃんのオシッコ・スタイルにしてしまいました。

それは惨めな、シートツツ姿でした。そう言われて赤ちゃんがオシッコする姿でした。

そして、股間が大きく開かれていました。

「ああっ……嫌っ！」

平三郎さまが、睦月さんのお股に顔を寄せていきました。睦月さんの女の匂いを嗅ぐように、鼻をクンクンと鳴らして、顔を近寄せました。

「あああ……嫌ああ……」

平三郎さまが匂いを嗅ぎます。女の匂いを嗅いでいます。そして舌を出すと、睦月さんのお股をペロリツと舐め上げました。

「嫌ああっ……」

二回、三回、四回と、平三郎さまが、睦月さんの女性器を舐め上げます。鼻先を股間に押しつけるようにして、睦月さんのお股をめていきます。

「御隠居さま……ああっ……嫌ああっ……」

お股が閉じられません。大きく開かれたまま平三郎さまに委ねられています。平三郎さまの思うとおりに舐められています。

「ああ……平三郎さま……」

お股を舐められて、睦月さんは観念してしまいました。平三郎さまは何と言っても、睦月さんの夫となるお犬さまです。睦月さんの身体をどうしようが、それは平三郎さまの勝手なのです。平三郎さまがお股をお望みなら、睦月さんは捧げなければならぬのです。

(以下次号)

肉獣病棟

❖一切の抑制から解放された美佐の官能—欲望の命ずるままに性の荒野にさまよい出る。曼珠沙華は深紅の芯を広げ、花芯に抱擁する

荒淫矢の如く

麻樹 香

え／＼山崎無平

淫花が匂う

窓を開けると、おもく湿った夜気とともに、金木犀きんもくしの濃い匂いが流れこんできた。その濃厚な、性的な花の匂いが、小泉千枝の感情をいつそう焦らだたしいものにした。

季節の変わり目にはかならずおこる生理の変調で、腰が鉛の袋を下げたようにだるい。星が、ひとつも出ていないのを見定めてから、千枝は窓を閉めて夜勤看護室に戻った。

「承子ちゃん、眠かったらすこし仮眠とっていいわよ。今夜は何もなさそうだから……」

韓国籍の、童顔の見習い看護婦は、先刻からカルテを整理しながら、ともすればひつつきそうになる、薄い一重瞼をもてあましている。

「すみません。でも、大丈夫です」

「大丈夫なものですか。またカルテの順番をまちがえて、回診の先生に怒鳴られるわよ」

金田承子は首をすくめ、ちらと舌を覗かせて笑った。陽気で、気さくな良い子なのだが、どうもそつつかしくていけない。回診のとき、患者のカルテをまちがえて渡したり、体温計を落としてこわしたり……そのときは泣きだしそうな顔でしょげるのだが、五分もすればケロリとして鼻歌のひとつも歌いそうな顔つきに戻っている。そういう底抜けの楽天



家で病院内の人気者だった。

「特に申し送り事項はなかったわね」

「ええと……ありません」

それでも慎重に、看護日誌を指でたどりながら答えた。

「三号室の谷沢さん、一昨日から便通ありませんけど……」

「そう、熱は？」

「消灯前三十六度四分、平熱です」

「たいしたことはなさそうね、あとでちよつと覗いておくわ。あなたはもう寝なさい」

「はい、では少しだけ……」

承子は白衣のまま仮眠用のベッドに横になり、毛布をかぶるとたちまち軽いいびきを洩らして眠りに落ちた。千枝は苦笑しながら、彼女の整理し残したカルテに視線を落した。

谷沢美佐——クラブ「ジャンヌ」経営。ふと、千枝の目がそのアドレスに釘付けされた。

私鉄のターミナルにちかい歓楽街で「ジャンヌ」

といえ……千枝は軽く目を閉じた。レズビアンのお溜り場という噂のあるその店に、千枝は忌むような記憶があった。

各病室にはテレビカメラが装置してある。そして、それは看護婦室の受像機に集中管理され、随時、必要に応じて病室番号のスイッチを押せば、患者の容態をいつでも観察することができる仕組みになっている。もう以前のように、ブザーの鳴るたびに病室へとんでゆく必要はない。

千枝は受像機の、三号のスイッチを押した。意外なことに、谷沢美佐はめざめていた。そして、ある秘密の遊戯に惑溺していた。白い、蛇のような肢体がうごめき、歯を噛みしめてのけぞるたびに、インターフォンからなまなましい呻きが流れてくる。

千枝はつめたいまなざしで、その孤独なショーをしばらく眺めた。

「どうしました、眠れませんか？」

美佐の狼狽ぶりは笑止だった。

彼女は、病室にテレビカメラが装置してあること

を知らないのだ。

軽いノイローゼと慢性的な胃炎で入院したばかりの彼女には、看護管理にそれを使う必要がなかったから、その装置のあることを教えなかった。下手に教えると、プライバシーの侵害とか何とか、うるさいことになるおそれがある。

「便通がないようですけど、おなかが苦しいんじゃないですか……浣腸してあげましょうか」

美佐は、しばらく答えなかった。

その顔に、千枝は見覚えがあった。すこしあがり気味の目尻と薄い唇、狐のように尖った顎……たしかにこの女だ。千枝の体内を、嗜虐の血が奔った。

「浣腸しましょうね……すぐに楽になりますよ」

千枝はやさしく囁いた。やがてこの女も、虐待の仮面を剥ぎとられて、泥沼の羞恥地獄を這いまわるのだ。美佐の肯くのを待って、千枝はテレビのスイッチを消した。

一昨年の夏だった。

救急車のけたたましいサイレンとともに、その交通事故の被害者が担ぎこまれて来たのは、ながく暑い一日もようやく暮れようとする時刻だった。夕食までのひとときを、リネン室の窓から、樺の大樹を染める真紅の残照の見事さに見とれていたことを、千枝は鮮やかに思い出す。

三時間もかかる、難しい手術だった。

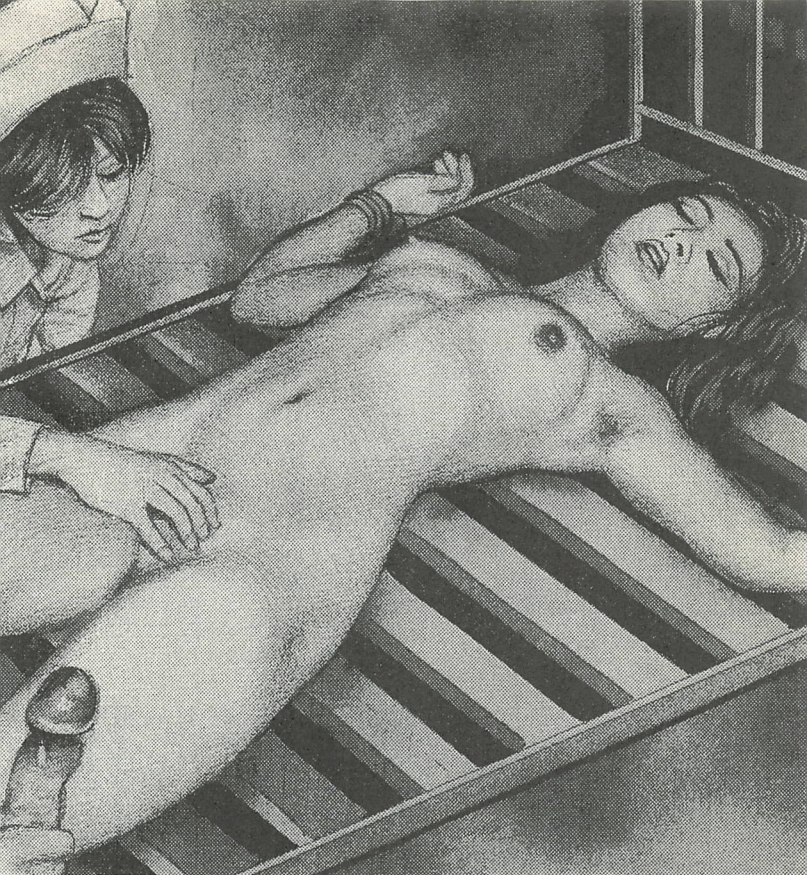
野球のボールを追って遊園地をとびだした少年が、砂利トラックにはねられたのだ。少年の腹腔は、溢れた血でシチュー鍋のように混濁していた。

手術が終わった後も、血に濡れた内臓の生臭いにおいが両手にこびりついていて、千枝は、遅い夕食にも食欲がなかった。

お酒でも飲まなきゃ今夜は眠れないわよ、という先輩の滝崎康子に誘われて、千枝はその「ジャンヌ」へ行った。

康子はその店の常連らしかった。

婚期はとうに過ぎていたが、いつそ身軽でさばさばするわ、という本人の口癖もまんざら強がりばかり



りでもなさそうで、とかく噂はあったが、欲望の処理は適当にやっているらしい。

顔馴染みらしい何人かの女客に小さく手を振って答えながら、康子は薄暗い奥のボックスへ千枝を誘った。

あのとき、千枝はわずか二杯のジントニックで意識を失ってしまった。何かが混ぜられたにちがいない。愛酒家だった父の血統をひいて、千枝は酒量には自信があった。いくら疲れていたにしても、その倍の量を飲んでも酔いつぶれることはないはずだった。

昏睡から醒めたとき、千枝はすでに全裸にされていた。そして、両手は固く括られて、ソファの脚に結びつけられていた。康子の姿

はなく、見知らぬ三人の少女に混じって、美佐の、狐のような顔がぼんやり見えた。

無防備のまま曝された千枝のからだを、三人の少女は意のままに犯した。乳房を、腋の下、茂みを、そして、もとも官能の鋭敏な肉の湿原を……。

レズビアンの彼女らは、同性の体の秘密を熟知している。

横たえられた千枝の裸体を一個の楽器にたとえれば、彼女らは優れた演奏者の指でその官能の弦を掻き鳴らし、千枝からあらゆる音色をひきだした。アダージョからアンダンテ、アレグロへ……それは、みごとにハーモニを保ちながら最終楽章へ誘い、壮絶な総奏フォルティッシモの反覆をもってクライマ



だ足の先で弄んだ。

「看護婦って、案外セックスに卑しいのね。ガツガツしてるみたい……」

吐きすてるような美佐の一言が、千枝を、その嗜虐の陶酔境から一挙に屈辱の汚泥の底に叩き落とした。目のくらむような羞恥と怒りが、千枝の全身を硬直させた。

被虐の朱い実

「さあ、浣腸しますから……膝を立てて……」

千枝は、美佐の寝衣の裾を胸元までまくりあげる、と、容赦なくその両膝をひらかせた。

ツクスを飾り、千枝の絶叫で終結した。その鮮烈な官能のどよめきは、黒弥撒を莊嚴する血と焰ほのおの交響を思わせた。

絶頂を経てぐったりと崩れた千枝の牝を、美佐は、ソファに組ん

濃い茂みの陰から肉の褻が紅い亀裂を覗かせ、そしてそこはすでにしつとりと霑^{うる}っているのを、千枝は忌わしいものに眺めた。

ゴムカバーに重ねたおしめを、その腰下に敷きこむと、千枝は十分に時間をかけて、その葡萄色の蕾にワセリンを塗りつけた。

美佐は、すでに再び揺れは始めている。肉の褻はさらに湿潤を深め、朱い実は熟れて露頭した。

千枝は指を深く送りこんだ。

「むむ……」

美佐は、声を殺して呻いた。

「苦しいですか？ ずいぶん硬く秘結していますものね。明日からは毎日こうして浣腸してあげましょうね」

「ああ……お願いだから、浣腸はしないで……」

「だめですよ、こんなに硬く便秘させては……それに、ほら、指でこうすると、貴女は気もちがよくなるでしょ……」

千枝は、執拗に美佐の「牝」の官能を翻弄した。

強烈な薬液が一挙にそそぎこまれた。

おもく、鋭い沈黙がしばらく続いた後、美佐は、喘ぎながらこらえきれぬものをおしめカバーの中に溢れさせた。

美佐は千枝を覚えていなかった。それは、たまたま気まぐれに異にかかった、哀れな美しい生贄の一匹にすぎないのだから当然である。

「ジャンヌ」にたむろする少女たちは、美貌の獲物をみつけるとひそかに美佐にサインを送り、彼女は適当にカクテルに細工した。そして酔いつぶれた獲物はさりげなく密室に運びこまれ、少女らの淫靡な嗜虐の性宴に供せられる。

鞭の乱打を浴びて悶える者も、汚辱と羞恥に泣き伏す者もいたが、それはすべて一夜きりの悪夢のように、闇から闇へ葬られた。犯された者は恥じて法に訴えようとはしなかったし、また、たとえそうするにも証拠がなかった。

稀には被虐の倒錯にめぎめて再び「ジャンヌ」を訪れる者もあったが、それには誰もとりあわなかつ

た。彼女らが魔手をのばすのは、常に新鮮な獲物に限られていたからだ。なにごともし一夜限り——それが彼女らの遊戯のルールだ。

が、私はちがう——と千枝は胸の底でつぶやいた。汚物にまみれた美佐の半球を拭いながら、まざまざとあの屈辱の一語が甦えるのを覚え、血が、熱く騒いだ。

翌朝、千枝は復讐の計画を主治医の牧野哲也に打ちあけた。この地方都市で中程度の規模をもつ総合病院には、医師も看護婦も少なくはない。だから谷沢美佐を徹底的に痛めつけるためには、彼女を、他の医師や看護婦の干渉から隔離することが必要だった。神経科担当の牧野医師の黙認があれば、万事が都合にことが運べる。

「ふむ、で、その代償は……」

「わたしのからだで……」

「いいだろう。他の者には、私の指示だといえはい」

千枝は、牧野が自分を欲しがっているのを知って

いた。そして、彼がサディストであることも……。それは動物の嗅覚が同族の「血」の臭いに敏感なのと同じだ。牧野の瞳は鳶色が濃い。そして千枝の瞳も同じ色をしている。

転落の予兆

海女が、深い海の底を蹴って浮きあがるときのように、目のまわりがどんどん明るさを増してゆき、やがて美佐はぼかりとその両目をひらいた。夥しい光の束が一時に流れこみ、その眩しさに一瞬眉をひそめたが、開け放たれた窓からは、きりきりと晴れあがった青空が爽やかに眺められた。

美佐は、珍しく頭が澄んでいるのを不思議なもののように感じていた。ずいぶんながく眠ったのだろうか。そういえば、ここ数カ月というものは、ほとんど熟睡することはなかった、と美佐は思った。

表向きは華やかにみえて、その実、浮き沈みのはげしい夜の世界で生きぬいてゆくのは並みだいてい

の苦勞ではない。すこしでも弱味をみせれば、客よりもまず女たちが離れていってしまう。この世界でホステスを失うことは、柱を抜かれた家も同然、致命的な打撃なのだ。

「ママ、目がさめたの……よく眠ったわね」

店ではいちばん若い珠子が、美佐の顔を覗きこむように笑いかけた。その白い歯なみがひどく眩しいものに見えた。

「ああ、珠子ちゃん……あなた、ずっとついていてくれたの？」

「ええ、昨日から……ママは一昨日からずっと眠りつづけていたのよ。催眠療法についてたかしら」

「そう……」

意識ははっきりしているのに、けだるい疲労感からだの隅々にあつて、そのぼらぼらな異和感が、私はまた病んでいる、と美佐には思えた。

「ママ、ずいぶん夢をみたでしょ。夢の中で色々なことをしたり、喋ったりしたこと、憶えている？」

「そうかしら、全然記憶がないけど……で、どんな

ことしたの？」

「いえないわ、とても恥ずかしくて……それよりママ、おしめ汚れていない？ 濡れていたら取り替えてあげるわよ」

珠子の意外な言葉に、美佐はうろたえた。

下半身が痺れていてすこしも気がつかなかったが、股間にはぶ厚いおしめがあてられ、ゴム製のおしめカバーまではかされていた。するどい羞恥が背筋をつらぬき、こめかみに閃光した。

しかし、珠子はその美佐の感情にかまわず、股間を手で探った。

「まあ、ぐしょぐしょに濡れてるわよ、ママ……すぐに取り替えますから……」

手早くおしめカバーのボタンをはずしにかかる珠子の手を、美佐は激しく払いのけた。するどい怒りとかなしみが錯綜して、何がなにやらわからなかった。しかし、少し気持ちが静まると、やはり濡れたおしめは気持ち悪い。珠子は、そうした美佐を呆れたようにみつめた。

「どうしたの、ママ……怒ったりして……」

「ごめんなさい、ついカッとして……でも、いつからこんな……」

「昨日、浣腸のときからよ。ママは赤ちゃんになった夢をみていたでしょ、おしめをあててって看護婦さんに頼んだのはママなのよ……憶えていないの？」

「……」

「そればかりじゃないのよ。ママったら、浣腸する間に、自分でオナニーもしたのよ。看護婦さんが、いつもそんなことするんですかって聞いたら、ええ、とてもいいのよ、なんて……私、恥ずかしくて困ったわ」

「そんなことも……」

「ママは浣腸も好きだといったわよ」

そうだったのか、と美佐は絶望の目を閉じた。自分が浣腸とおしめの魅力にとり憑かれた変質者であることは絶対の秘密であったのに……噂のはやい夜の世界では、ひとりでに洩れたニュースは、もう防

ぎやうのないことを美佐はよく知っている。

珠子はすでに美佐よりも優位にあった。その憐憫れんぴんのまなざしが逆転の証であった。珠子の促すままに両股をひらきながら、美佐は転落を意識した。熱いものが、しきりにこめかみを濡らした。

忌わしい記憶

細かい霧のような雨が幾日も続いた。

千枝は、牧野医師と謀り、ある種の薬品を使って、美佐をつねに半睡半醒の嗜眠状態にしておくことにした。

その状態では意識の制御が全く効かないから、美佐は、千枝の暗示が誘導するままに様々の痴態を露わにした。だらしなく開けた唇から白い涎を流しながら、浣腸を求め、自慰に耽る彼女の、痴呆そのものの姿が見舞い客を驚かせた。

その姿態を、千枝は何枚もカメラに収めながら、それが美佐の、日常的な意識の深層に潜在する願望

なのだと見舞い客に説明したが、それを疑う者はいなかった。

間もなく美佐は、精神病棟に移された。

そこは一般病棟からは隔絶された別世界だった。

窓には鉄格子が嵌められ、扉は厳重に施錠される。

その拘禁状態の息苦しさに美佐は焦らだつて暴れた

が、その懲罰として、美佐は三日間を皮の拘束衣に

包まれて過ごさねばならなかった。

美佐に与えられた拘束衣は、腰までの長さしかなかった。そして腰は赤い生ゴムのおしめカバーで蔽

われた。

両手は使えないので、決められた時間以外の用便は、すべてその中で済まさねばならない。その羞恥の衣装を着けて治療室に通う彼女に、人々は好奇の視線を集めた。

精神科の治療室は病院の中の密室である。

関係者以外の出入りは厳禁されているから、その室内では、千枝と牧野は意のままに美佐を翻弄することができた。純情な金田承子も、美佐の驕慢と変質者の痴態を嫌悪していたから、そこで施される苛烈な処置を疑うことはなかった。

一糸もまとわぬ姿で、

美佐はレザー張りの治療台に横たわった。そして千枝の誘導するままに故郷の草原を夢みていた。

信濃の秋は早い。真っ青に晴れた空には薄く白





雲がたなびき、高原を渡る風は肌に冷たい。その芒の茂みの陰で、美佐はじめて男を知った。曼珠沙華の花を手の中に碎きながら、美佐は、大学生だった従兄の良平に許したのだ。

しかし、そのとき美佐は致命的な失敗をおかしてしまった。あまりの痛さに、おびただしい血を流しながら失禁してしまったのだ。汚物に汚れた美佐の股間を、良平は軽侮の目で眺め、嘲笑した。彼女が故郷を捨てたのは、それから間もない冬休みの日だった。

高校中退の、身元保証人もない少女が働けるのは夜の巷だけだった。バー「紫苑」のママ久子に拾われたのをきっかけに、美佐はその世界に住みついてしまった。

美佐は男嫌いで通っていた。そういう美佐を、久子は妹のように可愛いがつてくれた。そしてついに美佐のからだを求めた。拒みつつける彼女を、なだめすかして久子は執拗に求めつづけた。

「私、アクメのとき、失禁するの」

拒みきれずに恥かしい性癖を告白したとき、久子は微笑しながら、こともなげにいい放った。

「ばかねえ、浣腸しておけばいいじゃないの……したことないの？」

それは美佐にとつて、奇想天外な着想だった。その夜、美佐ははじめて女の喜びを知った。朦朧と薄れた意識のまま、美佐は、与えられた男性自身を模した器具をおのれの中心に突きたてた。

一切の抑制から解放された美佐の官能は、欲望の命ずるままに、性の荒野にさまよい出た。

曼珠沙華は深紅の芯をひろげ、華麗な落日をその花芯に抱擁した。熱いものが血に混じり、それは網膜の裏で凝縮し、飛散し、奔流となって全身をめぐった。

「ああ……」

疾風は野面を薙ぎ、織い芯ははげしく戦慄した。血の残像は紅絹となつて空に流れ、生贄を求めて叫ぶ鴟の嘴を染めた。鴟は反転して美佐の子宮を啄んだ。切ない瞬間が迫っていた。

「ふふふ……もういいだろう。しかしすさまじいものだねえ」

「そうね、これ以上みせつけられたら、こちらの頭がおかしくなるわ。そろそろ治療にかかりましょうか」

金属製のベルトが頭部を締めつけ、手足はベッドの四隅にとりつけた革具につながれた。

「ああ……いやよ……もうすこしよ……お願い……」

美佐は不意に中断された行為の続行を哀願した。

「ええ、いま続けてあげますよ。でもあなたのお手々はもう縛るの、わるいお手々ですものね」

「金田君、きみ、その続きをやつてやれよ。勉強になるぜ」

牧野は卑猥に咽喉で笑った。承子は、ふるえる手で器具を握り、再び抽送を反覆した。そして、いつか美佐の官能の揺らぎに共鳴して自らも霑いはじめているのが恥ずかしかった。それは未経験な少女にとつては、刺激の強い性の目覚めだった。

「うう……」

美佐がようやく絶頂をきわめてそのうなじを反らした瞬間、千枝は電療盤のスイッチを押した。

「ぐえーっ……」

全身をつらぬくすさまじい電撃に、美佐は海老のように跳ねあがった。

「げえ……ええ……」

電流が断続するたびにその裸身はのけぞり、硬直し、崩れおちた。

黄葉期独特の明るく冷えた光線が室内に様々の陰

翳を与え、そのひとつひとつの翳が紫色の静寂を醸している。そのしじまを裂いて、美佐は固縛されたまま全身をはねあげ、噛みしめた唇から、声にならぬ絶叫を洩らして悶えた。

やがて美佐は泡を吹いて悶絶し、失禁した。夥しいものの異臭が、室内の静寂をさらに深いものにした。

禁断の遊戯

その夜、金田承子はいつまでも眠れなかった。眠ろうと焦れば焦るほど頭の芯が冴えて、どこからか漂ってくる金木犀の妖しい匂いが、彼女の官能を一層悩ましものにした。

ながくためらった後、承子は、昼間あの谷沢美佐を狂わせた忌わしい形の器具を、机の奥からとりだした。激しい誘惑に負けて、白衣に隠してひそかに持ち帰ったものだ。

同室の千枝は、夕刻外出するとき、今夜は帰らな

いといっていたから、この寮の六畳の部屋は、朝まで承子の個室というわけだ。めったにない機会である。

独りであることが承子を大胆にした。

鏡の前に横たわると、承子は自らその裾をひらいた。

承子の恥丘には茂みがない。

無知で粗野な母親から、それが「白板」と呼ばれるものであることを教えられたが、承子は恥じて誰にもそれを明かしたことがない。

そのすべすべした翳りのないふくらみは、それゆえに一筋の朱の亀裂を鮮やかなものにみせた。

承子は、その亀裂に器具の先を含ませながら、美佐の痴態をおもいうかべた。

「むむ……ああ……ねえ、看護婦さん……浣腸して……」

喘ぎ、うめきながら、頂上にちかづくとき彼女はいつもそれを求めた。腸のはげしい蠕動が官能の痺れに拍車を加えるのだろうか。

承子はすでに変身しはじめている。

美佐の白い残像が承子のものだった。

「ああ……お願いだから、浣腸して……」

小さな声だが、承子ははっきりその言葉を口走った。

その声を、千枝は扉の外で聞いてしまった。

牧野との情事は、千枝にとつて義務的な「支払」にすぎない。はつきりいうと、千枝は牧野が大嫌いだつた。

^{まわし} 蝮を踏みつぶしたような三角頭も、咽喉の奥でする含み笑いも……医師よりは農協の理事か、村会議員の似合いそうな泥臭い男である。女にもてない恨みがサディズムに転移したようなものだ、と千枝は胸の中で嘲けた。

牧野は巧みに縄を捌いて、千枝の全身を折りたたむように縛りあげた。両手は背中に、そして膝はふかく曲げて胸におしつけられる形だ。そういう姿勢が、女のもっとも弱い部分をあらわに曝すことになるとのことだということを、彼はよく知っていた。そうし

「おいて、彼は千枝の全身を羽毛で責めるのが好きだった。」

「むむ……くく……」

噛まされたさるぐつわを唾液で濡らしながら、千枝は芋虫のように転げまわった。口惜しいけれど、悦虐の苦悶が肌を薔薇色に染めてしまうのを牧野は愉しむ。

「ふふ……だいぶ嬉しそうじゃないか、ここが濡れてるぜ……」

「むむ……」

「そうか、さるぐつわがあつては答えられないな」

「ああ……苦しい……もう許して……」

さるぐつわを外した唇から、千枝の悲痛な声が洩れたが、牧野は容赦しない。そして悶える千枝に、彼の愛の印をうけ入れたいのだということを、もつとも卑猥な言葉で言えと迫る。拒めば鞭が浴びせられた。千枝は屈服した。

「あなたの……を、私の……に入れて……私、とても欲しいのよ……」

「そうか、そんなに俺のものが欲しいか、この淫乱女め」

彼は縄も解かず、千枝のふたつの秘所を犯した。

牧野が囑託になっている市中の小さな医院から急患の電話がなかったら、その責めは朝まで続くはずだったが、彼は舌うちしながら千枝を解放しないわけにはいかない。

そのため、千枝は彼のアパートを予想外にはやく出ることができた。

朝までなんてまっぴらだわ、蝮頭め……。灯の消えた彼の部屋の窓をふりかえりながら、千枝はしたたかに唾を飛ばした。

硝子器の触れあう音に続いて、承子のむせび泣くような声が洩れてきたとき、千枝は扉をノックした。

「承子、まだ起きてるわね。私よ、開けてちょうだい」

「は、ただいま……」

SMマニアは毎月21日、全国書店で一斉発売です

承子はあわてて周囲に散乱している器具を下着にくるみ、机の下に押しこむと扉の錠を外した。

「どうしたの、そんなにもじもじして……」

「いいえ、べつに」

「わかつているわよ、浣腸したこと……おしめもあててるんでしょ」

「……」

承子は羞恥にうなだれた。その間にも切ない刺激が絶えずつきあげてきて、膝頭ががくがくふるえた。もうトイレへ走る余裕もなかった。

「私、疲れたからすぐ寝るわ、床を取ってちょうだい」

「あのう……もう、私……」

「もう、どうしたの……洩らしそうだというの」

千枝は意地悪い一瞥を承子の腹部へ走らせた。

未経験な彼女は限界に弱かった。苦痛にその童顔を醜く歪めながら、承子は崩れるように畳にひざまづく、たちまちかなしい音を部屋中に響かせてしまった。

午後三時の精神科の治療室は、ひえびえと静かであった。窓からは、わずかな休憩時間をバレーボールに興じている白衣の群れが眺められた。

「承子、昨夜なにをしていたのか、いつてごらんない」

「すみません……悪うございました……」

「なにをしていたの……いいなさい」

「……」

「いわないつもりなの？ それなら谷沢さんと同じ方法でいわせてあげましょうか」

「谷沢さんのしてることを……真似してしまいました……ごめんなさい……」

「そう、それで……どうだったの」

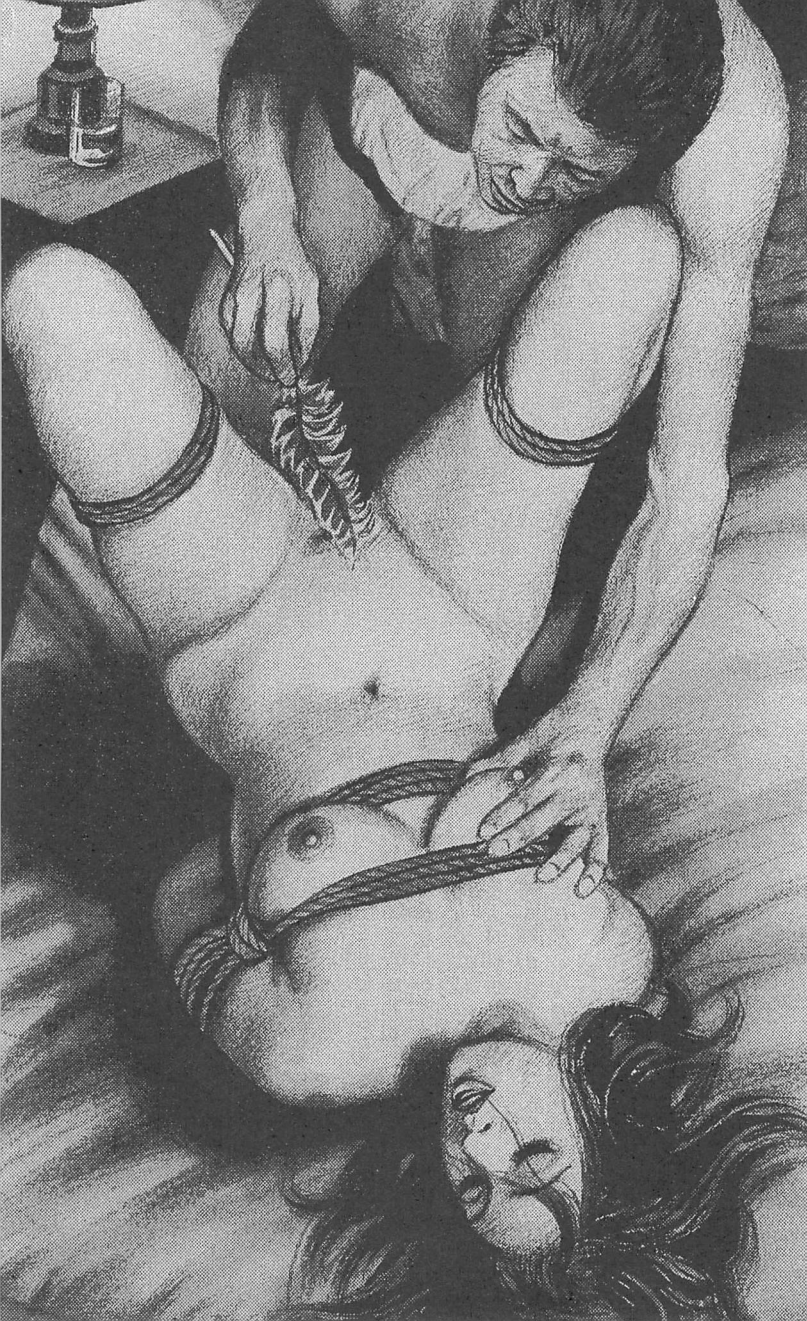
「……」

「答えられないの、強情な子ね」

「もう……忘れました」

「忘れた？ そう、じゃ私が思い出させてあげるわ」

「嫌です、もう決してしませんから、許して……」



「私じゃ気に入らないのね、それなら牧野先生にお願いしてあげるわ」

千枝は身を翻して立ち去ろうとした。

「待って下さい、お願いですから、先生にはいわないで……」

あの冷酷な牧野医師に昨夜の醜態を知られては、破滅は明らかだ。千枝以上に残酷なお仕置きを加えた挙句、医局中の笑いにされるにちがいない。

医局の中には、彼女が韓国人であることを快く思わない人が何人もいた。彼らがそれを知ったら、どのように承子を侮辱するか、それを思うと、彼女の小さな胸はつぶれた。承子は顔を覆って泣き伏した。

黒いレザー張りの治療台に横たわった承子の裸身は、まだ青い果実みたいに新鮮だ。両腕を左右の革具に固縛すると、幼い胸のふくらみはそれでもやはり女のものであった。

最後の薄い布片を脱がすと、千枝は軽い驚きの声を洩らした。

承子には、女の茂みがない。

その白磁のようななめらかな恥丘は、童女のままだった。千枝はそれを撫でてみて、すべすべして、蜜のようだった。それは蜜の蜜だった。

千枝の加える淫靡な刺激に、承子がこらえきれぬ喜悅のすすり泣きを洩らすころ、その蜜は溢れて流れた。

「白板の女って、話には聞いてたけど、はじめて見たわ。やはり血筋は争えないわね」

器具をかたづけながら、千枝は冷笑した。牧野に話したら喜ぶだろう。話の成り行き次第では、自分の身代わりに承子を人身御供に提供してもいいではないか。緋色の扱帯を禪のようにして股間縛りにしたら、よく似合うにちがいない。

その意外な思いつきに、千枝は低く笑った。

承子はひどい侮辱を感じた。身づくろいしながら、畸型を嘲笑する千枝の背に、厳しい一瞥を投げた。

彼女に殺意が生まれたのはそのときだった。

蒼い殺意

戸外は凄い月明りだった。

雲ひとつなく晴れた空は、ジュラルミンの板のように金属質の蒼白さを堪えてひろがっている。

もう薬の効いてくるころだな、と承子は腕時計に視線を走らせ、ふりむいて千枝に声をかけた。

「小泉さん、もう二時ですよ。仮眠をおとりになったら如何です？ あとは私が起きていますから……」

「そうねえ、そうしようかしら……私、きょうは疲れたわ」

遅れていた生理がはじまったせいかな、千枝は体の芯がだるかった。それに今夜はひどく眠いのだ。

軽く欠伸してから、千枝はベッドに入った。先刻、承子がいれてくれた紅茶に、少量の睡眠薬が混ぜてあったことなど、夢にも知らない。

千枝がすぐに深い眠りに落ちたのを見定めてか

ら、承子は、美佐の病室のテレビスイッチを入れた。

美佐のカルテには千枝の字で、午後十時に睡眠状態を持続させる薬品を注射した旨の記載がある。精神病棟の病室は施設する規則だが、それは先刻、所用のついでに外しておいたから、扉は自由に開くはずだ。

承子は、インターフォンのマイクに唇を寄せた。

地の底からの幽かな声に呼ばれるように、美佐は浅い眠りから覚めた。そしてインターフォンから流れてくる声にしばらく耳を傾けたが、その指示の意外な内容を知って驚愕した。

千枝は夜勤看護婦室のベッドに眠っている。そして部屋には誰もいない。千枝を刺すなら今だ。千枝を殺せば、明日からはあの電撃療法の責め苦から解放される。兇器は机の上のメスを使え……。

美佐は了解した。その声があのだ金田看護婦の声であることを……そして美佐がいつものとおり夢遊状態にあるものと思いこんでいるらしいことも、だ。

ところが、今夜の美佐はまったく薬の作用から醒めていたのだが、急に催してきた生理の手当てにトイレへゆき、つい面倒になってそのまま注射を怠けてしまったのだ。昼間、承子を辱しめたことで、千枝は疲れていた。

そのことをあの少女看護婦はまったく知らない。美佐は、息を詰めて思案に耽つたが、やがてあることに気づくと、わざとのろのろと起き上がった。そしていかにも夢遊状態にある者のように、蹣跚とした足どりで廊下に出た。

それを見届けてから、承子はテレビを消し、急いで病陳の巡回に出た。

復讐に燃える美佐の顔を、月光は蒼白に染め、机上のメスを美しく輝かせた。その長いメスは、汗ばんだ手に握りしめるとぞつとするほど冷たかった。

さすがに全身の戦慄はとどめ難かったが、それでも美佐はベッドにちかづくと、毛布を静かに剥ぎとった。

千枝は昏々と眠っている。すこし開けた口もとから

ら白い歯並がこぼれ、渚に散らばる貝殻のように月光に濡れていた。薄絹の下では豊かな胸が息づいていた。一瞬ためらったが、美佐は一気にその心臓へメスを突き立てた。

すさまじい絶叫に驚いて人々が駆けつけたとき、千枝は、虫ピンにつらぬかれた白い蛾のように、すでに絶命していた。

美佐は直ちに嚴重な監視の下に身柄を警察へ移され、一日おいて、承子は辞職願いを医局へ出して病院を去った。

翌年、その殺害事件の公判がひらかれたが、病院側、見舞い客の証言、カルテ、及び千枝の机から発見された、美佐の異常な痴態を示す夥しい写真などを証拠として、美佐には無罪の判決がいい渡された。

刑法第三十九条 心身喪失者ノ行為ハ、コレヲ罰セズ

その後の美佐と承子の消息については、誰も知る者がない。

M妻重度変態症候群

治療不可！輪姦&視姦マニアの妻たち

見世物奴隷として
自虐の繁華街を闊歩



P/ちい (25歳)

性奴として調教を始めて7年、とても人妻に見えないロリ系マソハットのP/ちいです。今までもいろいろな調教をしてきたが、野外露出は初めて。電気街やホームレス地帯、公園などを羞恥水着で歩かせました。恥ずかしがりながらも覚悟を決めたちいは、最後には笑顔さえ浮かべていました。

マイウェイムック

『変態人妻性乱季』

人妻野外露出&乱交調教
DVD165分収録

さくら企画ダイジェスト+撮り下ろし作品

乗客の視線に怯えながらも
媚肉を濡らす色情マダム

P/マリリン (34歳)

三年ほど前、出会い系で知り合い調教している人妻P/マリリンです。彼女は高校時代、連日のように彼氏の友達を相手に輪姦され、普通のセックスではイケない肉体になっていたのです。私との変態浮気にハマり、私の命令には絶対服従の性奴になりました。露出、乱交、SMと何でも言う事を聞きます。





日雇い労働者たちの 酒の肴に全裸オナニー

P/M子 (25歳)

調教を始めてからまだ二ヶ月現在、看護師として働いている彼女は、日勤が終わると毎日のように私の肉棒を欲しがるとSEX中毒の人妻です。かなりマシ性の強い女で、初めての露出プレイにもかかわらず、全裸でドヤ街を引き回しましたところ、暇が完全にイッてしまいました。見世物オナニーに耽っていました。





生臭い濃厚精汁を浴び
恍惚顔の真性変態妻



男を狂わす天然淫らマゾ



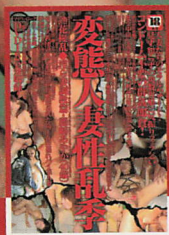
P／峰子（32歳）

看護師をしている人妻峰子です。別の妻に紹介されたのですが、実は彼女、高級会員制スワッピングサークルのアイドル的存在なのです。そんな人妻を我がものにし、喜び勇んで自前で乱交パーティーを開きました。参加者は「高級会員制」に対して低所得者、ニートなどの性欲が有り余った若者たちです。





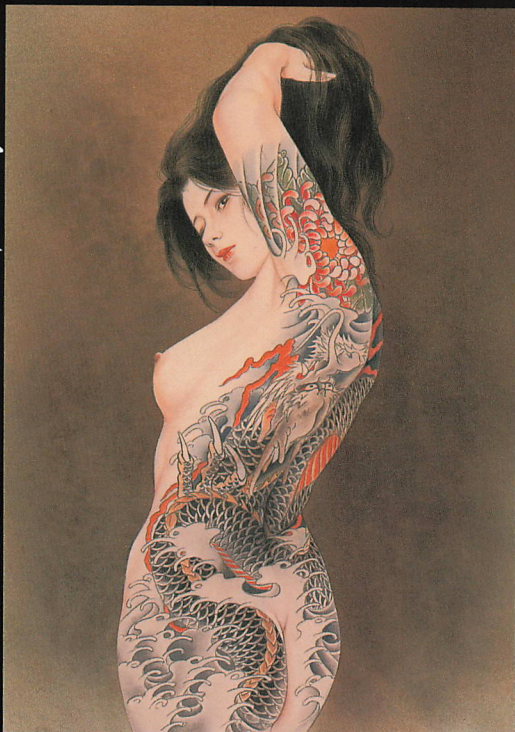
極上フェロモンボディに
群がるハイエナスワッパー



『変態人妻乱乱季』◆定価2500円（DVD付き／165分）
全国書店で絶賛発売中！小社通販でもご購入頂けます。送料350円です。

小妻容子

刺青美人画集



刺艷恋縄

◆定価 4,800円(通販は送料込み5,000円)◆A4 判 128P 限定部数◆3月9日発売

●お申し込み方法●

1. 現金書留でお申し込みの場合は本代 5,000 円 (送料込) を弊社までお送り下さい。その際「小妻容子画集 刺艷恋縄購入」と必ずお書き添え下さい。
2. 郵便振替でお申し込みの場合は本代 5,000 円 (送料込) を下記までお振込下さい。その際、通信欄に「小妻容子画集 刺艷恋縄購入」と必ずお書き添え下さい。
3. 代金引換でお申し込みの方はメール、または FAX でお申し込み下さい。下記アドレス、FAX 番号までお名前・ご住所・電話番号・冊数を記入の上お送り下さい。なお代金引換の場合、手数料 300 円を別途頂戴致します。

〒102-0073

東京都千代田区九段北4-1-26 第一稲穂ビル 2F
マイウェイ出版株式会社 小妻容子画集係

郵便振替口座番号：00110-3-138386

メールアドレス：info@myway-pub.jp

FAX：03-3515-7070

お問合せは 03-5216-3641 まで

電話で見つける
変態秘密交遊
パートナー

SM

伝言&ツーショット

- 札幌 011-200-4433
- 青森 017-771-7788
- 八戸 0178-36-7788
- 秋田 018-803-7788
- 岩手 019-903-7788
- 仙台 022-745-7788
- 山形 023-606-7788
- 福島 024-911-7788
- 新潟 025-333-7788
- 富山 076-403-5500
- 金沢 076-203-8585
- 福井 0776-31-0011
- 東京 03-5206-7100
- 多摩 042-648-1700
- 横浜 045-350-1700
- 川崎 044-330-4477
- 埼玉 043-658-7100
- 千葉 043-227-7100
- 茨城 029-307-1111
- 栃木 028-333-4455
- 群馬 027-219-4444
- 名古屋 052-788-2244
- 豊橋 0532-30-4444
- 三河 0564-30-7777
- 静岡 054-903-4455
- 浜松 053-533-5555
- 三重 059-343-4444
- 大阪 06-6135-6699
- 北大阪 072-683-6996
- 南大阪 072-254-9989
- 兵庫 078-842-6996
- 姫路 079-224-6996
- 京都 075-961-6996
- 滋賀 077-521-9989
- 奈良 0742-23-6996
- 和歌山 073-422-9989
- 岡山 086-899-6262
- 広島 082-543-6161
- 福岡 092-510-6666
- 北九州 093-330-7777

ValentineCall
信頼と実績のブランド「バレンタインコール」

緊縛人
調教
自傷
鬼畜
プレイ
便玩
催眠

完全
無料
のコンテンツ満載

http://

vccall.net/3848

マニア系AV無料見放題のツーショットサイト



携帯電話
PC対応
全キャリア対応
PHSは除く



もれなく
謝吉が当たる!!



http://web-vc.com/3848

サポートセンター
年中無休・24時間有人対応

0570-082000

■当番組の女性会員は大変貴重なマニア層です。モラルを重んじ、紳士的に振る舞える方のみご利用下さい。またお相手との合意なき過度な行為・プレイなどは絶対におやめ下さい。情報料1分100円～ サイト1P 10円 バケット料金、通話料別途。18歳未満の方のご利用はお断り致します。上記広告はTEL交際専用です。利用規約を確認の上ご利用下さい。無料ポイントは各番組にお問い合わせ下さい。●東京都新宿区新宿5-18

美濃村晃のS M画廊







吳画



マニアックビデオ・雑誌販売



★北川プロ、プレントラスト、パンプ
ポータ、メディアゼロワン、マニアワールド
ヤブー、HPSART、耽美会他正規販売店
★フェチ、SM、マゾ、盗撮、イメージスベ
ルマ、ホモ、レス、スカトロ、聖女、熟女、
洋物、ウエット&メツジー、マニア本
コミック、写真集、マニアグッズ、その他
各種インディーズ、一流AVメーカー強力
に取り揃えております。

千葉発

New Open

ソフト～ハード迄
S...40分15,000～
M...40分12,000～



素人SM趣味の女の子多数在籍

麻美 彩 レイナ

SM倶楽部

マリーン

受付11:00～ラスト

☎043-224-5799



横濱孫悟空 年中無休
PM12:00～AM3:00
横浜市神奈川区
松本町3-21-7 **045-320-4988**

Association of Masochism and Sadism・AMS

全国ネット

SMサークル・アムス

1981. 設立

SMを愛する男性、女性、ご夫婦等カップルの会員により
構成された日本で唯一の歴史ある完全会員制サークルです。
アムスのモットーは良識と守秘義務。そして性の有機性。

主な活動

● 会員間々のプレイパートナー紹介 ●

ご趣向の見合う方同士のセッティングを行っています。男性対女性、ご夫婦対ご夫婦、或は同性同士、ご夫婦対
シングル等、SMをベースに在る限り多様に対応いたしております。

● パーティーの開催 ●

テーマ性を以って、会員のご趣向に合わせたプレイパーティー、会食懇親会、旅行会等を適宜開催。

● プレイ技術向上セミナーの開催 ●

「初級」「中級」「上級」「医療」「応用」等段階別に適宜開催。「初級編」に関しては一般の方でもOK。

● 分科会活動 ●

「鬼六の会」「緊縛実践会」「妙煌の集い」「マーシュワールド」「創映舎の住人」「HANA-CHAN」「じゃこうの会」
「椿の館」「AMS-International」の9団体の分科会があり、夫々の想いのもと活動いたしております。

● 同人誌の刊行 ●

会員、一般読者からの投稿に依り次の三誌の同人誌が適宜刊行されております。

「AMSJ」.....SMをテーマにしたエッセイ、手記、小説等。

「じゃこう」.....女性の感性、女性を対象とした、ちょっとアブな同人誌。

「メイト通信」.....メイト募集、情報交換等趣味人からのメッセージ満載。

「AMS」「じゃこう」は何れも税、送料込みで3,000円、「メイト通信」が付録に付きま。

「メイト通信」のみであれば税、送料込みで2,000円。一般の方々にも頒布させていただいております。

入会のお問い合わせは

サークル事務局

☎ 03-3437-2154

HomePage <http://www.ams.co.jp>

SMサークル・アムスの資料の請求は

アムスが刊行する同人誌「AMS」「じゃこう」或いは「メイト通信」を
それぞれ所定の代金（郵便小為替・切手可）を同封の上、下記住所宛、
お取り寄せ下さい。資料同封の上、別の会社名でお送りしています。

〒105-0012 東京都港区芝大門2-3-9 柘上ビル4F
アムス通信社 ☎ 03-3437-4464

春性の咽鳴

売られる

肉の幸福感

羽鳥止愁 え／鹿島嗣男

◆後ろ手に縛られ頬には猿轡を噛まされた三人の女が、横一列に正座。若く美しい女たちの首から、値札がぶら下げられて哀れを誘う：

屈辱の値札

とある料亭の奥座敷。まわりの喧噪からまったく隔離され、おどろくほどの静かさである。

座敷では二人の男が酒宴に興じている。二人とも、いかにも好色そうな面構えで、話の内容も卑猥そのものである。

そこにもう一人の男が酒宴に加わった。

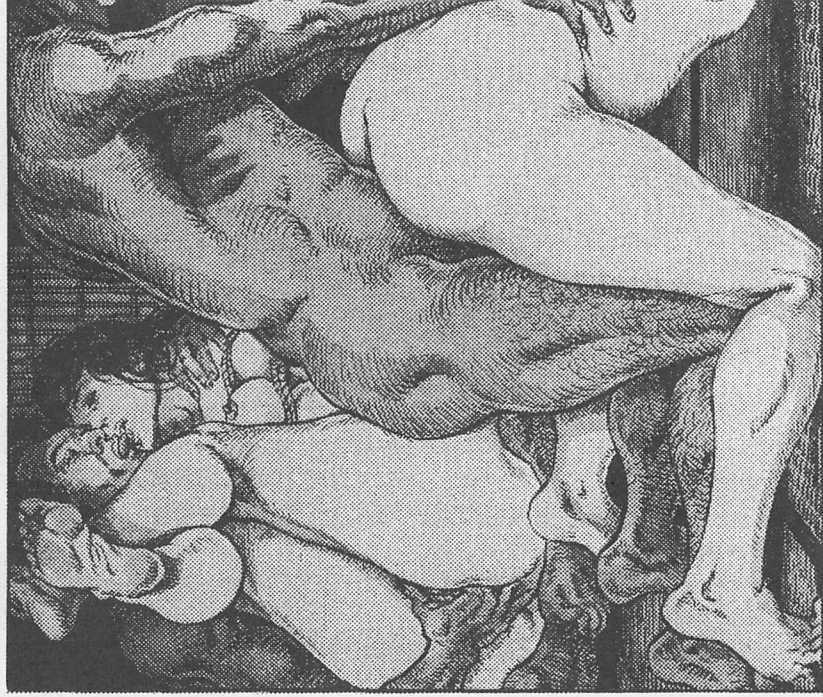
「やあ、お二人さん遅くなりまして、すんまへん」

「ああ、山鳥さん、お待ちしていました」

「今日はわたし、ええのん持って来ましたで」

「そうですか。いや、私たちも





今、言っただんですよ。お互いに今日のには自信があるってね」

「そうでつか。そら、楽しみなことちや」

「まあどうぞ、一杯いきましょう」

「へえ、おおきに。……どうでつか？ 景気の方は……」

「まあまあってところですかね。不景気だ不景気だといいいながら、買物だレジャーだと、若い娘はけっこう利用してくれますよ」

「まあ、おもろい商売でんな。わしらの商売も。ワツハハハ」

しばらく三人の馬鹿話が続いた。

「じゃ、そろそろ競売といきま

すか。どうです、皆さん」

「よろしいな。そんなに皆さんが自信持つてはるんやったら、早よう見たいがな」

「分かりました。それでは只今より、第七回の競売市を行います」

ポンポンと男が拍手を打つと、隣りの部屋と続きになってゐる襖が左右に開いた。

そこには、三人の女が横一列に正座してゐる。

うしろ手に緊縛され、頬には喰い入らんばかりに猿轡がかまされてゐる。そのうしろには、それぞれの介添役とみられる、これも若く美しい女達が黒革のブラジャーとパンティというスタイルで控えていた。

女達の首からは札がぶら下げられており、右はじの女には〈人妻三十三才・五〇万〉真ん中の女が〈OL二十四才・四〇万〉左端の女には〈学生十九才・三十五万〉とそれぞれ墨痕も鮮やかに記されてあつた。屈辱の値札をぶら下げた女達は、うしろ手の緊縛と黒髪を引き絞られて結ばれてゐる為、俯く

こともできず、涙に潤んだ瞳を男達に向けてゐる。

男達はそんな生贄を充分に舐めまわした。さすがに、皆が自信があると云つた通り、三人とも粒揃ひだつた。それぞれに個性のある容貌だし、身体付きも申し分ないように思えた。ぎっちりと締めあげた縄の間から、盛り上がった胸のまろみが、衣服の上からではあるが、それを物語つてゐる。

「町田はんのどれでつか？」

水を打つたような静寂を破つて、山鳥が声を掛けた。

「ぼくのはOLです」

「すると、剣持はんのが学生でつか。うむ、今日のはさすがに自慢しはるだけあつて、見事なものだな。いや、こら楽しみや。わしの人妻もなかなかいけまつしゃろ。うん、こらええ。ゆっくりいきまひよ、腰をすえて。ワツハハハ」

町田も剣持もじつと女達に眼を据えていた。自分の連れてきた女以外は、お互いに今初めて眼にす

上品な和服に身を包んだ人妻は、面長で、やや贅れた趣きが全身に漂い、手折られる花の風情を思わせた。

OLの方は、逆に見事な肉体を誇っていた。下唇の豊かさが全体を示唆しているようで、情熱的な雰囲気醸し少々のいたぶりには充分に耐え得る肉感的なからだ付きは、人妻のそれとは対照的であった。

学生の方は、やはりまだ未成熟なあどけなさを残し、ひと責めすれば、ワアワアと泣き叫びそうな幼さを感じさせた。

三者三様にバラエティに富み、男達は、それぞれに今日の魔宴の昂奮を掻き立てられた。

「それでは山鳥さんから、生贄の身の上話をして頂きましょうか」

「へえ、よろしおま。まあおきまりの話ですわ。亭主が交通事故を起こしましてな、当座の金に困ってわしの所へ来たという訳ですわ。いろいろ複雑な事情はあるらしいんですけど、そんなもん、この席で

関係おまへんやろ。あとはゆっくり当人どうしてやつとくなはれ。五〇万以上の値打ちはありまっせ」

「次は町田さんのOLです」

「私のは、皆が行く旅行に一緒に行きたくて、金を借りたものの、ちよつと無理をしすぎましてね。利息が積もり積もってこの金額です」

「私の学生は、可哀そうな話なんですよ。病気の母親の入院費の工面なんです。心臓病のやつかいなやつで、兄も働いてはいるんですが、とてもそれだけの給料じゃ追いつかなくなっただけですよ。この学生は母親の入院費が要る限り、借金をこの方法で返すことを了承しています。皆さん、いい値を付けてやって下さいよ。学校を退学することも勿論考えたんですが、ここまで来てもつたいないし、当人もそう願うんで……。若いし、処女ですからね」

「ほお、処女でつか。今時めずらしいでんな。十九で処女やなんて。その心根も気に入った。わしはこの学生はんがよろしいな」

「じゃ、町田さんはどうです。人妻でよろしい

か？」

「そうですね。少し値が張りますが、その分樂ませてくれるでしょうからな、結構です」

「それじゃ、私がOLで決まりですね。さてと、今回はいろいろ考えたんですがね。一度素朴な方法に帰ってもいいんじゃないかと思つて、こんな物を用意しましたが。おい、ここへお持ちしろ」

学生のうしろに控えた剣持付きの女が、静々と三人の前にいろんな道具を運び入れてきた。練りわさび、山芋のおろしたもの、唐がらし、お灸道具一式。

「ほほう、なるほど、そういうことでつか。わしらもいろんなもんを使い過ぎましたよつてな。昔に帰るわけだな。これもまたおもしろいな」

「町田さんはどうです？」

「結構です。願えれば浣腸器を揃えて頂きたいのですか」

「分かっています。町田さんは最後はそこにいかないと気のすまない方ですから、ちゃんと用意してい

ます」

「そうですね。それはありがたい」

町田は、細い不気味な光をたたえる眼でニヤリと笑った。

「それじゃ皆さん、よろしいですか？ 女達を部屋に入れて」

「よろしいで、お待ちかねや」

「よし、連れて来い」

今回の世話役の剣持が声を掛けると、うしろに控えていた介添役の女達が、縄尻を促して、女達をそれぞれ買い主の前に引き連れていった。そして自らは、自分の主人のうしろに控えて命令を待つ。

引き据えられた女達は、それぞれの思いを胸に、自分の身を捧げる男の前に打ち萎れて座っている。

処女の証明

「さて、学生はん。あんたの借金は、わしが剣持はんに返したるさかい、安心しなはれ、剣持はんにも

聞いて知つてるやろけど、一回五万円や。そやから後六回あんたはわしを喜ばせる債務があるんや。一回五万やつたらええ値やで。わしを満足させたら、その上にまた金を積んだる。わしらも何もあんたらの弱みにつけこんで、骨までしゃぶるといふやないで。あんたらを救けるのが目的なんやから、その所を勘違いせんといてや。何もせんと金を貰うのはあんたらも気が引けるやろやから、わしらの好きなように扱わせてもらうだけや。金さえ返してしまたら、後々まで尾を引くようなことはせんから、安心しい。それがわしらの会の決まりや。決して損な話やないで。そやから、あんたらも身を入れてわしらを喜ばせてくれなあかんのや」

笑いながら、山鳥は、眼の前で涙にくれている学生の顔を掴み、軽く左右に揺すった。女学生は更に涙を溢れさせた。

「おい、ご開帳といけ。処女やという娘はんの弁天様をまず拝ませてもらおやないか」
うしろに控えていた女に声をかけた。

「かしこまりました」

命令された女は女学生の側に寄り、清純な色つばさを匂わす、淡いピンクのスカートを捲り上げていった。

「うううっ！」

観念していたものの、やはり処女の身にとって、その行為は余りにも残酷だった。なよなよと身悶える姿が、山鳥の好き心をそそった。

袖と襟に、スカートと同じ淡いピンクの縁取りをあしらった純白のブラウス。その下にかすかに透けて見えるブラジャーの盛り上がり。スカートの捲れ上がっていくにつれて、そのふくらみが大きく揺れる。

汚れを知らない無垢な美しさが、世の中の酸いも甘いも知り尽した老練な山鳥にはこたえられない。

今、女学生のスカートは完全に腰の所まで捲れ上がっていた。パンティストッキングに包まれた太腿を、必要以上に重ね合わせ、羞恥に噎ぶ彼女の下半身は、やっと女になったという趣きの肉付きが表わ

れてきたという所であった。モゾモゾと腰の辺りに手を這わせていた介添役の女が、クルリとパンストのゴムを引き下ろした。

「ううっ」

「学生さん、こんな物、とっちゃいなさい。あなたなら素肌の方がよっぽど美しいわ」

尻の途中まで剥き下ろし、女学生の背中を自分の胸に抱きかかえるようにして反らせた。そして膝を崩すことを要求した。

女学生はおずおずと横坐りに尻を落とし、膝を立てて、その女の命令に従っていった。

女はクルクルとパンストを足首から抜きとってしまった。パンティ一枚になった羞ずかしさは隠しうもない。真つ赤に染めた頬を俯けて、露わになったパンティの裏側を隠すように、踵を重ね合わせた。

「さて、今度はこれよ。これさえとっちゃえば、すっぱりと諦められるわ。そしてあなたの最も神秘的な所をたっぷりとごらん頂くのよ。隠すべき所を晒

け出してしまふ恥ずかしさが、やがて悦びに変わっていくわ。女って不思議なものよ。さあ、お尻を浮かせて頂だい」

抱え上げた腰を反らすようにして尻を浮かせ、パンティのゴムを尻の半ばまで剥き下ろした。

さすがに身悶えが激しくなった。

構わずに女は、そのパンティを尻から一気に膝の所までむき下ろした。

「ううっ、うっ！」

重ねた膝をバタリと横に倒し、女学生は腰をよじらせて、山鳥の視線を羞恥の最奥から遮った。女はパンティを足首から抜き去った。

「膝を立てて、開いてごらん」

さるぐつわの奥で、いやいやと言っているのだろう。激しくかぶりを振って、ぴたりと太腿を合わせている。

「だめよ。そんなに駄々をこねちゃ。あなたは金で買われた身なのよ。いいの？ お母さんの入院費が払えなくても……」

「うう……」

ツート、新たな涙が目尻を伝わった。彼女はやがてゆっくりと膝を立てていった。

「そうそう、素直にすれば御主人様も特別に考えて下さるかもしれないわ。頑張るのよ」

膝を立てた女学生の深部の陰影がかすかに山鳥の眼に映った。しかしそれは、すぐに交差された踵の裏に隠れてしまった。

「踵をくつつけちゃだめよ。まだ、膝はいいけれど、踵は離して頂だい」

上体は反らされ気味に女の胸に預けている。開かれた踵の間からは、多分尻の方でも山鳥の視弄を浴びていることだろう。かすかに外気の触れるのがその部分に感じられる。

最早、逃がれられない辱しめの中に何の覆いも無く、自分は晒されているのだ！

堅く閉ざしたまぶたが、小刻みに震え出した。

山鳥は声もなく、汚れを知らぬ乙女の花園に眼を吸いつけた。自分の汚れた眼光が洗われる清浄な美

しきであつた。その清らかなものを、露わなまでに磨り尽そうとする淫らな邪心に、わずかな負い目は感じたが、しかし、それは一瞬。

山鳥は眼で女に合図した。全て納得づくの女は、丁寧に会釈を返し、女学生に囁きかけた。

「膝を開いていくの。ゆっくりゆっくり。そうしてあなたの全てを御主人様に見て頂くのよ。分かったわね」

わずかに身悶えを顕わしたものの、最早、観念の方が強いであろう。女学生はゆっくりと膝を開いていった。

徐々に晒け出される羞恥の源泉が、股間の拡がりと共に、自分の脳裡にもはつきりと描かれている。眼を開けて見なくても、どんなにあからさまになっているのか、痛い程に察せられる。

そんな羞恥の身悶えが、更に山鳥の嗜虐心を躍らせていた。

「羨ましい程、奇麗ね。あなたのこは。あなた、自分のものを見たことがある？」

「……」

弱々しく頭を振る。

「そう。自信を持つて、人に見せびらかしても大丈夫よ。色といい形といい……、申し分ないわ」

女の手が、あからさまな自分の花芯に伸びてきた。思わず膝を閉じ、その手を挟み込んでしまった。

「あらあら、駄目よ、閉じちゃ。言うことをきかないのなら、閉じられないように括っちゃうわよ。だから、素直にして頂だい。いい子だから……」

女は、言葉の優しさとは裏腹に、這わせていた指で内腿の柔らかい所を抓りあげた。爪で皮膚だけを摘みあげるといふ意地の悪さであった。

「ううっ！ うっ！」

女学生は飛び上がりながらに身をのけ反らせて、悶え泣いた。そして、生木を裂かれるような思

いで、再び両膝を左右に開いていく。

女の指の動きは、山鳥の眼を意識して当然ながら卑猥この上なかった。とても清纯な乙女が耐え得る動きではなかった。張り裂けんばかりのおぞましい叫びも、猿轡に押し殺され、どうすることもできぬ口惜しさを、気が狂ったような悶えに顕わした。

自分の意思で開いている内腿は、ガタガタと痙攣を始めた。閉じようと思えば閉じられるもどかしさを、その出来ぬ口惜しさが相乗作用をなし、激しい程の痙攣となつて噴出しているのである。

女の指は、女学生を抱え込むようにして、左右から花卉を開きにかかった。内部の柔媚な淡紅色の花びらを山鳥に覗かせている。

あえかな息吹きを見せるそれは、初々しい鮮やかさであった。

「やつぱり、わしみたいな年になると、これ位の若



い娘に憧れるんか、えらい昂奮してきたで」

こんもりとズボンを押上げている股間を叩きながら、山鳥は渴いた声を出した。

「男を知らない乙女の色ですわ」

「正真正銘の処女やな」

「そう思います」

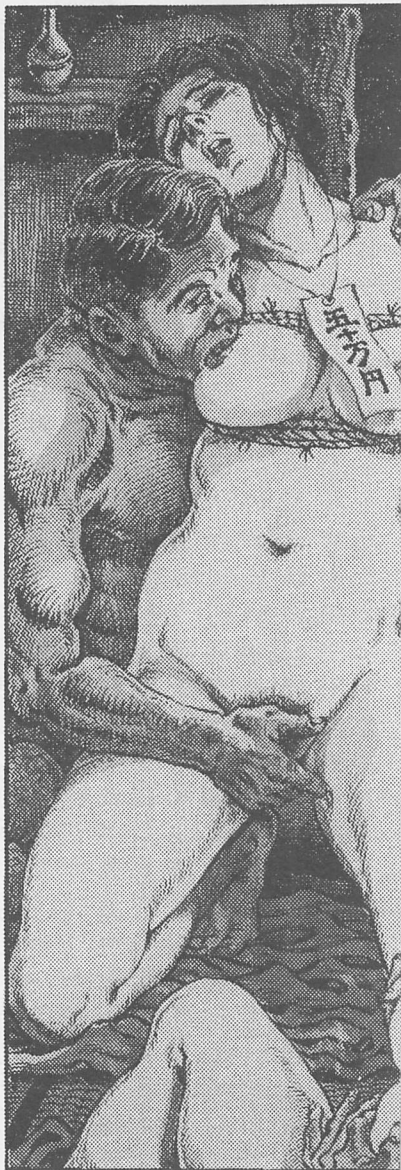
「楽しみやな、その時が。久し振りやで」

「充分に下準備を致しますわ。わたくしもこの娘なら、やり甲斐がありますもの」

「うん、頼むで」

「さて、学生さん。今度はお乳を見せて頂だい。もう一番恥ずかしい所をご披露してしまっただんですもの、お乳なんか羞ずかしくもなんともないでしょう。縄を解いてあげるけど、静かにしていてね。暴れたら答でぶつわよ。もつと酷く縛っちゃうから。いいわね」

女学生の頷きを強いて、女は、高手小手の縛めを解いていった。



爛れた痴

その横では、OLが衣服を全て剥き取られ、素っ裸の見事なからだを大の字に晒け出して、剣持の視弄を浴びていた。

身悶えは、次第に激しさを増している。それはどうも、全裸にされた事による羞恥の悶えだけではなさそうだ。猿轡の奥からは、止めようもなく獣の呻き声を絞り出していた。

手足は完全に引き伸ばされて四方の鉤に留められており、迫り上げるようにして浮かせた腰は、もどかしいくねりとなつて、激しく畳の上をバウンドしていた。その揺れ動く股間には、脂ぎったぬめりがガラガラと光り、羞恥の草叢をべつとりと肌にへばりつかせた。

山芋の原汁である。

アクの強い山芋をなすり込まれた、狂おしい悶えであつた。

途切れることなく滲み込んでくる痒みによつて、今や、OLの美肉の内壁は、気も狂わんばかりな掻痒感に責め苛まれていた。

「相当に痒そうだな。よし、少し楽にしてやろう。

おい、唐がらしの粉を振りかけてみる」

介添えの女は、真つ赤な粉を指先に摘むと、ハラハラと悩乱の個所に振りかけた。

「あとが大変ね。きつと、フフフ……」

今度は、その山芋のぬめりをなすりつけた人差指に、唐がらしの粉をまぶしつけて、深く切れこんだ美裂に擦りつけ始めた。

「うう、うっ！」

激しく黒髪を乱し、腰を左右に揺すりたて、パンパンと畳に尻を打ちつけて、その指の侮弄を語る。「少しおとなしくしなさいよ。痒みをとつてあげようといっているのに」

激しい抵抗に、やや気を荒立てたのか、女は、その暴れる鳩尾をグイと押さえつけた。そして情け容赦なく、深々と人差指を突き入れていく。

「ううっ！」

黒髪だけが狂ったように畳の上をのたうちまわる。

「あきれたわね、この娘。感じちゃってるじゃないの。こんなもので感じるなんて、あなたも相当ね」

「うう！」

余りの弄辱に、胸も張り裂けんばかりに振り絞る嗚咽も、空しく猿轡に奪い取られ、OLは溢れさせたくやし涙で顔もくしゃくしゃだ。

「どう？ 効いてきたんじゃないの？ カーツと、熱くなってきたでしょ。もっと悶えなさい。ゆつくりと觀賞してあげるわ。山芋と唐がらしの効き目からね。フフフ……」

量感たっぷりな太腿を、尻を、なめらかな腰を、揺すりに揺すり、悶え、軋ませて、淫靡に喘ぐOLの裸身は、充分な昂ぶりを剣持に与えていた。とりわけ、腰の動きにつれて、妖しいまでに肉の踊りを見せる乳房の肉感的なふるえが素晴らしい。

「おい、もっと乳を強調させてみる。責め甲斐のあ

る乳をしてるぞ、この女は」

「搾乳器でもかけてみますか？」

「それを強くかけてみる」

「はい」

女は、持参のカバンから二本の棒の両端がボルトで結ばれている簡単な器具を取り出して、OLの胸許に近寄った。

「少し痛いけど、我慢してね。これも四十万円の内よ」

仰向けの姿勢でも充分な張りを見せる形の良い乳房の上下に、その器具を挟み込んでギリギリとボルトを締め付けていった。

「それにしてもあなたのおっぱいは見事ね。それをこれからもっと大きくしてあげるわ。楽しみにしていらいっしやい」

「うう、うぐ、グウ！」

乳房の根本に半分位喰い入った。押しあげられた凝脂が風船のように腫れあがっていく。充血した乳首が痛々しく腫れあがり、紅みを増している。その

乳首を、女は人差指を丸めてツンと弾き飛ばした。

「うっ！　うう……」

なおもギリギリと締め付けられていく。激痛を訴えるOLは、たったひとつ自由な頭を振りたくった。

むごたらしく歪んだ乳房が、ゴムマリのように張り切った所で、女は手を止めた。

「どう？　気持ちいい……？」

「おい、痛みの方はそれ位にして、今度は悦ばせてやれ」

「はい」

女は柔らかい羽根を取り出した。それで、触れるか触れない程度に、優しく全身をくすぐり始めた。足の指から徐々に這い登り、ふくらはぎから内腿、鼠蹊部、そして腹から脾腹、奇麗に剃りあげられている腋窩へと伸びていった。しかし、何故か懊惱の痛痒が荒れ狂っている蠱惑の花園だけは通り過ぎた。

やる瀬ないもどかしさが、ふつつつとOLを襲っ

た。意地の悪い女の動きをなじるように、くぐもつた嗚咽が絞り出される。

女は痛々しい有様の乳房に羽根を這わせ始めた。敏感になっっている神経が見事に反応する。

「うう！」

今度は唇の中に、すっぱりとそのグミのようなものを包みこんだ。舌の先でコロコロと転がす。手にした羽根は、相変わらず肌の上を這い回っている。

しかし、やはりただ一点、太腿の接点の、あの最もOLが欲している部分だけは除外されていた。

焦らせるだけ焦らし、正に価千金の機を狙って、そこへの接触を女は考えていた。

やがて、OLの身悶えが様相を変え始めた。それははっきりと、剣持の眼にも分かった。腰のくねり、全身の波うちが、愉悦を表わす情熱のこもったものへと移行していったのだ。

激しかった乳房の痛みも、やがて麻痺し、緩和されて、今度は、それに呼応するように、与えられる優しい刺激によって、めくるめく陶酔の世界へ引き

込まれていく。

やるせなく身悶えるOLの全身は、ほんのりとピンク色に染まり、からだ全部でその官能の痺れを受け止めているようであつた。

機は熟したとみえたのだろう。女は、OLの体腔深くから滲み出してくる濃密な滑りの中に柔らかに指を這わせた。敏感な所を刺激される悦びに内腿から腰の肉がピンと突っ張つた。

女は中指の腹全部を熱い坩堝の中にのめり込ませた。そしてゆっくりと上下にゆすり始めた。

「うっ、うっ、うっ……」

「凄いわね、あなた。メロメロじゃない。指が溶けてしまいそうよ。もうすっかり準備が整つたって感じね」

こんこんと湧きあがってくる樹液を指にこすりとり、それをすぐ下の小さな蕾に流しこみ始めた。

「うう、うっ！」

さすがに抗いが全身を襲つた。

しかし女の指は、執拗なまでにその行為に専念し

た。潤滑油となつた己の羞液で、不浄の門戸を指のすさびに翻弄される羞ずかしさと口惜しさに、OLは、身を斬られるような憤辱に襲われた。

しかし、それも一瞬。次に、考えられないような妖しいうずきが芽生え出した。

名状しがたいドロドロの情念の中で、官能の愉悅だけが抽出され、より深い耽美の世界にのめり込んでいく自分を、どうする術もなかった。

「もう充分ですわ」

「よし、連れてこい」

「さあ、手をうしろに結え直しよ。おとなしくしてのよ」

大の字を解き、OLを高手小手に縛り直している間に、剣持は自分の衣服を全て脱ぎ去つた。

「味はよさそうかな」

「はい。きつと満足されると思いますわ。さあ立つて、御主人様の前にあなたの大事な所をご披露するのよ。どうぞ、お慰め下さいませってね」

女は彼女の肩をツンと押した。ヨロヨロとよろめ

くように歩を進めるOLは、もはや自失の状態であった。

意思のない人形となり果て、女が命ずるままに、剣持の前に両脚を大きく開き、さんざんに蹴り抜かれた花器を突き出すように晒け出した。

じつと射すくめるような熱い視線に、もじもじと消え入りたげな様子は隠しようもない。

女は、OLの尻の間から手を伸ばし湿潤の花弁を開きにかかった。

「じつくりと見て頂くのよ、あなたの女の生命……。これを、これからたつぷりと可愛がって頂けるのよ。羨ましいわ」

抗いの嗚咽も無くし、彼女はただ弱々しく頭を左右に振っている



だけである。

女は剣持を見た。剣持も女を見詰め返し、ゆつくりと頷ぎいた。

「ご主人様を跨ぎなさい。ぴたりと身体を合わせ腰を落としていくの。そして、しっかりとお受けするのよ。粗相がないようにね」

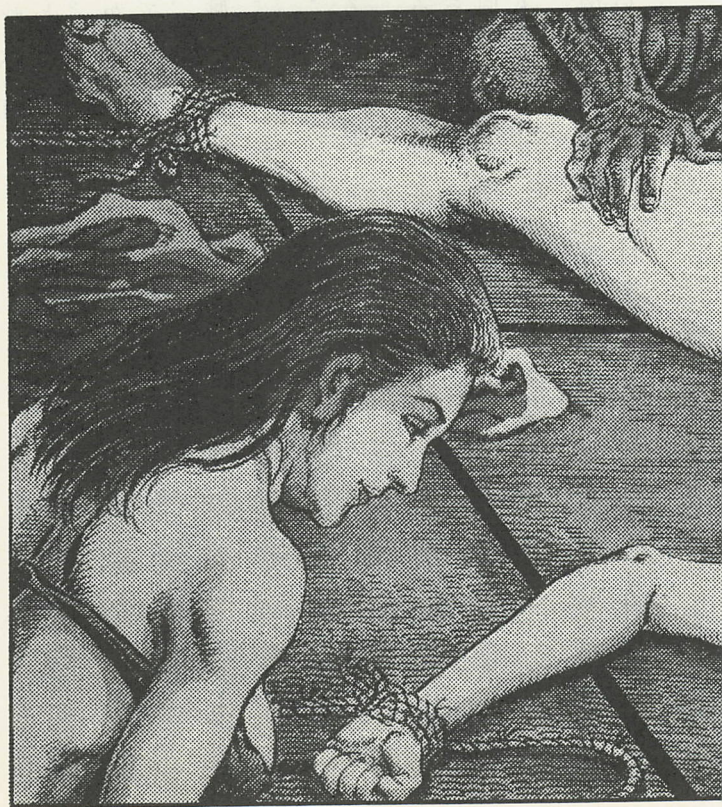
肩を押され、膝を落としていく。膝が畳に着いた。更に押し下げられていくと、硬質の刺激があった。

「うう……」

女はすかさず介添えの手を伸ばし、中心にあてがった。

「うう……、うっ……」

OLの熱い喘ぎをじかに感じとりながら、剣持は熱い坩堝くわぼの中で締めつけられるような蠕動を感じた。粘っこく包み込んでくる。



身も体も一体となった男女は、微妙な腰の悶えをお互いのリズムに合わせ、ゆつくりと優しく、その法悦歓喜の中にのめり込んでいった。もう介添えの女のことなど、彼女の頭の中にはなかった。ただひたすら、快楽をむさぼる雌道に浸っていく。

介添えの用をなさなくなった女は、複雑な気持を胸に、一歩下がって二人の愛欲図を眺めている。

燃える淫舞

「奥さん、もつと尻を振って挑発するんだ。発情期の雌のようにね」

「さつ、奥様。ご主人様のおっしゃる通りにするのよ。もう全部見せちゃってるんだから、羞ずかしがることはないでしょう。大きく腰を回して、お尻を強調させるの。魅力的なお尻なんだもの堂々と見せびらかせばいいのよ」

二人の弄舌にからかわれながら身悶える人妻。すでに一系残さず衣類は剥ぎ取られていた。そして全

裸のうしろ手縛りの立ち姿を、町田の前に尻を向けて露呈した。正面からは女の眼が自分の羞恥に突き刺さっている。

前と後ろから、好色な視線に苛まれる人妻の羞悶は、町田の嗜虐癖を充分満足させた。

たつぷりと時間をかけ、猫が鼠をいたぶるように、一枚一枚和服を脱がされる人妻に待ち受けていた凌辱は、素っ裸の身体を卑猥にくねらせて、ストリップ嬢がやるような淫らな踊りをやれという、ハレンチ極まりない要求であった。

「ご主人様は、ヒップの方に興味がおりなのよ。だから奥様も精一杯の演技でお尻の悶えを觀賞して頂くのよ。さあ、いつまでも甘えてないで、お尻をふりふりしてごらん」

女は、四、五〇センチ程の細長い笞の先で、嘲弄するように人妻の股間を突ついた。

「ううっ、うっ……」

猿轡の中で、屈辱の鳴咽が流れる。

三人の女とも、最初からずっと猿轡には手を掛け

ていなかった。それは男達が以前苦い経験を味合わされていたからであつた。猿轡をかまさなかつたばかりに、余りの弄辱に耐えきれなくなつた女が舌を噛んだのだ。三人ともそれですっかり興が冷めてしまい、それ以来、最初の競売時だけは猿轡は取らないでおこうと取り決めた。

「さあ奥様、やらないとこれで突きますわよ。いいの……？」

「うう…、うっ」

女が狙う筈の先を、腰を引いてよけようとするその人妻の動きが、うしろで見ている町田には、好ましい踊りとなつて視覚を刺激する。

「おい、そんなことでは生ぬるい。せつかく剣持さんが用意して下さつたのだ。そのお灸を使おう」

「はい」

「首に紐を巻きつけてな、畳に括りつけろ」

「奥様、ご主人様が面白い遊びを考えつかれたわ。

楽しみなことね……」

女は、夫人から剥ぎ取つた細紐を、そのか細い折

れそうな首に巻きつけた。そして、畳の縁と縁の間に鉤を差し込み、それに、夫人の首から垂れている細紐の端を通して、グイと引つ張つた。

「ううっ！」

ググツと首が引つ張られる。抗うにも、うしろ手ではどうしようもない。せめてもと力を入れて腰を踏ん張つてみても、首に巻きついた紐が締まってくだけで、苦しみを倍加させるだけだ。

惨めな恰好で膝まづき、更に上体が下がつていく。頤を畳に着け、豊かな肉置きをはち切れんばかりに強調させて、嫌らしい男の眼に晒け出してしまつた。

口惜しげな嗚咽が悄々と辺りをふるわせる。三つ重ねに小さく折り畳まれた夫人の身体は、痛苦と屈辱感の二重奏となつて、バラ色に燃え上つた。

夫人の尻の深い切れ込みが町田の真正面にあつた。ゴクリと生唾を飲み込んだ町田は、更に虐弄を要求する。

「けつを上げろ。膝を開け……」

「奥様、そんなに縮こまっていけないで、お尻をもつと見せびらかすのよ。奥の奥までね。さっ、膝をうしろに引くのよ」

女は、夫人の足首を掴んで、うしろに引つ張つた。

「うう……」

苦しい喘ぎと共に、尻をくねらせ、太腿が畳と直角に立った。浮き上がった尻の切れ込みから、その奥に潜む女の生命が、あからさまになった。その上に息づく小さな蕾までもが、耐えきれないように微妙な悶えを見せている。

「膝を開いて下さいな、奥様……」

笞の先で、臀溝を突つく。

「開かないというの？ 大した度胸ね」

女の笞の先は、夫人の菊門にあてがわれた。尻の悶えが一層激しくなる。

「開きなさいよ。開けばこんな悪戯はしないから」
「ううっ！」

嗚咽を残し、膝がじりじりと開かれていく。次第

に全容を明らかにしていく女の生命が浅ましい。大きく八の字に開かれた屈辱の姿態に、夫人の羞悶はいや増していく。

女は、大根の薄い輪切りを夫人の双臀に左右一個ずつのせて、その上に親指程もあるもぐさを置いた。

「奥様、熱ければお尻を振ってふり落とすことね。ホホホ……」

狂熱の乱艶

線香の火をもぐさに移し終えた女は、その線香を、夫人の股間の真下の畳の間に突き立てた。尻を低くしたら火焙りだ。

もぐさ特有のにおいと線香の香りが、夫人の鼻を衝く。やがてじわじわと熱の暴虐が開始された。

「うう……」

振り落とそうとする尻のくねりが大きくなってきた。半分程もぐさは火を落とした。

「うう、ううっうっ」

薄い輪切りの大根は、もはや水分を失なっていた。切羽詰まってきた夫人の必死の身悶えが、町田の胸を熱くする。

たおやかな令夫人が、淫らに羞恥の最奥を晒け出して、屈辱の極みに、豊かな双丘をふりたてている。町田の卑猥な視線が異常な輝きを増していく。

狂気の乱舞のうちに、もぐさは燃え尽きていった。落ち着きを戻した双臀から、女はもぐさのかすを払いのけた。

「フフ、赤くなっちゃって。熱かったでしょう、可哀そうに。でも跡は付かないわよ。どう？ もう一度やってあげましょうか？」

「うう、うう、ううっ」

不自由な頭をガクガク振り立てていやいやをする。その必死なまでの哀訴が嗜虐心を煽りたてる。

「おい、浣腸にしよう。もう待ち切れん」

「うう——！」

ひと際高い嗚咽が流れた。浣腸という卑猥な言葉

の響きに、夫人の羞辱が極みに達した。

「いやいや、そんなこといや！ やめて！」

胸が張り裂けそうな哀願も、うぐうぐと虚しく猿轡の中にかき消された。

女は、ガラスの浣腸器に薬液を注ぎ始める。粘っこい黄色の液体が筒一杯に満たされていった。

「さつ、奥様、お浣腸よ。奥様のお尻は、ほんとに男心をそそるお尻みたいね。きつと浣腸器が似合うわよ」

柔らかい乳白色の肉置きを撫でさすりながら、女は嘴管からたれる薬液を臀裂に滴らせた。

冷たく気味の悪い感触に、双臀の悶えはいよいよ怯えを増した。

「いくわよ。力を抜いて楽にしてるのよ」

「うう、ううっ」

「バカね。力を入れれば痛いだけじゃないの。馴れてないから仕方ないけど、トイレをする時のように自然にすればいいのよ」

「うっ、くうっ」

グイグイと突き入ってくる異物の痛苦に、夫人は涙を振り絞った。激痛と共に、根本までその嘴管は菊の花弁を貫いた。そして追い打ちをかけるように、冷たい浸触が腸壁に襲いかかった。

絶望的な哀咽が流れる。注腸の悪感に苛まれて夫人は氣も狂わんばかりの煩悶を見せる。押し込まれた嘴管のおぞましさに尻朶を振り続ける。

長い時間を費やした二百CCの注入が終わった。

だが、夫人にとっては、これからが始まりであった。恥辱の瞬間が確実に襲ってくるのだ。

夫人を徹底的に打ちのめす屈辱の時が、刻々と迫ってくる。夫人は全身にゾツと悪感を走らせた。

そんな夫人の苦しみも悪魔に魂を売り渡した二人には好ましいヒップダンスなのだろう。

「うう、うっう！」

苦悶の呻きをあげ、双丘の狭間の弛張が慌ただしくなった。全身が汗でねっとりとして光ってきた。

「そろそろですね。どうします？」

「ここで出させては、皆さんに不快な思いをさせ

る。連れて行け」

「はい。さあ奥様。もう少しの我慢よ。しっかりとね」

女は鉤に結えつけていた紐を解き、夫人は、わずかに安堵の表情を示した。

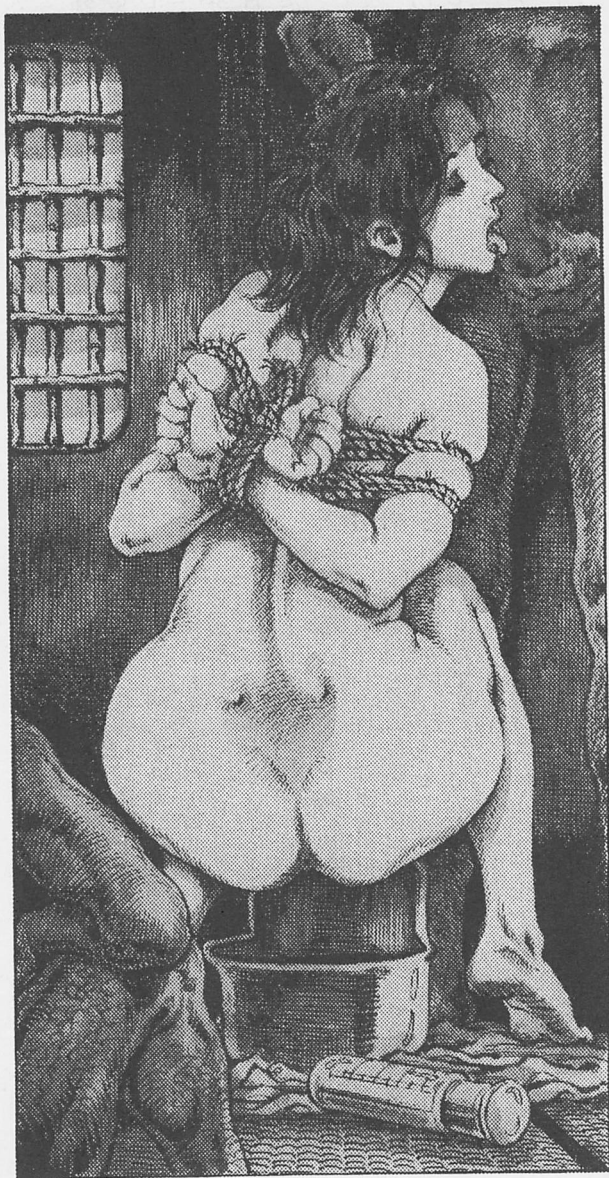
しかし、荒れ狂う暴虐の嵐はそんな生易しいものではなかった。その瞬時のやすらぎが、かえって下腹の鈍痛をより鮮烈なものに変えていた。再び尻をよじり、全身に力を入れる苦悶の闘いが始まった。

「奥様、立ってトイレに行くのよ」

首紐を引っ張って夫人を促す。

立ち上がった夫人は、尻を引き、少しでも下腹への負担を軽くしようと必死だ。最早、町田の粘っこい視線を意識する余裕すらなかった。首から引つ張られた細紐で、へつぱり腰を打擲されながら、屈辱の歩行を演じていった。

「奥様、トイレの上にしゃがむのよ。洋式トイレだけど、ちょっと変則的に使わせて頂くわ。こちらを向いて便座の上にしゃがむの。奥様の美しい所をた



んを見てあげるわ」

トイレに辿り着いた夫人は、開け放たれたドアの外に町田がいるのを驚いた表情で見つめ、そしてその意図を知り、頬を真っ赤に染めて、必死のまなざしで頭を振り続けた。

「嫌がつている余裕があるの？ 奥様。そこら辺に垂れ流しは許さないわ。そんなことになったら唇と舌でお掃除させるわよ。早く上がりなさい。膝を大きく開いて、ご主人様によく見て頂くのよ」

細紐でピシヤリと尻を打ちすえられた。

夫人の下腹は、もうゴロゴロと音をたて、荒れ狂う鈍痛がキリキリと絞りあげた。締め付けている菊門の箍も、その暴虐の前にもはや限界を越えようとしていた。

夫人は、わずかに残っていた羞恥の片鱗を遂に葬り去った。おずおずと便座の上に這い上がり、和式トイレの姿を露呈した。

「もつと膝を開くのよ」

クイクイと首紐を引っ張られた。異常な状況のた

め平衡感覚を失いかけていた夫人は、思わず前につんのめりそうになった。

余りの惨めさ、悔しさにキツと天井を睨みつけた夫人は、しかし、込み上げてくる憤りを押し殺し膝を大きく開いていく。

「いいわよ。やっておしまいなさい」

「うう！」

最早、限界は越えた。

スーッと、意識がかすんでいく中で、弛緩させた股間から、ドロドロに溶化した黄金臭が激しく迸出されていった。キリキリと嗚咽を絞り出し四つの熱い視線を痛い程感じながら、夫人は長い長い屈辱の行為を演じていく。

「どんな美人でも、お出しになるものはやはり同じね」

「うう……」

肩に顔を埋めるようにして、夫人はその弄言に噎び泣く。

「まだ終わらないの、奥様。ずいぶんと長いね」

夫人の屈辱をこれでもかこれでもかと絞り出し、女は冷やかにせせら笑う。

「後始末をして部屋に連れてこい。私は先に帰っている」

「はい、かしこまりました。……さあつ、奥様。後始末をしてあげるわ。奥様はこれから綺麗になったことでご主人様をお受けするのよ。どう……？」

夫人の眼には、驚きとおぞましさの錯綜した拒絶の色が流れた。

「嫌でももうだめよ。逃れられないの。でも満更悪いものでもないわよ。最初は辛いかも知れないけど、その悦びが分かれば、こっちの方がずっと感じられるわ。そんなに忌み嫌うものでもないわよ」

女は、トイレットペーパーで何度も何度も夫人の汚れを拭き清め、最後にアルコールを含ませた脱脂綿で仕上げをした。

「ご主人様のものは立派よ。最初にしては大き過ぎるかも知れないから、ワセリンをたっぷり塗っといてあげるわ。おとなしくしているのよ」

女は柵から取ったワセリンを、今拭き清めた夫人の菊門に塗りこめていった。

果てなき魔宴

「いよいよでつか。町田はん」

ひとり帰ってきた町田に、山鳥は楽しそうに声をかけた。

彼の胡座の上には、幼ない裸身を剥き出された女学生が横向きにかかえられ、すすり泣く顔を山鳥の胸に埋めるようにしていた。

山鳥も全裸であった。初めて男に肌を密着させた女学生は、もう山鳥の言いなりであった。抵抗する気力などあろう筈もない。山鳥の命ずるままに、左腕は彼の首に回し、右手は自分の太腿の横でいきり立つ醜悪さに添わせていた。

山鳥は、女学生の、恐れおののく指の動きに陶然としている。

その横では、仰臥した剣持の上で、OLが女上位

SMマニアは毎月21日、全国書店で一斉発売です

の姿を淫らにくねらせていた。縛り上げられた胸の円みを剣持の胸に擦りつけ、結合を遂げているあたりは、前後左右に卑猥にくねらせていた。

首紐でうしろから促され、屈辱の奉仕を強いられる、その準備を整えてきた人妻が部屋の中に入ってきた。

町田も全て衣服は剥ぎとっていた。

夫人は、その部屋の中で演じられている男女の痴宴に、思わず眼を背けた。そして、町田の前に引きすえられ、全裸の男の猛々しさを眼のあたりにして、もう膝の力が抜けてしまったように、ヘナヘナとその場に座り込んでしまった。

いまわしい不浄の個所で男を受け入れるべく引導を渡されてきた夫人であったが、その場の余りの淫らさに、衝き上げるようなおぞましさに苛まれる。

「さっ、奥様。ご主人様がお待ちかねよ。膝を開いてお尻を突き出すのよ」

ワセリンを必要以上に塗りたくられ、ぬめぬめ脂ぎった尻を町田の前に突き出して、夫人は膝を着い

た。

「よし、来い！」

バシッと、その尻朶を大きな平手でしばきあげ、町田は夫人の尻を自分に迎え入れるべく決断を促すのだった。

「うう……」

あえかな嗚咽は止めようもなく、夫人は、女の介添えに身を任せていった。

突き出した尻のあわりに、異和感をおぼえた。

「ううつ、む、無理よ。とてもむりよ許して、こわいわ」

必死に哀願するまなざしも、女の冷笑に黙殺され、腰を摑んだ町田の手は非情な力で圧力を加えてきた。

「ううつ、くう！ いやっ！」

夫人の尻が悶え狂った。しかし、肩は女に抑えられ、腰をがつしりと町田の両手で摑まれていては、どんな足掻きも無駄であろう。ググツと裂かれるような痛辱の中で、町田が邪悪な思いを遂げようとし

ている。

「グウ! 酷い!」

きわめてゆるやかに、ワセリンの助けを借りた町田が体腔を犯していく。内壁を圧迫される刺激に、夫人は吐気すら覚えた。

猿轡を外された所でもはや声を出す気力もないのだろう。ズブツと落ち込んでいく尻の動きにつれて、町田はさらに奥深く侵入する。

「お嬢ちゃん、いよいよ大詰めやで、二人のお姉さんらを見て、男と女とはこんなもんやて分ったやろ。学校では教えてくれんええ勉強をしたんやで、あんたは。卒論にでもしたらどうや」

体を揺すって高笑いする山鳥の胡座の中で、蛇に睨まれた小鳥さながら顫えおののく女学生の可憐さが、痛い程山鳥の心を打った。

「お嬢ちゃんのこども、もう充分やから、いつでもわしを受け入れんのやけど、どないして記念すべき処女喪失を演出したるかと思うて、頭を痛めてるんや。まあ優しいにやつたるから、恐がらんでもええで……」

彼女の肩先を優しく叩きながら、山鳥は、わくわくする気持を抑えかねていた。最初の経験を素晴らしい愉悅の中で迎えさせてやるつもりなのだ。それがせてもの彼の思いやりでもある。



ValentineCall
（電話と映像のブランド「ValentineCall」）

1日6万秒のサービス

VC CALL

最強素人系出逢い
出逢える大人数のポータルサイト

完全無料

AV 盗撮不審で疑われる時に、ほら! 盗撮!!
盗撮無料で他人のH顔を放題!!
官能小説、無料出逢いポイント付
毎月開催! 素人参加AVコンテスト
「夢企画」AV女優とH出来る!

<http://vccall.net/3798>

一般電話の方も下記番号からご利用できます。

SM・マニア専門伝言&ツーショット

札幌	011-200-4433
仙台	022-745-7788
埼玉	048-658-7100
東京	03-5206-7100
神奈川	045-350-1700
愛知	052-788-2244
大阪	06-6135-6699
広島	082-543-6161
福岡	092-510-6666

TEL SEX専用伝言&ツーショット

全国 03-5206-7177



もれなく
諭吉が当たる!!
諭吉はコチラ

<http://web-vc.com/3798>

24時間安心サポート ☎ 0570-082000

■18歳未満の方のご利用は固くお断りいたします ■情報料
1分〜100円〜サイト1P10円 / パケット料金、通話料別途
■上記広告にはTEL交換費用、利用規約をご確認の上、ご利用下さい ■東京都新宿区新宿5-18

女学生は、すでに介添えの女の手練手管によって、充分に官能をめざめさせられていた。肉体的にその準備は出来上がっていた。ただ、精神的な嫌悪感が、せっかくの努力も水泡に帰してしまふ怖れを、山鳥は感じていた。

今の段階では、まだ心から山鳥を迎え入れるとは思えない。

山鳥は奉仕するつもりであつた。

この可憐な女学生なら、彼の全てを捧げても、悦ばせてやりたいという若々しい情熱が芽生えている。

山鳥は、そんな嗜虐の裏返しともいえる奉仕的な気持に充足を得て、女学生の身体を抱き締めた。

「さあ、学生はん。目エつぶってな、氣を楽にするんやで。すぐにええ氣持にさしたるさかいな」

山鳥は女学生を畳の上に仰臥させた。そして立てさせた膝を開いていった。

女学生は両手を顔にあて、一切の抵抗をなくしてゐる。

ふるいつきたくなくなるような可憐な肉奥のたたずまいに、山鳥はブルツと感激の顫えを呈した。そして、長い舌を突き出して、初々しい輝きに愛の奉仕を始めた。

彼女は思わずに腰をくねらせ、女の手によって一度昇り詰めた余炎を再び掻き立てられていく。

両手で顔を覆つたまま、山鳥の愛撫に身を委ね始めた。

山鳥は、すぐに新たな浸潤を察知した。その感受性の豊かさに、改めて感嘆した。余裕たつぷりに山鳥はその奉仕に専念していった。

一切の抵抗を無くし、身を委ねているだけの女学生が、今度は、積極的に身をふるわせ、心までも痺れさせて、山鳥の奉仕に応えるまで、山鳥は続けるつもりであつた。

その前兆が、荒くなってきた喘ぎにはつきりと感じられた。小鼻をふくらませ、小刻みな呼吸を喘がせて、腰の辺りをもじつかせる可憐な風情。

山鳥は頷くように笑つた顔を、更に埋めてい

く。溢れ出る浸潤は息も切らずに続く。山鳥は側で見ている女にも、舌の奉仕を促した。

女は、女学生のまだ青っぽい白桃に舌を吸いつかせていった。

敏感に感じる女体の上下を、熱い舌の滑りで同時に責め苛まれ、女学生はもはや凌辱される嫌悪感を失ないつつあった。

どろどろの肉欲の中に自分を溶け込ませ、一切の理性を葬り去った今、彼女にあるのはただその法悦、陶醉の中にのめり込み、恍惚、愉悦の真っ只中で自分の肉体を燃焼させてしまうことだけであった。

本能的な女の性が、自分の身体の中に男を求める欲情を目覚めさせ、今やそのことだけが狂おしい程に彼女の心を支配した。

それを表現する妖しいくねりが、山鳥の舌の動きに合わすように、はつきりと女学生の腰部に頭われってきた。

「フフ、お嬢ちゃん、わしを欲しがってくれるんか

いな。そないに腰の動きが言うとるけど、ほんまか？」

顔を離した山鳥は、女学生の瞳を見つめてささやきかけた。

羞ずかしげな様子は隠しようもなく真っ赤に上気させた頬で、こつくりと頷ぐ女学生に山鳥の心は痺れ、えもいわれぬ陶醉に胸が熱くうずいた。

「よっしゃ、よっしゃ。やさしいにやったるで。可愛い子やな……」

その語尾は感激にふるえ、涙声に近かった。

女学生から一旦軀を離した山鳥は、呼吸を静め、体勢を整えて、ゆつくりとやさしくふくやかな肉のあわいを侵蝕していく。それを知った女学生は、もう逃がれられない痺悦の中で、女となる崇高な儀式に身を引き緊めて、息を詰める。

山鳥との優しい交合の中に、痺れるような感覚で、女学生は破瓜の時を迎えていった。

三組の男女の愛欲図は、いつ果てるともなく続いている。



愛淫菩薩

ザパンの女臭

❖「ムムッ！」と呻き声を洩らす翠子夫人のくの字に曲げた両脚を二人の男が左右に割り広げる。紐で割られた秘苑から花蜜が溢れる



●●●●●
豊臀の淫舞
●●●●●

車は国道を外れて、すでにかなり走っている。林道に簡易舗装しただけの山道である。陽は山の端に傾いて、快い涼気が、車窓から流れていた。

道の両側に枝を広げている楓などの雑木林越しに上毛三山の一つの山肌がせまり、道は急勾配の登りになっている。道幅はかなり広いが、人通りはほとんど無くなって、ハイキング帰りの学生の一団や、地元の農夫が時々車の脇を下^{みどりこ}っていく。

「この辺りならいいだろう。翠子、身体を起こしな

花影 渉 え／榆畑雄二

さい」

ハンドルを握る夫の王思文が、バックミラーを見ながら命じた。

翠子は、後部シートに隣家の中学生の次郎と乗っている。彼女は、この日、藕^{ろうけち}纈^{けち}ぼかしの淡いピンクの附下げに、銀糸柄の袋帯を着けた、艶やかな着物姿だったが、その胸乳の上下を灰色の野太い綿ロープで後手に縛られ、白い喉に幅五センチもある犬首輪を嵌められているため、次郎の膝に上体を倒して人目を避けていた。

「はい、ご主人さま。……でも、まだ人が通りますわ」

「言われた通りにしなさい！」

強い口調で命じられて、翠子はおずおずと身体を起こし、静かに、バックシートに背をもたせ掛けた。

柔かい頬の線が、羞恥のためにうすく紅潮し、翡翠を思わせる深く澄んだ瞳の奥に、幽かに欲情の影を宿した翠子は、上品な中にも妖しい美しさを醸し

出している。

軽く内側にカールして柔かくまいている漆黒の髪。上瞼に迫つて、弓型に生え揃っている濃い眉。つんと上向いた鼻筋。オレンジ・ローズの口紅で鮮やかに濡れている唇は、物問うように軽く開かれ、よく見ると、上唇の上に薄っすらと生毛がはえている。

隣席の次郎は、そんな翠子おばさまの、艶麗な美貌に、視線を吸いつけられていた。その無遠慮とも思える執拗な視線を感じとっていたが、次郎を咎めることはせず翠子は黙って前を見ている。

翠子は、隣家の一人息子であるこの次郎を幼ない頃から可愛がってきた。三年生になって、急に大人びてきた次郎は、細面のやや憂鬱そうな表情と、すらりとした背丈をもつ美少年に成長した。

その次郎に、半年前の春先き、王と翠子は野外での夫婦プレイを窃視された。それが、きっかけで、次郎は夫婦の密戯の中に誘いこまれ、すでに何度か翠子の肉体を頒け与えられて、完全に彼女の虜にな

つていた。

翠子もまた次郎の近るような「青い性」に好意を持つようになつていたから、そんな無遠慮な視線を、許している。彼は、王と翠子夫妻にとって、恰好のペット的存在である。

夫の王は、大学で東洋史を講ずる学者だが、家庭では、翠子を愛奴として馴致し、見事なマゾ妻に育てあげていた。

美少年の次郎は、そんな夫婦の性宴に彩りを添えるスパイスであつた。

車は蛇行しながら、ゆっくり坂道を登つて行く。

「次郎君、おばさまの着物の裾を、くつろげてあげなさい」

「はい……おばさま、ご免なさい」

エナメル草履をはいた白足袋の爪先を、きちつと揃えている翠子に次郎は躊躇り寄り、着物の裾を左右にまくり上げた。さらに綾倫子の長襦袢、水色無地の縮緬湯文字と、次々に分け広げ、翠子の陶器のよう滑らかな太腿を顕わにしていく。

「あつ、次郎ちゃん、だめよ！」

後手に縛られているため、翠子は、抗うことができず、わずかに腰を引いて、次郎の手を避けようとした。翠子は、着物を着るときは一切下穿きを許されていけない、帯の下まで、湯文字を分け広げられると、いきなり襷間の叢が、露顕してしまう。

翠子は、必死で片腿を捻り、

「ねっ、次郎ちゃん、やめて！」

と小さく叫んだが、王はさらに、

「次郎君、いいから、おばさまの着物を、すつかりまくり上げて、お尻丸出しにしてやりなさい」

「ああ、いや！ ご主人さま、こんなところでそんな……」

翠子は、弱々しく身悶えた。彼女は今朝方、次郎を連れてドライブに行くことを告げられた時、こうした事態を予期してはいた。が、まさか走っている車の中で、下半身を露出させられるとは。

「次郎君、どうした。やりなさい」

「はい！」

次郎は、夫人に抱きつくように着物の裾をからげ、一気に尻から引きずり上げた。

「あつ！」

翠子の真白に肉の実った豊かな双臀が剥き出され、レースカバーのシートの上に、でんと据えられた。

「ああ、おばさま、綺麗だ！」

次郎が思わず叫び、翠子の豊腰を撫でさすった。

その、むっちりとした腰部には、黒い絹の縞り紐が、きつく巻きつけられ、臍の直下から一直線に襷間を割って喰いこみ、双臀の割れ目の上でT字型に結びつけられている。

そして三十センチほどの余った部分が、尻の線に沿って垂れ下っていた。縞り紐は、直経五ミリほどの細さだったから、翠子のクレバスに深々と埋没している。

そんな恥ずかしい下半身を剥き出しにされてしまった翠子は、諦めたように小声で、「ああ、次郎ちゃん、の意地悪！」と軽いいながら身を沈め、背凭

れに頭をのせて、薄っすらと瞼を閉じた。

釣瓶落としの秋の陽は、山陰に没し、仰向いた翠子の顔が、ほの白く浮んでいる。喉に嵌められた黒革の首輪は、光った鉾がびっしり打ちつけてある。

おどろおどろしい代物で、細面の翠子の美貌とは違和感があったが、それが却って翠子に、いかにも奴隷妻といった可憐な雰囲気を加味した。

王は、そんな翠子をバックミラーで観察しながら、車を走らせていたが、前方から中年の農夫が下ってくるのを見ると、とつぜん車をとめた。

「すみません、こけし作りの坂東さんの工房は、まだ先でしょうか」

麦藁帽子をかぶった実直そうな農夫が、「はあ……」と足を停め、車に近寄ってきた。

「坂東こけしは、もうすこし行つて右へ曲がれば、すぐじゃが……」

答えながら農夫は、ふと、車内を覗きこみ、翠子の妖異な姿態を見て、啞然として立ち竦んだ。

「こ、これは……！」

そんな、農夫の驚きをよそに、翠子は身じろぎもせず、じつと息を詰めている。農夫の視線が、素早く翠子の全身を舐め回した。

(ああ……見られている)

翠子の頬に刷いたような血がのぼり、背筋を、羞恥と快虐の戦慄が奔った。

農夫は、薄闇の中で幻覚でも見たように、ぽかんと口をあけて立ちつくしている。

車が静かに走り出し、農夫は、呆然と見送った。

やがて車は右折し、〈坂東こけし工房〉と小さな電飾看板が立っている農家の納屋のような建物の庭に滑りこんで停った。王は、小さくクラクションを鳴らし、車から降り立った。

母屋から、肩幅のがっしり張った中背の男が迎えに出た。二人は顔見知りらしい。

「先生、お待ち申し上げておりました。東京からでは、お疲れだったでしょう」

「坂東さん、遅くなりましたが、お言葉に甘えて遠慮なくお邪魔にあがりました」

「で、奥さまは？」

「連れて来ております。おい、翠子、車を降りて坂東師匠にご挨拶しなさい」

二人が立っている庭は、すでに闇に包まれ、母屋の玄関で灯っている外燈の淡い光が、小さな光輪をつくっている。

車は、その光の輪の中に停っていた。

「翠子、なにを愚図々々している！」

「はい、ご主人さま。……でも……」

「いいから、そのままの恰好で車を降りるんだ！次郎君、おばさまの尻を持ってあげなさい」

強い口調で言われて、翠子は意を決したように車を降り立ち、外燈の光の中に全身を晒して瞑目した。

「ふつつかな奴ですが、愛奴の翠子です。よろしくお願ひいたします」

「ほう！これは、聞きしにまさる美しい奥さまじや……。おう、こんなにお尻を丸出しになさって！」

坂東は、先ほどの農夫と同じ表情で、口を開けたまま、翠子の姿態を眺めている。

優雅な着物姿のまま後手に緊縛され、下半身を露わにして立ちつくす翠子。

首輪の幅が広すぎるために、俯向くこともできず、翠子はわずかに顔をそむけて、瞼をしばたたいている。

(初めての方に、こんな引き合わせ方をなさるなんて……)

翠子は、夫を恨めしく思いながらも、襷間紐の端を次郎に把られた自分の羞恥の姿を、想像して、徐々に昂つてきている。

翠子の周囲を、ゆつくり一周しながら、品定めするように、観察している、こけし作家の坂東は、顔の大半が濃い髭におおわれているため、女の性を識り尽した老人のようにも見え、また精悍な中年男のようにも見える。

「いかがですか。お眼鏡に叶いましたか？」

「素晴らしい女性じゃ。こんな艶っぽい女には、め

ったにお目にかかれるものじゃございません。品の良さも申し分ない！ 王先生、これほどのお方を、よくぞ、このようなマゾの奥さまに、ご飼育なされた！」

「ああ、よかった。師匠、あなたに、それほど気に入ってもらえるとは、翠子はしあわせ者です。ほれ、師匠に、例のご挨拶をせんか」

「ワンッ！」

先ほどの農夫に、恥ずかしい姿態を視姦されたことで、翠子の被虐の琴線は、すでに微妙に震え始めていた。そのうえ、いま、初体面の、こけし作家から、*「マゾの奥さま」*と蔑称された翠子は、全身に駆けめぐる蠢律に突き上げられて、思わず犬の凝声を声高に放っていた。

招じ入れられた坂東こけし工房は、二十坪ほどの広い板敷きで、中央に熊の毛皮が敷かれ、奥の一角に一段高い工作台があつて、その上に鉋が据えられている。

部屋の奥には、直経五十センチほどの丸木柱が立

っており、年代物らしく黒光りしている。

その柱を背にして、全裸の若い女が、縛りつけられ項垂れていた。女の足許の毛皮の上で恰幅のいいワイシャツ姿の男が、胡坐をかいて酒を飲んでゐる。王とは知り合いの県会議員の神谷であつた。

部屋の入り口で、立ちつくす王らに向つて、神谷は、

「王先生、お先にお邪魔してますよ。さあ、どうぞ、こちらへ……」

と、酔いに染つた磊落な笑顔でいった。

議会で、建設委員長を勤める神谷は、本業は土建会社の社長だが、坂東工房のスポンサーでもあつた。肩書きと女には、目がないと言われる彼は、クラブのホステスや芸者を次々に囲い、嗜虐趣味を發揮している。今、全裸で縛られている女も、神谷が最近手に入れて飼育している緋奈翠子であつた。

王は三年前、都心の一流百貨店で開催された「坂東工房創作こけし展」の会場で、神谷に紹介された。その時、同伴していた翠子に、神谷が異常な執

心を示した。

美人妻の翠子に、他人が常軌を逸した興味を持つことは、愉快なことではなかつた。しかし、神谷が無遠慮な視線を翠子の全身に這わせ

「これは、美形だ……。王先生、ぜひ、お願いしたい。奥様に、坂東君の作品のモデルになってくださるよう説得してくださいませんか」

と、いったとき、王の心に一つの計画が浮かんたのである。

坂東の作るこけしは、柔らかに艶冶なラインで、不思議な色気を発する作品が多かつた。

王は以前から、その作品に興味を持ち、買い集めて観賞しているうちに、坂東の「裏芸」の噂を聞いた。

坂東は、彫刻の才能にも秀で、木彫りの裸像を数多く作っているという。しかもその作品は、すべて女性の緊縛姿ばかりという噂だつた。

王は翠子の緊縛裸像を、坂東に彫らせようとしている。その段取りを、神谷がとってくれた。

王は、田舎政治家の神谷に、どうしても好意を持たなかったが、デパートで、ひと目、翠子を見ただけで、彼女のマゾ性とその肉体に秘められた美質を見抜いた眼力には、秘かに舌を巻いた。

この妖美な翠子の緊縛裸体を木彫にして残したい、という願望で王と神谷は共鳴した。

媚肉の昂ぶり

襷間に喰いこんだ細紐の端を次郎にとられながら、部屋の中央に進んだ翠子は、紅潮した顔を横に捻って立ちつくした。

「奥さん、こんな姿のあなたに、お逢いできる時を永いこと、待っていました。デパートの展覧会場で、紹介されて以来、あなたのことを夢にまで見たくらいです。やっぱり奥さんは、僕の思った通り、縄のよく似合うお方だ。で、こちらの坊やは、奥さんが可愛がっているとかいう次郎君かね？」

神谷は、酔いで赤く濁った目で、無遠慮に翠子の

全身を睨め回し、下腹部の繁みを、じつと凝視した。

翠子の秘苑は、股紐を固く啜え、すでに果蜜を溢れさせるばかりに充血している。突出した花芽が、ズンズンと疼き、纖毛を押し分けるように、大きく勃起している。

その部分を、神谷のような男に熟視されると、翠子は急激に昂っていく心奥の変化まで読みとられるようで、薄っすらと汗をかいだ。

「ああ、神谷さま、お許しになって！ 翠子のそこばかりご覧になるのは……」

「いや驚いた！ 奥さん、あなたはずいぶん毛深いんですね。それに、見事なハート型だ！ こんな形をしている女性もいるんですねあ！」

神谷は、感にたえないような声を放った。

「ほう」と、坂東も、しげしげと覗きこむ。

「なるほど、黒々と立派ですな。緋奈子のは、短く刈り取ったあと、一本一本毛抜きで抜いてしまったんだが、こうして見比べると、のっぺりしていて面



白くない。やはり、ここの黒鬚は、女体の重要なアクセントなんですなあ」

二人のやりとりを聞いていた王が、

「翠子、いまからお前の裸像を坂東師匠に彫ってもらうのだ。さあ、着物を脱いで、素っ裸を、じっくり検分していただきなさい」

翠子は、はっとしたように頬を染め、

「まあ！ ご主人さま。こんなに大勢の殿方の前で、素裸になれと仰言るの。いや！ 許して……」

「はは……。肝心なところを、こうして丸出しにしているながら、今さらなにを」

「でも……」

口籠りながら翠子は、嫋々^{じょうじょう}と身をよじった。

翠子は、家庭にあつては、ほとんど連日、全裸に縄目の衣裳だけで暮している。夫の目に身体に限々まで晒し、立居ふるまいにも羞恥をにじませて、その欲求には、たちどころに応えるマゾ性が身についている。

しかしそれは、十年間にわたって愛を育ててきた

夫にだからこそできること。高い教養と美貌に恵まれた翠子は本来、誇り高い女であった。

王は、哀しそうな翠子の眼差しから、そうした抗議を悟ったが、

「私がいいと言っているのだ。みなさんに、素裸を見てもらいなさい！」

「は、はい」

翠子は、それ以上抗わなかった。薄っすらと瞼を閉じて、優しい声音で言った。

「次郎ちゃん、お願い。おばさまの縄を解いて……そして、お着物を脱がせて頂戴」

「……でも、おばさま。本当に、いいんだね？」

翠子は、瞑目したまま、微かに頷いた。

次郎が、胸乳を括った綿ロープを解き放ち、両手が自由になると、翠子はふっと吐息を漏らし、乳房を揉むように胸もとで組み合わせる。

帯メを解かれ、銀糸柄の重たい袋帯が、どさっと足元に落下した。纈ばかりの着物の裾が、はらりと豊満な臀を滑り落ち、博多人形のような立ち姿の周

囲に、裾広がりにうねる。

次郎は息を詰めて頬をふくらませ、気ぜわしく伊達メを解き、純白の綾綸子の長襦袢を広げていく。次々にほどこされる腰紐が、しゅつと軋むような絹擦れの音をたて、周囲をとりまく男たちの前に、何条も投げ出され、とぐろを巻いた。

着物が、長襦袢もろとも、ハラリと脱げ落ち、この日翠子が使っているマダム・ロシヤスの淡い香水のかおりが、男たちの鼻孔をくすぐった。

「うむ、たまらん！ 和服を脱がされる美女の風情は、恐らく世界一色つばいものでしょうな」

神谷が呻くようにいった。坂東も、

「まったくですなあ。まるで蛹の殻を剥くように一枚一枚脱がされていく奥さんの表情が、何ともエロチックだ！」

肌襦袢と水色湯文字の前を固く押えて、翠子は羞恥に紅潮した顔を、懸命に捻じつて、男たちの視線に耐えている。

背後から次郎が、そつと肌襦袢を脱がせた。

「あつ……」

翠子は思わず声をあげ、豊かな乳房を両腕で覆った。

滑らかな背中から肩へかけての肉の丸みが、螢光灯の光を撥ねかえして白く輝き、男たちの目を射る。仄かに立ち昇る女体の温もりは、神谷の劣情を、激しくそそった。思わず彼は、たった一枚残された湯文字に、手をかけようとした。

「はっ！」

と翠子は、豊腰をくねらせ、その魔手を避けて臍な腫で、優しく神谷を睨んだ。

たまりかねたように次郎が、

「おじさま、もうこの辺で許してあげて……おぼさまが可哀相だ！」

「ああ、次郎ちゃん、あなたは、優しい子ね……でも……でも、仕方がないのよ。ご主人さまが、望んでらっしゃるんだから……」

言いながら翠子は、激しく顔を後ろに振り向け、次郎の唇を求めた。

「……ムム。さあ、お湯文字も、最後の一枚も脱がせて！」

背後から、翠子おばさまの掌に余る重い乳房を抱きしめ、夢中で口を吸っている次郎が、無意識のうちに、湯文字を解き落とした。

「……！」

ついに全裸に剥かれた翠子は、羞恥の源泉を少しでも隠そうとするように、左肢を軽く曲げ、両腕を挙げて背後の次郎を固くかき抱いた。露わになった濃密な脇毛が、フルフルと震え、白く伸ばされた喉の皮膚が、翠子の昂ぶりを示すように、ひくつと痙攣した。

●●● 歯を持つ宝具 ●●●

大人への一步を踏みだしたばかりの可憐な少年を、背後に抱きしめ、全裸で男たちの輪の中に佇立する翠子夫人。その裸像は、結婚いらい十年余にわたって、夫に馴致、矯正され、完璧なプロポーショ

ンと、さまざまな奴隷妻としての特性を具えている。

両腕を高々と挙げ、仰向くように睫毛を閉じているその顔は、ほっそりと面長だが、濃い自然の眉毛が長く裾を引き、ラベンダー・ブルーのアイシャドウに縁どられた双眸は、深い二重瞼で、霞むように潤んでいる。

オレンジ・ローズの口紅で淡く光る唇は、見る者に微笑みかけるような優しさを漂わせる。アーモンドに似た形のいい鼻孔。その鼻中には、小さな穴が穿たれている。

いつでも金のリングを、ぶら下げられるようになっていいる。肉の厚いすき透るような耳朶には、この日、0・7カラットのダイヤのピアス・リングが刺さっていた。

そして、翠子の首に、ぴっちりとはめられている猛犬用の牛革首輪。この首輪は、王が香港のペット・シヨップで特別に作らせたもので、今では、彼女の身体の一部のように、しつくりと馴染んでいた。

翠子の乳房は、結婚当初から、ふつくと豊かだった。王はそれでも満足せず、古来、秘かに知られるジャワ島の豊胸薬草のエキスを注射した。そのためか、子供のいない翠子の乳房でも、見事な釣鐘型を保ち、メロンのようにずしりと重く熟れている。

乳頭は、好き者の間で珍重される「盲乳」であった。乳首が、普段は、盛り上った乳暈の中に隠れているが、刺激を受けると野苺さながらの紅い頭が突出してくる。

縦長の臍は、小指の頭ほどの宝石が、すっぽり陥入する凹みをみせ、括れた蜂腰からいきなり盛り上がる双臀が、丸々と脂肪をのせて、ヴィーナス像のように張っている。その腰回りにも、翠子はパラフィンを注入され、細腰だった娘時代からは想像もつかないほど、肉感的な肉置きに変貌していた。

「お、おばさま……」

長い接吻から、ようやく唇を離れた次郎が抑制を知らぬ思春期の少年特有の、せつついた声音で呻き、

前へ回って乳房から脇窩へと激しく唇を這わせた。

「次郎ちゃん、だめ！……みなさまの前でそんな……」

翠子は、口籠りながらも優しく少年を抱擁し、少し腰を引いた。

縦一文字に細紐の食いこむ美臀が、坂東の目の前に突き出され、深く窪む二つの尻えくぼが、ぴくぴくと慄えている。

「……ねっ、次郎ちゃん。おばさまは、これから、お師匠さんの前で、ポーズをとらなければいけないの。おばさまの全身に、うんと綺麗に化粧してください……」

「でも……僕もう……」

次郎はすでに、猛りに猛っていた。

間近で見守る王は、少年の没我の興奮ぶりを、やや当惑しながらも、好ましいものと思った。

上流志向の強い翠子は、夫の前でも全身を華麗に飾り立てられないと、「愛奴の舞い」を演じること躊躇する。完璧な曲線をもつ裸身を、さらに豪華

に裝飾され、千一夜の舞姫さながらに化身して初めて彼女は、令夫人の備えを忘れて、赤光を発する。

——それは、美貌の翠子が、その誇りと矜持をかなぐり捨て、マゾの牝犬に昇華するための儀式であり、それによつてのみ、自己陶醉できる強烈なナルシズムの発露でもあった。

そうした性癖を持つ翠子に、純真な次郎が前後なく溺れ、煽られて猛りたつのは当然だ、と王は思う。

その王の思考を見透したように、神谷が言った。

「次郎君、翠子おばさまを存分に愛してあげたまえ。おばさまの化粧は、緋奈子にさせよう」

立ち上がつて神谷は、丸木柱から緋奈子を解き放ち、彼女の方に引きずつてきた。

白裸の女は、麻酔剤でも嗅がされているらしく、朦朧とした面持で、翠子の足もとに膝をつき、呆けたように、その立ち姿を見上げた。

「ほれ、緋奈子、しっかりせんか……おやおや、こいつは、芋茎こけしを、あそこに啞えさせられ、長

い間放置されたので、気が変になつていゝんですわ」

言いながら神谷は、緋奈子の襷間に手をさし入れ、白くふやけた巨大なズイキを、ぬるりと引き抜いた。笠の直径が六、七センチもある淫猥な責め具で、ねっとりした樹液にまみれ、湯気を立てている。その張形を引き抜かれた瞬間、緋奈子は腰がくだけたように、どきりと熊皮の上に仰向けに倒れ、

「あう……あうん……」

と幼児のような舌足らずの呻き声をあげた。大きく開かれた両足の付け根で、無毛のクレバスが赤々と爆ぜ、荒い呼吸につれて、ぱくぱくと喘いでいる。そこは、巨大な充填物を長時間埋めこまれていたため、筋肉が伸びきつたに違いない。

「まあ、なんてことを……」

翠子は、足下に展開された、同性の羞恥絵図に、思わず顔をそむけ、身をすくませた。

神谷はかまわず、その濡れた責め具を翠子の鼻先に突きつける。

「さあ、奥さん、あなたも、これを腹に収めるんだ。そして悶えぬく表情を坂東師匠に彫ってもらうんだよ」

「やめて！ おばさまにそんなひどいことをするのは、やめてください！」

「次郎君、そんな悲しそうな顔をしなさんな。それは王先生も、ご承知のことなんだよ」

「本当ですか、おじさま！ おばさまにこんなものを……」

王は、哀しそうな目差しで翠子を見上げ、幽かに頷いた。

「嗚乎、ご主人さま！ あなた、本当に翠子にもこれを受入れると仰言るの！」

「これを啜えて昇りつめる絶頂の表情を、坂東師匠に見てもらわなければ、本当にいい作品は彫れんんじゃないよ」

「ああ、ご主人さま。あなたって方は……」

翠子は、瞬時、泣きそうな目で見詰め、やがて、諦らめたように、ほつれ毛をさつと振って前を向

き、呟き声で言った。

「いいわ。次郎ちゃん、おばさまのお腹にそれを含ませて……」

翠子は、静かに熊皮の上に身を横たえていった。

「奥さん！ いいお覚悟じゃ。僕も精いっぱい、良い下絵をとって、あなたの最高の彫り姿を仕上げますぞ！」

坂東が昂った声で言いながら立ち上がり、部屋の隅から、粗い麻ロープの束を持つてくると、

「縛らせてもらいますよ」

長々と伸した両腕を、頭の上で固く括り、首輪を通した二重縄で、大きな乳房を絞るように横8の字に縛り上げていく。

翠子は、濃い睫毛をとじ合わせたまま、協力するように身体を浮かせていたが、ふと、傍らにうずくまる次郎にほほ笑みかけ、

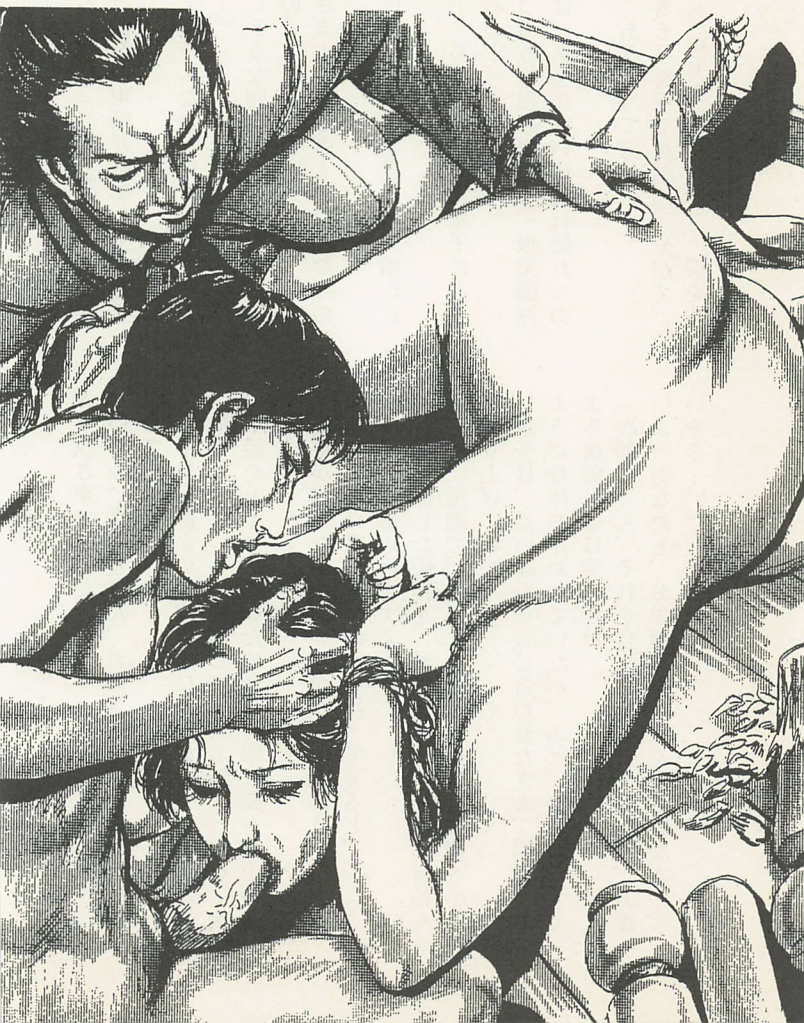
「次郎ちゃん、それを含ませる前に……ねえ、お願いよ。あなたも、お洋服を脱いでくださらなきゃ、いや……」

「はい！」

次郎は、翠子の綺麗に揃った腋毛に口づけしながら、気ぜわしく、着ているものすべてを脱ぎ捨てていく。やがて、露出した次郎の若々しい屹立が、鵲鴿きぎの尾のように躍動しているのに瞳を当てた翠子は、さっと黒髪をなびかせて口唇に迎え入れた。

「あうっ、おばさま！」

次郎が天を仰ぐように身を揉んだが、翠子の熱い唇はそれ



をしつかり啞え、蠕進する芋虫みたいに、奥へ奥へと食み入れていく……。次郎は、たまりかねて、その両頬に掌を当て、我身を煩張る翠子おばさまの一寸の寵った貌を、激しく愛撫した。

「ほれ、奥さんは、このように身を投げ出して受入れようとなさつて。緋奈子、お前が奥さんの望む化粧をしてやるんだ！」

神谷に促されて緋奈子は、ゆらゆらと身体を起こし、王の差し出すハンドバックから化粧ポーチを取り出した。ようやく感覚が戻ってきた感じの彼女は、仰臥する翠子の脇に、にじり寄り、

「まあ、なんてお綺麗な方……」

改めて、その全身を見廻しながら、紅筆をとり出し、麻縄に絞られて、ビュンと突出した桜桃に赤々とルージュを塗っていく。

「ムムッ！」と、くぐもった啞き声を漏らす翠子。

その、くの字に曲げられた両肢を、王と神谷が抱えるように左右に引き展げる。絹の細紐で真一文字に断ち割られた翠子の秘苑は、肉襞から滲み出る花

蜜で、裾細りの纖毛を、しとどに濡らし、妖しく光っている。

●●●●● 花芽とリング ●●●●●

緋奈子は、その叢に顔を触れんばかりにかがみ、亀裂にまつわり着く和毛を、指で掻き分け、恥かしそうに小首をもたげている花芽を摘んで、そつと揉んだ。

ぴくんと躍るように痙攣する翠子の下肢。

「まあ、敏感だわ」

緋奈子は、その肉芽とラビアにも、柔かく紅筆を当て、オレンジ・ローズに塗り上げていく。

「そこに、リングを……ねえ、お願い、翠子の花芽にリングをつけて……」

次郎の屹立を甘噛みしながら、ふと翠子が訴えた。

「あら？ 見て！ こんな敏感なところにピアス・ホールが穿つてあるわ。この奥さまは、リング夫人

なのね」

「化粧ポーチの中に、小さな宝石箱がありますわ。

そこに金の刺環リングが……」

「まあ、こんな大きなリング！」

緋奈子は、真赤に充血した花の芽を軽くくすぐった。と花芽は、見る見る大きく脹れあがり、リング・ホールが、ぼつかりと口を広げる。すつと金の針が刺しこまれた。

「綺麗だわね！」

「うむ、きれいだ！ 王先生、あんたは、なんという素晴らしい愛奴をお持ちなんだ！」

覗きこんでいた神谷が、羨むように言う。

緋奈子は、さらに襷間紐をずらし、菊の蕾も覗きこむ。ひくひくと蠢めく灰紅い魔肚。

「ねえ、奥さま、ここには、どんなお化粧をすればいいの？」

「そこは……嗚乎、恥ずかしい……」

翠子は、全身に紅を奔らせ、必死の口調で、

「そこには……愛奴のお尻の穴には、長い金鎖の下

った鈴を……。ご主人さまは、それを含ませるのがお好みですわ！」

直径二センチの金鈴は、王が持っている。

「これです」

その肛門鈴は、内包が二層になっており、翠子の直腸に、すっぱり収まって、コロ、コロと微かな音色を響かせた。そして、ぴつちり窄まった渦の中心から、二十センチほどの細い金鎖が、肉体から生えた蔓茎のように垂れ下がり、きらきらと煌めいて揺れた。

「……金のリングに金の鎖！ まあ、なんて贅沢なんでしょう」

緋奈子が、羨ましそうに叫ぶ。

「ねえ、緋奈子さん、翠子のお尻に、アプリコット色の口紅を塗って……そして、お臍に翡翠の原石を埋めこんでくだらない」

華麗な、まばゆいほどの性装の愛奴ができ上った。自分から望んで、身体のみずみずまでアラビアのダンサーのように飾り立てた翠子は、

「ああ、ありがとう緋奈子さん。愛奴は……愛奴は綺麗？」

「ええ、眩しいくらいにお綺麗よ！」

「うれしい！これから、皆さんのオモチャになるのね。……い、いいわ、緋奈子さん、あなたが含んでいらしたモノを頂きますッ！……入れて！」

満座を魅了する甘い吐息を漏らし、翠子は、ぐつと豊満な双臀をせり上げた。

「お、お奥さま、こないやらしい物を貴女まで……ああ、可哀相だわ……」

緋奈子が、神谷から手渡された張形を、ぐいと突き立てようとしたとき、次郎が、

「あつ、それは、ぼくがやります！」

「嬉しい！次郎ちゃん、ありがとう、同性の緋奈子さんに醜い姿を晒すのは、恥ずかしいの……」

次郎の溢泌させた粘液で、妖しく濡れる唇を、半開きにしたまま翠子は、激しく豊胸を上下させ、次郎の矛先を待ち受ける。

次郎は、その胸乳から、宝石を埋めた臍の周辺、

さらには、下腹部の翳りにまで口づけの雨を降らせ、徐々に秘門へと顔を近づけていく。そこは、すでに間歇泉と化して、熱い秘湯を、無限とも思われる量で噴出している。

そのためだけに、じつと目を凝らした次郎は、深く食いこむ股紐を、そつと引き分け、ぽっかり口を開ける肉の谷間に、巨大な随喜の笠を押し当てた。

「さあ、おばさま、吸いこんで！ぐつと吸いこんで！」

はつと軀を縮める翠子。すかさず、緋奈子が、

「だめ！身体を固くしちゃダメよッ」

と、乳房を優しく揉みしだく。

「あウッ……ムムッ」

瞬時、息を詰め、渾身の力をこめて翠子は、菊蕾を締めあげ、下腹を無残なほど膨らませた。その吸気を一気に上腹部に吸い上げる。

「ヒッ！」

醜怪な淫具は、自ら力を得たように蠢き、ずぶずぶと狭間に没入していく。

「おおッ！」

「凄い！」

火柱と化した翠子は、なおも吸引の努力を止めない。巨大な笠を呑みこんだ余韻で、翠子の裸体は、毛穴から血を吹かんばかりに、熱く滾^な滾^なっている。そして一呼吸ごとに、長大なズイキ柱を噛み啞え、自らの秘貝の奥へ奥へと誘い入れていく。

その腰部の律動に伴って、翠子の菊門に生えた金鎖が、きらきらと揺れ、内肛では、明瞭な鈴の音が、コロコロと鳴り続けた。

「なんという逸品だ！ 王先生、もしかしたら奥さんのアレは、幻の名器といわれるへ齒を持つ姫貝ではないだろうか？」

神谷が、痴呆めいた顔で言う。

「ほう、そんな名器があるんですか？」

「いや、僕も話に聞いただけで、そんなのが、ほんとうにあるのかどうか……見たわけじゃありませんが……いや、これこそ齒のある姫貝だ！ そうに違いありませんよ」

「まさか……妻がそんな名器の持ち主だなんて……でも時々あるんですよ。喰い千切られそうに締めつけてくるときが」

「ほう！」

「たまに、これが激しく燃えあがったときだけです……」

「それだ！ 奥さんは、やはり齒のある姫貝の持ち主なんだ！」

この会話は、虚ろに瞳を遊ばせている翠子の耳にもはいつてくる。

「まあ、恥ずかしいわ。あたしが、そんな下品な身体を持ち主だなんて……」

「いや、翠子、儂にもなんだか解らなくなってきたが……もしかしたらお前は、百万人に一人の構造なのかも知れん」

「いやッ、いや！ 翠子って本性は卑しい女なの？……でも、ご主人さま、そんな風になすつたのは貴方ですわ」

「おお、いいとも。卑しい女で結構。さあ、もつ

と、もつと燃えあがるんだ」

「おばさまは、卑しい女なんかじゃない。おばさまは愛情が少し深すぎるだけなんだ」

「ありがとう、次郎ちゃん。あなた、いつも優しい。……でも、おばさまは本当は、どうしようもないほど業の深い女みたい。ご主人さまに飼育されて……おばさまは、どんどん造り変えられていくんだわ……」

翠子は、ふと哀婉な表情を漂わせ、濃密な腋毛の中に顔を隠そうとするように横を向いた。

「その表情だ!」

坂東が駆けより、近々と覗きこんで、下絵に筆を走らせる。

「あッ、いやあ! ご覧にならないで!」

思わず翠子は、睨り上げた。

拳腕縛りの頭わなポーズで、うねり舞う翠子の白裸を、坂東が、次々と下絵に写していく。必死に顔をそむけ、羞恥の表情を見られまいとするが、彼は真上から、横から、また下肢の間からと自在に跳び

土方の公園で

私は現在、20歳の女子大生です。これは小学生の時の体験です。近所の公園で恰幅の良いおじさんが近づいて来て、

「おじさんのここ、ちよつと舐めてくれないかな? 舐めてくれればお

小遣いをあげるよ」

と、ズボンの前から赤黒い肉棒を出しました。

早熟の私は、それが何かは知っていましたがお小遣い欲しさに舐めたのです。

「ハンカチで手も縛らせてくれたらもつとあげるよ」

と言われ承諾すると、

おじさんは私の顔を見ながら射精したようでした。

その日の夜、興奮した私は初めてオナニーをしたのです。そのときのトラウマなのか、いまでは年配の恰幅よい男性としかつき合えません。しかも、手を縛られないと、セックスの時に燃えないのです。

(岐阜・さおり)

読者調教秘話



回つて、翠子の羞恥に満ちた表情ばかりを狙つて、的確に面布に固定していく。

翠子は、そんな彫刻家の目が、心底恐いと思つた。

●●●●● 姫具の惨歌 ●●●●●

翠子の恥じ入る一コマ一コマには、これまで他人に晒したことのない、感性の傾斜や、隠された性癖が、あからさまに投影される。

翠子は、異性に鼻孔を覗かれると、身震いするほど恥ずかしい。項の生え際、脹脛の上部なども、そうであつた。それらは翠子の秘められた性感帯である。耳朶などは特に敏感であつた。

その、彼女自身すらほとんど知らない性感帯を坂東は、次々にあばき、狼狽するその反応で、見守る神谷たちにまで露呈してしまう。

そのうえ、翠子の一番^{おそ}虞れていた事態が、近づきつつあつた。秘門に差し込まれたズイキ棒が、しだ

いにその魔力を発揮しだした。

秘肉はすでに、灼けるように疼いている。滲み出る果蜜と葛湯みたいな粘液が混ざり合い、沸き立ち、感度の高い粘膜を刺激して、翠子の理性を狂わせ始める。

「ムム……ムツ……か、痒いッ」

王と神谷に抱きとられた太股が、小刻みに慄え出す。巨竿をしつかり啜えた陰唇は、めくれ上つて、とろけそうに充血し、熟れた無花果^{いちじく}のように粟立っている。

「あッ、うんム……」

「ひッ、かゆい……か、痒いわ。次郎ちゃん、お願い！ 助けて」

翠子は、必死に半身を起こそうとする。

呆然として術を知らない次郎に代り、緋奈子が、「奥さま、しっかり！」

と、抱き起こしてやるが、翠子は、頭上に挙げた腕で空を掻き、すでに悩乱し始めている。

「ひーッ、あう、あう……」

全身に戦慄が走り、翠子は、白目を剥いて自分の
 襷間を覗きこみ、

「あッあッ、あなた、ご主人さま、愛奴を助けて！

……痒いの」

「どこが痒い？」

「愛奴の……愛奴の……」

「どこだ！」

「愛奴のオ……オ×ンコよ」

「どんなオ×ンコなの、言ってごらん」

「愛奴のオ×ンコは歯のある姫貝……何もかも噛んで
 しまう歯のあるオ×ンコよ、ご主人さま！」

「そうじゃ。愛奴のこれは、世界一のオ×ンコだ
 ぞ！」

・ 蹴られ、焦らされ、翠子は、自分の発する痴語に
 酔って、ガクン、ガクンと頷いている。

「嬉しい！ 愛奴……い、いきますッ」

「おばさまあッ！」

次郎が翠子の襷間にがばつと被いかぶさり、リン
 グ付きの肉芽と、ずいきを抱き締める陰唇を、音を

たてて吸った。

「ン……ムムッ」

翠子は、激しく首を振り、緋奈子の唇に、武者振
 り着いて、絶息した。

ぶるん、ぶるんと慄え続ける下腹部で、鈴の音
 が、淫靡に鳴り続ける。

やがて、どきりと上体を倒した翠子は、口から泡
 を吹きながらも、譫言のように可憐な言葉を吐き続
 ける。

「……ご覧になって……ご主人さま、次郎ちゃん、
 神谷さま……奥のハラワタまでご存分に」

坂東の手練の絵筆が、その表情を、刻明に写しと
 っていく。

気がついた翠子は、揺籃ゆりかごに乗せられているのかと
 思った。

実際は、坂東が作った「晒し車」に乗せられてい
 た。マゾ妻から人間性の最後の一片まで剥ぎとって
 しまう淫猥な運搬車である。

一メートル四方の台座（高さは五十センチほど）に、角柱が立てられ、それに寄りかかって、翠子は尻餅をつかされた恰好になっている。そして両手首を、頭上で縛られていた。

両肢は、内股がひきつるほど横一文字に広げられて、膝と足首を、支点とした縄で、手首の位置に繋ぎ留められている。乳房はいぜん、横8の字に絞り出されたまま、首輪に通され、柱に固定されている。また、丸い額にも二列の麻が巻きつき、頭を柱

に押しつけて縛られていた。

さらに、黒い獣皮のアイ・マスクで目隠しまでされている。翠子を狂乱に追いやった責具と股紐は、はずされていた。

翠子は、大股開きで、でんと尻を着き、秘壺をこれ見よがしに突き出した恰好のまま、「三点吊り」されているのであった。雪囲いの縄を、何条も張られて枝を支えている立ち木のようなポーズである。

台座にはキャスターが着いていて、ちよつと押せば翠子の剥き身を、好きな方向へ運んでいく。翠子は懸命に腰を揉んだ。わずかに動かせるのは、そこだけであつた。

と、肛腔の奥で微かに鈴が鳴る。

翠子の杏色にルージュされた菊座からは、いぜんとして金の鎖がたれ下





っていた。

「翠子」

近くで王の声がした。

「神谷さんのアイデアで
な。お前に、もうひとつふ
んばりして貰うことにな
った。お前だけじゃなく
て緋奈子さんも、同じ恰
好にされている」

「まあ、緋奈子さんも

……」

翠子は安心した声を出
したが、王は嘘をついて
いた。

緋奈子は、いま、後手
に縛られたまま、熊皮の
上に寝そべる神谷に、懸
命に口舌奉仕を強いられ
ている。

翠子が、ズイキの責具で、悶絶したとき、その濃厚な色気に、魂を奪われた神谷は、

「うむ、たまらん。王先生、奥さんの齒のある姫貝を、僕にも、おすそ分けしてください！」

と厚かましい要求をした。しかし、王は許さなかった。

神谷は、女体を酷薄に扱うばかりで、マゾ性の強いほとんどの女性が濃厚に持っている、責め手への愛に裏うちされた信頼感をまったく理解していない。

自分の性癖に押し流されるだけの男である。

不満を顕にして神谷の代案が、ロシアン・ルーレットに似たプレイである。

翠子が、いまからその生贄にされようとしている。

「ワンッ」

翠子は、夫への訣別を一声告げ、ゴロゴロと不規則な回転をしながら、部屋の中央へ載せられて行った。

●●●●● サフランの女臭 ●●●●●

目隠しをされた翠子は、自分がいま、どっちへ転っているのか、見当もつかない。

極限まで広げられて、想像するだに目の眩むようなポーズをとらされていることだけは、解っているが……。

「……次郎ちゃん？ ……次郎ちゃん、嗚乎、誰かそばにいるのなら、応えて！」

翠子は、想像力を働かせるしかない。

「ふッ」

と、身近で、動物の鼻息のような気配がした。

「はっ！ いやあ、犬なんかいや」

「ふふ……。奥さんには獣姦願望があるのかな。そんな可愛いモノじゃないですよ。ほら！」

神谷の声だ。内股に、ぬるっと冷たいものが触れた。

「あつ、ウ、ウナギッ！ やめてエ！」

「はは……。さあ、太いウナギを啞えさせてあげましょう」

熱しきつた秘門に、男たちが顔を近づける気配を感じて翠子は、

「ひッ……」

と腰を引いた。ぎつしり身にまとわりついた麻縄が、ギシギシと軋む。

（あの、おぞましいウナギの頭部が、胎内に、ぬめりこんで来る）

翠子はほんの一刻、僅かだったが失禁した。水滴は、弾かれたように弧を描いて噴き上った。

「はは……嘘ですよ。奥さん。でも吃驚して、お漏らししてしまいましたね。みんなで、しっかり見物させて貰いましたよ」

この責めは、翠子に、思いがけない羞恥を覚えさせた。「妄想責め」とも言える。視覚を奪われて慄える翠子の脳裡に想い描かれる淫奔なシーンが叫び声となって、男たちに、彼女の潜在意識までさらけ出して見せる結果になった。

自責に駆られながら、傍で、見守っていた王は、濃い酸味のこもった快感を憶えた。箱入り娘だった翠子。

それが、彼の飼育によって、こんな花電車の娼婦みたいな卑語を、口にするまでに成熟した。

「ふふ……奥さん、そんなに怯えなくてもいい。この遊びはね、あなたを遠巻きにしている殿方の逸物を狙って、この台車を突き放つんですよ。それを奥さんの「齒のある姫貝」で見事に啞えることが、できたなら、あなたの勝ちだ。簡単でしょう？」

「まあ、そんな！……いや、いや！ 翠子はご主人さまとだけしか……」

「そこが奥さんの可愛いところだ。でも、あなたは、次郎君にも身体を、あげているんでしょう？ だったら我々の誰かを受け入れたって、いいじゃないですか」

「ああ……、翠子は、どうすれば……許して！」

三点吊りの全裸を、露骨に曝しながらも、翠子は懸命に夫への貞節を守ろうとしている。その可憐さ

SMマニアは毎月21日、全国書店で一斉発売です

にさすがの神谷も打たれた。

「奥さん、僕と坂東君は、抜き身のかわりに天狗の面でもつけましょう。あなたの気持ちも多少安らぐでしょう。しかしご主人と次郎君は、生身のままでいいんですね」

「は、はい！」

翠子は、ついに屈伏した。

「よし、見事に受け入れたかどうかは、緋奈子に検分させる」

「ああ……」

翠子は、アイ・マスクから涙を滲ませながら、

「……もう翠子は、どうなつても構わない……」

翠子を固定した台車を神谷、坂東、次郎と王が、全裸で遠巻きにしている。

神谷と坂東の二人は、腰に素彫りの天狗の面をとりつけ、抜き身を覆っているが、その上反りした鼻先は、まさに魁偉だ。

「はは……こうして見ると天狗の鼻というのは太くて逞しいもんですな」

神谷が、ことさら、翠子に聞かせるように言った。翠子は塑像のように白々とした裸体を鎮座させている。

神谷の脅しめいた言葉にも、動揺の色を見せまいと必死に耐えて、*「愛奴の極致」*の美を漂わせている。

介添としてそばに立つ緋奈子が、

「奥さま、負けちゃ駄目よ。しっかりね！」

と励ます声に、翠子は、縄目を軋ませて、応じるような風情さえ見せた。

「緋奈子さん、翠子のあそこに、たつぷりと油を塗つてやつてくださらんか」

王が憐情をこめた声で頼んだ。

「おばさま、ぼくは、こっちに居るよ！」

たまりかねた次郎の声。

緋奈子が、小瓶にはいつたひまし油を、たつぷり掬いと、真赤に化粧された亀裂へ、濡れぬれと塗りこめていく。

翠子は、わずかに尻を擡^{もた}げて生ぬるい油を受けと

めた。

陰裂は台座の端からはみ出て突き出されているため、上縁の叢が影をなさず、螢光灯の光をまともに受けて照り輝き、逸りたてているようにすら見える。

神谷が叫んだ。

「それ、緋奈子、台座を、思いきり廻せ！ 停つて向き合つた男が、最初のお客さんだ！」

「それじゃ、奥さま、廻すわよ。許してネ……」

台座は独楽のように廻りだした。

（ああ……夫の前で停つてほしい！）

翠子は、翼のように広げた両肢を、空に舞わせながら必死に念じた。

やがて、台座が停つた。

「どなたの前なの？ ねッ、緋奈子さん」

「ごめんなさい。教えたら叱られるわ」

停つた方向に、緋奈子が台座を、ゆるく押し転がした。

ゴロゴロ、ゴロゴロ。

床鳴りが止んだ瞬間、翠子の花芯に、ずぶりと剛直が侵入した！

「あウッ！」

衝撃的に痙攣する裸身。カッと口を開いた翠子は、喉を震わせ、火のような息を吐いた。

剛直は、子壺を突き上げ、腔壁を膺の辺りにまで圧迫している。

目隠しの下で、翠子は白眼を剥いた。

「まあ！ 見事に啜え込んだわ。さあ、奥さま、姫貝を締め上げて、この方が、どなただか当てるのよ」

「ひつ、ひつ」

翠子は、肩で息をつき、一途に、菊蕾と陰唇に力をこめた。

「わ、わからない……」

剛直が、ゆっくり前後にしごかれた。

「天狗の鼻？ か、神谷さま、神谷さまね！」

「残念でした。」

緋奈子が、台車を引き戻す。すぽと剛直が、去

つていった。

台座は、また中央に運ばれる。翠子は、全身を慄わせて歔泣している。

「奥さま、気を確かになさつて！　こんどこそ当てるのよ」

台座が、また廻される。

（こんどこそ、王か次郎に——）

翠子は、絶望的に祈った。回転が停まり、台車は、また、ゴロゴロと前進した。

ずぶり！

「ひっ」

（ああ、また天狗！）

「坂東師匠さま？」

「可哀相な奥さま。また間違ひよ」

台座は、また中央へ——。

翠子は、もう泣かなかつた。

（神さま！　わたしは、そんなに悪い女？　二度も罰をお受けするほど翠子は、淫らなマゾなのですか。それとも、これは、翠子に、もっともつと愛情

深い奴隷妻に成熟させるための試練なのですか翠子は、もう祈らない）

凄愴な表情で、次の回転を待つ翠子の緊縛裸形を、坂東は、吸いこまれるように凝視し、彫刻家の目で、脳裡に焼きつけていた。

「翠子、今度は僕のところへ来い！」

「おばさま、今度こそ天狗のところへなんか行かないで！」

隷女ルーレットは、三たび回転し始めた。緋奈子が、手加減してくれたらしく、台座は、ゆるゆると回っている。

翠子の身体の奥に、とつぜん熱いものが湧き上がって来た。それはオコリにも似た淫奔な熱の塊だった。

嗚乎、翠子は、愛淫菩薩。淫らなブラック・ホールよ！　近づくものを、すべて呑みこむ魔腔だわ。さあ押して！

静かに停った翠子の生々しい陰裂から、サフランの香りが濃厚に、湧き上がった。

後手縄のプロローグ。女体に戦慄が…

縄好き亀甲隷嬢

渡辺

一

サディストのロープアートにすっかりめだね切った
生贄は男の欲するまままばゆい裸身をさらしていく



ロープ芸の極致——亀甲縛りに挑戦する。華麗な八頭身の女体が快楽の期待におののきつつも甘美な陶醉へと…



裸身に喰い込む縄の鮮烈な刺激。股間に渡され
た縄で媚肉が疼く。純白の素肌から濃厚な女臭
がかもし出される。その臭いが牡の股間を擦る



美牝は股縄の食い込みに喘ぎながら
甘い吐息を発散して牝を挑発する。
牝らしく生きたい彼女の自発的選択







肛門の調教を受けさせられ
る愛奴はねつとりと愛液を
みなぎらせて淫らな収縮を

責めは次第にエスカレ
ートし苛烈なあなる洗
浄を経て本格的な肛門
虐めが粛々とすすむ：



手はじめは
浣腸によつ
て充分ほぐ
された肛門
での性行為



生贄の美尻で欲望をとげたあとは二つの
肉穴を入念な愛撫でみがきあげる周到さ



男の太い指で散々にもてあそばされる魅惑のアヌス・ホール！



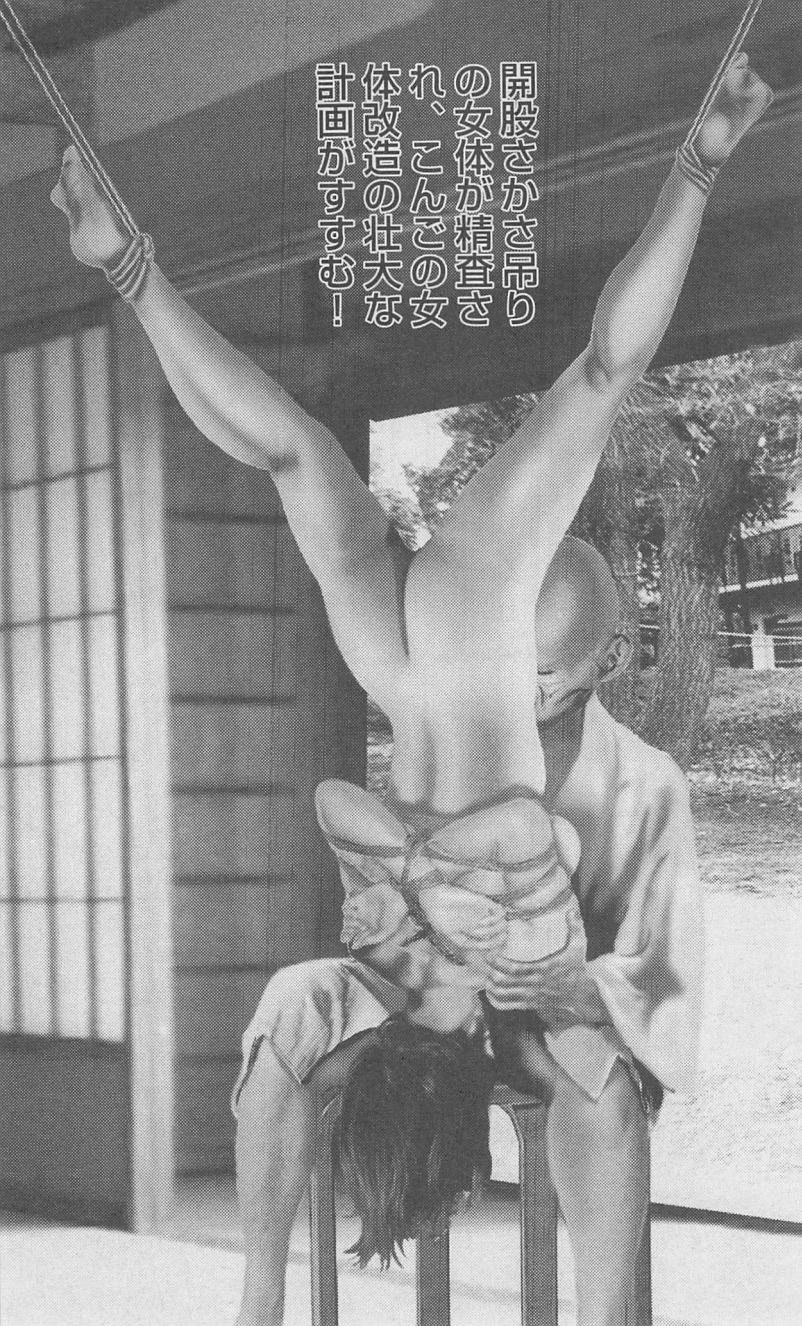
A black and white photograph showing a woman in a bikini hanging from a rope. She is positioned in the center-left of the frame, with her body angled towards the right. Her eyes are closed, and her expression is serene. To her right, a man in a light-colored shirt is partially visible, looking towards her. The background features a building with windows and a hedge. The overall scene suggests a performance or a staged event.

過度の性行為でさらに
柔軟さを増した女体。
見事なオツパイ吊りが
倒錯した女体美を描く

オッパイ吊りにつづ
く乳首縛り。糸がつ
まびかれて苦悶深し



開股さかを吊り
の女体が精査さ
れ、こんごの女
体改造の壮大な
計画がすすむ！



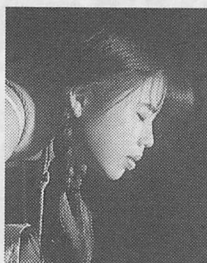


愛奴教育の一環。今夜は鳥籠の中で

悦 虐 天 使 たち

今月号の

〈沢田なつみ〉
虐弄の保健室



「私、淫乱なんです。毎日セックスしないといと、身体が疼いて寝れないんです」と衝撃の告白をしたなつみちゃんも。小さい頃からモテた彼女は小学生の時に担任からイタズラをされ、それ以降性に目覚めたという。高校生の頃には毎日セックスをしないと気が済まなく

なり、今でもセフレは4人ほどいて、レは4人ほどいて、日替わりで、楽しんでる。1月に一度は乱交パーティーにも積極的に参加して新しいセックスフレンドも探しているのだとか。最近ではたまたまセックスで足りなくなると、今回モデルの応募した。た

★A型。153・82・57・81。山羊座。東京都出身。黒人のセックスフレンドが欲しい。

〈松浦清美〉
聖なる恋獄

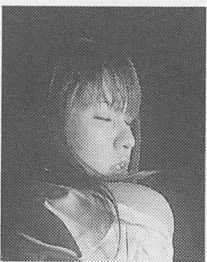


縛りがいいのである。女性とは彼女の事を言うのだらうと思ふほど、縄が肌に食い込む姿が美しい。縛れば縛るほど、白い肌は徐々に赤味を増し、被虐の目は潤む。そして、マゾ特有のオーラを出す清美さん。そんな彼女の姿をもっと見たくて、スタッフが罵倒すると下の

★B型。158・85・58・86。乙女座。新潟県出身。ホットヨガにハマっています。

口から甘蜜が溢れる。指を入れてみる。指をキュッと絡め、菊蕾をこねくり回すと、はあして下さうかに甘い声をだして、おねだり。さらに、おキツメに縛ってやると、それだけで彼女はアクメを迎えるのである。

〈木下美菜〉
従順女体深化論



美しくプロポーションを抜け、男性陣が思わず振り向いてしまう美貌をもつ美菜さん。実は現在、青年実業家と婚約中である。しかし、今まで一度もアクメを迎えなかった事のない美菜さんは、一度でいいから肉欲に溺れてみたい、嫌とい

★B型。164・86・60・90。水瓶座。東京都出身。花嫁修業中です。

うほどセックスをうほしんでみたいと考える、モデルに応募して来た。それではとスタッフで虐めぬいてあげよう。と、縄、玩具、流腸とたっぷり彼女を楽ませる。彼女が初めて、初めに、彼女を上げて、最後は潮まで吹き、大満足して帰って行つた。

変態的 官能小説 大募集

◆当誌では読者の皆様の思いがこもった
投稿を心よりお待ちしております。

あなたの心の内に秘めた熱く滾る情熱
を、SMに対する真摯な思いを、あなた
自身の願望を、私たちに教えて下さい。

体験告白

あなたのSMプレイ体験を私たちに教えて下さい。

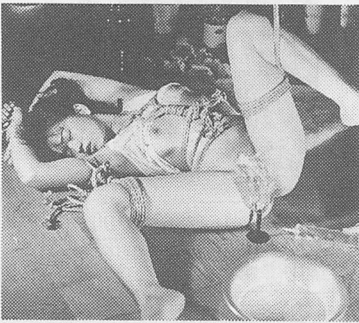
素晴らしいマゾ奴隷を獲得した話。誰にも言えない秘密の体
験。他人には理解されない性癖の告白。またM女に手記を書か
せ、調教の記録にする。等等。創作を排した本物の迫力ある告
白をお待ちしております。

あなたの告白が、今後、より一層SMの世界を盛り上げてい
くための原動力になるのです。

また告白と共に、写真を同封されますと掲載の確率が非常に
高くなります。

◆原稿用紙で二十枚から四十枚程がベストですが、小説同様に
あなたの書きやすい書き方、長さが構いません。文章力に自信
がなくとも、担当者があなたの告白を読みやすく書き直します
ので、まずは投稿してみてください。

ワープロを使用する方は小説と同様にフロッピーをお送り下
さると助かります。なお、こちらの方も原稿は返却しておりま
せんので、手元にコピー等で保存してお送り下さい。



小説

当誌では、あなたにしか書くことが出来ないSM小説を随時
募集しています。

日頃、自分が思い描いている世界は異常なのではないか？
などと思ったことはありませんか。

もしそうなら、それを小説にしてみましょう。実現する
のが不可能な事でも、小説の中でなら理想の女性に対して自分
がしたいこと、やりたいことを、思う存分出来るはずですよ。簡単に
す。むずかしい熟語や気のきいた言いまわしはまったく必要あ
りません。あなた自身の言葉で自由に書いてみてください。あ
なたの持つてゐるSMに対する情熱が一番切なのです。

既存のSM小説にとらわれない、パワー溢れる素晴らしい原
稿が「SMマニア」の生命なのです。皆様の官能あふれる耽美
小説をお待ちしております。

◆文章に自信がないという方もご安心ください。お送りいた
だいた原稿は、編集部で担当が読みやすく書き直します。

原稿の長さは、四百字詰め原稿用紙で五十枚程度の作品がベ
ストですが、あなたの書きやすい書き方、長さが構いません。
また、別紙に原稿用紙一枚程度のあらすじをつけていただける
と助かります。

ワープロを使用する方は、原稿の他にテキストファイル形式
で保存したフロッピーを同封していただき、使用機種名とソフ
ト名を明記してください。

また、原稿は原則として返却しておりませんので、コピー等
をして手元に保存しておいて下さい。

写真・ビデオ・イラスト

読者のみなさん自身のプレイ・フォトやプレイ・ビデオ、秘
蔵されているSM史に残る写真等をお送り下さい。また、絵の
好きな方、イラストに興味のある方は、あなたの願望を自由に
表現したイラストをお送り下さい。

写真もイラストも巧拙はまったく関係ありません。

写真やビデオを掲載させていただく場合は、必ず目線をほど
こしておりますので、安心して投稿してください。また、投稿
されたものが当誌から外部に流出するような事は絶対にありま
せん。

SMに対する様々な思いが凝縮された作品を、ぜひ我々に見
せてください。

◆写真はカラー・モノクロ・現像済み・未現像に関わらず、ビ
デオもテープの種類を問わず広く募集しております。写真枚数、
投稿量は多いほど助かります。

なお、写真やビデオの投稿の場合、いっしょに簡単な手記を
添えていただければ大歓迎です。また、手記の他に、写真には
キャプション（写真に関する短い説明）もお願いします。

全ての宛先は

〒102-0073

東京都千代田区九段北 4-1-26

第一稲穂ビル2F マイウェイ出版(株)

SMマニア編集部 黒岩迄

●投稿についてご不明な点は本誌編集部
までお問い合わせ下さい。 03-3556-1353

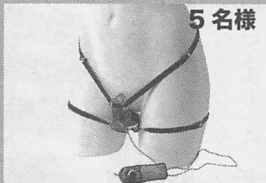
[SM マニア] 愛読者プレゼント

ご希望の商品だけではなく本誌の感想もできるだけ詳しくお書き添えください

●本誌がオススメするオンラインショップ『NLS』から厳選 SM 用品!

アラウザー

5 名様



3 本のゴムバンドで本体を固定させることで、室内・野外問わず使えるオルガ形状の装着ローター。薄型のストッパーは高い装着性を実現した。

メディカルジェル

5 名様



グリセリン系の粘りが少ない『アナル専用ジェル』である。温熱持続成分配合により血管が拡張され血流促進作用があり、摩擦に強いグリセリン系。

商品提供/ NLS お問い合わせ 0120 (58) 3539
HP アドレス/ <http://www.e-nls.com/index.php>



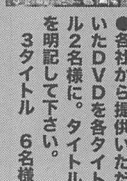
ツイステンシエイク

5 名様

機能面はスイング&パイプレーションの 2 系統とスタンダードだが、チャーミングな形状とお洒落なパッケージで女の子ウケすること間違い無しである!



「悪魔の肉体2」



「DVD」

●各社から提供いただいた DVD を各タイトル 2 名様に。タイトルを明記して下さい。
3 タイトル 6 名様

[応募方法] ◆ご希望の品を記入し下記住所までお送り下さい。その際に面白かった小説、つまらなかった小説、また今度取り上げてほしい企画、その他のご意見ご感想などをお書き添えください。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。ご応募お待ちしております。

〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-26 第一稲穂ビル 2F

マイウェイ出版(株) SM マニア『読者プレゼント』係

幼年色魔症候群

女姦法楽

美川一樹 え／前田寿按

付きまとう老人

昼前の一般病棟は、ベッドのシーツ替えて慌ただしい。作業が済むまで廊下でじっと待っている者や院内をブラブラして時間を潰す者など、患者の性格がよく表れる。

「佳織ちゃん、この間特診の担当になったんだろ?」

六人部屋のシーツを一人で交換している佳織に、

❖イジメに遭う我が子を守る為に悪童の卑猥な鬨りを受け入れてしまう美貌の母。少年は熟した女の肉を巧みに愛撫し性感を昂める!





さつきから一人の老人がずっと付きまといっている。

「谷本さん、外で待つててくださいる？」

佳織は努めて笑顔で言った。シーツを替えた後、すぐに昼食の配膳をしなくてはならない。一日のうちで今が一番忙しい時間帯だ。暇な患者のおしやべりに付き合っている余裕は無い。

「やめてくれよ、谷本さんなんて。俺は勝治さんと呼んでほしいんだよなあ」

へへッと笑って、老人は短い白髪頭を掻いた。浴衣の胸元がだらしく緩んで、瘦せた胸が覗いている。

「じゃあ、勝治さん。外に出てくださいますか？」
はだけた胸元を直してやり、佳織はあくまでも言葉柔らかに言った。

「優しいねえ、佳織ちゃん。俺、看護師さんたちの中じゃあんたが一番好きだよ」

前屈みでシーツを取り替えている佳織のヒップが目の前にある。白衣にピチッと包まれたそのまろやかな肉は、患者らの癒しの源だ。

「なあ、佳織ちゃんよう」

勝治は佳織の尻をスルツと撫でた。

「ダメよ、そんなことしたら。婦長さんに報告しますからね」

佳織は落ち着いた声で老人を窘めた。一日中病室で暮らさねばならない患者は、ただでさえ退屈を持て余している。テレビだつて一日中見ていればさすがに飽きてくる。

自然、男性患者は若い看護師への性的興味が関心の中心になる。だから患者に身体を触られることなど日常茶飯事で、そんなことで一々慌てていたら仕事が進まない。

「なあ、どんなことするんだい？ 特診の看護つてさ。教えてくれよ、佳織ちゃん」

「別にここと変わりませんよ」

この谷本勝治という患者は我が倅で扱いくく、しかもあること無いこと院内に噂を流すことを趣味にしている老人で、看護師仲間でも一番評判の悪い患者だった。

「俺の知り合いが一度特診病棟に入院したことがあつてさ。あつちは制服だつてピンク色の超ミニらしいじゃないか。なあ、夜は患者に添い寝までしてくれるつて本当なのかい？　俺も佳織ちゃんにそんなことしてもらいてえなあ」

勝治が白衣の上から太ももを撫でてきた。佳織はその手を軽く払うと、次のベッドに取りかかる。

「なあ、佳織ちゃんよう」

勝治は後ろから佳織に抱きつき、白衣の上から胸に触れてきた。

「ちよつと、谷本さんっ！」

勝治の手を振りほどこうとするが、年寄りのくせに意外と力があり、佳織は彼の腕の中でもがく。

「ちよつとだけ。なあ、ちよつとだけキスさせてくれよ」

「もうっ、……離してっ、谷本さん」

またかと心中佳織はため息をついた。入院生活の長い年寄りはストレスの発散場所が無いぶん、性欲ばかり強くなる。患者に突然抱きつかれたり、スカ

ートの中に手を入れられたりなど、さほど珍しいことではない。

「なあ、キスだけ、キスだけでいいからさあ……、頼むよ、佳織ちゃんよう」

佳織にしがみついた老人は、憐れみを請うように懇願する。

(もう……)

いつまでもグズグズしていると昼食の配膳に間に合わない。それにこの老人の機嫌をそこねると、後々の仕事やりずらくなる。

「……キスだけですよ……」

佳織は抵抗を止めて、ぼつりと言った。

「い、いいのかい？」

まさか佳織が受け入れてくれるとは思つてもみなかつたので、当の勝治の方が驚いた。

「……早く。誰かに見られたら大変ですから」

佳織は俯いて老人を促した。不思議なもので、こんな不良患者が相手でもやはり胸の鼓動が高鳴り、顔が熱くなってくる。

「本当にキスだけですよ」

「わ、分かった」

勝治は佳織の腰を抱いた。しなやかにくびれた抱き心地の良い腰だ。

香水はつけていないはずだが、なぜか甘い良い香りがする。

「そ、それじゃ……」

勝治は色の悪い唇をあんぐりと開けて、佳織の桜色の唇にムニユツと押しつけた。

「んん……」

老人特有の口臭に眉を顰めた佳織は、初めて担当した特診患者の高木のことを思い出していた。肉体関係を要求されることは無かったものの、金と権力を意のままにしている男のオーラに圧倒され、もし高木が身体を求めて来たら、きつと断り切れなかったらと思う。

「か、佳織ちゃん、ああ……、佳織ちゃん……」

勝治は佳織の唇を舐め回し、舌を入れようとしてきた。

「た、谷本さん……、もう、やめて……」

「まだ、まだ……、もうちょっと……」

興奮した老人は佳織の唇を強く吸い、白衣の上から両手で彼女の尻を掴み、力任せに揉む。すると制服の裾がずり上がり、白いパンストに包まれた佳織の太ももが剥き出る。

「ね、ねえ、誰か来ちゃうから……、もうやめて……」

「かつ、佳織ちゃんっ……」

顔を真っ赤にした勝治はさらにエスカレートし、彼女をベッドに押し倒そうとし出した。

「ちよっ、ちよっと、谷本さんっ……」

老人は歯止めが効かなくなっている。対応を誤ったかと佳織は後悔した。

「何してるのっ！ 谷本さんっ」

「ふ、婦長っ……、いやこれは……、ち、違うんだ……」

光江の一喝で、勝治の狼藉はびたりと止まった。

老人は哀れなくらい動揺し、しどろもどろで弁明す

る。

「患者は看護師の仕事の邪魔をしないことつ。さつさと部屋を出て行きなさいっ!」

「は、はいっ」

娘ほど年の離れた光江に叱られ、老人はこそそこそと逃げるように病室を出て行つた。

「あなたもまだまだ甘いわね。ああいう手合いは、欲求を満たしてやつたつて図に乗るだけよ。安易にキスなんかさせないことだわね。もつともあなたの方から誘つたのなら、話しは別ですけどね、ホホホッ」

「そ、そんな……、違いますっ」

嫌みな婦長に失態を見られた。ネチネチと続く小言を佳織は覚悟した。

「まあいいわ。それよりあなた、いますぐ婦長室までいらつしやい」

「え? あ、はい……」

代わりの看護師と交代すると、佳織は光江に付いて病室を後にした。

敗北の証拠

佳織はやや緊張した面持で婦長室に入った。カーペットが敷き詰められた部屋には、正面にどしりと重厚な机が置かれ、ここを訪れた者を威圧する。

「この間人間ドックで入院なさった高木様、あなたのこと良くおっしゃつてたわよ。かなり気に入られたみたいね、ホホホッ」

「いえ……」

光江に勧められ、佳織はソファに掛けた。

「あの方、いずれあなたを専属看護師にしたいとおっしゃるわよ。そしたらあなた、どうするつもり? ご主人やお子さんのこともあるしねえ……、もちろんご家族には秘密のまま高木様とそうした関係が続けても構わないのよ。病院は秘密を完全に守りますからね。現にそうした看護師が何人もいるんだから。ホホホッ、妻と愛人を両立するつて、かなりスリリングで意外と嵌るらしいわよ。今までにトラブ

ルなんて一度も起きてないんだから、みんなよろしくやってるんじゃないかしら。ただ、私は残念ながら経験が無いけどね」

まるで愛人の幹旋を楽しんでいるような光江の口ぶりだ。

「あの……、私はまだ気持ちの整理が……」

「そうね。別に急ぐわけじゃないからいいわ。そんなことより、あなたに来てもらったのはね、別の特診患者の担当になってもらいたいのよ」

「特診……ですか」

佳織の顔が心なしに曇る。

「ええ、それも子供のね」

あまり気の進まなそうな佳織の様子には気も留めず、光江は引き出しからカルテを出した。

と、その時。ドアが数回ノックされて車椅子に乗せられた恭子が、研修生の増田に押されて入ってきた。彼女はいかにも疲れた様子でぐったりと車椅子に身体を預けているが、なぜか頬や目元がほんのりと紅潮して血色が良い。

「午前中の検査はもう終わったの?」

「ええと、肛門科と泌尿器科……、あ、それから婦人科の検査が終わりました」

そう答える少年もかなり顔が紅潮している。

「そう、それは大変だったわね」

光江は口元に皮肉っぽい笑みを浮かべた。検査を受ける科が変わる度に意図的な羞恥を与えられ、おそらく何度かエクスタシーに達してしまったのに違いない。かなり強度なマゾ体質と言える。この女のように、妙に気位の高い女が一患者としてプライドをずたずたにされてくずれてゆく様は、何とも小気味が良い。まさに看護師冥利に尽きる。

「佳織さん、詳しいことは午後にしましょ。あなたはもういいわ」

佳織を下がらせると、光江は引き出しから小さな薬瓶を出した。

「検査が続くとかなり疲れるでしょ? ビタミン剤だから飲みなさい」

薬瓶をカラカラ振ると、光江は恭子の手の平にオ

レンジ色の錠剤を二粒落とした。

「……」

彼女は渡された錠剤を何の躊躇いもなく口に運び、増田が差し出した水でコクツと嚥下する。

「それじゃ部屋に戻りましょ。増田君、あなたはナースステーションで待機してなさい」

光江は自ら恭子の車椅子を押して婦長室を出ると、エレベーターに乗って特診部屋のある階に向かう。

「部屋で院長先生が、直々に診察してくださいからね」

「え、ええ……」

恭子の返事はどこか虚ろで力がない。各診療科を回る度に、彼女は全裸のままで恥ずかしい診察を受け続けた。しかも他の患者が見ている前で身体のうちこちを触診されると必ず身体が反応してしまい、彼女は自分の中に隠された淫らな性癖をあからさまにされたようですっかり気弱になっている。

「さあ、着いたわ。今日は朝から大変だったわね」

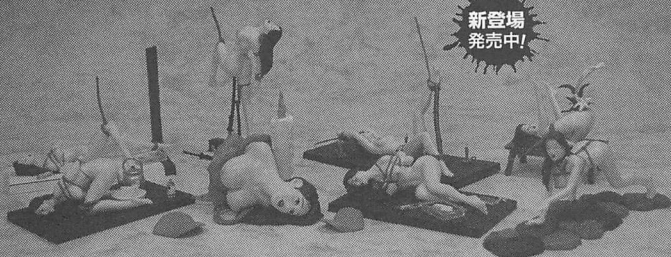


アダルトフィギュアシリーズ
話題沸騰のエロポンに待望の第二弾登場!!
美牝・淫虐の館

縄艶妖花

久米実業プロデュース

新登場
発売中!



モノクロバージョン 全8種

カプセル 各500円(税込)

カラーバージョン 全8種

ボックス 各735円(税込)

ボックスのみシークレットがあります。

新作エロポンそくそく登場!!

第1弾 原田雨情 恥縛乱舞 淫幻の世界
第2弾 美牝・淫虐の館 縄艶妖花

※この作品に登場する名称及び人物は、フィクションで実在のものです。

<http://www.eropon.net/>

製造/株式会社トレジャーワークス 〒150-0011 東京都渋谷区東1-22-11 TEL:03-6419-0789 FAX:03-6419-0786

何気ない一言でも、感じやすい淫らな肉体をからかわれているようで、恭子には皮肉たつぷりに聞こえる。部屋は布団が綺麗に敷き直されていて、窓から心地よい風が流れ込んでいた。

「直ぐに院長先生がいらっしゃいますから、横にな

って待ってて」

「はい……」

恭子はひんやりとした新しいシーツの上に身を横たえた。診察中に抑えきれなかった何度かの絶頂でまだ身体が熱く火照り、替えたばかりのシーツの冷



たさが肌に心地よい。

「ちよつと失礼」

光江は恭子の合わせ着の紐を解き、前をはだけると、肩から滑らせてすつかり脱がせてしまった。

（ああ……、また……）

しかし恥ずかしいという気持ちちが身体の芯に再び妖しい火を灯す。

（さっきの精神昂進剤がもう効いてきたようね、フツツ）

恭子の白い肌がほんのりと桜色に染まり、愛撫もされていけないのに淫らに迫り出した乳房は、しっとり汗ばんで光っている。乳首が突起しているのは薬のせいで欲求が高まっている証拠だ。

「お忙しい方ですから、すぐ診察できるように準備しておきましょうね」

そう言うとき光江は恭子の両腕を左右に広げてから膝を立たせると、その脚を大きく開かせた。

「ああ……、こんな恰好……」

恭子は思わず脚を閉じようとしたが、なぜか身体

に力が入らない。それどころか、恥ずかしい姿勢を強いられることで身体の芯が熱く疼き、全身が火照る。

「いいのよ、無理しなくても。あなた、こういうことが好きなんでしょ？ 隠さないでいいのよ、ホホッ」

光江がテレビのスイッチを入れてリモコンを操作すると、ビデオが再生され始めた。

「あつ……、で、出ちゃう……」

画面に映ったのは、午前中研修生の増田に介助されて尿を採取されている場面だった。

「ああ、いや、は……、恥ずかしい……」

増田の肩に手を置いて身体を支えた恭子は、あてがわれた紙コップにチヨロチヨロと小便を迸らせ、羞恥と快感に酔った表情を浮かべている。

「こ、こんなものを撮ってたなんて……、ああ、非道いわ……」

「ホホホッ。何が非道いもんですか、こんなにウツトリした顔して。あなた、愉しんでたんでしょ？」

「ああ、そんな、ウソです……」

しかし光江に内ももを軽く撫でられただけでゾクゾクと快感が走り、恭子は意に反して自分から脚を大きく開いてしまう。

(ああ……、どうして……)

光江にあちこちまさぐられているうちに柔肌が益々敏感になり、恭子を淫らな気持ちにさせる。

と、突然部屋のドアが開けられ白衣の男が入ってきた。

「どうかね？ 具合は」

「……っ！」

部屋に入ってきたその男が田之倉だと分かった瞬間、恭子はアツと目を見開き言葉を失った。

「ここは私の病院だね。婦長、まだ教えてなかったのかね？」

「そう言えば……。申し訳ありません、つい忘れてました」

光江はククツと笑った。

「そ、そんな……」

恭子は大きく開いた脚を必死で閉じようとするがなぜか全く力が入らず、田之倉の前に全てを曝したまま身動き一つ出来ない。

「あ、あなた達、一体何を……」

自分がとんでもない異に嵌められたことを恭子はようやく悟った。この田之倉という男は、自分の権勢を守るためなら何でもやる男だと聞いている。恭子は背筋に冷たいものを感じた。

「フフフツ、心配しなさんな。何も捕って食おうというわけじゃない。ただ、あんたにはもう少し大人になってほしいだけだよ」

大きく開いた恭子の両脚の間にデンツと胡座をかいた田之倉は、光江からリモコンを受け取り画面を切り替えた。

「あつ、んっ、んんっ……」

婦人科の診察台の上で大きく脚を開いて両手足を拘束された恭子が、膣にバイブレーターを挿入されて身体を仰け反らせている。

「あつ、せ……、先生っ……、あつ、だめっ……、

い、いつ……」

頬を上気させて喘ぐ恭子は、明らかに絶頂の直前だった。

「フフツ、君にも教えておこう。この男は高木といつてね。商工会の理事で私の大切な後援者なんだ」

「そ……、そんな……」

白衣を着て診察室に居たので、恭子はすっかり担当医だと思い込んでいた。

「常識で考えてみたまえ。医者が患者にこんなことをするかい？ フフフツ」

「ひ、ひどい……」

恭子は涙を溜めて田之倉を睨んだ。しかし身体の疼きはますます激しくなり、太ももを撫でてくる田之倉の手を無意識に求めてしまう。

「せ、先生つ……、あつ、ああつ……、だめつ、先生つ……、い……、イッちゃうつ……」

高木がまるで機械のピストン運動のように細かくパイプを前後させると、恭子の熱い肉がチュプチュプと濡れた音を立てる。

「あつ、い、イクつ……、せ、先生つ……、イッちゃいますつ……、ああつ！」

ブルブルと腰を震わせた恭子は高木に何度も絶頂の言葉を告げ、やがてぐったりと静かになった。

「こんな映像が選挙区に出回ったらどうなるだろうねえ、フフフツ」

「そ、そんな……、ああ……」

田之倉に割れ目を触られると口惜しいほど気持ち良く、腰が淫らにうねってしまう。

「おい、神谷君。入ってくるといい」

「えっ！」

カメラを手にしてニヤニヤと部屋に入って来る神谷を見て、恭子は目の前が真っ暗になる。

「どうも、課長。これはまたなんとも大胆な、ハハッ」

「ああ、いやつ……、やつぱりあなたもグルだったのね……、く、口惜しいつ」

恭子の目尻から涙が伝った。しかし神谷のイヤらしい視線を火照った肌に感じると、明らかに強い快

感を感じた。

「大股開いて口惜しいもクソも無いもんですよ、課長。ハハハッ」

彼は大きく開かれた恭子の両脚を正面に、彼女の顔がしっかりと入るように構図を決めるとシャッターを切った。

「い、いやあ……、やめてえ……」

フラッシュが光る度に膺が疼き、熱く濡れてしまふ。田之倉と光江は恭子の敗北の証を覗き込み、ニンマリとほくそ笑んだ。

ミニの看護士

午後、超ミニの白衣に着替えた佳織は、光江と共に特診部屋のフロアに向かった。

「この男の子、ちよつと癖のある子だね」

光江はそこで初めて佳織にカルテを渡した。

(……っ！)

そのカルテに書かれた名を見た途端、佳織はサッ

と顔色を変えた。

「看護師のプロフィールをお母様にお見せしたら、横に居たその子が是非あなたがいいって言い出してね。そしたらお母様も納得がいったようだったわ」

「そうですか……」

吉岡公伸……。間違いない、息子の真一が通っている学校の子供だ。よりによってこの子がこの病院の特診室に……。しかも、自分が担当看護師に指名されるとは……。

佳織の息子、真一は数週間前から学校に行きたがらなくなり、その理由を問いたですとどうもイジメに遭っているらしいことが分かった。学校に向いて直接担任に話を聞いてみると、以前から頻繁に問題を起こしている吉岡という生徒が、学年を問わず複数の児童を対象にイジメを行っているという。

そこで、被害に遭っている児童の父母らが結束して学校に掛け合い、公伸と母親の妙子を交えて話し合いの場を設けたが、息子がそんなことをするはず

がないと母親は全く聞く耳を持たず、席を蹴って帰ってしまった。そして翌日、息子共々精神的苦痛を与えられたと学校に抗議のファックスを送りつけ、公伸はその日以来登校を拒否している。

「あの、婦長……。担当を他の方に代わっていただくわけにはいきませんか」

「それは無理な話ね。とにかくこの坊やが、あなたじゃなきゃイヤだつて言うんだから」

「……はい」

特診患者からの指名を看護師から断ることが出来ないのは佳織も分かっている。ここでは患者は大切なお客様なのだ。

「分かっているわね、片瀬さん。相手はたとえ子供でも特診の患者様なんですから、くれぐれも失礼のないようにね。それと……、この子の父親は院長の強力な後援者だから、その辺の配慮も忘れないで」

「は、はい……」

部屋は紫陽花の間で、佳織は刑場に引かれる罪人のような思いで光江の後に続いた。

「僕、この人知ってるよ。ねえ、ママも知ってるよね？」

「そうねえ、フフフツ」

光江が紹介し終えるのを待たずに、公伸は佳織を指さして言った。

「あら、そうでしたの？ 吉岡様」

担当を替えてくれと言ってきた佳織といい、これは何やら訳ありだと光江は直感した。

「ええ、ちよつと学校でね。それにしても片瀬さんが、この病院にお勤めだったとはねえ……。まあ、考えてみればあなたのせいでうちの息子が心に傷を負って登校拒否になったんですから、あなた自身が息子の看護をするのは当然と言えば当然かしらねえ、フフフツ」

「……」

佳織はぐつと感情を抑えて小さく頭を下げた。自分の可愛い息子をイジメの対象にしていた子供を、特診担当しなければならぬ不条理に唇を噛み締める。

「ねえ、ママ。なんでこの人こんなに短いスカート穿いてるの？」

甘やかされて育った公伸は、大人を恐れるということが全く無い。少年は面白がつて佳織の側にまわりつき、なんと彼女のミニスカートを捲ろうとする。

「そ、そんなことしちゃだめよ……」

あからさまに子供の手を払いのけるわけにもいかず、佳織は困ったように公伸の手をかわす。

「フフフツ、好きなんじゃないの？　そういう恰好が」

母親の妙子は佳織を侮蔑的な目で観察している。

「へえ……」

公伸は目を輝かせて佳織にまわりつく。少年は、母親よりも少し若い佳織を明らかに女として見ている。

「うちの子ったら、授業参観に来ていたあなたを偶然見かけてから、すっかり気に入っちゃったらしいのよ。もう一度真一君の美人のママに会いたいっ

て、もうしつこいの。それなのにあなたったら、学校とグルになって公伸をイジメっ子呼ばわりして、本当にバカな母親だわ」

「……」

よくもヌケヌケとそんなことをと佳織は口惜しく思ったが、横にいる光江にギロリと睨まれ、懸命に感情を抑える。

「真一ったらさあ、僕が先生のスカートを捲つて来いって命令してもグズグズしててちつとも言うこと聞かないんだもん。そしたらアイツそのこと先生に言いつけたんだよ、ママ。ただのジョークじゃないか、ほんと頭に来るよ」

「そう、非道い子ねえ。そうやってあなたを悪者にしていったのね、真一君が。そういう子なのよ、あの子は。大人しそうな顔して、やることが陰湿なのよ」

「そ、そんな……、話が全然……」

母子の勝手な言い分に佳織は思わず抗議しかけたが、光江から脚をピシャツと叩かれると唇を噛み締

めて言葉を呑み込んだ。

「それじゃ後はお任せすることにして、私はちよつと用がありますから。公伸、何か困ったことがあったら何でも真一君のママに頼みなさいね。この人、どんなことでもしてくるらしいわよ、フフフツ」

元々学校への当てつけで形ばかり入院させるだけなので、妙子はさっさと帰り支度を始めた。

「お母様、どうぞご心配なく。お子様はこの片瀬が責任を持つてお預かりいたしますので」

光江は部屋を出てゆく妙子に深々と頭を下げた。

「片瀬さん。分かっているでしよけど、あなたの行動は常にカメラで監視されてるんですからね。公伸君との間に何があつたかは知らないけど、この際つまらない感情は捨てなさい。いいわね」

彼女はまるで因果を含めるように、佳織の耳元でそう囁いた。

「わ……、分かりました……」

母親が帰ってからしばらくして光江も婦長室に戻り、佳織と二人きりになった公伸の行動はまさに傍

若無人だった。

「ハハハツ、待て、待てつたら」

「き、公伸君……、だめ……、ああ、やめて……」

少年は逃げる佳織を面白がつて追い回し、彼女のミニを掴んでパツと捲る。

「見えたつ、白だ、白、白、ハハハツ。真一ママは白パンツだあ、ハハハツ」

まだ心の未成熟な子供は、一度興奮を覚える遊びを見つけると抑制が効かない。たとえそれがどれだけ他人に辛い思いをさせるものであつても、行動はますますエスカレートし、時に大人以上の残酷さを発揮する。

「もう、ほんとにやめて、公伸君」

疲れを知らない公伸に散々追いかけて回され、佳織は息を切らせて床にへたりこんでしまった。

「まだダメだよ。早く逃げてよ、つまらないじゃないか」

丸めた新聞紙を刀のつもりで振り回し、佳織の背中やヒップをパンパン叩く。いつもはクラスと同級

生を追いかけ回して遊んでいるが、同い年の子供のパンツを見るよりも、成熟した女のスカートを捲る方がかに興奮を覚える。

「ああ、やめて……、叩かないで……。あ、あなた……、いつも学校でこんなことしてるの？」

丸めた新聞紙をいつそ取り上げてしまいたいが、室内の隠しカメラで光江に監視されていることを思うとそれでもない。

「だって楽しいじゃん、ハハハッ」

公伸は床に膝を崩した佳織に突進し、背後から抱きついた。

「いやっ、危ないっ……」

瞬間佳織は手についてなんとか身体を支えた。公

伸はどうやらプロレスごっこに興じ始めたようだ。

「えいっ！ どうだっ」

佳織の首に腕を巻き付けた彼は、体重をかけて彼女を押し倒す。

「い、痛いっ、やめて、公伸君」

まだ子供とは言ってもそこは男の子だ。彼女は床にねじ伏せられ、少年は上に馬乗りになった。ミニが腰まで捲れ上がり、白いパンティーがすっかり剥き出しになってしまった。

「ハハハッ、それっ、やっ」

再び新聞紙の棒を手にした公伸は、佳織の頭や肩をパンパン叩く。

「や、やめて、ああ……、ぶたないで……」

佳織が自分に逆らえない立場にあることを熟知している公伸は、佳織が嫌がると逆に面白がって棒を振り上げる。

「へへッ、真一も泣き虫だけどママの方も弱っちいんだね」





「ああ……、いやあ……」
「へへへッ」

真一の美しい母親の顔が悲しげに歪むのを見ると、公伸はゾクゾクッと胸が高鳴った。大人の女を屈服させる快感が殊の外強く深いことを知り、少年は胸をときめかせた。

悪童野ばなし

下校を促す音楽が流れる中、大勢の児童が賑やかに校門からかけだしてゆく。彼らは仲の良い友達同士まとまって帰ってゆくが、そんな中、真一は一人ぼつんと家路についていた。

公伸に付きまとわれなくなつて安心して学校生活を送れるようにはなつたものの、不思議なことに真一は

新しい友達を作るでもなく、どこか孤独だった。

そんな真一の様子を心配した担任の女教師は、下校前に彼を職員室に呼んだ。

「片瀬君、学校楽しい？」

年若い女教師は、笑顔で真一に話し掛ける。

「はい、楽しいです」

彼女がとりとめのない話題を振って彼の緊張を解そうとしているのを、真一は充分理解していた。

「何か困った事があつたら先生に相談してね」

「はい……」

スカートのオレンジ色が鮮やかで、そこから滑らかな大人の女の脚が伸びている。彼女はスカートの裾を軽く摘んでそのムッチリとした脚を組み、真一をドキッとさせた。自分のさりげない行為が児童に充分的な刺激を与えることなど予想もしていない迂闊さがあつた。

真一は職員室を出るとたつた今日の前にしていた女教師の脚を思い描いた。ストッキングに包まれたふくらはぎのラインにどうしてこんなにも悩ましい

想いを抱くのか、彼は自分の生理を持て余した。そして、公伸に命令されてあの女教師のスカートを捲った時の、一瞬だけ垣間見えた小さなパンティーと、ムツと匂い立つような太ももの肉付きを思い出し、その時の得も言われぬ興奮が蘇った。

そして自宅近くの公園まで来たとき、真一は近所に住む亜弓がぼつんとベンチに座っているのを見つけた。

「亜弓ちゃん」

「あ、真一君」

幼なじみの亜弓は真一よりも年上で、その分彼よりも背が高く身体つきも既に女っぽい。ミニスカートから伸びた脚はいかにも滑らかな肌をしていて、太ももの肉付きは充分男の子らの目を惹く。

真一は彼女の隣に座ったものの、ずっと黙っている。ここで一人ぼつんとしていた亜弓の心の内が何となく分かるからだ。

「公伸君、もう学校に来ないかもね」

亜弓がポツツと呟いた。

「うん……」

真一は複雑な気持ちで頷いた。幼稚園に通っていた頃は亜弓の家と家族ぐるみの付き合いをしていた、お互いの家にお泊まりするくらいの仲だった。小さな頃からずっと好きだっただけに、どこか寂しそうな彼女の横顔を見ると、真一は胸が痛む。

あれは忘れもしない数ヶ月前の出来事だった。下校途中に前に行く亜弓を偶然見かけた真一は、彼女に追いついて一緒に帰ることにしたが、その時運悪く公伸と出くわしてしまった。

「へへッ、随分仲いいじゃん。お前ら」

悪ガキは二人を冷やかして、しつこくつけ回した。
「ちょっとこっち来いよ」

公伸は嫌がる二人を公園のトイレに引っ張っていった。質の悪い生徒に捕まった不運を嘆いたが、逆らうとかえってしつこいイジメを受けるので、真一と亜弓は仕方なく従った。

そこら中に猥褻な落書きをされた公衆トイレは、鼻を突く悪臭に満ちていた。

「なあ、そんなに仲がいいならここでキスしてみよ。へへッ」

公伸はこれが子供かと思うほど残忍な笑みを浮かべて二人に命じた。

「そんな……、い、イヤだよ……」

「何っ？　ざけんなっ！」

公伸に腹を殴られ、真一はウツと呻いてその場に蹲る。勝負は簡単についた。亜弓は固い表情で立ちつくしている。

「やれよ。好きなんだろ、お前ら。いつも一緒にいるもんな、へへッ」

「真一君……」

亜弓は、顔を歪めて立ち上がった真一の腕を支えて助けた。

「早くしろってんだよ、このバカっ！」

二人は公伸に何度も頭を叩かれ、仕方なくほんの一瞬だけ唇を付けた。

「ハハハッ、やったやった。キスしてやんの、こいつら。ハハハッ」

しかし彼のいたぶりはそれで終わらなかった。公伸は二人にパンツを下ろせと命じた。

「俺の命令に従わないと、どうなるか分かつてるよな」

「……」

日常的にイジメを受けて心が屈しやすくなっている者は、早く苦痛から解放されたいがために、より従属的な関係に自らはまり込んでゆく傾向がある。

真一は顔を歪めて半ズボンのチャックを下ろすと、パンツごと膝までズリ下ろした。

「ハハハッ、チンチン丸出しでやんの」

公伸は指を差して笑い、ちゃんと見るように亜弓に命じる。顔を真っ赤にした少女は真一の気持ちを感じ、チラッと見ただけで直ぐに目をそらす。

「うっ……、くうっ……」

大好きな幼なじみの前でこんな情けない姿を……。真一は目尻に涙を滲ませ、心に刺すような痛みが走った。しかし自分でも驚くことに、屈辱的なイジメに遭いながらも、真一のまだ幼い性器には

甘く切ない感覚が貫くのだ。

「お前も早く脱げよ」

「……」

公伸に睨まれた亜弓はすすり上げながら手をミニの中に忍ばせ、白いパンツを膝まで引つ張り下ろした。

「へへッ。見ろよ、真一」

彼は亜弓のミニを捲り上げ、まだスベスベの下腹部を丸出しにした。

「いやっ……、やめてっ……」

亜弓は激しく身を振り、脚をくの字に曲げて恥ずかしい部分を隠そうと懸命だったが、やがて力で負けた彼女は、涙を零しながら真一と真向かいに立たされた。

（亜弓ちゃん……）

昔から好きだった亜弓。最近は急に大人っぽくなって、話し掛けるのが少し照れくさくなるほど綺麗になった亜弓。その彼女が今無惨に下腹部を丸出しにして目の前に立っている。自分がずっと大切に

思っていたものも、ちよつとした暴力によつてこんなにも容易く蹂躪されてしまうのだ。

しかし公伸に理不尽な目に遭っている亜弓の姿はなんとも妖しく心ときめかせる。可愛らしいものがむごたらしく壊されることになぜかドキドキする。被虐などという観念などまだ持ち合わせていない真一は、この不思議な感覚に戸惑った。

「二人で触り合つてみるよ、へへへッ」

公伸の陰湿なイジメはさらにエスカレートした。

「真一君……」

「あ、亜弓ちゃん……」

二人はおずおずと手を伸ばすと、まだスベスベの互いの下腹部にそつと触れた。

（あつ……）

亜弓の細くて柔らかい手に握られ、真一ははつきりと快感を感じた。

（ん……）

真一の震える手が恥ずかしい割れ目をなぞつてくると、妖しい感覚がその部分から身体の芯へ鋭く駆け

け抜けた。まだ幼い真一と違い、彼女は既にオナニの秘密の快感を知っていた。

（これが……、亜弓ちゃんの……）

手の平に柔らかな割れ目の形がはつきりと分かる。彼女に性器を握られていた快感と相まって、真一は頭がボーッとしてきた。

「いつまでやってんだよ、バカ」

思わずうつとりと浸っていた真一は、いきなり公伸に突き飛ばされた。

「い、痛っ……」

フフンツと鼻で笑った公伸は、亜弓のミニの中に乱暴に右手をつつこんだ。

「うっ……、い、いやっ……」

幼なじみの可憐な顔は辛そうに歪み、真っ赤だ。

「スнгеエ柔らけえじゃん、へへッ」

「あつ、やつ、やめてっ……」

あまりに乱暴な揉み方なので亜弓は思わず公伸の腕を掴んだが、がっぷりとそこを揉んでくる手を引き離すことが出来ず、亜弓はイヤイヤと顔を振って

すすり泣く。

(亜弓ちゃん……)

公伸の手が亜弓のミニの中で激しく前後に動いている。大人の肉付きになつてきた太ももをキュッと閉ざした亜弓は、唇を噛み締めてじつと耐えているが、耳たぶはピンク色に染まり、やがて頬も上気して来ると、彼女の様子が少しずつ変化してきた。はつきりとは分らないが、真一は何か危険な予感を抱いた。

「真一、お前もう帰つていいぞ」

「えっ？」

亜弓の微妙な変化に思わず見入っていた真一はふと我に返つた。

「し、真一君……」

亜弓は訴えるような涙目で真一を見る。

「さっさと消えろよ、バカ」

「う、うん……」

公伸に睨まれると真一はそそくさとパンツとズボンを引つ張り上げ、大好きな女の子を見捨てる惨め

さに打ちのめされてその場から逃げていった。

少女えつつち

(ああ、亜弓ちゃん……)

一旦は家に向かったものの、亜弓を残して自分だけ逃げてきたことに良心が咎め、踵を返して再び公園に戻った真一は、遠巻きにしながら恐る恐るトイレに近づいた。

「……っ！」

何とも言えない妖しい気配がそこから漂つてきて、二人がまだトイレに居ることはすぐに分かった。しかしそこで真一はあまりに残酷な光景を目撃する羽目になった。

公伸はまだ亜弓のミニの中に手をつ突っ込んでいて、飽きもせずその手を前後に動かしている。だがそうされている亜弓の様子は先程とはまるきり異なつた。ポツと頬を染めた彼女は両手をだらんと脇に垂らして目を閉じ、もうすっかり諦めきつたように

されるがままにしている。しかも公伸が時々何か話し掛けると、恥ずかしそうに小さく頷いたり、首を振ったりして何か答えている。そして彼女の足元には、脱いだ白いパンツが落ちていた。

(いったい何を話してるんだろう……)

二人を何やら濃密な空気が包んでいることに胸騒ぎを覚えた真一は、二人に気付かれないようにさらに近づいた。

「痛くないのか？」

「……うん」

恥ずかしそうに答える亜弓の聲が、はつきりと聞こえた。

「さつきはごめんな。乱暴にしちゃって」

真一が聞いたこともないような優しい言葉が、公伸の口から出た。

「ううん……、もういい……」

相変わらず性器を揉まれたまま、亜弓は小さく首を振った。

「お前、オッパイも膨らんでるんだな。もう大人み

たいじゃん」

「そんなことないよ……、まだ小っちゃいもん……」

亜弓は恥ずかしそうに、チラッと公伸を見て小さく笑った。

「キスしようぜ」

「うん……」

公伸は亜弓の唇に自分の唇をチュツと重ねた。亜弓は照れくさそうにクスツと笑った。

「なあ、大人のキスってどうやるか知ってるか？」
少年はまだ亜弓の性器を揉み続けている。

「うん……、知ってる……」

亜弓がこつくり頷くと公伸はもう一度唇を重ね、今度は舌を差し入れた。

「んっ……、ハア、んっ……」

亜弓はその舌におずおずと自分の舌を絡め、二人は拙いながらも互いの舌を吸い合い、唇を密着させる。

「俺、亜弓のこと好きかも。だってお前の身体って

もう大人っぽいから……、俺、亜弓のこと見てると
変な気分になっちゃうんだよな」

「……」

いつもは女の子をイジメてばかりいる公伸に突然
気持ち打ち明けられ、その素直な告白に少女はド
キドキしながら顔を赤らめる。

「お前は、俺のことどう思う？」

「どうって……」

「言えよ」

少年は亜弓の性器を揉む手に力を入れた。

「あっ……」

鋭い快感が背筋を走り、少女は思わず顔を仰け反
らせる。

「俺、いつもお前らをイジメてるから、きつと嫌い
なんだろ」

公伸はトレーナーの上から、少女の可憐な乳房を
揉んだ。

「で……、でも……、今の公伸君……、そんなに怖
くない……」

身体の芯から溢れる快感が、ウブな少女を大胆に
した。

「ほんとかな？ 俺のこと嫌いじゃないのか？」

「わ……、わからないけど……、今の公伸君……、
ちよつと優しい……」

それだけ言うとお前は、はにかんで小さく笑つ
た。アソコを揉まれながら公伸と話しをしているの
が恥ずかしい。

「もうちよつとお前に触っていい？」

公伸の右手はミニの中、そして左手はトレーナー
の中に潜り込んで妖しく蠢いている。

「う、うん、いいよ……」

亜弓は掠れた声で言い、目を閉じた。

「気持ちいい？」

まるで少女の身体を気づかうような公伸の言葉に
普段の傍若無人さは全く無い。

「……うん、気持ちいい……」

既にオナニーの快感に目覚めている亜弓は、この
ままいじられ続けると、自分の身体がどうなるのか

十分分かつている。

「お前、真一のこと好きなの？」

「わかならい……」

真一は昔からの幼なじみで一番好きな男の子だ。

しかし亜弓は今それを口にすることを躊躇った。

「俺を好きになれよ。真一より俺のことを好きになれたら」

「あつ……、公伸君……」

乳房と割れ目を同時に強く揉まれ、自分で触っているだけでは得られない快感に頭がくらくらした。

「亜弓、俺のことを好きになれよ。命令だ」

「う、うん……、公伸君のことも好きになる……」

亜弓の返事に満足した公伸は一旦淫らな悪戯を中断し、彼女をトイレ裏の小さな倉庫に連れ込んだ。

そこは老人らがゲートボールの道具などをしまっておくための小屋で、日曜日以外は滅多に人が入ってこない場所だった。

公伸は亜弓をビニールシートに座らせて、自分もその横に並んだ。

「お前って可愛いな」

公伸は亜弓にキスをした。

「公伸君……」

亜弓は彼の肩に手を置いて、自分からも唇を寄せた。

「俺のチンチン見てみたい？」

少年は掠れた声で言った。

「……うん、見たい……」

亜弓はこつくりと頷いて、クスツと笑う。

「ほら、見ろよ」

少年は半ズボンをズリ下ろしてからパンツを下げた。

「可愛い……」

真一のものと同様、まだツルツルの性器がちよこんと垂れている。

「触れよ」

公伸は再び亜弓のミニの中に手を入れてきた。

「……うん」

少女は横座りした膝を崩して少年が手を入れやす

いようにしてやっ
から、手を伸ばして
公伸のモノをそつと
握った。

「フフッ、公伸君
の、可愛い……」

二人は互いの性器
をまさぐり合い、目
が合うとクスクスと
笑って何度もキスを
した。

（やっぱり真一君よ
り、男らしいかも
……）

エッチなことに興
味があるのは女の子
も同じだ。それなの
に妙に遠慮ばかりし
ている男の子は何と



なく子供っぽくて物足りない。いつそちよつと乱暴でもいいから、エッチなことをリードしてくれる男の子の方が一緒にいてドキドキする。

「公伸君……、好き

……」

「亜弓……」

亜弓は少年に寄り添い、二人は床に倒れ込んでそのまま抱き合った。

（亜弓ちゃん……）

大好きだった幼なじみが、イジメっ子のイヤらしい悪戯に屈服してゆく様を目



の当たりにした真一は、心に深い傷を負い、公伸との主従関係はもはや絶対的なものとなった。

それからというもの、亜弓と公伸は真一から見ても日に日に親密さを増してゆき、手を繋いだ二人が楽しげに登下校する様子も、頻繁に目撃するようになった。

「公伸君にまた会いたいな……」

亜弓はぼつりと呟いた。

「……」

真一は何も答えられない。あんな非道いことをされたのに、そのイジメっ子を好きになつてしまう女の子の心理が理解できなかった。

「真一君、私にイタズラしたい?」

「えっ?」

真一はドキツとして亜弓を見た。今でも彼女のことは大好きだ。たとえ公伸とどんな淫らな遊びに耽つていたとしても、この気持ちは変えようがない。

「公伸君がね……、たまには真一君にもさせてやれ

って……。これは命令だぞって……」

「……」

真一は俯いたまま黙った。公伸が学校に来なくなる数日前、亜弓をお前に返してやろうかと言われたことがある。ただしそれには条件がある。

亜弓を返す代わりに、お前のママに一度イタズラさせろと彼は平然と言つてのけた。亜弓はやっぱりまだ子供だし、今度は大人の女とエッチなことをしてみたいんだと、彼は微塵も悪びれずに言い放ち、もしお前のママが言うことをきけば、お前をイジメるのを止めてやると付け加えた。

「お前のママって綺麗だよなあ。俺、好きなんだあ。なあ、一度でいいからママとエッチなことさせろよ。お前からもそう頼んでみるよ」

もちろん真一は即座に断つたが、その時の公伸の真剣な目つきにゾツとしたのを覚えている。

「真一君……、いいよ……、しても」

亜弓はミニをスーツと捲った。白いパンツがピチツと腰に張り付いている。

「あそこの小屋に行く？ 真一君いつも覗いてたよね、私と公伸君があそこで遭つてるところ。ごめんね、公伸君にばっかり……。私、公伸君に命令されるとなんだか不思議な気持ちになつて断れないの……。だからあそこで何度もエッチなことされちゃつて……。そしたら私、なんだか……」

「そ、そんなこと……。もういいよ」

真一はその場から逃げるように走り去つた。

悪童のえじき

「だからお前のママと遊ばせてくれたらもうイジメないでやるつて真一に言つたんだ、へへへッ」

公伸は棒状に固く丸めた新聞紙を、隣の部屋に向かつて放り投げた。

「取つてきてよ」

「……」

佳織は口惜しい気持ちを抑えて立ち上がり、丸めた棒を拾つてきて少年に渡した。

「へへッ」

彼は佳織から新聞紙の棒を受け取ると、今度はドアの方へ放り投げた。

「取つてきて」

「……」

佳織はあまりに腹が立つて目に涙が浮かんできた。この少年は、今まで息子の真一をどんな風にイジメてきたのか、まるで自慢話でもするように佳織に話して聞かせた。

「早くしてよ。僕の言うとおりにしないと、また真一をイジメるよ。それでもいいの？」

「ほ……。本当に……。約束してくれるのね。もう真一をイジメないつて……」

佳織は必死に涙を堪えて言つた。

「ああ、約束するよ。真一ママが、僕と遊んでくれるならね」

公伸は目をキラキラと輝かせて答えた。大人を相手に悪びれもせず平然としている少年が、佳織にはまるで悪魔に思えた。

「い、いいわ……、あなたと遊んであげる……。
で、でも真一や亜弓ちゃんには絶対秘密よ」

「オッケー、へへッ」

公伸は顎でドアを指し、早く拾ってこいと佳織を促す。

「いいわ、取ってきてあげる」

佳織はドア近くに転がっていた棒を拾って来ると少年に手渡した。冷静にならねばと自分に言い聞かせるのだが、息子をイジメていた子供に、いいようにされている屈辱に身体が小刻みに震えてくる。

「あーあ、何かイマイチつまんだよねあ

……」

すると少年は、丸めた新聞をビリビリに破いて辺りにまき散らし始めた。

「さっさと拾ってよ。汚いじゃん」

少年は挑発的に佳織の顔を覗き込む。

「……そ、そうね」

佳織は少年の足元にしゃがんだ。すると極端に短いピンクの制服がたくし上がり、太ももがつけ根近

くまで露出してしまふ。彼女はパンティーが見えなようにミニの裾を手で抑えながら、床に散乱した紙片を拾う。

「ほら、今度はこつち」

佳織が全て拾い終わってゴミ箱に捨てると、公伸は少し離れた場所に立ってまた自分の足元に千切った新聞紙をまき散らす。

「……」

こんな挑発にまともに反応してはいけなと言いつ聞かせながらも、悔しさのあまり佳織は胸が詰まってくる。

「そんなんじゃ、拾いにくいんじゃないの?」

ぴたりと揃えた膝を床に付け、片手でミニの前を押さえながら紙片を拾っている佳織を見下ろし、公伸は冷ややかに言った。

「そ、そうね……」

佳織はミニの前を押さえていた手を離し、両手を使つて紙くずを拾う。

すると少し膝を動かしただけで、ミニの裾がずり

上がり、角度によつてはパンティーがチラチラと覗けてしまう。

「へへッ」

公伸はつま先で佳織の膝をツンツンとつついた。

「……な、何？」

佳織はビクツと少年を見上げる。

「別に……、へへッ」

彼は尚も彼女の膝をつつく。

「……し、下着を、見たいの……？」

「さあね。見せたければ好きにすれば」

「……」

子供のくせに……。佳織は涙を悟られないように指先でサツと素早く拭った。

「い、いいわ、見せてあげるわ……」

公伸をキツと睨むと、佳織は少年の目の前で片膝を立てた。

ミニの裾はさらに捲れ上がり、白いパンティーがすっかりさらけ出された。

（イヤらしい子供……。そんなに見なければ見るが

いいわ）

佳織は唇を噛み締めて散らかった紙を拾う。目尻から溢れた涙が筋となつて頬を伝う。

「ほらほら、もつと。ハハハッ」

少年はさも愉快そうに笑い、次々と新聞を千切つては床に散乱させる。

「どんどん拾わないといつまで経つても終わらないよ、真一ママ」

彼は細かく破いた紙片を、佳織の頭や顔に叩きつける。

「あつ……。や、やめて……」

思わず手を止めて顔を覆う佳織に、少年は千切つた紙切れを容赦なく叩きつける。

「ほら、早く拾いなよ。ハハハッ」

大人の女を服従させる快感は、亜弓にイタズラした時とは比べものにならず、公伸の陰湿ないたぶりは残酷さを増してゆく。

「ねえ、真一ママ。さっき、見せてあげるわなんて偉そうに言っただけ、そんな程度なの？ そんな

じゃ亜弓と遊んでた時の方がよっぽど楽しいよ」

(……な、なんて子……)

佳織は涙に潤んだ目で底意地の悪い少年を見上げたが、彼の挑むような目に気圧されてしまい、自分から先に目を伏せた。

「ほら、ほら、脚」

「ああ……、そんな……」

佳織は辛そうに顔を歪めながらも、立て膝した脚をゆつくりと開いた。ムチツと肉付きの良い内ももが少年の目に曝され、パンティーにぴっちり覆われた恥ずかしい女の膨らみまで丸見えに。

「……ひ、非道い子ね……、あなたって……」

「フンツ！ よく言うよ」

公伸は佳織の肩を突き飛ばし、仰向けに倒れた彼女に跨って頬を思いきり張り飛ばした。

「ヒッ！ や、やめてっ……」

「ハハハッ、おもしろえ！」

パシッ、パシッと頬を張る音と佳織のすすり泣く声が、いつまでも部屋に響いた。

すがりつく媚肉

町長選が始まって一週間。町には朝から晩まで選挙カーが走り回り、両陣営の加熱気味の選挙活動のため、普段は静かな町が、ある種異様な空気に包まれる。

「どうだ、票の伸びは？ 抜かりはないだろうな」

田之倉は恭子の脚を大きく割り開いてからゆつくりと身体を重ね、彼女の中に深く押し入った。

「ああ……、せ、先生……、いい……」

彼の肩に手を回した恭子は、薄く開いた唇から白い歯を覗かせて熱い吐息を漏らす。

ここは田之倉の別宅。まだ昼の二時を回った時刻だが、支援者回りの途中中に恭子を電話で呼びつけた。ベッドの下には彼女のスーツや下着が脱ぎ散らかされたままになっている。

「フフッ、すっかり可愛くなりおって。正義感の強いキャリアウーマンはどこかへ消し飛んじまった

な」

田之倉は弾力豊かな恭子の乳房を味わうように揉み、ゆったりと腰を動かす。

「んっ……、だ、だつて……、あんなに色々されたら……、お、女はもう……、負けちゃいます。恭子は……恭子はお、男様におすがりするしか、ああ……、もつと……、あなた、もつとして……」

「いいともさ、フフッ」

パリッとスーツに身を包んだ恭子をねじ伏せて犯すのが、田之倉のお気に入りだった。特に、つい先程までスタッフの先頭に立ってきばきと指示を与え、現町長の町政を舌鋒鋭く批判していた恭子を、そのまま宅に呼んでその場で抱くのが堪らなく興奮する。

「商工会の高木や私の後援者の三橋には充分話をつけてある。お前の勝ち間違いないが、最後まで油断するなよ」

自分の力を思い知らせるかのように、彼は恭子を深く突いた。

「……え、ええ……、分かつてます……、ああ、あなた……、つ、強い……、ああ、すごい……」

「いいぞ、恭子。もつと啼け。啼いて私を愉しませろ」

恭子の中に強いマゾヒズムが潜んでいることを嗅ぎつけた田之倉は、病院内で連日のように彼女を犯し、まず肉体から屈服させていった。

そして恭子の被虐的氣質が本物であることを確信した彼は、セックスで手なずけた恭子を見新町長に据えるべく、表向き現町長支持を表明しながら、裏で画策して追い落としを謀っていた。田之倉にとつてはただの持ち駒に過ぎない町長だが、無能で無粋な男よりはセックス人形にできる女町長の方がかくに楽しみが多い。

「実は今夜一席設けて下柳を呼んである」

田之倉は、ポッチリと桜色に突起した乳首を吸い、ねっちりと乳房を揉み込む。

「んっ、あ……、ああ……、下柳様つて確か……」
「野党のボスだ。何かとうるさい奴だな。お前も顔



くらい知ってるだろ」

強いリズムで腰を打ち据えられ、恭子は顔を仰け反らせて喘ぐ。

「え、ええ……、あつ、んっ……」

「奴をお前から誘え。で、今夜一晚愉しませろ」

田之倉は次期町長候補の恭子に夜の相手をさせることで、政敵を抱き込もうという腹だった。

「奴と懇ろ（かんろ）になつておけば、お前だつて議會を運営し易くなるだろ。女町長ならせつかくの女の武器を最大限に利用しなくちゃな、フフフッ」

「ああ……、わ、分かりました。下柳様のお相手をお願いしますから……、だからもつと……、もつと突いて……、ああ、いいっ」

選挙戦が始まってからというものの、いったい何人の男に抱かれたか分からない。上は財界の大物から下は商店街の会長まで、文字通り身体で票を集めさせられた。

「あつ、あつ……、いいっ、気持ち、いいっ……」
「フフッ、一度イカせてやろう」

田之倉は恭子の膝を腕に抱えると、上から体重をかけて腰を密着させて身体を前後に揺する。

「いつ、あつ……、んんっ、いいっ」

「お前は俺の言うとおりに動いていけばいい。可愛い人形でいさえすれば、俺がきつと名町長に育ててやる」

「は、はいっ……、ああ、あなた……、あなた様、い、いいっ……、気持ちいいのっ……」

女などいくら虚勢を張ったところで、こうして男に一本貫かれれば容易く骨抜きになつてしまうのだ。恭子は男の底力を見せつけられた思いだが、夫と離婚して以来久しく遠ざかつていた屈する悦びに甘く酔っている。

そしてその頃、田之倉の病院ではちょうど午後の回診が済み、ナース達がようやく一息つける時刻だった。

「最近、佳織さん見かけないわね」

「あら、知らなかったの？ 彼女、この間からまた新しい特診が付いたのよ。なんでもまだ坊やらしい

「んだけど」

「へえ、そうなんだ……」

休憩時間のナースステーションは婦長の厳しい監視も無く、患者が差し入れてくれたお菓子とお茶で賑やかだ。

「結構我が侘で扱いにくいらしいわよ、その子」

「佳織さんこの一週間全くこつちに顔出さないじゃない。かなり手を焼いてるのよ、きつと」

そんな噂話も婦長の光江が姿を現すとピタッと止み、彼女らはそれぞれの持ち場にそそくさと移動する。

（フンツ、無駄口ばかりたたいて……）

光江は婦長室に入ると、公伸の部屋に電話する。

「もしもし、坊ちゃん？ もう起きてらっしゃるの？ そろそろそちらに伺つてもいいかしら」

彼女は、部下のナースが聞いたら吹き出したくなるような、オクターブ高い声を出して言った。

「ああ、婦長さん？ なんだ、もうお昼すぎちゃってるんだ。うーん、もうちょっと後にしてほしい

な。それじゃね」

電話を切った公伸は受話器を置くとトイレに入り、寝室に戻つて布団に潜った。横には佳織が枕を並べて寝ている。

「起きてる？」

「ええ……」

公伸はパジャマを着ているが、佳織は全裸だった。

しかも両腕を背中にまわし、手首にオモチャの手錠をかけられている。

「腕、痛い？」

少年は佳織の乳房に触れ、その量感に満ちた柔肉をやりわりと掴んだ。

「少しだけ……、でも大丈夫……」

佳織は口元に笑みを浮かべ、少年に揉まれている自分の乳房を眺めた。

まだほっそりとした子供の手が豊満な膨らみを揉み、形の良い乳房がプルプルと弾む様は、自分で見ても猥褻な感じがする。エッチな身体つきとは良く

言ったものだと思う。

「とても上手になったわね、あなた……」

ピンク色の乳首が直ぐに凝ってくる。すると少年は彼女の腰に手を回して佳織を抱き寄せ、頭をもたげた乳首を口に含んだ。

「ああ……、き、公伸ちゃん……」

少年の柔らかな唇でチューチュー吸われると、まだ赤ん坊の真一に授乳していた時のことを思い出し、懐かしさと快感に佳織はうっとりとした表情を浮かべる。

「へへッ、佳織ママのオッパイおいしいね」

公伸は佳織の乳房をゆさゆさと揉み込み、左右の乳首を交互に吸い、さらに舌先で転がす。

「んっ……、いっ……」

少年の上達の早さに、佳織は驚いている。まだ毛も生えていない子供に何が出来るとタカを括っていた佳織だが、公伸の担当を務め始めて二日目の夜、まだ幼いながらも見事にそり立った彼のモノを見せられ、なぜか身体中の力が抜けてしまつてあとは

もう何も考えられず、気がつけばまだ子供の公伸に床に押し倒されて犯されていた。少年にとってもちろん初めての性交だったに違いないが、知識だけは既に充分あったのだろう、彼は紛れもなく、しかもしつかりと佳織を犯した。

「んっ、ああ……、そう、上手よ……」

愛する息子をイジメの対象にしていた少年に犯されるだけでも罪深いことなのに、あろうことか自分はその事実を受け入れ始めている。女であることの弱さと業の深さを佳織は痛感した。

「ねえ、分かる？」

佳織の太ももの間に脚を割り込ませた公伸は、下腹部をギュッと押しつけた。

「え、ええ……、あなたのが大きくなつてゐるわ」

まだ皮も剥け切れていない子供のアレが、パジャマの下で生意気にピクンツと勃起している。それはまだまだ幼い屹立ではあるが、それでも充分佳織を悩ましくさせる。

「もう大人なのね、あなた、ああ……」

まだ乳首をチューチュー吸っている公伸の坊ちゃん刈りの頭に頬を寄せ、感じていることを彼に伝えるつもりで甘く吐息を漏らした。

「そうだよ、僕はもう大人さ。へへッ」

佳織を犯すことで晴れて初体験を済ませた公伸は、男としての自信をつけた。しかも楽しい遊びを見つけた子供のしつこいまでの集中力は並はずれていて、初めてのレイプを愉しんだ日、公伸はずっと彼女を離さなかった。

幼なき支配者

そして最初の内は佳織の中に挿入することばかり面白がっていた彼だったが、翌日になると早くも佳織に絶頂を極めさせることに成功した。

「ねえ、キスしようよ。佳織ママ」

ピンクの乳首が充分凝って突起したことに満足した公伸は、コリツと甘噛みして佳織を一声喘がせると、身体をもぞもぞずらして彼女と間近に向き合

う。

「ええ……、キスしましょ。公伸ちゃん」

ニコツと微笑んだ佳織は、目元を染めて目を閉じる。すると少年の柔らかな唇がすぐに重なってき

た。

「ん……」
公伸に髪をまさぐられながら舌を吸われると、それだけで頭がボーッとしてしまう。少年にイカされてしまった弱みがあるのも事実だが、彼は佳織の性感のツボをかなりマスターしている。

「あなたつたら、キスもこんなに上手になつて」

これが本当に息子と二つしか違わない少年なのかと信じられない思いで佳織は公伸を見つめ、今度は自分から唇を重ねていった。

「ねえ、佳織ママ、僕にこんなことができるなんて考えてもみなかったでしょ。まだ子供だと油断してたんじゃない？」

「それは……」

佳織は頬を染めて目を伏せた。

その仕草にはまさに屈從を甘受した女の媚びが匂っている。

「でも佳織ママは僕に犯られちゃった。へへッ、女の人ってあんなにイヤらしい声を上げるんだね。

僕、びっくりしたよ。でも可愛かったな、へへへッ」

「ああ、言わないで……。佳織、恥ずかしい……」

冷やかして愉しむ公伸に佳織は甘えて言い、皮肉な子供に裸身を押しつけて許しを請う。

「約束はちゃんと守つてよ、佳織」

公伸は佳織の名を呼び捨て、上氣した彼女の頬に手を当てて髪をまさぐる。

「ええ、分かっているわ。あなたとの約束ですもの」

二人は昨夜、息子の真一をイジメの対象から外す代わりに、佳織が公伸のガールフレンドになることを互いに約束し、誓約書をかかわした。その書面は今二人の枕元にある。

私、吉岡公伸は片瀬佳織の息子真一に対して、片

瀬佳織の絶対服従と、同女を恋人として所有することを条件に今後一切のイジメ行為をしないことをここに誓います。

村瀬佳織の所有者にして恋人 吉岡公伸

私、片瀬佳織は吉岡公伸様が息子真一と仲良くして下さるお礼として、以下のことを誓います。

一、公伸様に対し、精神的にも肉体的にも絶対服従すること

二、年上の恋人として公伸様に対し深い愛情を抱くこと

三、常に夫よりも公伸様との関係を優先すること
四、公伸様がご成人あそばす折には、公伸様による完全所有を念頭に夫との離縁を検討すること。その際には公伸様のご希望が最優先されること

五、公伸様の子供を妊娠した場合には、その子は夫との間の子として生涯愛情をもって育てる

SMマニアは毎月21日、全国書店で一斉発売です

ああ、そこ……、いい……、き、公伸ちゃま……、
んんっ、い、いいっ……」

佳織は少年とのセックスにのめり込み、あたり憚らずに淫らな声を上げた。そして両手を手錠で繋がれたまま、正常位で公伸に犯された。ただしその浅ましい痴態を、光江に案内された真一に見られていることにはまだ気付いてなかった。

それから三月後、初の女性町長が誕生した話題がようやく落ち着き始めたある日曜日。町の森林公園でピクニックを楽しむ家族があった。

「ハハハッ、お前は下手だなあ」

父親の投げた球を捕りきれなかった真一は、グローブを放って球を懸命に追いかける。しかしその球は芝を勢いよく弾み、ピクニックシートに座って父子のキャッチボールを笑顔で眺めていた母親の所まで転がっていった。

「今度は捕れるわよ、真ちゃん」

運動神経のあまり良くない息子を、母親は優しく

励ました。

「ほら、真一」

佳織のすぐ隣に座っていた公伸が、真一にボールを放った。

「うん……、ありがとう……、お、お兄ちゃん……」

ボールを受け取った真一は、一瞬顔を歪めた。公伸の左手が母親のスカートの下に潜り、直にヒップを撫でているのに気付いたのだ。母親をオモチャにしている公伸をお兄ちゃんと呼ばれる苦痛に胸が刺される。

「さ、真ちゃん、頑張つて」

息子に見られたことを悟った佳織は、カーディガンで公伸の手元を隠し、恥ずかしそうに微笑んだ。公伸との異常な関係を息子が気付いていることを佳織は承知している。昨夜も、お泊まりに来た公伸と夜中こっそりリビングで抱き合い、キスしていたところを真一に見られている。何も知らないのは夫だけだった。

「可哀想……、真一……」

公伸を佳織の家にお泊まりさせることを提案したのは彼の母親妙子で、自分の息子をお兄ちゃんと呼ぶよう真一に強制したのも彼女だ。

「ねえ、佳織、あのことちゃんとママに話したの？」

「ええ……、この間お会いしたときにお母様にお話したわ」

公伸がパンティーを脱がせようとしてきたので、佳織は夫にバレないように注意しながら腰を少しだけ浮かせ、少年の淫らな作業に協力した。

「お兄ちゃま……、私、どうしたらいいの？」

公伸に脱がされたパンティーをバッグにしまい、佳織は並んで座った子供に真顔で尋ねた。

実は佳織は妊娠していた。夫と公伸と、いったいどちらの子供なのかは分からない。ここ数ヶ月、公伸は頻繁にお泊まりに来ては夜中夫の目を盗んで佳織を抱き、時に激しく犯した。

佳織もまた、少年が泊まりに来た夜は彼の誘いを

密かに期待し、夫が寝付く夜中が待ち遠しくて仕方がなかった。特に夫が出張で家を空ける日など、普段真一の部屋で一緒に寝る公伸は、まるで当然のように夫婦の寝室を使い、夫のパジャマを着て佳織を抱き翌朝を迎える。そしてその結果が佳織の妊娠だった。

「産めばいいじゃん。そんなことより今晚も泊まっていから、いつもの時間にリビングでね、へへッ」

公伸の手が佳織の性器を撫でた。

「あつ……、いやんつ、お兄ちゃま……」

「へへッ、スリルがあつていいじゃん、こういうの」

「そ……、そうだけど……」

佳織は、可愛い暴君を頬を染めてじっと見つめる。その姿は遠目に見れば仲の良い親子だが、公伸に向けられた佳織の眼差しは熱く潤んでいて、それは愛する男を見つめる新妻のそれのようでもあった。

(完)

M女たちのリアルな痴態
 緊縛生姦施術、強制絶頂肉遊戯術
濃厚4P緊縛凌辱映像一五〇分



肉感美人恋縄日記

にっかんびじんれんじょうにつま

M氣質充分な淫女たちのリアルドキュメント映像
 振り下ろし映像150分+ダイジェスト映像30分 定価2500円

全国書店にて絶賛発売中!!

テ102-0073 東京都千代田区九段北4-1-26
 第一稲穂ビル2F マイウェイ出版株式会社

TEL.03-5216-3641

(なお送料は350円です)

肉の迷路

❖「人前に出せるようにもう少し磨きをかけなきゃな」と言われてゆきえは蟻の戸渡りに舌を這わせる。女泣かせの剛直が身震いする

墮ちる痺薬

ゆきえはあぐら縛りにされて、縄尻をベッドの脚につながれていた。

眼の前で、辻が洗面器に溶いた石けん液を太い浣腸器に吸い上げている。白濁した液がシリンダーに刻まれた目盛りを五〇CC、七〇CCと越えてゆく。そのたびにゆきえは胸を喘がせ、床にペタリと落とした腰をよじった。

あぐらを組まされているために、始末をされた後でも、そこは閉じ切らずにパツクリ開き切っている。辻の並はずれて太く、その上真珠まで埋めたものを食わされた後だけに、その感じが一層はなはだしかった。子宮にまで外気が入って来るみたいだ。

痺れがまだ腰まわりに残っていて、

牝犬の止り木

並木梗太郎 え/沖 渉二

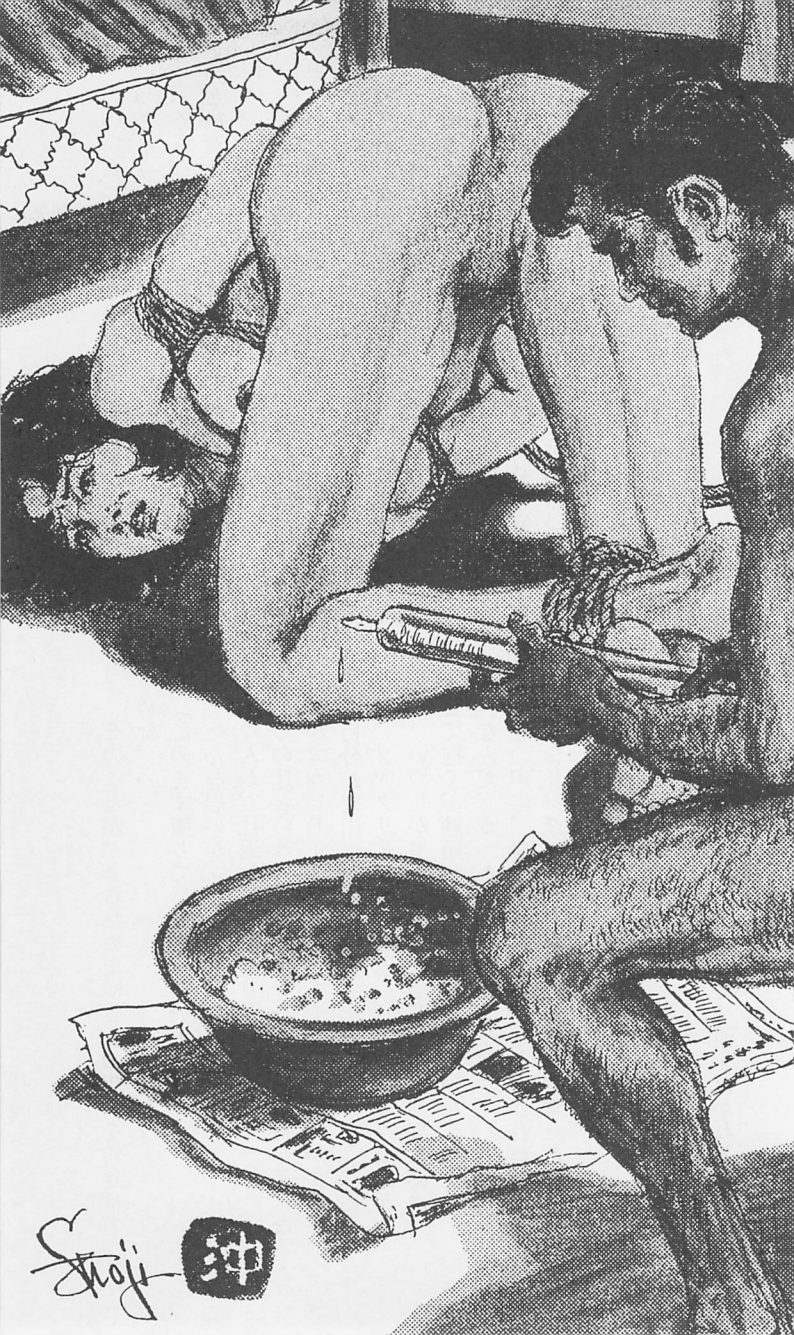
指一本動かすのさえおつくうだ。浣腸器に吸い上げられる石けん液におびえながらも、ついウトウトと頭が垂れそうになる。それでいてつらいという気持ちにはなかった。身も魂もどこかあてどなく浮遊している。

辻はゆきえをすっかり自分の女にしたつもりで、何かと彼女のことを訊いた。

ゆきえも隠さずに話した。宮川洋平に地下室に閉じ込められてサジズムの洗礼を受けた所から、岩田に至るまでの遍歴を、これが自分の人生の総決算といった心持ちで話した。事実、これから辻のものになれば、自分の人生というものはもうないに等しいだろう。そんな自分を他人のようにゆきえは観ていた。

「おめえも、若い割には苦勞して来たんだな」

辻はわずかに同情を見せた。



「いい女つてのは、ひとつ道が狂いだすと、こんなつちまうことが多いんだよな」

そんな批判も口にした。女の道を狂わせるのにひと役買っている自分を、ひそかに矜^{きん}る口ぶりであった。

思ひ出を語っているうちに、久しく忘れてしまっていた水谷享子のこと、脳裏にクローズアップされて来た。恋人の矢崎を自分から奪い、宮川をけしかけて自分を犯させ、その上に父親の妾に売り渡しさえした女だ。

ゆきえが今日のような運命をたどることになったそのキツカケを作った張本人は、水谷享子と言っている。その張本人はいま、矢崎を自分の家の養子に迎え、しあわせな結婚生活を送っている。結婚と同時に大学は中退した。

学生娼婦と、県内有数の大企業の社長夫人と——かつて大学の演劇部で主演女優の座を競い合った二人にしては、ここ一年半あまりの間に生じた、あまりにも大きな落差であった。

そのことが、あらためてゆきえの想いを灼きはじめた。

（このまま堕ちて行きたくない……）

そんな思いが、激しく脳裏に渦巻いた。

（なんか、仕返しをしてやりたい……）

この辻というスケコマ師なら、あの水谷享子になにかコッピドイ仕返しをしてくれそうな気がする。

自分が宮川以来受けて来た血を吐くような屈辱を、ソックリそのままお返ししてくれそうな気がする。いつしかゆきえも、娼婦がしあわせな人妻に對して抱く、嫉妬心のとりこになっていた。

「なんだ、うつとりした眼をしやがつて」

辻の声に、ゆきえは現実にもどされた。蒼く光るシリンドラーは、二百CCの所まで満たされている。

「浣腸が好きでたまらねえんだな？」

ゆきえはかぶりを振った。浣腸そのものより、その後に来るであろうアナルコイタスのことが恐怖となつて胃の腑にしこつていた。前を貰かれるのさえ

あれほどの苦痛を与えたものが、アヌスにどれほどの苦痛を与えるものか——しかし、哀訴など通じないことは、これまでの辻のやり方でわかつていた。

ベッドの脚から解き放たれたゆきえは、あぐら縛りの体を絨氈の上に俯伏せにされた。

もたげられた尻が大きく左右に割れて、薔が露出するのが感じられた。ゆきえは絨毯のケバに頬をすりつけながら、固く眼を閉じた。

辻はワセリンをすみれ色のアヌスのくぼみに塗り込みはじめた。

「ああ……」

感覚がピクついて、腰をゆすぶらずにはいられない。

「このヒクつきを見たら、どんな萎え魔羅もそそり立つだろうぜ」

辻は悦に入って、ゆきえから悲鳴を絞り取る。

ヌルリと指が入って来て、内壁に塗り込めはじめた。指をグルグルまわされて内壁を搔かれると、声がかぼそく引き癒れた。我を忘れて辻の指の根を食

い締めた。

「たまらねえ締まりっぷりをしてやがる」

辻は調子に乗って指を抽送させた。

「ああ、たまらないッ……もう、おくすりを入れて……」

ゆきえは腰を振りつつ自分からせがんだ。自分を墮とすことで、水谷享子への復讐心をつのらせようとする気持ちが働いていた。

女を酔わす珠

辻はゆっくりとピストンを押した。なまぬるい石けん液が、指で刺激されてヒリつく腸壁にしみる。

その感覚、その圧迫感が、たえずゆきえを呻かせ、喘がせ、そして腰を振らせた。快樂とも苦痛とも分かちがたいひととき。

やがて膨満感が胃袋を圧迫し、呼吸が苦しくなってきた。下腹が張って、海老縛りに折りたたまれた恰好が窮屈さを増した。あぶら汗が、ふいごさなが

らに喘ぐ脾腹や内股に湧き、白い肌をヌメヌメ光らせ始めた。

注入を終えた辻は、ふたたび指でアヌスに栓をして、抽送を始めた。もう一方の手で汗ばんだ乳ぶさをいじったり、剥き出しの肉芽を擦ったりする。ゆきえは苦しげな息づかいの中から昂ぶった悲鳴を洩らし、腰をゆさぶった。ゆさぶりながら体の芯から熱いものがトロトロ溢れ出て、内股に伝わるのが感じられた。

「ああ……たまらない……」

腹の底から声がほとばしり出た。

「気持ちいいのか」

「……はい……」

ゆきえは頭をなよなよゆさぶりながら、辻の指を締めた。締めながら絹をこすり合わせるようなやり声を洩らした。

「いい女だ。男のおもちやになるために生まれたような女だ。こんな女がいると思うと、この仕事は止められねえ」

辻の声も昂ぶりをこらえ切れない。

「ああ、もう……」

ゆきえはすすり泣くような喘ぎに喉をヒクつかせながら、辻の指を啜えた尻をゆすりたてた。腹がグルグル鳴って、ともすれば眼が昏む。悪寒が背すじをチリチリ顫わせる。

「ねえッ、おねがいッ」

「まだだ」

辻はゆきえの苦しみをじっくり味わおうと構えている。美しい女が便意にさいなまれて生汗を噴きつつのたうつさまほど嗜虐欲をそそるものはないのだ。そして一度排便を男に見られた女は、例外なく言いなりになる。

ゆきえの息づかいが切迫し、悶えが小刻みになった。もはや片時もじっとしていられない。噴き出した冷汗がオリブ油を塗り込めたように雪肌を絢光らせる。

ゆきえは血の気を失なって慄えだした。

「……お、おねがい……」

訴える舌がもつれた。

辻はようやくあぐら縛りの縄を解いた。が、自分で立ち上がる力はなかった。すこしでも足を踏ん張ろうとすると、体ぜんたいが爆発しそうなのだ。尻に指栓をかわれ、細腰を抱かれて、オコリにかかったように顫えながら、ゆきえはトイレに連れ込まれた。

洋式便器に腰を落としたゆきえは、胴ぶるいしながら括約筋をゆるめた。弛緩のひと時が、愉悅の呻きを上げさせる。その垂れた顔を髪を掴んでもたげさせた辻は、あえかに息づく口に、怒張を啜えさせた。口をふさがれて吹き上げた鼻孔に、いやでも異臭が吸い込まれる。ゆきえはポロポロ涙をこぼしながら、口にあまるものに舌をからめ、吸った。口技を激しくすることで、まつわりつく異臭からすこしでも逃れたかったのだ。

腰をゆすつてとめどもない排泄を続けながら、昂ぶり切った貌を曝す美女を見降ろしつつ、辻は埋め込んだ真珠を舌でなぞらせた。そうさせるとどんな

女でも、そのコツコツしたもので肉を擦り上げられる時の愉悅を思つて、例外なく興奮する。ゆきえも弛緩した顔つきを真つ赤に上気させ、額の生え際に玉の汗を浮かべて、切羽つまった息づかいをしはじめた。

排便に排尿が加わつて、ゆきえは歎くような喘ぎを喉にくぐもらせつつ、口いっぱいには拡がった龟头をしゃぶり、くぼみに並ぶ真珠をなぞる。口の端からよだれが白い糸になつてあごに垂れる。辻はそんなゆきえの屈服した表情を眺めながら、硬くとがらせている乳首を揉みなぶる。便意をこらえてコチコチに鳥肌立っていた体に温もりと柔かさがもどつて来て、ボウとするような色を見せはじめた。最後のひとしずくまで絞り切つて、ゆきえは弛緩の極みの陶酔に身をゆだねている。辻が体を引くと、大きく息をついて、上体をゆらりとよろめかせた。

辻はそんなゆきえをバスルームに連れ込んで、尻の汚れを温湯で洗い流した。指を奥まで入れられて洗われるゆきえは、腰をよじりながら昂ぶり切った

声をあげた。

(むしゃぶりとつきたいような、
いい尻をしてやがる)

それが辻に鞭打ちを思いつか
せた。

寝室へもどると、後ろ手の縄
尻を天井のフックに引っ掛け
て、爪先立ちに吊り下げた。房
鞭を出して来てゆきえに見せ
た。ゆきえはそれにねっとりか
らみつくような眼を向け、それ
から締め上げられている胸を喘
がせた。

「はじめてでもなさそうだな」

「……」

ゆきえは身ぶるいしながら眼
をつぶった。なんとというマゾの
虫がこの身に棲みついてしまっ
たんだろう、と思わずにはいら



れない。ゾロリと尻を這う鞭の感触に戦慄が生じ、熱いものが腹の底からこみ上がる。

ピシッ！

巧みな手さばきで鞭が尻に鳴った。

「ああッ」

ピクンと反り身になって、硬化させた尻たばをよじった。痛みよりも痺れるような感覚が尾骶骨のあたりから這い上がってくる。

ピシッ！

「ヒイーッ」

後ろ手を握りしめ背伸びするように身を反らす。バランスが崩れてたたらを踏んだ。お尻が灼ける——そう思ううちに次の一撃が加わる。

「かんにんしてッ」

「顔は気持ちいいと言っているぞ」

ピシッ——と小気味よく尻肉が爆ぜる。クリームを固めたような尻肌には赤味がさし、ひとすじふたす



じ、ひととき赤い痕が交錯する。

辻は鞭を止めて前をまさぐった。

「ベトベトじゃないか」

「いや……」

「これほどのマゾも珍らしいぜ」

「もう、かんにんして……」

言いもあえず、鞭が腰を打ってきた。ゆきえはその痛みをううむと噛みしめて、ゆらゆらと吊られた体をゆらめかせた。

（体が、とろけちゃいそう……）

何度か精を放つてとろけ切った肉は、鞭によつて活を入れられて、新たな刺激をむさぼり始めているのだ。ゆきえは肩を波打たせるようにして熱い吐息を吐きつつ、かぼそく歎き声を上げはじめた。

「鞭打たれてよがり戯きか」

「……」

パシッ！ と鞭が爆ぜ、ゆきえはアクメを迎えたような呻きを上げつつ、総身を痙攣させた。

辻は鞭を横啞えにして、ピンとしこり切った乳首を揉み、力を失なつた股ぐらをまさぐつて、肉芽を剥いた。

「ああ……いいわッ」

ゆきえは羞かしげもなく声を放った。

「して……おねがい……」

昂ぶり切つて身も世もなげな声に、辻もそそれたに違いない。吊り縄をゆるめて、上体が水平になるようにした。そのまま腰を突き出させて、背後からつながろうというのだ。

辻は腰を抱き寄せ、尻たぼを割った。熱い肉塊を当てがわれて、ゆきえは悦びの声を張り上げた。腰をゆすつて誘った。

「ガツつくんじゃねえ」

当てがったまま、辻はゆきえの尻の穴にワセリン

を塗った。前からのぬめりを受けて、そこは十分にうるおっていたが、自分の巨大さを知っている辻は大事をとった。商売ものを傷つけたくないという配慮もはたらいたのだろう。とにかく、自分のものを啞えることができれば、たいていの男は楽に啞えられる筈だという自負心があった。

「リラックスしていねえと裂けるぞ」

「ああ、こわいッ」

グイと突きつけられて、ゆきえは喉を絞った。慄えが背すじを駆け抜けた。そしてそれは強引に捻じ込まれて来た。

「あ、い、いたいわッ……やめて……」

逃げようとする腰をガツシリ押さえ込まれ、中心にさらに力が加わった。

「う、うむ……いた……」

ゆきえはギリギリ唇を噛んで、あぶら汗を滲み出させたうなじを反り上げた。こみ上がる慄えの中を、ジリジリと凶暴なものが挟り込まれてくる。疼痛に括約筋が灼かれた。

「肉をゆるめろ」

辻が焦れたような声を放った。ゆきえはわずかに口で息をついた。そのとたんにそれはもつとも拡がった部分にめり込んだ。

「う、うッ……」

「もう大丈夫だ。堂々と啜え込んでいるぞ」

ジリジリ生汗をうなじに湧かせながら、ゆきえは貫かれて行った。眼が昏み、息づかいがかぼそく切迫した悲鳴になつて絞り出された。

「真珠が……真珠が……」

たまらない！ とゆきえは苦しい息づかいの下から叫んだ。コツコツした珠が腸壁を擦り上げてくるのだ。魂まで痺れるようなその感覚に、ゆきえは歯が鳴るのをどうしようもなかった。

「いくわッ……だ、だめッ……」

背すじを引き脛らせつつ、グッとあごを衝き上げた。足が萎えそうになるのを吊り縄でどうにか支えられつつ、喉を絞らたてた。辻のものをギッシリ啜え込まされて裂けんばかりになつたゆきえのアヌス

は、ヒクヒク痙攣しつつ、うつすらと血をにじませ始めた。

運命の凶器

翌日は、終日素っ裸のままベッドにつながれて過ごした。

辻は、岩田にオトシマエをつけさせるのだと言つて朝早く出かけたきり、夕方まで帰らなかった。

ゆきえは窓の外に日の移るのをうとうとと見ながら、運命の移ろいに身を任せた。

腰が重く、股の付け根がうずく。そして尻の穴にまだ焙られるような感覚が残っている。それが絶えずゆきえを身じろがせた。

これからどうなるのだろうか、ということとは、もう考えないことにした。いくら足掻いてもどうにもならないのだ。それはこれまでの運命が証明していた。ただ、故郷の父母とさらに遠くなるのが、つらかった。それを思うと涙が出た。おとなしく真面目

で、よく出来た娘がこんなことになったと知ったら、母がどれほどなげくことかと思うと涙がこぼれた。それでいて、辻に刻み込まれた体のうずきは消えなかった。

夕方も暗くなつてから、辻が帰つて来た。酒を飲んだらしい赤い顔をしている。そしてソファに掛けると、また飲みはじめた。

「オトシマエはつけてきた。お前は完全におれのものだ。いいな」

ゆきえは何の表情もない顔で、うなづいて見せた。

「岩田さんに、ひどいことをしたんですか？」

「あんな男にでも情が移っていたのか」

辻は頬をゆがめて鼻を鳴らした。

「どうなったのか聞きたいの」

「軽くヤキを入れてやっただけよ」

軽くとは言ったが、それを言う時の冷酷な薄笑いで、およその事は察知できた。熊のような岩田も、ヤクザの組織が相手ではグウの音も出なかったに違

いない。ゆきえには話されなかったが、岩田は腕を折られ、商売道具の自動車をメチャメチャに壊されたのだ。

「あの野郎、おめえのほかにもう一人女を働かせていたなあ」

「芳江さん？」

「そう、芳江とかいって色っぽい年増だった。岩田の女房面していやがったが、奴の眼の前でおれたち三人がかりで、さんざんなぶりものにしてやったぜ」

「そう……」

何の感慨も湧かない。自分がこんな運命をたどるなら、芳江だって同じような運命をたどったっておかしくはない。

「あの女は風俗で働かせることにした。その方がコイルガールなんかさせておくより、よほど稼ぎがでけえからよ」

ゆきえは盛り場の裏通りにケバケバしいネオンをまたたかせている、そんな商売のことを思った。

「そうすると、このあたしも、風俗行きなのね」

「いや」

と辻は飲みかけのグラスの手を止めて言った。

「おめえはもったいねえ。おれの女にしたからにや、そんな安っぽい所で働かせやしねえ」

グイとネクタイをゆるめて、ひと息にグラスをあけた。

辻はゆきえに何をさせるともどこで働かせるとも言わずに、グラスを置くと、抱きすくめて来た。ゆきえも強いて問いただすこともせず、酒くさい口づけを受けた。

いましめを解かれたゆきえは、ベッドに大の字に寝ころんだ辻の服を脱がせて裸にした。肌と肌を寄せて添い寝し、抱きすくめてくるままに口づけを交わしながら、手で股間をまさぐった。力を得ていなくとも、それは大きい。自分の運命を決定づける大ききだった。尻の穴がうずき出した。

「口でやれ」

辻は仰向けになって命じた。酒のせいか、昼間芳

江を何度となく犯ったせい、今夜の辻は手だけでは大きくならないようだ。

ゆきえは辻の股の間に身をしゃがませて根を握りしめ、含んだ。もう一方の手で垂れ袋をゆっくり揉む。頭を振りながらそんな動作を続けていると、感情が濡れて来て我にもなく身が入った。唇を締めて先端を吸い込みながら鈴に舌を這わせ、握りしめた手で擦ってやると、それは口の中、掌の中で徐々に力を得てくる。その女にはない力のみなぎってくる。さまが、ゆきえをさらに女らしくする。

「うめえもんだな」

辻はゆきえの髪を掻きやって、口の動きを眼で追いながら讚めた。

「これならどこへ出しても一流で通る」

「わたしにどんなことをさせるつもりなの？」

ゆきえはつばきで濡れた口を離して、はじめて訊いた。

「兄貴が決めることだ」

「わたしはあなたの女になったのではなかったの

すか」

「おれの女、すなわち組の女だ。おれの一存にやいかねえのよ」

辻の口調には、ゆきえを自分ひとりのものにしておきたいという気持ちがありありと見えた。昨夜からゆきえの体のいたる所をなぶり抜いて、その良さに惚れ込んだのに違いはない。そんな自分をヤキがまわったと自嘲するふうだ。

ゆきえはふたたび辻を口に含んだ。誰のものになろうと同じことだ、と思おうとした。が、こわもてながら根は単純なこの男とならなにかやっていけそうな気がしていた所だけに、落胆の気持ちがあるのも否定できなかった。スケコマシといえど組でも下っ端なのだろう。コマしたスケは上の者にさし出して身の振り方を決めてもらうことになっているに違いなかった。

ゆきえはもの大きいが取り柄らしいこの男に、ふと愛着のようなものを感じて、愛撫に心をこめた。湧き出たつばきを指先に取って、奥深いアヌスをマツサージしてやった。そうしながら握りしめたものを擦ってやると、面白いように反応してくる。

「わたしは辻さんのものでいたいわ」

「おれだって離したくねえよ」

「どうしてもダメなの？」

「おめえのことをつい兄貴にしゃべっちゃまったんだ。明日兄貴が見にくることになっている」

酒気を帯びて帰って来たのは自分のせいだったのかもしれないと、ゆきえははじめて思い当たった。ふといとおしくなつてゆきえは、愛撫にこまやかさを加えた。

「すると、明日はもうお別れというわけね」

「それでもねえ。人前に出せるよう、もうすこし磨きをかけ





る間は、ここに居ることになるだろう」
ゆきえは重い袋をもたげて、蟻の戸渡りに舌を這わせた。
辻はううむと呻いて心地よげに身ぶるいした。女を泣かせる剛直の陰にこんな弱い所を隠し持っているところが面白い。
「辻さんとお別れになる前に、ひとつだけお願いがあるのだけれど、訊いていただけるかしら」
顔をもたげて、ふたたび亀頭に舌をなめずらせながら、ゆ

きえは上眼使いに辻を見た。

「なんだ。言ってみな」

「あたしをこんな女にした張本人のことなんですけど……」

「おめえをおとし入れた享子とかいう女のことか」

「そう」

「とくれば、後は聞かなくても分かる。仕返しして欲しいんだろう」

「ええ」

「姦るだけなら簡単なもんだ」

「それだけでいいわ。ただ、わたしの眼の前でして欲しいの」

「ここへ連れて来て姦りゃいいんだろう？」

「そう」

「いい家の人妻ってことだから、写真を撮れば金になる」

「そこまでは考えてないけれど……」

「写真で脅せば、売りだつてさせられる。おめえと同じようにな」

ゆきえの胸がさわいだ。あの高慢な水谷享子がヤクザの膝下にひれ伏して売春させられることを思っただけで、体の奥が熱くなった。

「でも、すぐ兄貴とやらしい人に取り上げられるんでしよう」

「……」

「そこまでは考えていないの。ただあの女が辻さんにメチャクチャにされてどんな顔をするか見たいだけなの」

「よっしゃ、やってやる」

辻はこらえかねたようにゆきえを腹の上に抱き上げてまたがらせた。ゆきえは辻のものを握って、濡れた股間に当てがい、嵌め込んだ。

「おめえと主演を争ったくらいだから、さぞや美人だろう。人妻つてもそそられるぜ」

「そんな気持ちでやろうってのね、あたしのことなどさておいて」

ゆきえはわざとスネて見せた。

「妬くんじゃねえ。おれはそんな気の強い女より、

おめえみていなやわやわとした、男に優しい女がいのさ」

「それがスケコマシの手なんでしょう？」

「今度ばかりは、コマされたのはおれの方かも知れねえ」

辻の言葉には真実味がこもっていた。

恫喝する刺青

次の日も昼過ぎになって、辻の兄貴分という男が外車で乗りつけて来た。その男、長谷川に対する辻のペコペコした態度で、ゆきえは組織内における地位の低さを、あらためて思い知らされた。

長谷川は三十も半ばの男で、身だしなみはスケコマシほどではないにせよ、ヤクザっぽい貫禄という点では、数段まさっていた。頭をクルーカットにして柔道家のようないかつい体をストライプのダブルのスーツで包んでいる。時々見える鋭い眼くばりは、人の背すじを寒くせずにはおかない。

長谷川はソファに股を拡げてドツカと坐り、金のシガレットケースから取り出した外国タバコに辻のさし出す火を受けながら、眼の前に立たされたゆきえから、片時も値ぶみする眼を離さない。

ゆきえは服を着たまま立っていたのだが、まるで素っ裸を見られてるように、身動きできなかった。膝頭が小刻みに顫えた。

「おめえが啞え込んだ女にしちゃ、上の部だな」

煙をゆっくり吐き出しながら、長谷川は言った。

それが最上のほめ言葉らしく、辻は喜色満面でペコペコしている。

「これでマゾというのが本当なら、クラブに出してもいいな」

「マゾという点では太鼓判を押しますよ」

「まあ見てからだ」

ゆきえは裸になることを命じられた。ゆきえは素直に命令に従った。パンティまで落として、生まれたままの姿を、はじめての男の前に立てた。

「手をどけろ」

低いなげない声にも否やを言わせないものがあった。ゆきえは胸と下腹に当てていた手を、うしろに組んでうなだれた。

「肌の白いのがいいな。これならライトにうつるだろう。奥の生えぶりも品がある。尻を見せな」

ゆきえは慄える足を踏みしめるようにして、後向きになった。

「よし。次は体を前に倒して足を拡げるんだ。もつとこつちへ寄せ」

ゆきえは長谷川の鼻先まで近寄って命じられた姿勢をとった。どこを見られるか言われなくても判った。その部分がヒクついた。

「まだ崩れていないな。おめえのデカ魔羅でやられ続けていたら、商売ものにならなくなるところだった」

長谷川の冷たい手がゆきえの尻の硬さを調べ、開陳されたアヌスに触れた。思わず声が出た。

「感度もよさそうだ」

それからゆきえはテーブルに上がることを命じら

れた。腰を落として股を拡げ、指でくつろげて見せろと言う。ゆきえは冷たいしこりを胸の中で呑み込みながら、命令に従った。毛を掻き上げて柔肉をくつろげて見せる指が、さすがに慄えた。

長谷川は金の指輪をはめた、よくマニキュアの行きとどいた指をさしのべて、クリトリスを剥き上げて大きさを調べ、ラビアのかたちと大きさ、厚みなども丹念に調べた。

「色が黒ずんでいないのがいいな。ここにピアスしてリングを嵌めたら映えるぞ」

長谷川も次第に氣を入れてきている。近頃まれな商品の質の高さに昂ぶっている。

「あとはどれだけ男を悦ばせられるかだが、商売をはじめてから、どれくらいになる」

「半年……くらいです」

はじめてゆきえは口をきいた。

「客は毎日取らされたのか」

「一週間に一度くらいです……」

「あの岩田とかいう男も、この女は大事に使って

たみたいだな。スレッツカラシの多い今の世の中で、これほどの女はなかなか見つからねえから、細く長く稼がせようとしたんだろう」

辻は長谷川の言葉に、いちいち相槌を打っている。女に対してあれほど威丈高になる男が滑稽なほどだ。そんな辻を振り向きもせず長谷川はオープンを続けるゆきえを眺めまわす。

「濡らしてきたな」

指摘されて、ゆきえは小さな声をあげ、股を反射的につぼめた。

「拡げていな」

ゆきえは唇を噛み顔をそむけて、慄える膝をくつろげた。

「命令されたら必ず返事をするんだ。いいか」

「……はい……」

「見せながら、もつと濡らして見せろ」

「ああ……」

「クリをいじってもいいぞ」

ゆきえはしっとり汗に光る乳ぶさを喘がせうなじ

まで染めながら、ゆっくり指を動かした。腰が自然にうごめき、かほそい声が洩れた。敏感なしこりをいじる指が、次第に熱い蜜にまみれだした。

「なるほど、こいつは本物のマゾみたいだな」

辻は揉み手せんばかりに大きくうなづいた。ゆきえを手離したくないと言った言葉も、兄貴の褒め言葉の前には立ち消えになった。

「縛られるともつと濡らしますよ」

「その前に、おれの服を脱がせろ」

「はい」

ゆきえは救われた気分で股を閉じ、テーブルを降りた。そこにウツソリと立った長谷川に、かほそい裸身をすりつけるようにして、ゆきえは服を上着から始めてネクタイ、シャツと順番に脱がせていった。長谷川はゆきえの体に触りもせず、じっと身を任せつ切りだ。かえってゆきえの方が触って欲しいと思ったほどだった。手を動かすたびにプリプリ弾む乳ぶさがいつしか感じられだし、乳首が立って甘いうずきを伝えはじめた。

SMマニアは毎月21日、全国書店で一斉発売です

凶獸が躍る刻

長谷川は背中に総刺青をしていた。凶柄は雲竜。刺青の男にはじめて接するゆきえは、不気味さの中に、異様なまでの昂ぶりを感じさせられた。それは、これでもうふつうの世界にはもどれないということが無意識のうちに感じ取ったせいかもしれない。

上半身を裸にすると、膝まづいてズボンを降ろし、靴下と一緒に抜き取った。あとは禪一本。その紐を解く手が慄え、胸が息苦しいまでに高鳴った。

長谷川の股間はゆきえの裸身を前にしているにもかかわらず、デレッとドス黒く垂れたままであった。そしてゆきえに息を吞ませたのは、剥け返った頭にも刺青がほどこされていることだった。

それは一對の、一見して猛虎のそれとわかる眼であつた。眼だけが爛々と光を放っている。辻の真珠

もゆきえをおびえさせたがこれはそれ以上だった。

「どうした」

さしのべようとした手を引つ込めてしまったゆきえを見降ろして、長谷川は薄く嗤った。その顔は明らかに誇っていた。

「商売女が、男のものを手にさわることもできないか」

ゆきえは息をつめるようにして、わななく手をさしのべて握りしめた。大きさは辻のにくらべて驚くほどのものでもなかったが、その眼がそれをおぎなつてあまりあつた。おそろおそろ両手に捧げるようにして動かしした。

擦るにつれてそれは力を孕み、双眸はさらに光を増した。いまにも空をのぞんで高々と雄叫びを上げそうな勢いである。眼をそらそうとすると叱咤された。眼を向けると鳩尾にジワリと汗が湧く。姦されないうちから、ゆきえはフラフラにされた。

それはゆきえの手の中でやがてややせり出し気味の腹を撃たんばかりに屹立した。



双眸がゆきえを凝視するみたいだ。その時はじめてゆきえは、瞳の刺青が怒張の極みに達した時女を直視するようなふうに彫られていることに気付いた。

「啞えろ」

長谷川は命じた。

ゆきえは魅入られたように口を寄せ、おののきを喉にこみ上げらせながら、啞えた。

瞳の放つ威圧が喉を衝き上げる。力が入らなかった。

「舐めろ」

おそろおそろの瞳のあったとおぼしい部分に熱い舌をからめ後は夢中だった。

呻きながら唇を締め、顔をゆさぶりつつ舐めまわし一方では握りしめた手を動かした。

右手は腰にまわして尻をまさぐった。そうしながらむせぶような声を出した。背すじにたえず戦慄が走った。

「辻、縛れ。しゃぶらせたまま縛るんだ」

「へい」

うしろから肩をたたかれて、ゆきえは長谷川にしがみつかせていた両手を背中にまわした。長谷川は女に積極的に出られるのを好まないのかもしれない、と思った。が、それにしても、一人の男に屈辱的な奉仕をしながら、もう一人の男に自由を奪われていくとは——二人の男を同時に相手にすることなどは初めてのゆきえは、昂ぶりに悶えすすり泣かずにはいられなかった。

ゆきえは後ろ手に縄掛けされた後も、フェラチオの中止を許されなかった。いつしか長谷川はソファに腰をおろし、その股間にゆきえが顔を埋める恰好になっていた。根を締め上げられた乳ぶさがうずき、胸が呼吸の乱れと共に締めつけられた。いつしか股を自分から踏み拡げて腰をモジつかせていた。

「鞭を使ってみろ」

長谷川はゆきえの髪をいじりまわし、乳ぶさをなぶりながら、辻に命じた。突き出されてうごめくゆきえの尻は、どんな男にも鞭打ちの欲望を起こさせ

る。

辻は喜々として鞭をふるった。鞭が尻に鳴るたびに、ゆきえは苦鳴を鼻から噴きこぼし長谷川のものをきつく啞えた。齒を当てずにいるのが精いっぱい

だった。それが面白いのか、長谷川はゆきえの髪を掴んで、強引に顔を動かした。ゆきえの眼から涙が噴きこぼれ口はみじめな音を発して、あごによだれをあふれさせた。その口の中で、双の眼は濡れて一

レイプ願望のある愛人

都内で自営業を営む30代の男性です。僕には妻には内緒で若い愛人がいます。愛人が好きなレイプはレイプなのです。それも最近マンネリ気味であまり興奮しなくなり、なにか打開策はないかと考えております。

車の中や野外、ビルの屋上と試した事もありました。その時は刺激があつて結構おもしろかったのですが、半年もたつとやはり飽きてしまします。

彼女は最近なつてこんなことを言い始めました。

「私を襲ってくれる男の人が他にもいたら、刺激的だと思ふの」

それを聞いた僕は、

「自分の好きな女が、他の男にレイプされるのは嫌だな」というと、

「それだつたら、相手の彼女も同じように貴方がレイプをすれば良いんじゃないかしら？」

といいます。つまり、交換レイプと言うか一種のスワッピングプレイです。エッチなことは大好きでSMの経験もあります。そういうプレイは初めてです。想像しただけで刺激的で、ペニス勃起して体が熱くなつて来ました。できれば二人の女を同じように開股縛りにして並べ交互にレイプしたいと思ひます。

(東京・利一)



層の輝きを加え、猛りまわる。

あぶら汗にまみれ、息も絶え絶えになったところで、ようやくゆきえは許された。ドタリと上体を床に投げだし、燃えるような尻をうねらせた。

そこに長谷川の手にした鞭が打ち降ろされた。

「ヒイーツ……ゆ、ゆるしてッ……」

辻のそれとは全く異質の鞭のふるいように、ゆきえは恐怖さえ覚えて、床の上を転がった。その腰に胸に脾腹に、的確な鞭がおそいかかる。髪を引っ掴まれて床を引きずりまわしながら、さらに打ち据える。男のサジスチックな欲望をたたきつけるような打ち方だ。

抵抗の気構えも失せ、氣息えんえんとして伸びてしまったゆきえを長谷川は爪先で仰向けに引っくり返し、力のない下肢を蹴り上げた。

無造作に太い指が秘肉を分けて突き入れられ、まさぐられた。そこは濡れそぼって灼けんばかりになっていた。ゆきえは無意識に鼻声を洩らし、腰をなよなよとゆすっていた。

「どうやら合格のようだ」

そう言つて長谷川はようやく鞭を捨てた。そして絨毯の上にあぐらをかいた。

「来い」

命じられても腰さえ立てる力のないゆきえは髪を掴まれて引き寄せられた。怒張の先端の双眸がドス黒く濁った光で、泣き喘ぐゆきえを見据えている。

「だらしがねえぞ」

髪を掴まれたまま、大きな掌で頬を打たれた。ガクン、ガクン、と首が捻じれるたびに髪が生え際が抜けんばかりの激痛に引き癡った。

ゆきえは泣きながら、やつとの事で長谷川のあぐらに這いのぼり、股を拡げてまたがった。腰をうごめかせて先端を咥え込むのも無我夢中だった。どうにか咥えて腰を降ろしてゆき、それがしつかり嵌まつてきた時には、安堵のあまり声が出た。

長谷川はゆきえの腰を両手に抱き込んで、しつかりつながつた。

「ああ……き、きついワッ……」

虎の眼が肉の秘奥をあの手で灼くようだ。子宮の底まで覗かれるおそろしさが、たえずゆきえを叫ばせた。

「もつとしつかり腰を使わんか」

長谷川の指がアヌスに押し込まれて来た。

「ヒイッ……い、いやあ……」

「締めてみる」

ゆきえは泣き声を逞しい長谷川のようなじに吐きかけながら、締めた。締めながら腰をまわした。

「あ、もう……」

「悪くねえ。自分で楽しんでいないで、もつと締めてみる」

「イ、イッ……」

歯を剥いてやや浮かせ気味にした腰をよじりたてた。

「た、たまらないわッ……」

よがり歎きに慄えながら、ゆきえは一方的に昂ぶらされてゆく。

「い、いかせて……」

「我慢しろ。ダラシがねえぞ」

「だ、だつてッ……ああ、いいわッ……」

ゆきえは白い尻を長谷川のあぐらの中で躍らせた。

長分川もこらえ切れなくなつたか、ゆきえの尻をさらに抱き込み、分厚い胸板で、乳ぶさが押しつぶされんばかりに締めつけた。

虎の双眸が飛び出さんばかりに輝きを強めるのが体の中に感じられた。ゆきえはヒーツと啼いて、刺青の輝く肩に噛みついた。

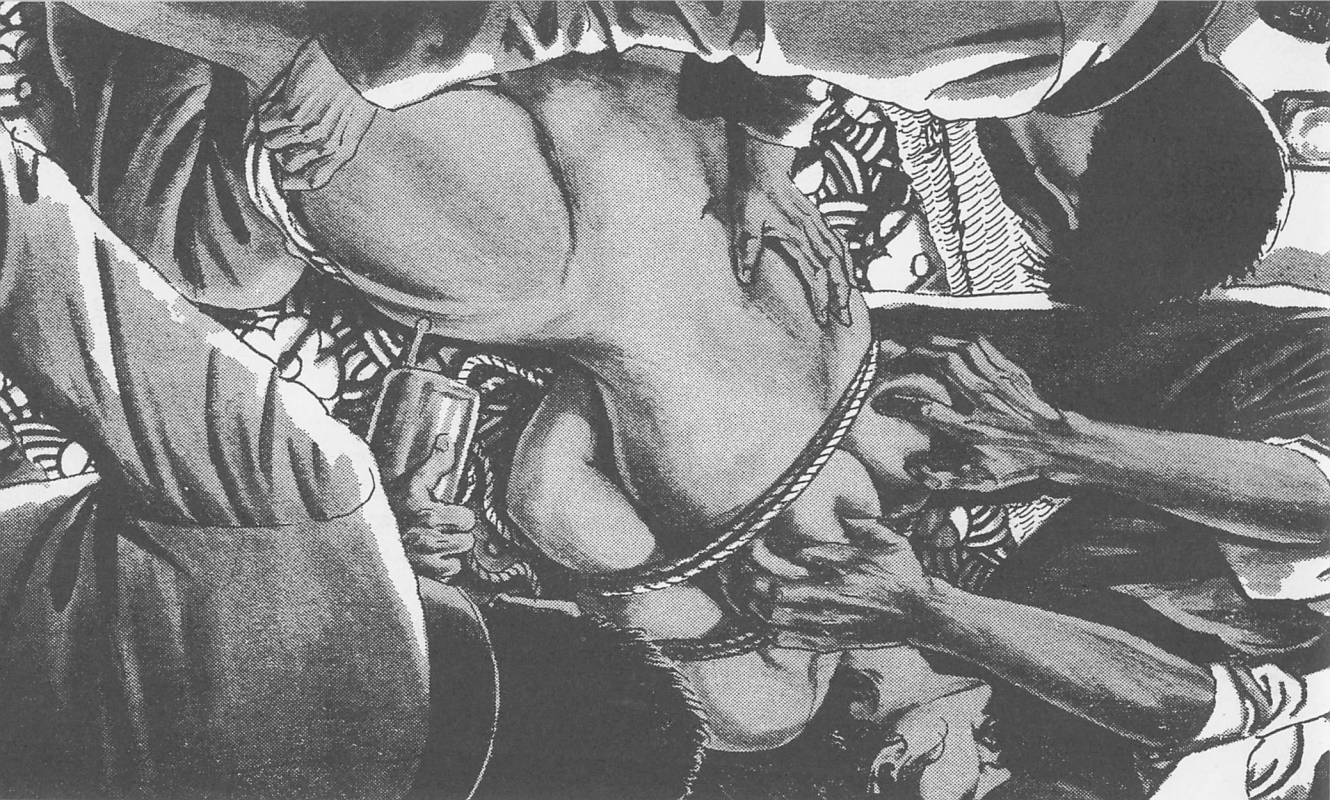
「いくッ……あ……いくうッ……」

ドツとよがり歎きを噴きこぼしながら、ゆきえは総身を激しく痙攣させた。

その悦びに収縮する肉の中に、猛虎が咆えた。火のようなその咆哮に子宮をたたかれたゆきえは、うむ、と白眼を剥いてうなつた。

スーッと意識が遠のいてゆく中で、ゆきえは荒々しく息をつく口が長谷川の口でふさがれるのを感じ取った。

(次号完結)



戯魔の虫吸

不良の杜の淫獣

結城彩雨

え／＼ミナミ高志

群虐の人妻絵図

このままではダメになってしまう……三枝子の心は重く暗い。いくら湯につかって清めても、思う存分に白濁の精を浴びせていった征治達の悪臭が、からだの隅々にまで滲み込んでいる。

それが三枝子の氣力を萎えさせる。逃げることも出来ない。かと言って、不良学生達によってたかつ

て犯され、こともあろうに浣腸までされたなどと、夫に言えるわけもない。

（どう、どうすればいいの……あ、あなた……ゆるして……）

疑うと言うことを知らない夫を見るのがつらい。自分を信じきっている夫をあざむいている我が身が恨めしい。

三枝子はつとめて平静をよそおった。いつもと変らずに朝食をすませ、夫を会社へ送り出す。

◆三枝子はうつ伏せにひっくり返される。両脚を大きく開かれて下腹部の下に枕が押し込まれる。美しい人妻の肛門に肉塊が進入する



「あ、あなた……」

「なんだい、三枝子」

「……いえ、なんでもないので……いつてらっしゃい」

夫は今日から三日間の出張である。夫のいない間が恐い。三枝子は不意に夫にしがみつきたくなった。

玄関まで夫を見送り、軽い口づけをかわした。夫を送り出すと、次は子供の番である。

「正樹ちゃん、はやくしたくしなさい。遅刻するわよ」

三枝子は子供のリュックサックに着がえや洗面用具、おやつなどを詰めた。

正樹は一泊で遠足に行く。長野県の高原へ。動植物の観察や登山など自然に親しむ課外活動である。

「お弁当はここに入れておきますからね。お菓はここ、いいわね、正樹ちゃん」

「うん」

正樹は素直にうなずいた。このところ征治達にい

じめられる事もなく、心の傷も癒えてきたのか、ようやく明るさをとり戻した正樹だ。

その正樹の為にも、三枝子は暗い心をかくして、つとめて明るく我が子に接した。せめて子供だけでも、一日もはやく悪夢を忘れて欲しい。

したくをすませると、三枝子は子供を学校の集合場所まで見送った。初等部の校庭である。リュックサックをしよわせ、お小遣いを渡すと、

「正樹ちゃん、うんと楽しんでいらつしやいね」

「いつてきます。おみやげ買ってくるからね、ママ」

うれしそうな笑顔を残して、子供を乗せた観光バスは走り去った。

夫は出張、そして子供は遠足へ……一人残された三枝子の脳裡に一抹の不安がよぎった。

我が家へもどうと初等部の校門を出ると、通りの電柱にガ克蘭姿が見えた。山西が電柱にもたれ、三枝子の方を見てニヤニヤと笑っている。

三枝子はハッと身を硬くした。やはり現われた。

逃げ出したいが足が動かない。さんざん犯されて、浣腸された所までビデオに撮影されている。逃げられるはずはない。

山西はあたりの様子をうかがってから、ゆっくりと三枝子の方へ歩いてきた。

「ガキは行ったか、へへへ」

どこで調べたのか、夫の出張のことまで知っている。

山西の眼が淫らに光り、三枝子の腰のあたりをなめるように見る。

「番長がお呼びだぜ、奥さん」

「何、何んの用なの……」

「番長の用と言や、決つてるだろうが、奥さん。ほれ、来なつて」

山西の手が三枝子の腕をつかんだ。逃がさない為か、痛いぐらいの力だ。三枝子にはわかに泣きたくなつた。膝がガクガクとふるえ出す。

高等部の壁ぞいに裏門へと引きたてられた。不良の森へ連れ込まれる。その森の奥に三枝子が征治た

ちにはじめて犯された空手部の道場があつた。

狩りと称して襲つてきた男達、裸で逃げまどつた三枝子、そして……思い出すだけでもブルツと身ぶるいがする。

今は閉鎖されている道場の部室へ連れ込まれると、番長の征治が待つていた。椅子にふんぞり返り、両足を机の上に乗せて、まだ昼前だと言うのにビールをあおっている。

征治の左右には功二と克也もいた。

「フフフ、待つてたぜ、奥さん」

征治が低い声で笑つた。

死んだ魚のような眼で見つめられると、三枝子は背筋に悪寒が走つて身がすくんだ。蛇ににらまれた小ネズミである。

（ああ、このままでは、本当にダメになつてしまう……）

そんな思いが再び三枝子の脳裡をかけめぐつた。気力をふり絞るようにして、唇をかみしめ、征治を見た。

「何、何んの用があると言うのですか」

「フフフ、わかつていくせに、かまととぶりやがる」

征治はニヤリと笑った。テーブルの上には巨大なガラス浣腸器が無雑作にころがり、不気味に光っている。

三枝子は唇をワナワナとふるわせた。

「もう、もう羞かしめられるのはいや……あなた達のおもちやになるのは、いやです」

三枝子は顔をひきつらせ、吐くように言った。

それを無視して征治はへらへらと笑うと、ビデオカセットを取り出して三枝子に見せつけた。

「奥さん、たいした人気だぜ。一本四万円でも飛ぶように売れやがる」

カセットのラベルには「人妻・須藤三枝子を狩る」と書かれていた。三枝子が我が家の客間で征治達に輪姦された時に撮影されたものだ。

「そ、そんな……」

三枝子はあわててビデオカセットを奪い取ろうと

した。だが逆にその手を克也につかまれた。

「もう遅いぜ、奥さん。三十本ダビングしたけどよ、ぜんぶ売り切れた、へへへ」

「いいオメンコしてるって、評判だぜ。奥さんはもう大スターだ」

克也と功二は意地悪く言った。

三枝子の顔がたちまち血の気を失って、蒼白になった。そんなおぞましいものが、三十本も売られたなんて……。

「ひ、ひどい……いやよ、いやッ」

「何がいやだ、フフフ、たいした人気だからよ。もう一本撮らせてもらうぜ、奥さん」

征治の言葉に、三枝子はひとつのどを絞った。

「いや、いやですッ……そんなことは、二度といや、いやアッ」

悲鳴をあげるのをかまわず、左右から克也と功二に腕を取られて、ズルズルと引きずられた。道場の方へ連れていかれる。

「何をいやがってるんだ。いい気持ちになれる上

に、裏ビデオのスターとして有名にしてやろうと言
うんじゃねえか」

「へへへ、空手部からビデオ撮影部へのくらがえつ
てところだな」

克也と功二はうれしそうに、へらへらと笑った。
部屋から道場へ入ると、元木と矢島、それに山西
も加わって撮影準備が出来上がっていた。汚いフト
ンが一枚敷かれ、それを取り囲んでビデオカメラや
照明器具がセットされていた。カメラは二台もあ
る。

「いや、いやあ……やめてくださいッ」

三枝子は克也と功二に引きずられながらもがい
た。

「今日は本格的に撮るからよ。時間をかけてこつて
り責めてやるぜ。覚悟しな、へへへ」

「題して『人妻三枝子の熟れた肉』ってところだ。

人妻の貫禄を見せて、うんと気分を出すんだぞ、奥
さん」

克也と功二があざ笑えば、征治は手の上で巨大な

浣腸器をころがしながら、

「フフフ、奥さんの今日の相手は、克也と功二だ。

せいぜい泣かせてもらうんだな、三枝子」

はじめると言う合図で、克也と功二は三枝子をフ
トンの上へ突きころがした。

ジイーと二台のビデオカメラが三枝子を狙って回
転をはじめた。克也と功二はガクランを脱いで裸に
なった。もう天を突かんばかりの肉塊が、凶器みた
いに反りかえっている。

「ひッ……いやッ」

美貌をひきつらせ、悲鳴をあげて三枝子は総身を
硬直させた。スカートの裾をひるがえして逃げる。
裸の克也と功二がニヤニヤしながら追いつめ、ビデ
オカメラが追う。

「ああッ……」

たちまち壁ぎわに追いつめられてしまい、三枝子
は絶望の叫びをあげた。克也と功二を見る三枝子の
美しい顔が、恐怖と絶望にゆがんだ。

「こ、こないでッ、こっちへ来ないでッ」

三枝子は恐怖の叫びをあげながら、背中を壁にすりつけて横にずれた。それをせせら笑うように、克也と功二はたくましい肉塊をわざとゆさぶつて見せる。

「へへへ、可愛がつてやるぜ」

「気どるなよ、奥さん。本当はこいつが欲しいくせによ」

克也と功二は左右から三枝子に飛びかかった。克也がブラウスのボタンをはずしにかかれば、功二はスカートのジッパーを引き下げる。

「ああッ、いや、いやですッ……やめてッ」

「ほれ、おとなしく脱いでスッ裸になるんだよ、須藤三枝子」

「やめてッ……いや、ああ、いやッ……」

ブラウスが剥ぎ取られ、スカートが形のいい足をすべった。間髪を入れず、ブラジャーとパンティに手がかかった。

「こんなものをつけやがつて。奥さんはいつでも犯れるように、ノーパン、ノーブラでいるんだよ」

「いやあッ」

下着が引き裂かれる鋭い音が、悲鳴と重なった。

官能を煽る指

一糸まとわぬ全裸に剥かれた三枝子は、両手を背中にねじ上げられて、フトンの上へ引きもどされた。

「フッフ、奥さんはやつぱりスッ裸が似合うぜ」

征治は手の上で巨大な浣腸器をもてあそびながら、ニヤニヤとながめている。だが、その眼にははやくも、嗜虐の色が淫らに光りはじめた。

克也と功二は三枝子の見事なまでの裸身を征治の眼にさらした。ビデオカメラにもじつくり撮らせる。

「奥さん、俺達のたくましいのにキスしな。うんと可愛がつて欲しいってな」

「いや、いやですッ」

三枝子はまだ自分に向けられるビデオカメラに、

生きた心地もなく、いやいやと激しくかぶりを振る。

「いやだつてえのか、奥さん。亭主一人じゃ満足出来ねえくせによ」

「どうやら縛らなきや、素直になれねえようだな、奥さん」

功二が荒縄を取り上げてビシビシしごとくと、克也が背中へねじり上げた三枝子の手首に巻きつける。更に縄は三枝子の乳房の上下にもくい込んできた。息詰まるきつい縄目だ。

「あ、ああッ」

三枝子は肌にくい込む縄の感覚に、全身から力が抜けていく。

克也と功二は、うしろ手に縛った三枝子をおおむけにひっくり返すと、左右から足首をつかんで引きはだけた。

「いやあッ」

三枝子はそのどを絞って泣き出した。内腿は筋を浮き上がらせるまでに割り開かれ、妖しい肉の花園が

あられもなくさらけ出された。

ビデオカメラのレンズが、グット迫る。克也と功二はつかんだ足首をグイと腹の方へ折り曲げ、いっそうあらわに股間をさらけ出した。

「うまそうなお×ンコしてるじゃねえか、奥さん。パツクリと剥き出したぜ」

「ガキを生んだとは思えねえぜ、へへへ、こいつがどう反応しはじめるか、楽しみだ」

克也と功二はすぐには媚肉に触れようとはせず、乳房や内腿に手を這わせはじめた。空手修行でゴツゴツした指先で、内腿を撫でまわし、乳房を荒々しく揉みしだく。

「あ、ううッ……」

三枝子は必死に唇をかみしめ、声を押し殺して頭を振った。

揉み込まれる乳房とつまみあげられてしごかれる乳首が、そして撫でまわされる内腿や腰が、いやでも女の官能を刺激され、妖しく熱をはらんでいく。

男達の手を払おうと、いくらかぶりを振り、腰を

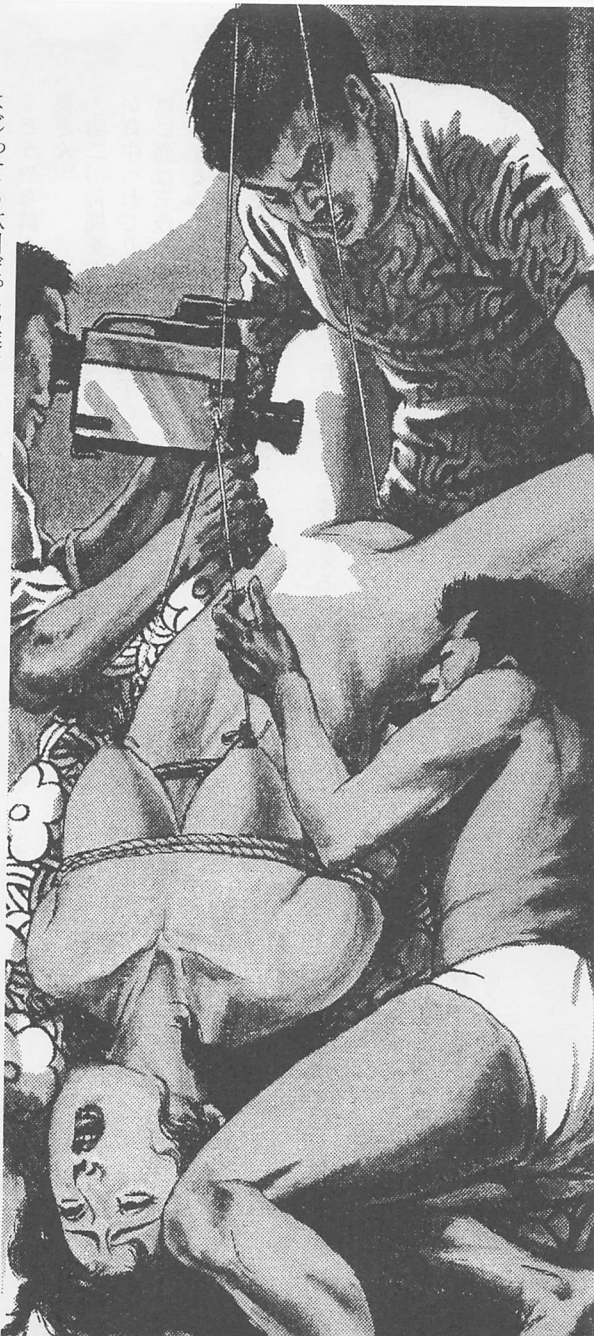
よじっても駄目だ。男達はおもしろがっていつそう淫らに指を動かしてくる。

「へへへ、気分出しなよ、奥さん」

「ほれ、カメラがしっかり奥さんのオムンコを撮っ

てんだからよ」

いやッ……と三枝子のはけぞらせた美貌を打ち振った。それでも乳首が固くとがりはじめ、熱をはらんだ膣の最奥から、ジクジクと羞かしい反応があふ



れ出た。

(だ、だめッ……ああ、いけないワッ)

おぞましきとは裏腹に、男達の指に反応してしま
う熟れた肉体が哀しく、くやしさに泣き声がこぼれ
出た。熱をはらんだ肉が、いやでもうずき出す。

「やめて……ああ、もう、やめてッ」

そう叫びながらも、三枝子はあえぎをとめられな
くなった。ビデオカメラに撮影されていると言う異
常な状態が、三枝子の感覚をも異常にする。

「ああ……お、おとなしくあなた達に犯されますッ
……ですから、カメラだけは……ビデオに撮るのだ
けは、かんにんしてッ」

こらえ切れずに三枝子は泣き声を放ち、哀願し
た。

「へへへ、あきらめな。奥まで剥き出しにして、ビ
デオに撮ってやるぜ、奥さん」

「ひッ、いやアッ」

触れられて三枝子は悲鳴をあげた。左右から媚肉
の合わせ目をつままれてくつろげられる。秘められ

た肉奥に外気がしのび込む感覚に、三枝子は気が遠
くなる。

「奥まで剥き出したぜ、奥さん、へへへ」

「もう濡らしてやがる、へへへ、いい色になったじ
やねえか」

男達の言葉に、三枝子はカァッと頭の芯が灼け
た。ビデオカメラの視線を、痛いまでに感じた。

「いや、いやアッ……ビデオはいや、お願いです、
撮らないでッ」

生きた心地もなく、三枝子は腰をよじり立てて泣
き叫んだ。ドツと汗が噴き出した。

だが、克也と功二はあざ笑うばかりだ。媚肉の合
わせ目をいっぱいにくつろげ、ビデオカメラに余す
ことなく撮らせる。

色といい形といい、これほど見事な肉の構造は他
にあるまい。子供を生んだにもかかわらず少しも型
崩れしておらず、まるで生娘のようなピンクの肉
襞、それでいてジクジクと果汁をあふれさせる妖し
いまでの成熟ぶりである。

「へへへ、もつとあふれさせるんだよ、奥さん。人妻の成熟した性をすっかりさらけ出すんだ。ほれほれ」

「今日はメロメロになって、入れて欲しくてしょうがねえと言う状態になるまで、こいつはおあずけだ、へへへ」

克也と功二は、たくましくそそり立った肉塊の先端を、三枝子の腰のあたりに意地悪くこすりつけた。

いつもならけだものさながらにいどみかかっているのに、今日はビデオカメラを意識して、執拗だ。

「へへへ、もつとズンとよくしてやるぜ」

「いやいやアッ……もう、かんにんしてッ」

「いい声で泣くじゃねえか、奥さん」

克也と功二は、指先で剥き出した肉襞をまさぐりつづけながら、媚肉の合わせ目の頂点、女芯をおおっている表皮をグイと剥いた。

「あ……い、いやッ……」

三枝子の腰がビクッビクッとおのきを見せた。

赤く充血した女芯が、ツンとビデオカメラに写し出される。人妻だけに、そこは毒々しいまでに熟し切っていた。

「いやアッ……」

「へへへ、いやじゃねえ。こいつをいじられるのが好きなくせによ」

固い指先が充血しきった女芯をこすり上げると、三枝子はひきつった悲鳴をあげた。顔をのけぞらせ、ガクガクと腰をゆすりたてる。

「や、やめてッ……あ、ああッ、いや、いやアッ……手をどけてッ」

息もつけないように、悲鳴が噴きあがる。

「フフフ、まったくいい声で泣きやがる。こいつは客が喜ぶぜ」

ニヤニヤと舌なめずりしながら、征治が言った。

泣きながらも、ジクジクと果汁をあふれさせ、官能を昂ぶらせていく女体の貪欲さに、征治は舌を巻く思いだ。

「もつと奥さんをとろけさせるんだ、フフフ、こい

つをせない」

征治は、釣り糸を功二の前に投げた。

克也と功二はニヤリと笑った。その釣り糸を天井のリングに通して垂らす。一方を克也が持ち、もう一方は功二が持った。

「ヒイヒイ泣かせてやるぜ、奥さん」

克也は釣り糸の先端に輪をつくると、三枝子の女芯をつまみ上げる。釣り糸の輪を通して、キュツと絞りあげる。

「ひいッ……」

ビクンと反り返って、三枝子は腰をゆさぶりたてた。悲鳴がのどをかきむしった。

「やめてッ……こ、こんなこと、かんにんしてッ

……」

「へへへ、そんなに気持ちいいのか、須藤三枝子夫人、それッ」

釣り糸のもう一方を持っている功二が、クイクイと引いて女芯を吊り上げる。

「ひッ……かんにんしてッ……ひッひいッ」

女芯を吊り上げられて、いやでも三枝子の腰が浮き上がる。腰をはねあげ、乳房をゆさぶって、まるで電流でも通されたように三枝子はビクンビクンと痙攣する。

「フフフ、もっと思い切って吊ってやれ、功二。乳首を吊るのも忘れるんじゃないぞ」

征治が非情に命じる。

押忍と言うなり、功二は更にむごく釣り糸を引いた。

ひいッ……と三枝子は激しくのけぞった。

「や、やめてッ……もう、かんにんしてッ」

「何を言ってやがる。こんなのは序の口、まだまだこれからだぜ、奥さん」

功二は女芯をむごく吊り上げながら、釣り糸のもう一方を三枝子の乳首に巻きつける。

先が二つに分かれていて、それぞれ左右の乳首につながれた。

「ああッ……こんな、こんなことって……もう、やめて……」

三枝子は顔をふりたくって泣きじゃくった。天井のリングを軸に、三枝子の女芯と乳首は天びんのように吊り上げられた。少しでも腰を落せば、女芯と乳首は釣り糸に引っぱられ、激痛が走った。

いやでも両膝を立てて開き、腰を浮かさねばならない。

「どうだ、ズンといいだろうが、奥さん」

「へへへ、そろそろ俺達の太いのを入れて欲しいんじゃないかねのか」

克也と功二は、釣り糸にむごく吊り上げられた女芯と乳首を、指先でつまんだりこすったり、揉み上げたりしながら、意地悪く言った。

三枝子は返事をする余裕もない。

ひッひッとのどを絞り、内腿を痙攣させるばかりだ。

「男にぶち込んで欲しいんだろ、へへへ、オメンコは、もうビチヨビチヨだぜ」

「いや……ああ、いや……ひッ、ひッ」

「まだとろけ方が足りねえようだな、奥さん。ど

れ、もつといじくりまわしてやるか」

男達はせせら笑い、更に指先でいじくりまわし、釣り糸をピンとはじいた。

踊る肉人形

三枝子はもう、男達の指先と釣り糸に踊らされる肉の人形だった。腰をはね上げ、総身を揉み絞るようになって、ひいひいとのどを絞った。

「あ、あ……た、たまらないッ……ひッひッ、もう、たすけてッ」

吊り上げられていじくりまわされる三枝子の女芯と乳首は、今にも血を噴き出さんばかりに充血して、痛々しい。

それをビデオカメラのレンズが、じつくりと這っていく。妖しいまでの女体の変化を、鮮明に撮っていく。ジクジクと果汁をあふれさせ、熱くたぎって収縮する媚肉の蠢めきさえ見逃がさない。

「どうだ、オメンコにぶち込んで欲しいとまだ言わ

ねえのか」

征治が克也と功二に向って言った。征治は洗面器にグリセリン原液と食用酢を混入し、巨大な流腸器の先でドロドロとかき混ぜた。

「どうやら三枝子に流腸する気らしい。だが、泣きじゃくる三枝子はまだ気づいていない。

「おめえらの責めが手ぬるいんじゃないのか。かまう事はねえ、ビシビシ責めあげろ、克也に功二」

「押忍ッ、もう少しだけ、番長」

功二がピンピンと釣り糸を弾いた。克也も女芯を指先でつまむようにして、しごきあげる。むごいまでのクリ責めだ。

「ひいッ……も、もう、ゆるして……三枝子、変になっちゃウッ」

「だったら、どうして欲しいか言うんだよ、奥さん、へへへ」

「ああ……三、三枝子を、犯して……でも、でもビデオはいや……」

三枝子は耐えきれずに、泣きながら言った。この

ままでは、本当にからだが灼けただれてしまいそうだった。

苦痛にも似た官能のうずきが、三枝子に拒らいたの氣力を萎えさせる。もう男達に犯されるしかないと言う絶望と諦観が、三枝子をおおった。だが、それをビデオカメラに撮られ、裏ビデオとして闇ルートで売られるのは耐えがたい。

「ビ、ビデオに撮るのだけは、かんにんして……お願いです」

「そいつは無理な相談だぜ。もう客の注文を受けちまったからよ、へへへ」

「いやあ……ああ、いや……」

「それなら、もつとじらしてやる、へへへ、どこまで強情をはってられるかな」

克也と功二は、三枝子の媚肉に責めを集中しはじめた。克也が吊り上げた女芯を責めあげれば、功二は肉襞に指先を這わせる。その間も、たくましい肉塊の先端をムッチリした太腿や腰にこすりつけた。

「あ、あああ……ひッ、ひッ、たまないッ、どう

かなつちやうわッ」

三枝子は我を忘れて泣き出した。両膝を立てて浮かせた腰を、淫らがましいまでうねらせつつ、あふれ出た果汁をツーとしたたせさせた。

氣も狂わんばかりに官能がふくれ上がり、頭の中がうつろに。必死に氣力をふり絞ろうとするが、もう駄目だ。

「ああ……し、して……」

自分の意志に関係なく、唇が動いた。

「へへへへ、何をして欲しいんだい、奥さん」

「……あ、あなた達の太いのを……三枝子の……三枝子のオ……オ×ンコの中に……入れて欲しい……」

三枝子は泣き声をのどに詰まらせながら、強要された言葉を口にした。本当なら一生口にする事のない言葉だ。

「それだけか、奥さん」

「ああ、犯される三枝子を……ビ、ビデオに撮って……」

言い終るなり、三枝子は身も世もなく身悶えしつつか号泣した。これをどんな男達が聞き、見るのか……ジイーと回転を続けるビデオカメラに、三枝子は死にたい気持ちだ。

「いいだろう、フフフ、ぶち込んでやれ。うんと深くな」

征治がへらへらと笑いながら命じた。顔はギラギラと油ぎり、嗜虐の興奮に酔い痴れている。

「押忍ッ……へへへ」

身を乗り出したのは克也だ。克也が一番手らしい。ペロリと舌なめずりをした。

指先を引きあげた三枝子の媚肉は、しとどに濡れそぼっていた。媚肉の合わせ目は赤く充血して、指でくつろげなくともめくれあがり、肉襞を生々しくのぞかせている。そして、その頂点に釣り糸で吊り上げられた女芯が、妖しく脈打っていた。

「へへへ、それじゃ入れるぜ、奥さん」

克也は三枝子の両膝の間に腰を分け入らせ、両わきに太腿をかかえ込んだ。

「あ、あ、待ってッ……
そ、それを……取って、
取ってからにしてッ」

三枝子は狼狽した。まだ乳首と女芯は吊られたままで、三枝子は腰を浮かせたままにいる。

「このままでいいんだ、
へへへ、ただ犯るんじや、おもしろえビデオは出来ねえからな」

「そんな……いや、あ、いやですッ」

逃げようとよじりたてようとしても、すでに腰はがつしり押え込まれている。

克也はニタニタと笑い、媚肉の合わせ目にそ



って灼熱の肉塊を二度三度と這わせ、三枝子に狂おしい悲鳴をあげさせて、ビデオカメラにじっくり撮らせた。

それからゆっくりと腰を突き出し、三枝子の肉壺に分け入らせていく。

「あッ……い、いやッ……」

いくら観念したつもりでも声が出た。

この前は犯される恐ろしさ、羞かしさにビデオカメラを意識する余裕はなかった。だが今は、撮られているという事が、逆に三枝子をおびえさせ、羞恥の渦へと落とし込む。

「か、かんにんして……」

三枝子は歯をカチカチとかみ鳴らしつつ、腰をよじりたてた。灼けるような感覚が媚肉に分け入って、三枝子は頭の芯が真っ赤に灼けた。

克也は三枝子の顔をのぞき込んで、クククツと笑った。

「どうだ、須藤三枝子。うれしいか」

「うむ……いや、あ、うむ……」

ギリギリと歯をかむ美貌をひきつらせ、三枝子は総身を揉み絞るようにしてうめいた。揉み絞る裸身から見る見る汗を噴いて、ズリ上がろうとする。

「へへへ、うんと深く入れてやるからよ。思いきって歎くんだけ、奥さん」

克也は三枝子の白い両脚をそれぞれ肩にかつぎ上げた。三枝子のからだを、腰を浮かせたまま二つ折りにしていく。

真上から杭を打ち込むように、グイグイとえぐり込ませた。

「からみついてくるじゃねえか、奥さん。好きだな、へへへ」

「あ……いや、いやッ……うむ……」

「いやがつてる割には、たいした締めつけようだぜ」

待ち切れないように、肉襞はざわめかせつつからみつき、吸い込もうとする三枝子に、克也は舌を巻く思いだ。犯れば犯るほど味がよくなる。

克也は浮きたつような心地で、からみつく肉襞を

奥へ引き込むようにして、いつきに膣奥まで押し込んだ。ズシッと先端が子宮口に達した。

「ひいひい……」

嫌悪とも悦びともつかないふるえが、三枝子の裸身に走った。泣き顔が大きくのけぞり、悲鳴がこぼれ出た。

「これ位深く入れりゃ、満足だろ、奥さん」

「い、いやあ……」

「もつと深く入れて欲しいってえのか、へへへ、ほれッ」

克也は更に子宮を押し上げるまでにえぐり込むと、ゆつくりと腰を使い出す。

功二もニヤニヤと笑いながら、三枝子の乳房を揉み込み、釣り糸を弾いて乳首と女芯をいたぶりはじめた。

「あ、ああ、いや……いやあ……」

黒髪をふりたくり、キリキリと唇をかんで三枝子は泣いた。

いくら頭をふつても、奥深く送り込まれてくる肉

欲の快美は、押しとどめようがない。

ツーン、ツーンと快美のうずきがからだの芯を走り、肉がドロドロにとろけていく。それに泣き声が妖しくからみついた。汗まみれの裸身が、うねりながら匂うようなピンク色にくるまれていく。

「あ、ううッ……あうッ……」

押えきれない歡き声が出た。

グイグイと灼熱の肉塊をえぐり込ませてくる克也と、乳房や女芯を丹念にいじくりまわしてくる功二と……。

たちまち三枝子はめくるめく官能の渦中に翻弄された。

「あ、ああ……」

「たいした歡こびようじゃねえか。そんないいのか、奥さん」

「ああッ……あうッ……」

三枝子は返事をする余裕もなく、ハアッハアッと熱い息をもらし、頭をグラグラと振った。肉人形さながらにあやつられ、三枝子はもう官能の波に押し

流されていく自分を、どうしようもなかった。

ビデオカメラに撮られているのを、恐ろしく思う
気持ちさえうつろになった。

「ああッ」

ひととき三枝子の裸身が大きく悶え、二つに折り
込まれたからだだが、克也をきつく締めつけた。ブル
ッ、ブルッと痙攣する。

「氣をやるのか、奥さん」

「ああッ……も、もう……」

「へへへ、まだだ。もつといい事をしてやるから、
それまで我慢しな」

突然、克也の動きがとまった。功二も釣り糸から
手を離す。

（そ、そんな……どうしてなの……）

三枝子は狼狼の眼で克也を見た。もう三枝子のか
らだは、あと一步という所まで息せき切って昇りは
じめている。

「ああ……」

どうしてなの、やめないで……そう言いかけて、

三枝子は唇をかみしばった。そんな浅ましいことを
言えるわけがない。

「フフフ、俺の出番のようだな」

征治がゆつくりと三枝子に歩み寄った。その手に
はグリセリン原液と食用酢をいっぱい吸いこんだ
巨大な浣腸器が握られていた。

官能の波間に

何をされたと思う間もなく、冷たく硬質な感覚が
三枝子の肛門を貫いた。

「そ、そこはいやッ」

あわてて腰をよじろうとしても、三枝子の中から
は二つ折りにされ、上から肉の最奥を杭のように貫
いている。

もはや、避けることは不可能だ。

「ひいッ……いや、いやあッ……それだけはいやあ
ッ」

何をされるのか知って、三枝子は弾かれたように

悲鳴を放った。

・浣腸器の嘴管で三枝子の肛門を縫うようにして、
征治はへらへらと笑った。

「浣腸してやるぜ、須藤三枝子。奥さんの大好きな
浣腸をな。こいつをされりや、思い切つて気をやれ
るだろうぜ、フフフ」

「いやあッ……かんにんして、それだけはッ、お願
いッ……」

浣腸……それはいたぶりの中でも、三枝子が最も
恐れている責めだ。それを犯されているさなかに、
しようと言う。

「フフフ、こっちの準備はいいぜ。プレイを再開し
ろ、克也」

「押忍ッ」

克也が再び腰をリズミカルに使いはじめ、功二も
指のいたぶりをはじめた。今度は本気になって、三
枝子をいつきに追い上げにかかった。

「あ……ああッ……いや……」

三枝子は狼狽に顔をひきつらせ、二つ折りにされ

た裸身を揉み絞った。

「へへへ、思い切つて気をやるんだぜ。人妻の熟し
切った性を、カメラにさらけ出すんだ」

と克也が一段と荒々しく衝き上げれば、功二も負
けじと三枝子の顔の所へ腰を落して黒髪をつかみ、
「こっちの方も楽しませてやるぜ、へへへ、ほれ、
下の口だけじゃなく、上の口でもくわえ込むんだ」
ズボッと三枝子の中に、押し込んだ。

「いや、いやあッ……」

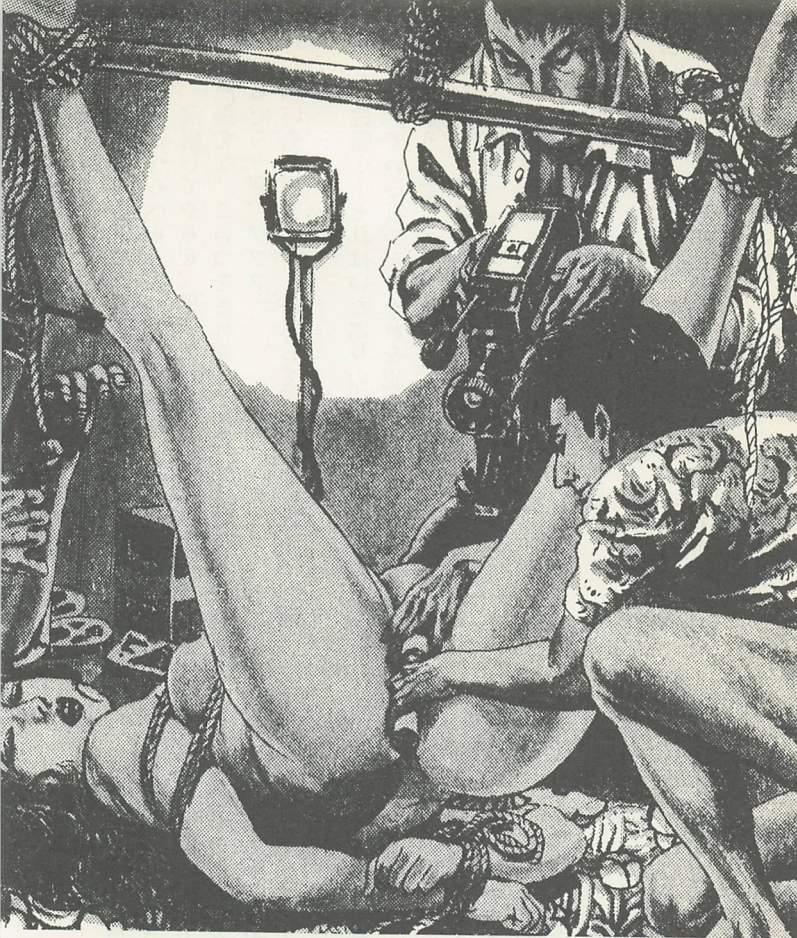
三枝子の悲鳴は、くぐもつたうめき声でかすれ
た。

浣腸におびえる余裕も与えられず、三枝子は上下
から貫かれて、たちまちわけもわからぬ状態へ陥さ
れていく。くすぶり続けた官能の炎に、油でも注が
れたようでカアツと燃えあがった。

「う、ううッ……うぐぐッ……」

三枝子はガクガクと裸身をはね上げた。息も出来
ない状態で、のどがひッひッと鳴る。

「フフフ、とどめだ、須藤三枝子」



征治は三枝子が生々しい
身悶えを見せはじめると、
ググツと巨大な浣腸器のポ
ンプを押した。ドクッドク
ツと重い薬液が三枝子の腸
管に流入する。

「ひい……」

三枝子は白眼を剥いて、
ガクガクと腰をふりたて
た。

「う、うむツ、ううむツ」

最初のひと押しで、いつ
きに昇りつめる様子だ。ガ
クンと腰をはね上げ、から
だ中を激しく突つ張らせ
る。その間にもひッひッと
のどを絞り、肉という肉を
痙攣させる。それは肉の最
奥をえぐり上げている克也

にも、唇を割って押し入んでいる功二にも、そしてポンプを押す征治の手にも、生々しい収縮となつて感じ取れた。

ガクツと三枝子のからだから力が抜けた。

だが、それでも男達は三枝子を責めるのをやめようとはしない。ビデオ撮影とあつて、克也も功二も、三枝子にのめり込むのを調整し、まだ果ててはいない。征治もまだ、千五百CCもの大量浣腸をはじめたばかりだ。

「へへへ、まだまだ、一回位気をやったって許しやしねえぞ」

「何回でも気をやらせてやる。ほれ、しっかりとねえかよ、奥さん」

克也と功二は上下からむごく三枝子を衝き上げて、釣り糸を弾いては三枝子の汗まみれの裸身に活を入れる。



「フッフ、輪姦じこみの奥さんだ。何度もいくのが得意のはずだぜ」

征治はわざと、ゆっくり浣腸器のポンプを押し続ける。

「うむ、ううむ……」

口をふさがれたまま、三枝子はうめいた。ビクツビクツと汗にヌラヌラ光る裸身が痙攣した。

官能の絶頂感にひたることも許されず、たて続けに追い上げられる。眼尻は吊り上がり、黒髪もヌラヌラ湿る凄惨な表情だ。

「ひい……うむッ、ひッ……」

声にならない声を、功二にふさがれたのどの奥から、三枝子は絞り出した。

「またいくのか、フッフ、その調子でどんどん気をやるんだ。それだけビデオを買う客も喜こぶからよ」

征治はあざ笑い、前の克也とリズムを合わせ、嘴管で三枝子の肛門をえぐり込み、こねくりまわしな

がら、薬液を吞ませていく。

ヒクヒクとおののき、時折り耐えきれないようにキュツと収縮を見せる三枝子の肛門が、たまらなく男心を蕩かす。

「うぐぐツ……うむ、ううむ……ひツ……」

三枝子は二度、三度と絶頂へ昇りつめていく。いや、絶頂感が継続しながら波打つと言った方が正しい。

そのたびに男達は、へらへらと笑った。

「こちらで一度、すつきりさせてやるか、フッフ、先は長いからな」

征治がニヤツと笑った。

押忍ツと克也と功二がうなずく。克也と功二とて、そろそろ精をこらえきれなくなつた。

「うむ……う、ううツ……」

三枝子はもう、半狂乱だ。めくるめく官能の炎の中で、からだ中が灼けただれ、我を忘れて自分から腰をうねらせた。

白眼を剥きつばなしで、功二を含まされた口の端

からは唾液をしたたらせて、総身に痙攣を走らせた。

「今だ。同時に噴き上げてやれ」

征治に言われて、克也と功二は猛然とスパートをかけた。今度はもう、耐える気はなかった。ドツとばかりに押えていた精を、思いつき放った。

それに合わせて、征治も浣腸器のポンプをいつきに押し切った。残り二百CCいっぺんの注入である。

「ひツ、ひいいツ……ううむ……」

ガクンとのけぞつた三枝子の裸身が、ひととき生々しく痙攣した。子宮口に肛門、そしてのに、三枝子は灼けるようなほとばしりを感じとつた。

グツタリと死体みたいに、三枝子の裸身が崩れ落ちた。

「フウー、まったくいい味した奥さんだぜ。息子がとろけちゃうかと思うぜ」

「口の方だって、たいしたもんだ、へへへ、さすが人妻だ」

克也と功二は法悦の熱い息を吐いて、うなるように言った。さすがに疲れたらしく、床に大の字になつてしまふ。

「どうしたい。もうダウンか、フッフ、だらしねえぞ」

征治が克也と功二に向つて言った。

「まだまだ、へへへ、これだけいい女を犯れるんだ。一回で終るかよ」

「いっぷくしたら、もう一度犯るぜ。今度は俺がオメンコだ」

克也と功二はへらへらと笑つた。タバコをくわえ、うまそうに吸う。

その横で二台のビデオカメラが、フツンの上の三枝子にレンズを向けている。

三枝子の両脚は、タガがはずれたように大きく開いたままだつた。激しいまでに濡れそぼつた媚肉も口を開いたままで、白濁の精をトロリとしたたせでいる。それは三枝子の肛門にまで流れおちて、ヒクヒクツツと蕾をふるわせている。

釣り糸にむごく吊り上げられた女芯と乳首も、赤くただれて痙攣していた。

それらをビデオカメラがじつくりと、なめるように撮つていく。あまりの生々しさに、カメラを持つ山西や元木の手もふるえる。

「フッフ、奥さんは休ませねえぜ」

征治は克也と功二に手伝わせて、三枝子の両脚を天井から吊つた。天井から竹刀を吊り下げ、その両端に三枝子の足首を縛りつけて、腰が三十センチ程浮くように吊る。

その両脚の前にかがみ込むと、

「浣腸だけじゃ、尻の穴がものたりねえよな、奥さん、フッフ」

征治は下からすくい上げるようにして、三枝子の双臀を撫でまわした。ムチムチした肉づきが汗でヌルヌルと、まるで白いモチみたいだ。

「どれ、尻の穴に触らせてみな、奥さん」

「あ……かんにんして……お尻はいや……」

三枝子はまだ正気にもどらないうつろな瞳を開い

て、腰をもじつかせた。

「奥さんは尻の穴までビデオに撮らせるんだ。須藤三枝子の尻の穴は、たいした評判になること間違いねえ」

征治は臀丘を割って、その奥にひそむ禁断の蕾を指先でまさぐる所を、カメラに撮らせた。

便意におののくのか、ぴつちりとすぼめた三枝子の肛門は、その粘膜が指先に吸いついてくる。

「あ、ああ……そこ、そこはいや……かんにんして……」

まさぐられたことで、急激に荒々しい便意がふくれあがったのか、三枝子は裸身を硬直させて、うめき声を洩らした。

「ひねり出したいんだろ、奥さん。千五百CCも流腸したんだからよ」

「いや、いやッ……ううむ……」

「無理すんなよ」

征治は便器を引き寄せた。

三枝子はいやいやと頭をふった。ビデオカメラが

しっかりねらっているのだ。汗に光る三枝子の肌に、更にあぶら汗がにじみ出た。

「それじゃ、栓をしてやるぜ、奥さん」

征治は張型を三枝子に見せた。これまで見せられた張型の中では一番小さいが、それでもかなりの大きさだ。それで肛門に栓をしようと言う。

「いやッ……そんなもの、使わないでッ」

「大丈夫だぜ。これ位なら奥さんの尻の穴には楽に入るはずだ、フフフ、それともひり出す所をビデオに撮らせるか、奥さん」

せせら笑い、征治は張型の先をジワジワと三枝子の肛門に押しつけた。たつぷりとクリームが塗ってあり、そのすべりを利用して押し込む。

「フフフ、どうだ。思ったより楽に入っていくだろうが」

「ああッ……い、いやッ……」

汗まみれの裸身をふりたてて、三枝子は唇をかみしばったまま泣いた。おぞましい排泄器官さえ嬲りの対象とされ、ビデオカメラに撮られているのだ。

「いや……ああ、もういやあ……ううッ……」

「いやがつてる割には、もうこんなに深く入ったぜ、奥さん」

あざ笑いながら、征治は克也と功二に眼くばせした。

ニヤツと笑った克也と功二が起き上がって三枝子に近づいた。

「尻の穴に栓をしてもらった事だし、第二ラウンドといくか、奥さん」

「今度はさっきよりずっと多く気をやらせてやるぜ、へへへ」

克也と功二はゆつくりと三枝子の裸身にまとわりついた。

「ひいいッ……」

三枝子ののどを悲鳴がかきむしった。

揺さぶりに歎く

もう、わけもわからぬ錯乱の内に、いったい何度

気をやらされたことだろう。

いくら泣いて哀願しても駄目だった。張型を引き抜かれ、おぞましい汚辱のほとばしりまでビデオカメラに撮られてしまった。そしていつしか、三枝子は頭の中が暗くなり、気を失った。

それから先の記憶はない。

「ほれ、しっかりしねえか、奥さん」

征治に頬をはたかれ、三枝子は低くうめいてうつろな瞳を開いた。身も心もズタズタになって、すぐには意識がはつきりしない。

そんな三枝子の耳に男達の声が響く。

「すぐに編集してダビングするんだ」

「今度は何本ぐらいやりやいいんですか、番長」

「とりあえず五十本だな、フッフ、飛ぶように売れる事だろうぜ」

恐ろしい言葉に、三枝子はハッと我に返った。

「ああ……いや……」

かぶりを振りながら、三枝子は涙をこぼした。撮影は終わった。それはおぞましいビデオが裏ビデオと

して商品化されることを意味する。

三枝子はドス黒い絶望の底なし沼へと落ちていく自分を感じた。もうどうしようもない。

「しっかりと云ったんだぞ、奥さん」

征治は三枝子を抱き起こした。すでに足の縄や釣り糸は解かれていたが、うしろ手の縄はそのままだ。

「ああ……かんにんして……もう、もう、ゆるしてください……」

「何を言ってやがる。奥さんは充分楽しんだかもしれねえが、俺はまだだ、フッフ、お楽しみはこれからだぜ」

「そ、そんな……」

三枝子は唇をワナワナとふるわせた。すでに元木

や山西らの姿はなく、克也と功二は床で大の字になっている。

一人征治だけが、ギラギラと欲情をみなぎらせ

ていた。

「……哀しい……ああ、死にたいほどみじめだわ……」

そうつぶやいてすすり泣くだけで、もう三枝子は征治にされるがままである。

征治は三枝子をうしろ手に縛ったまま立ち上げらせると、ハイヒールをはかせた。一糸まとわぬ女体がうしろ手に縛られ、ハイヒールをはいただけのかっこうが、征治の好みだった。

「ほれ、歩かねえか」

バシツと三枝子の双臀を張った。

三枝子はフラフラした。腰のあたりが鉛でも入ったように重く、まだ火照りがおさまりきらず、足元が定まらない。



「しゃんと歩かねえかよ。色っぽく尻を振ってな、フッフ」

「ああ……だって、だって……」

「しょうのねえ奥さんだ。どれ、支えてやるぜ、奥さん」

不意に指先で肛門をさぐりあてられ、三枝子はヒッと上体をのけぞらせた。

「ああッ、いやッ……も、もう、そこはかんにんしてッ」

「フッフ、指で支えてやろうと言うんだ」

せせら笑って征治は指先でジワジワと三枝子の



肛門を割った。指先で腸腔を縫う感じだ。

「どうだ、奥さん。浣腸のあとだけあって、もう指の根っこまで入っちゃったぜ」

「ああ、いや……」

三枝子は汚辱感に泣き声を高くした。おぞましさにしゃがみ込みたくても、征治の指が許さない。

「フフフ、須藤三枝子、いい尻だ」

征治はうれしそうに笑った。

人さし指をいっぱい三枝子の肛門に沈め、他の指は臀丘にくい込ませたまま、前へ押し出すようにして歩かせる。

克也と功二を残して、征治は三枝子を道場の外へ連れ出した。真昼の太陽を受けて、林の木々がキラキラと光っている。

「い、いやッ……外へ行くのは、いやです……かんにんしてッ」

「フフフ、こうやって指で支えてやってるんだ。歩くと尻の穴が気持ちいいだろうが」

「や、やめて……ああ……」

三枝子は強引に不良の森の中を歩かされた。足を進めるたびに征治の指が、肛門と腸管にこすれ、汚辱感にハイヒールが崩れそうになる。

人の姿はないとは言え、白昼、森の中を全裸で歩かされる羞かしさに、三枝子は気が狂いそうだ。

「フフフ、指をクイクイ締めつけやがつて」

征治はあざ笑うように言った。

森の出口が近づいてくると、三枝子はひとときわおびえて、裸身を硬直させた。木々の向うに運動場で体操している高等部の生徒達の姿が見える。三枝子は両脚を突っ張らせて進むことを拒んだ。

「ああ、これ以上はかんにんして……人に見られるう……」

「心配するな。着せてやるぜ、フフフ、だがその前にだ……」

征治は大きなぶなの木の幹に三枝子の正面を押しつけると、双臀をうしろに突き出させた。

指を三枝子の肛門から引き抜くなり、浣腸器の先をすばやく突き立てた。征治はカバンの中に容量千

五百CCの巨大な浣腸器を準備していたのである。

「やめてッ……ああ、浣腸はいや、もう、もう、いやッ」

「おとなしくしてねえと、スッ裸で街中を引きまわすぜ、奥さん」

「あ、いやッ……あ、あむ……」

ドクドクと薬液が流入してきた。三枝子は唇をかんで、うしろ手に縛られた裸身をワナワナとふるわせた。

白昼の野外で浣腸されるなど、三枝子には信じられないことだ。

「……かんにんして、あ、ああ……」

拒らう気力も萎え、三枝子は肩をふるわせてすり上げるばかり。

三百CCも注入したところで、征治は嘴管を引き抜いた。

「残りはあとのお楽しみだ、フッフ」

征治は浣腸器をタオルで巻いてカバンにしまおうと、ガ克蘭の上衣を脱いで三枝子の肩にはおらせ

た。

「それじゃ行こうか、奥さん。残りの浣腸は道々でチビチビとしてやるからよ、フッフ」

「そ、そんな……」

三枝子はいやいやとかぶりを振った。

だが、征治は長いガ克蘭の裾から三枝子の双臀に手をもぐり込ませ、再び指先で肛門を深く縫った。

「かんにんして……ああ、いやです……お願い……」

いくら哀願しても、三枝子は肛門の指にあやつられるように歩かされた。

運動場をまわり込んで、高等部の裏門から外へ出る。

「あ、ああ……」

三枝子は裸身を硬張らせ、泣き声をかみ殺して顔を伏せた。

白昼の通りは、けっこう人通りがあつた。

ガ克蘭の上衣を肩にはおらされているとはい

え、その下は一糸まとわぬ全裸である。へたに動く、ボタンをはめていないガ克兰の前から、縄に絞り込まれた豊満な乳房や剥き出しの下腹がのぞきそうになる。

三枝子は生きた心地がない。

「おとなしくしてねえと、いつでもガ克兰をひっぱがすからな、奥さん」

耳元で征治が意地悪くささやいた。

すれちがう通行人が、いちように三枝子をふり返った。

そして征治の手が三枝子の双臀にもぐり込んでいる事に気づくと、ギョツとした顔をする。

三枝子が余りに美しく、ガ克兰姿で素足を剥き出しという異様なかつこうが、いやでも人眼を惹いた。

征治の手が三枝子の双臀にのびているのを、よだれの垂れそうな顔で見送る男もいる。

(ああ、こんな……こんなことって……)

好奇と驚ろきの眼にさらされ、三枝子はわあっと

泣き出しそうになるのを、必死にこらえる。

「ほれ、そこを右にまがるんだ、奥さん」

「あ……ううッ……」

右だ左だと腸管の中でまがる指に、三枝子是从だ中に汗がにじんだ。足がガクガクして崩れそうになるたびに、指先でグイと肛門を吊り上げられた。

少し人通りが途切れると、征治は三枝子を路地に連れ込んだ。

「ここでもう一度浣腸してやるぜ。尻をこつちへ突き出しな、奥さん」

「もう、いや……ゆるして、お願い……人に見られるわ……」

いやいやと三枝子の双臀が左右によじれた。

征治は笑いながら、三枝子の双臀を剥き出して、バシッと張った。

「フッフ、こいつにはまだ千二百CC残ってんだ。三百CCずつとしても、あと四回は浣腸してやれるぜ、奥さん」

カバンから巨大なを取り出すと、征治は再び浣

腸をしかけていく。三百CC注入されると、また表通りに引き出された。

「ああ……」

永遠とも思われる道程だった。

官能的ファイナーレ

ようやく我が家に連れもどされた三枝子は、もう一人では立っていられなかった。道々四回にわたって浣腸され、千五百CC一滴残らず呑み込まされた。

「ああ……」

三枝子は歯をかみ鳴らしつつ、ブルブルと身ぶるいしている。耐えがたいまでに便意がふくれ上がっている。

ことに征治の指が腸管でうごめくと、

「あ、あ……かんにんして……うむむ……」

苦悶に美貌をひきつらせ、あぶら汗を噴き出した。

ググツと腹部が鳴り、腰がかたときもじつとしていられないように動いた。

「ああ、く、くるしい……も、もう……」

「我慢しろ。今すぐひり出させてやるからよ、奥さん」

玄関を上がると、ガ克蘭の上衣を剥いで全裸にした。ハイヒールははかせたままだ。

「は、はやく……おトイレに……ああ、たまんないッ」

「フフフ、たまんねえか。そいつはいいや」

征治は崩れ落ちようとする三枝子を抱きかかえて、台所へ入った。

「ううッ、おトイレに……」

「ひり出す所をビデオに撮らせておいて、今更トイレもねえもんだぜ。ここでひり出すんだ、奥さん」

「ううッ……うむ……」

反発する気力もなく、三枝子は腰をブルブル痙攣させた。あぶら汗に光る裸身は、荒々しく襲う便意に総毛立った。



「フフフ、尻の穴がヒクヒク痙攣してるじゃねえか。きつく締めつけやがつてよう」

もう一人では動く事もかなわぬ三枝子を、台所のテーブルの上にうつ伏せに横たえた。両脚をいっばいに左右へ開き、テーブルの脚にそれぞれ縛りつける。腹部の下にはクッションを押し込み、双臀をせり上がらせる。

「……ううッ、洩、洩れちゃう……」

とらされたかつこうを羞じらう余裕すらなく、三枝子は泣きながら双臀をよじっている。もう、出口を求めて荒れ狂う便意は、耐える限界をこえた。

「いよいよだな、奥さん。どんなふうにひり出すか、今回はじっくり見せてもらうぜ、フフフ」

便器がわりに洗面器をすえると、征治は顔がくつきそうにして、更に三枝子の臀丘を割り開いた。

指先で三枝子の肛門をまさぐる。

「あ、あ、やめて……指を、指を取って……」

「だめだ。じっくり見せてもらおうと言ったろうが、フフフ、指でも確めるのさ」

「……そ、そんな、指をどけて……ああ、出ちゃう」

「遠慮せずに出せよ。尻の穴を思いつきり開いてな」

「いや……」

最後の氣力をふり絞るように、三枝子は頭を振った。

おぞましい排泄を指でも確かめると言う征治の言葉が、三枝子には信じられない。だが征治の指は蛭のように吸いついて離れず、ゆるゆると肛門のまわりをまさぐってくる。

「ひッ……ひッ……も、もうッ……」

三枝子はガタガタとふるえながら、のどを悲痛に絞った。あふれ出ようとする便意を、とめられない。

三枝子は肛門の痙攣を自覚した。必死にすばめていたものが、盛り上がるようにふくれて口を開いたかと思うと、シャーッと薬液がほとばしった。

「フフフ、派手にひり出すじゃねえか、奥さん。尻

の穴もパツクリだ」

征治のからかいと肛門に這う指の感触、そして荒々しくほとばしる感覚が三枝子を絶望と汚辱感にまみれさせた。

「い、いやあ……」

号泣が汗まみれの三枝子ののをかきむしった。

征治はしぶきが顔に飛ぶのもかまわず、くい入るようにのぞき込み、指先でまさぐり続ける。生々しく口を開いた肛門の形をなぞり、その痙攣を感じ取る。

すでに浣腸されているだけあって、ほとばしるのは薬液ばかり。注入された量が、そのままそっくりひり出されてくる。

「生々しいぜ、奥さん。わかるか、こんなに尻の穴が開いているんだぜ、フッフ」

征治は意地悪く開花した三枝子の肛門に、指を出し入れすることさえした。

「や、やめてッ……ひッ、ひッ、いやあッ」

三枝子は半狂乱になった。おぞましさに引きすば

めようとしても、一度ほとばしったものは押しとどめようがない。

「いや、いやあッ」

「いい声で泣きやがる。フッフ、ひり出しながら尻の穴に触られるのが、そんなにいいのかよ、奥さん」

征治は天にも昇る快感に酔い痴れている。征治とて、排泄している女の肛門に触れるなど、これがはじめてだ。それだけ三枝子が美しく、妖しすぎると言う事だろう。

「たまらねえ……須藤三枝子の尻の穴か」

メラメラと嗜虐の炎が燃えあがるのを、征治は感じた。

三枝子がすっかり絞り切るのを待たず、征治は手にした張型の先を三枝子の肛門にあてがった。道場でのビデオ撮影の時、栓がわりに肛門に挿入されたものより、ひとまわり大きなものだ。

「ひいッ……なんということを……や、やめてッ」

激しい狼狽を見せて、三枝子は泣きわめいた。う

しろをふり返った三枝子の眼に、臀丘の谷間に押し込まれようとする張型が見える。その大きさに戦慄した。

次の瞬間、引き裂かれるような苦痛が肛門に走った。張型の先がむごく蕾を押し開いていく。

「い、いやアッ……痛、痛い……」

「派手にひり出していた時の、尻の穴の開き具合からすりや、これくらい入るはずだぜ、奥さん」

「やめてッ……あ、ああ、いや、いやッ……う、うむ……」

ひきつった三枝子の顔がのけぞった。ジワジワとねじり込まれて、息もつけずにひッひッとのどを絞った。

浣腸の後だけに、繊細な神経は昂ぶっている。それがただれんばかりに押し開かれ、ヒクヒクと張型をくい締めた。

「ほれみろ。うまそうにくわえ込んだじゃねえかよ」

「う、ううッ……取、取って……」

三枝子のはのけぞらせた顔を弱々しく振り、ハアハアと背中を波打たせて、苦しげにあえいだ。

「征治は出来るだけ深くねじ込んだ。」

「気持ちいいだろ、奥さん、フフフ」

「こ、こんないやらしいこと……気持ちよくなかないわ……いや、いや、取って……」

「オメンコをほおっておかれて、すねてんのか、奥さん」

意地悪く笑って、征治は前の媚肉にも手をのばした。長大な張型が征治の手の中にあつた。

「い、いやあ……もう、いやッ」

「このデカイのをくわえ込めば、尻の方までズンとよくなるぜ」

「いやッ……あ、ああ……ひいッ……」

媚肉の合わせ目に長大なものがのめり込んでくる感覚に、三枝子はズリ上がるようにして悲鳴をほとばしらせた。

薄い粘膜をへだてて腸管の張型とこすれ合いながら、長大なものは膣奥へ沈んだ。こすれ合う部分

が、灼けただれるような火花を放ち、三枝子は頭の中がそぞろになる。

「これでズンと気持ちいいはずだぜ、フッフ、前もうしろもよく締めやがる」

「ああッ……か、かんにんして……こんなのいや、もう、もう、いやッ」

おぞましいものを前とうしろに同時に挿入された恐ろしさに、三枝子は気が狂いそうだ。

「オ×ンコにぶち込んでやったのは、サービスだからよ。そのつもりでせいぜい尻の穴の方は気分出さんだぜ」

そう言うなり、征治は女の部分に埋め込んだ張型のスイッチを入れた。ブーンと振動音がして、三枝子の中で張型の頭が動き出した。肉襪をこねくりまわし、張型の頭が子宮口をなめる。

同時に三枝子の肛門の張型をつかんで、あやつりはじめた。気の遠くなる責めの二重奏である。

「ひいいッ、た、たままないッ……気が変になるわッ」

三枝子は腰をガクガクはねあげて、白眼を剥いた。とてもじつとしてられない。

膣奥をとろかす振動と、肛門をこねくりまわされる感覚と……それが薄い粘膜をへだてて連動しあう。

「ああッ……とめて、とめてッ……」

「そんな事を言いながら、もうオ×ンコの方はビチヨビチヨじゃねえか。負けねえように尻の穴も気分出せよ」

そんな事を言われても、三枝子は反発する気力もなく、ひいひいのどを絞って泣くばかりだ。何かなんだかわからぬままに、快美と苦痛が入り混じって、三枝子を錯乱へと陥していく。

征治は明らかに三枝子の肛門に焦点を合わせていた。膣奥は張型をくわえ込ませたままだが、肛門の方は自ら張型をあやつっている。まるで自分の肉で犯しているように抽送をくり返してはねじり、えぐってこねくりまわした。

「フッフ、尻の穴の方もいい感じになってきたぜ、

読者メッセージ

奥さん」

はじめは張り裂けんばかりにぴつちりと張型をくわえ込んでいた三枝子の肛門が、しだいになじんでくるのがわかった。

夢のようなひととき

3年ぐらい前になるでしょうか？
私はいつも愛読しているSM雑誌を購入し、家の近くでパチンコをしていました。その日はついていたのか、フィバーの連続。喜んでいと手がすべって、本が入っている袋を落としてしまいました。数冊のSM雑誌が下に散らばったのです。そのとき、隣の台に座っていた若い女性がチラツと表紙を見て、

「私、縛られるの好きなの」

とつぶやきました。

「俺、女を縛りたいと思ってるけど縛った事はないんだ」

と言うと、女は軍資金をくれるなら縛ってもいいということです。これは神がくれたチャンスだと思い、思いきって誘ってみました。

ホテルに行く途中に大人の玩具でロープを購入し、酒とつまみを大量に買ってから恋人同士のようにホテルにはいりました。よく考えてみれば、新しの援助交際だったのでしょうか。

恥ずかしながら、私はすごく興奮しました。しかし、イザという時に手が震えて縛る事ができないのです。

「しっかり縛りなさいよ」

と女に笑われる始末。女はフェラチオをしてくれて終わりました。それが私のSM初体験でした。(群馬・征平)

それと同時に、三枝子の身悶えが一段とあらわになった。なす術もなく苦痛と愉悦がもつれあう官能に翻弄されていく。

「あ、あああ……こんなツ……」



「フッフ、気分が出てきたな、奥さん。尻の穴で氣をやるんだ」

征治は張型をあやつりながら、バイブレーターのスィッチを入れた。

ビクンと三枝子の裸身がはねあがった。

「あ、ああッ、もう……ああッ……」

火のような衝撃がからだの芯を走り、三枝子は我を忘れて官能の絶頂へのめり込んでいった。

昏迷の中の淫

外はもう、夕陽が西の空へ沈みかかった。

三枝子は夕食のしたくをさせられていた。一糸まとわぬ全裸に、腰にエプロンを巻いただけのかっこうである。もう縄も解かれ、張型も引き抜かれていたが、肛門の張型だけはそのままだった。足にはハイヒールをはかされている。

三枝子は征治の為にステーキを焼いた。

「フッフ、奥さんは料理が上手だな。もつと肉を焼

きな。精をつけておかなくちやよ」

征治はガツガツ食った。朝から三枝子を責めるのに夢中で、何も食べていないだけに、さすがに腹がへっている。

食べる間も征治は三枝子を横に立たせ、ネチネチと双臀を撫でまわした。

「奥さんの尻もステーキにすりや、さぞかしうまいだろうぜ、フッフ」

そんな冗談を言いながらも、三枝子の双臀をかたときも離そうとしない。

「……お願い、もう……もう、かんにんしてください……」

三枝子はうなだれたまま、すすり泣くような声で言った。撫でまわされる双臀を、いやでならないと言ったふうによじる。ハイヒールをはかされている為、臀丘がキュッと締ってせり上がり、それがいやでも肛門の張型を感じさせた。

「ああ、もう……帰ってください……」

「バカ言うな。俺はまだ奥さんを犯っちゃいねえ、

フフフ、それに亭主が出張なのはわかってるんだぜ」

「……………」

三枝子は絶句した。やはり夫の出張のことまで調べていた。

「フフフ、今夜はじっくり楽しませてもらうぜ、奥さん。このムチムチの尻をよ」

「……三、三枝子、本当にダメになつてしまふわ……」

哀しげに言つて、三枝子は涙をこぼした。

哀願してもきいてくれる男ではない。哀願すればする程、自分がみじめになるだけだ。結局は征治の思い通りにされてしまう事はすでにいやと言うほど思い知らされた。

食事をすませると、征治は三枝子を浴室へ連れ込んだ。浴槽にはすでに湯が満々とはられていた。

「夜のお楽しみに向けて、からだをほぐしてやるぜ、奥さん、フフフ」

征治は三枝子を抱き上げると、湯につかった。ザ

ーと湯があふれ出た。

湯のぬくもりが、さんざん荒しまくられ、疲れ切つた三枝子のからだにしみわたる。それが張りつめていた気持ちをはぐすのか、三枝子はシクシクとすすり泣きはじめた。

「泣くのはまだはいぜ。いやでも今夜はひいひい泣かせてやるからよ」

征治は浴槽の中で三枝子を膝の上に抱いて、乳房をねっとりといじくりまわした。首筋に唇を這わせる。

「ああ……」

三枝子は顔をのけぞらせて、グラグラと振つた。揉み込まれる乳房が妖しい快美を呼び起こす。おぞましいと思つても、からだは征治のいたぶりになじまされている。たちまち乳首が固くとながつてきた。

「フフフ、ますます敏感になるようだな、奥さん」

「ああ、どこまで辱しめれば、気がすむと言うの」「どこまでもさ、フフフ、骨までしゃぶるつてやつ

だ。ほれ、尻を見せろ、奥さん」

征治は三枝子の双臀をもたげさせた。浴槽の縁に三枝子の腹部を押つけ、上体を浴槽からのり出させる。

湯面からポツカリ浮き出た臀丘がヌラヌラと濡れ光り、ムチツと官能美あふれる肉づきが弾けんばかりだ。そして、臀丘の谷間には痛々しいまでに張型がくい込んでいる。

「何度見ても、まったくいい尻をしてやがる、フッフ、この尻が俺を狂わせるぜ」

征治は眼の前の三枝子の双臀に、口づけしように手を這わせた。じつくりと撫でまわしてから張型に手をかける。

「あ、あ……いや、そこはもう、もう、かんにんしてッ」

にわかに泣き声を高くして、三枝



子は双臀をゆすりたてた。

「いや、いやですッ」

「じつとしてろ。いい尻して泣くん

じゃねえよ、三枝子」

「ああ、ゆるして……」

ゆつくりと張型がゆさぶられ、まわされた。いっぱい押し開かれ、ぴっちり張型をくわえ込まれている三枝子の肛門が、ひきつれるように歪んだ。

湯が荒しまくられた肛門の粘膜にヒリヒリと泌みた。

「あ、ああ……お尻はいや、もういやッ」

「尻をシャンと持ち上げてろッ」

パシッと臀丘をはたいては、またゆつくりと張型をあやつる。

たちまち三枝子の肛門は、水分を含んだ真綿みたいな柔らかさを見せ



はじめ、張型の動きがめだつてなめらかになった。

「お願い、もう……ああ……」

おぞましさと嫌悪だけしかないと思いつながらも、その底で得体の知れない妖しい感覚が湧き上がるのを、三枝子は昏迷の中に感じている。

「フフフ、だいぶ尻の穴がほぐれてきたようだな、奥さん」

征治はねじるようにして、張型を引き抜いた。数時間にわたって拡張を強いられた三枝子の肛門は、括約筋も麻痺したように生々しく腸腔までのぞかせている。

それを征治は指先でゆるゆるとまさぐった。指が二本楽々とする。

「いい感じだ。そそられるぜ、フフフ」

「あ、ああッ……もう、お尻はゆるして……ど、どんなことでもされますから、お尻だけは……」

繊細な肛門の粘膜は、湯と指のいたぶりにただれたようにズキズキとうずいた。

双臀がうねり、湯が波打つてあふれた。

「俺は奥さんのここがいいんだ。須藤三枝子の尻の穴がな、フフフ、もっとよくしてやるぜ」

征治はいやらしく舌なめずりをしたと思うと、いきなり三枝子の肛門に吸いついた。

「ひいッ……そんな、そんなところにッ……」

べちよという感じで吸いついた唇に、三枝子は総毛立った。おぞましい排泄器官を唇で吸われる、三枝子には信じられない。

「いや、いやあッ」

双臀が征治の顔をはじき飛ばさんばかりに躍った。

だが、いくら泣き叫んでも征治の唇は、蛭のように吸いついてはなれない。

グチュグチュと唇が鳴り、舌先が粘膜をなめあげる。それは腸管の中にまでもぐり込んで、ペロペロと蛇みたいに動いた。

「フフフ、どうだ、奥さん」

征治は一度顔を上げると、ニヤツと笑った。口のまわりがベトベトで淫らに光っている。

「奥さんは幸福者だぜ。こうやって尻の穴までなめてもらえるんだからよ、フフフ」

「い、いやらしいだけだわ……ゆるして……ああ、もう、かんにんして……」

「そんなに尻の穴はいやなのか、奥さん」

そう言うなり、征治は再び三枝子の肛門に吸いついた。三枝子がいやがればいやがる程、征治は肛虐に酔いしれる。

「やめてッ……ひッ、や、やめてッ」

三枝子は顔をのけぞらせたまま、黒髪をかきむしるようにして、切羽つまった泣き声をあげた。

それが征治を喜ばせることになるかわかっていても、三枝子は泣き叫ばずにはいられない。

「すっかり尻の穴がとろけたな、奥さん」

ようやく征治が唇をはなした。ペロツと舌なめずりする。

うわ眼使いに見上げた三枝子の顔は、おぞましいいたぶりに赤く上気し、悩乱にゆがんでいる。

汗にまみれ、ハアツハアツとあえぐ表情が魅力的

だ。

「フフフ、こんなに尻の穴を開いて、何か入れて欲しくてたまらんと言った様子だな、奥さん」

「ああ……もう、これ以上は……か、かんにんして……」

「フフフ、夜は長い。まだまだ、これだけいい尻の穴をほつとく手はねえぜ」

征治は意味あり気に笑った。

浴槽から三枝子を出して、石鹸をヌルヌルと裸身にぬりたくった。

三枝子のからだを洗うというよりは、愛撫している感じがした。

ツンと乳首のところがった乳房を撫でまわし、腰から双臀、太腿へとすべらせる。

「ああ、お尻はいや……もう、いや……」

「フフフ、ベッドインの為に尻の穴もきれいにしなくちやよ」

「……どうして、どうしてお尻ばかり……ああ、いやなのよ……」

「フフフ、今にすぐわかる」

征治はうれしそうに笑った。その眼には嗜虐の欲情がメラメラと燃えた。

三枝子は底知れぬ不安に、ブルブルとからだのふるえがとまらなくなった。

嗜虐者の標的

浴室を出ると、三枝子は二階の寝室へ連れ込まれた。

一糸まとわぬ裸身に、ハイヒールをはかされただけである。

湯上がりの肌がピンクに色づいて、ほんのりと湯気をあげて妖しい。

「化粧しな、フフフ、この俺に犯られる為の化粧だ。うんとみがき上げるんだぜ」

三枝子は命じられるままに、三面鏡に向った。洗髪をきれいにセツトし、真っ赤なルーージュを引く。

征治に犯される為の哀しい化粧である。

征治はベッドの上でビールをおりながら、ニヤニヤと三枝子が化粧するのをながめている。

「フフフ、美しい女だぜ。よし、こっちへ来な」

征治はいやらしく手招きした。

「奥さんがいつも亭主に抱かれていたこのベッドの上で、たっぷり犯ってやるからな。今夜は覚悟しな」

「……………」

三枝子はどうも言わなかった。

唇をかみしめてうなだれ、オズオズと征治の前へ進んだ。

「縛るぜ、奥さん」

征治は荒縄をビシビシしごいた。三枝子の手を背中にまわして交差させ、縛りあげた。乳房の上下もきつく絞りあげる。

いつになくきつい縄目に、三枝子は背中を丸くしてうめいた。

「いい肉づきしているだけあって、縄がよくくい込

みやがる、フッフ」

征治は三枝子をベッドの上にあおむけに押し倒した。足首をつかんで左右へ割ると、その間にかがみ込む。

三枝子は唇をかみしめて、両眼を閉じた。もう何も言おうとしない事実が、悲痛な覚悟をうかがわせる。

「今夜は俺の女だと言うことを、このからだに思い知らせてやるぜ」

征治はそんな事を言いながら、ゆっくりと三枝子の内腿に手を這わせた。ゆるゆると撫でまわしながら、しだいに指先を媚肉の合わせ目へと這いのぼらせる。

くつろげた三枝子のそれは、すでにじつとりと濡れている。

「もう濡れてやがる。風呂場で可愛がつてやったのがきいたようだな、奥さん」

「う、うッ」

三枝子は声をかみ殺して、低くうめいた。征治は

三枝子の反応をうかがいながら、媚肉に指を這わせていく。

「奥さん、この俺の女になるつてことが、どういう事かわかるか」

「……ううッ……」

「フッフ、すぐにたつぷり思い知らせてやるぜ。とびきりの方法だよ」

ねちねちと三枝子に語りかけながら、三枝子の中指を沈めにかかった。

人さし指を膣の最奥に、中指を肛門にあてがつてジワジワと沈め、親指で女芯をいびりにいく。

同時にもう一方の手を、三枝子の乳房にのぼした。

乳房に膣奥、そして肛門に女芯と四ヶ所の同時責めである。

「あ……ああ……」

かみしばっていた三枝子の唇が開き、耐えきれない嬌声が出た。

「い、いやあ……そ、そんなッ」

胴がブルブルとふるえ、からだの芯がキュッと絞れた。

いくら嫌悪しても、まだおさまりきっていない浴室での官能の残り火が、ジワジワと三枝子をあぶりたてた。

「あ、あ……かんにんして……ああッ……」

からだの芯が灼け、それはどうしようもない愉悅の証しとなって、ドロドロとあふれた。

たちまち三枝子は、息も絶えだえにあえぎ出した。

「感じ出したな、奥さん。前もうしろもクイクイ指を締めつけてくるじゃねえか」

「ああ……たまんない……」

「その調子でどんどん燃えな、フフフ」

征治は酔い痴れたように責め続ける。親指で女芯をこすり、揉み込みながら、膣の最奥と肛門に埋め込んだ指を粘膜をへだててこすり合わせ、抽送する。

ジクジクと果汁があふれ出て、征治の指がうごめ

くあたりは、しとどに濡れそぼっている。

朝から何度となく責め続けられていると言うのに、なおも生々しく反応を見せる人妻の性に征治は舌を巻く思いだった。

「俺のをぶち込んで欲しくなったら、おねだりするんだぜ、奥さん」

「ああ……いや……」

三枝子のかぶりをふる。もう湯上がりの肌に玉の汗をじつとりと浮べ、腰のあたりをブルブルふるわせてあえぐ。

押えきれない戯き声が出た。

「あ、ううッ……ああうッ……」

「フフフ、奥さん。欲しいんだろ」

三枝子はガクガクとうなずいた。

もううなずくしか、征治のいたぶりをはやく終わせる方法はない。

このままでは……一度や二度、気をやったくらいで許してくれる征治ではない。

「欲しいなら、はつきり言え」

「……欲、欲しい……ああ、征治さんの……太いのを三枝子の中に……入れて……」

「フフフ、入れて欲しいか。よしよし、約束通り、とびきりの方法で犯ってやるぜ」

ニヤリと笑うと、征治は三枝子をうつ伏せにひっくり返した。

新しい縄を手にして、三枝子の両脚を大きく開かせてベッドの脚に縛りつけた。

腹部の下には枕を押し込み、双臀をより高くもたげさせる。

「フフフ……」

征治はピタピタと三枝子の双臀をたたいた。

それから再び、三枝子の肛門に指先を這わせた。

「あ、ああ、そこは……」

てつきりうしろから灼熱の肉塊が、媚肉に思っていただけに、三枝子は狼狽した。征治は、三枝子の肛門を指でいたぶりはじめたのだ。

「おとなしくしてろよ。すぐ入れてやるからな、フフ、潤滑油にはこいつが一番だ」

征治は冷蔵庫から持ってきたバターを手にすると、それを親指ほどの大きさに切って三枝子の肛門にねじ込んだ。二つ三つと押し入れる。

「ああ、何を……何をしているのッ……」

「フフフ、バターが奥さんの尻の中でとけりゃ、ズンとすべりがよくなるってもんだぜ」

「……………」

三枝子は何を言われているのか、わからなかった。その間にも腸管でとろけたバターが、トロリと肛門から滲み出た。

征治はそのバターをまぶすように、三枝子の肛門を揉み込んだ。

「何を、何をする気なの……言って……」

三枝子はおびえた。何か底知れぬ不安と恐怖がふくれあがった。

「フフフ、奥さんの処女をいただくのさ」

「……………」

「分かんねえのか。奥さんの尻の穴に俺の太いのをぶち込んでやろうと言ってるんだ」

三枝子の美貌が血の気を失って、蒼白にひきつった。ワナワナと唇がふるえたかと思うと、

「ひいッ……」

絹を裂くような悲鳴が、のけぞった三枝子ののどにほとばしった。

三枝子は、おぞましい排泄器官が性行為の対象になるなど、考えた事もない。

「いや、いやアッ……そんな恐ろしいことは、いやあ……」

三枝子は狂ったように泣き叫んだ。

「俺はどっちかと言うと、女の尻を犯るのが好きだね。まして奥さんの尻の穴となりや、フッフ、胴ぶるいがくるぜ」

「いやあ……お、お尻でなんて、いや、いやッ……そんなひどいことッ」

「亭主さえ触わらせた事のねえ尻の穴を掘られ、この俺の女になるんだ、フッフ」

さすがの征治も肛姦の興奮に声がうわずった。三枝子の肛門を揉み込む手もふるえる。

のぞき込んだ三枝子の肛門は、滲み出たバターにねっとりとし光り、おびえたようにヒクヒクあえいでいた。

征治のたくましい灼熱で割り開くには、あまりに痛々しい。

「ゆるしてッ……お尻でなんて、いや、いやアッ」
「あきらめな、奥さん」

征治はゆつくりと三枝子の上へのしかかっていた。
(以下次号)

SMマニア 9月号

定価980円 本体933円

平成19年9月1日発行

編集人 黒岩 絃
発行人 黒岩 絃

発行 マイウェイ出版(株)

〒102-0073

東京都千代田区九段北4-1-26

第一稲穂ビル2F

営業 ☎03-5216-3641

編集 ☎03-3556-1353

印刷所 株式会社光邦
小宮山印刷株式会社

小誌を直接購読される方は現金書留でご送金願います。一部980円(送料100円)です。
半年(5880円)または一年(11760円)の長期購読の場合、送料は当社が負担いたします。

マイウェイ出版 通信販売のお知らせ



DVD二穴同時激ハメ!
付録DVD収録時間:180分
A5版/定価2300円(税込)



変態人妻性乱季
付録DVD収録時間:165分
A5版/定価2500円(税込)



生搾り母乳奥様
付録DVD収録時間:240分
A5版/定価2500円(税込)



M女の巣蜜猟性書
付録DVD収録時間:170分
A5版/定価2500円(税込)



淫縄電マ絶頂体験DVD
付録DVD収録時間:150分
A5版/定価2800円(税込)



巨乳熟母近親愛
付録DVD収録時間:155分
A5版/定価2500円(税込)



エクスタシーフィリピン
付録DVD収録時間:120分
A5版/定価2300円(税込)



ニューハーフDVD④
付録DVD収録時間:180分
A5版/定価2500円(税込)



女子トイレの秘密
付録DVD収録時間:180分
A5版/定価2500円(税込)



腋毛美人
付録DVD収録時間:180分
A5版/定価2300円(税込)



エクスタシータイランド
付録DVD収録時間:120分
A5版/定価2300円(税込)



発情素人官能実験
付録DVD収録時間:180分
A5版/定価2500円(税込)

購入方法

■現金書留/希望商品名と冊数、住所・氏名・電話番号を明記の上、雑誌定価と送料350円(一部地域を除く)を合計した金額を現金書留にて、小社通販部宛にご送金下さい。

■代金引換/希望商品名と冊数、住所・氏名・電話番号を明記し、代金引換希望とお書き添えの上、はがき、電話、ファックスにて小社通販部宛にご送付下さい。代金は商品到着時に配達員へお支払い願います。なお、代金引換の場合、送料350円の他に代引き手数料300円が加算されます。

マイウェイ出版株式会社

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-26 第一穂穂ビル2F
TEL 03-5216-3641 FAX 03-3515-7070

小社ホームページでも
ご購入いただけます→

<http://www.myway-pub.jp/>

『肉姫姪艶』
オールカラー 230ページ
定価1470円 好評発売中



Mマニア
ウェイ出版株式会社
誌 02171-9



4910021710979
00933